

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第216集

秋葉林遺跡Ⅱ

第二東名No.25地点

(縄文時代早期以降編)

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

沼津市-4

2010

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第216集

秋葉林遺跡Ⅱ

第二東名No.25地点

(縄文時代早期以降編)

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

沼津市-4

2010

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

日本一の名峰・富士山の南に位置する愛鷹山の南麓では、旧石器時代から古墳時代の遺跡が多数発見されており、人々が古くからこの地域で生活を営んでいたことがわかります。これらの遺跡群は、地域の歴史を記録するものとして、地元市町の教育委員会や有志により発掘調査が行われてきました。秋葉林遺跡（第二東名No.25地点）が所在する愛鷹山南西麓は、南東麓に比べ開発の数が少なく、それに比例し埋蔵文化財の発掘件数も限られていましたが、第二東名の建設事業に伴う埋蔵文化財調査により、南西麓も南東麓同様、遺跡が濃密に分布することが明らかになりました。

秋葉林遺跡は5つの尾根と4つの谷にまたがる広大な調査区で、平成10年から平成12年と、平成18年に現地調査が行われ、平成19年から整理事業が進められてきました。発掘された資料は膨大であったため、時期ごとに分けて報告することとなり、平成21年12月に旧石器時代～縄文時代草創期編を刊行しましたが、今回は縄文時代早期以降編について刊行の運びとなりました。

縄文時代の調査では石斧・石鏃を中心とする石器と、早期から後期にかけての土器が出土しました。特に早期の押型土器が多く出土し、この時期の貴重な資料を提供しております。古墳時代の調査では5基の古墳を検出しました。これらはすべて横穴式石室を持ち、古墳時代後期の所産と考えられます。残存状況は概してよいものとはいえませんが、1号墳からは圭頭大刀が出土し注目されます。

今回の調査報告が、縄文時代・古墳時代の研究者の方々はもとより、地元の人々にも広く活用されることで、地域の歴史を解明し埋蔵文化財への理解を深める一助となることを祈念しています。

現地調査及び資料整理にあたっては、中日本高速道路株式会社東京支社（旧日本道路公団静岡建設局）・静岡県教育委員会をはじめとする多くの関係諸機関に多大なるご協力を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

平成22年3月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長 天 野 忍

例 言

1. 本書は、静岡県沼津市青野千秋葉林831他に所在する秋葉林遺跡（第二東名No.25地点）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成10・11年度に実施した確認調査の結果を受け、平成11・12・18年度第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財調査として、日本道路公団静岡建設局沼津工事事務所・中日本高速道路株式会社横浜支社沼津工事事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成11年1月から平成12年10月、平成18年4月から6月まで現地調査を実施した。
3. 資料整理は、平成19年4月から平成22年3月まで実施し、その結果を3冊の調査報告書としてまとめる。本書は第3分冊目にあたり、縄文時代早期以降の遺物、遺構と自然科学分析を所収した。
4. 現地調査体制は『秋葉林遺跡Ⅰ』に掲載した。資料整理体制は下記の通りである。

平成19年度

所長：齋藤 忠 常務理事兼事務局長：清水 哲 事務局次長：佐野五十三 稲葉保幸
事務局次長兼総務課長：大場正夫 調査課副主任：中鉢京子
事務局次長兼調査課長：及川 司 東部調査二係長：笹原千賀子
調査研究員：菊池吉修 遠藤圭一

平成20年度

常務理事兼所長：清水 哲 次長兼事業係長：稲葉保幸 次長兼総務課長：大場正夫
次長兼調査課長：及川 司 調査課副主任：中鉢京子 東部調査係長：笹原千賀子
常動輒託員：阿部 敬

平成21年度

常務理事兼所長：天野 忍 次長兼事業係長：稲葉保幸 次長兼総務課長：松村 享
次長兼調査課長：及川 司 調査課副主任：中鉢京子 東部調査係長：笹原千賀子
調査研究員：遠藤圭一

5. 本書の執筆は遠藤圭一、大谷宏治、三好元樹、菊池吉修、小崎晋、三辻利一、西尾太加二が行った。執筆分担は下記の通りである。

遠藤圭一 第1章、第2章 第1節1～4、第3章、第4章 第3節、第5章、
第6章 第1節・第3節

大谷宏治 第4章 第2節1(3)～(5)、第6章 第2節

三好元樹 第2章 第1節5、第3節

遠藤・小崎 第2章 第2節

遠藤・菊池 第4章 第1節・第2節2～7

大谷・菊池 第4章 第2節1(1)・(2)

三辻利一 第7章 第3節

西尾太加二 第7章 第4節

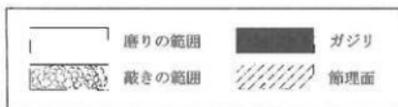
6. 作業の迅速化を図るため、石器実測の一部を㈱東京航業研究所および株式会社ラングに委託した。
7. 出土黒曜石の産地同定は独立行政法人沼津工業高等専門学校名誉教授望月明彦氏に委託した。鑑定結果は『秋葉林遺跡Ⅰ』に掲載している。
8. 資料整理で実施した理科学分析と委託先は次の通りである。分析結果は、第7章に掲載している。

放射性炭素年代測定・樹種同定	株式会社 加速器分析研究所
須恵器・土師器の蛍光X線分析	三辻利一（大阪大谷大学）
1号墳出土大刀木質部材質分析	西尾太加二（当財団保存処理室長）
1号墳出土玉材質分析	バリノ・サーヴェイ株式会社

9. 鉄製品の保存処理は、当財団保存処理室長西尾太加二が実施した。
10. 遺物の写真撮影は、当財団写真担当職員が実施した。
11. 発掘調査資料は、静岡県教育委員会文化課が保管している。
12. 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
13. 発掘調査および整理作業では以下の方々にご指導、ご助言を賜った。厚く御礼申し上げる。
 穴沢味光 池谷信之 井上隆 岩原剛 菊地芳朗 佐野五十三 鈴木一有 瀧瀬芳之 富永樹之
 西澤正晴 深谷淳 馬目順一 山本恵一（五十音順・敬称略）

凡 例

1. 調査区の方眼設定は、国土座標平面直角座標Ⅷ系を基準に、(-94500.000,28680.000) = (A,O)と設定した。1グリッドは10m×10mで、各グリッドの呼称は、該当グリッドの南西角の座標名称を用いている。
2. 出土遺物は5桁までの通し番号を付して取り上げ、土器P、石器S、礫R、玉B、炭化物C、金属器Mの略号を付した。本文中の遺物番号は、現場での取り上げ番号をそのまま採用した。遺物番号と本報告書掲載番号の対応関係は、遺物属性表を参照のこと。
3. 石器の実測は原則として第三角投影図法に拠った。
 実測図中で用いた指示記号は、以下の通りである。



4. 出土遺物図の縮尺は以下の通りである。
 縄文土器、金属製品 : 1/2
 弥生時代以降土器 : 1/3または1/4
 剥片石器類、剥片類、石核 : 2/3
 打製石斧、磨石・敲石類 : 1/3
 石皿・台石類 : 1/4
5. 報告にあたり、遺構番号を付け直した。新旧遺構番号の対応関係は、遺構属性表を参照のこと。
6. 各遺構の略号表記は以下の通りである。
 SY 集石 SF 土坑 FP 焼土跡 JDP 石斧集中 SB 竪穴状遺構
 SZ 古墳 SD 溝状遺構 SX 方形周溝状遺構 TM 地下室遺構
7. 本文もしくは観察表に用いる色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修 1992）を使用した。
8. 第5図は国土地理院発行1:25,000地形図「沼津」を複写して加工・加筆した。

目次

序

例言・凡例

目次

第1章 遺跡の概要	1
第1節 調査の概要	1
第2節 土層堆積状況	1
第3節 歴史的環境	5
1 縄文時代	
2 古墳時代	
第2章 縄文時代の調査の成果	9
第1節 遺構	9
1 概要	
2 集石	
3 土坑	
4 焼土跡	
5 石斧集中	
第2節 土器	35
1 概要	
2 出土土器の検討	
第3節 石器	74
1 概要	
2 石器集中域の石器	
3 遺構外出土の石器	
第3章 弥生時代の調査の成果	183
1 概要	
2 遺構と遺物	
3 遺構外出土遺物	
第4章 古墳時代～律令期の調査の成果	187
第1節 調査の概要	187
第2節 遺構	187
1 1号墳	
2 2号墳	
3 3号墳	

4	4号墳	
5	5号墳	
6	1号方形周溝状遺構	
7	2号方形周溝状遺構	
第3節	遺構外出土遺物	218
1	概要	
2	出土遺物	
第5章	その他の時代の遺構と遺物	221
第1節	時期不明の遺構	221
1	概要	
2	遺構と遺物	
第2節	その他の時代の遺物	228
1	旧石器時代の石器	
2	古代以降の砥石	
3	古代以降の土器	
第6章	まとめ	233
第1節	秋葉林遺跡出土の縄文土器と石器について	233
1	西尾根部	
2	東尾根部北側	
3	東尾根部南側	
第2節	出土遺物から見た秋葉林1号墳の被葬者像	237
1	圭頭大刀の評価	
2	鉄鎌の評価	
3	釘・鏝の評価	
4	秋葉林1号墳の被葬者像～金属製品からみた秋葉林1号墳～	
第3節	2つの方形周溝状遺構と3号墳について	243
1	2つの方形周溝状遺構について	
2	3号墳出土の甕について	
第7章	理化学分析	245
第1節	樹種同定調査報告書 株式会社 加速器分析研究所	245
第2節	放射性炭素年代調査報告書 株式会社 加速器分析研究所	249
第3節	寺家前遺跡・衣原遺跡・秋葉林遺跡出土須恵器・土師器の蛍光X線分析 三辻利一	253
第4節	金銅装圭頭大刀にともなう木質部の樹種について 西尾太加二	258
第5節	秋葉林遺跡1号墳出土玉の材質分析調査 パリノ・サーヴェイ株式会社	260

挿図目次

第 1 図	秋葉林遺跡の位置	1	第 39 図	縄文土器 第Ⅱ群(3)	55
第 2 図	基本層序	2	第 40 図	縄文土器 第Ⅱ群(4)	56
第 3 図	テストピット・トレンチ配置	3	第 41 図	縄文土器 第Ⅱ群(5)・第Ⅲ群(1)	57
第 4 図	土層堆積状況	4	第 42 図	縄文土器 第Ⅲ群(2)・第Ⅳ群(1)	58
第 5 図	秋葉林遺跡周辺主要遺跡地図	6	第 43 図	縄文土器 第Ⅳ群(2)	59
第 6 図	集石・礫分布	12	第 44 図	縄文土器 第Ⅳ群(3)	60
第 7 図	集石集中部	13	第 45 図	縄文土器 第Ⅳ群(4)	61
第 8 図	集石(1)	14	第 46 図	縄文土器 第Ⅳ群(5)	62
第 9 図	集石(2)	15	第 47 図	縄文土器 第Ⅳ群(6)・第Ⅴ群(1)	63
第 10 図	集石(3)	16	第 48 図	縄文土器 第Ⅴ群(2)	64
第 11 図	集石(4)	17	第 49 図	縄文土器 第Ⅴ群(3)	65
第 12 図	集石(5)	18	第 50 図	縄文土器 第Ⅵ群・第Ⅶ群	66
第 13 図	集石(6)	19	第 51 図	縄文土器 第Ⅷ群(1)	67
第 14 図	集石出土遺物(1)	20	第 52 図	縄文土器 第Ⅷ群(2)・土製品	68
第 15 図	集石出土遺物(2)	21	第 53 図	剥片石器類 器種別分布	76
第 16 図	土坑・焼土跡分布	24	第 54 図	礫石器類 器種別分布	77
第 17 図	土坑(1)	25	第 55 図	石鏃 形態分類別分布	80
第 18 図	土坑(2)	26	第 56 図	石鏃 石材別分布	81
第 19 図	土坑(3)	27	第 57 図	石核 形態分類別分布	82
第 20 図	土坑(4)	28	第 58 図	石核 石材別分布	83
第 21 図	土坑(5)	29	第 59 図	打製石斧 形態分類別分布	84
第 22 図	土坑(6)	30	第 60 図	打製石斧 石材別分布	85
第 23 図	土坑(7)	31	第 61 図	稜部磨石 形態分類別・石材別分布	86
第 24 図	土坑(8)	32	第 62 図	石器集中域 1・2 剥片石器類 器種別分布	92
第 25 図	焼土跡	33	第 63 図	石器集中域 1・2 礫石器類 器種別分布	93
第 26 図	石斧集中検出状況	34	第 64 図	石器集中域 1・2 石材別分布	94
第 27 図	石斧集中出土遺物	34	第 65 図	石器集中域 1・2 黒曜石 産地別分布	95
第 28 図	縄文土器分布	44	第 66 図	石器集中域 1 出土石器(1)	96
第 29 図	縄文土器の分布状況(分類別)(1)	45	第 67 図	石器集中域 1 出土石器(2)	97
第 30 図	縄文土器の分布状況(分類別)(2)	46	第 68 図	石器集中域 1 出土石器(3)	98
第 31 図	縄文土器の分布状況(分類別)(3)	47	第 69 図	石器集中域 2 出土石器(1)	102
第 32 図	縄文土器の分布状況(分類別)(4)	48	第 70 図	石器集中域 2 出土石器(2)	103
第 33 図	縄文土器 第Ⅰ群(1)	49	第 71 図	石器集中域 2 出土石器(3)	104
第 34 図	縄文土器 第Ⅰ群(2)	50	第 72 図	石器集中域 2 出土石器(4)	105
第 35 図	縄文土器 第Ⅰ群(3)	51			
第 36 図	縄文土器 第Ⅰ群(4)	52			
第 37 図	縄文土器 第Ⅱ群(1)	53			
第 38 図	縄文土器 第Ⅱ群(2)	54			

第73図	石器集中域2	出土石器(5)	……………106	第111図	弥生時代遺構全体図	……………184
第74図	石器集中域2	出土石器(6)	……………107	第112図	竪穴状遺構検出状況	……………185
第75図	石器集中域3	出土石器(1)	……………109	第113図	竪穴状遺構出土遺物	……………186
第76図	石器集中域3・4	剥片石器類 器種別分布	……………110	第114図	弥生時代遺構外出土遺物	……………186
第77図	石器集中域3・4	礫石器類 器種別分布	……………111	第115図	古墳時代・律令期遺構全体図	……………188
第78図	石器集中域3・4	石材別分布	……………112	第116図	1～3号墳周辺地形	……………189
第79図	石器集中域3・4	黒曜石 産地別分布	……………113	第117図	1号墳全体図	……………190
第80図	石器集中域3	出土石器(2)	……………114	第118図	1号墳石室展開図	……………191
第81図	石器集中域4	出土石器(1)	……………117	第119図	1号墳横穴式石室段構造部分実測図	……………192
第82図	石器集中域4	出土石器(2)	……………118	第120図	1号墳横穴式石室墓壇実測図	……………193
第83図	石器集中域4	出土石器(3)	……………119	第121図	1号墳遺物出土状況図	……………194
第84図	石器集中域外	出土石器(1)	……………133	第122図	1号墳遺物出土状況詳細図	……………195
第85図	石器集中域外	出土石器(2)	……………134	第123図	1号墳出土土器	……………196
第86図	石器集中域外	出土石器(3)	……………135	第124図	1号墳出土玉類	……………196
第87図	石器集中域外	出土石器(4)	……………136	第125図	圭頭大刀の部位名称	……………197
第88図	石器集中域外	出土石器(5)	……………137	第126図	1号墳出土圭頭大刀	……………198
第89図	石器集中域外	出土石器(6)	……………138	第127図	1号墳出土鉄鎌	……………200
第90図	石器集中域外	出土石器(7)	……………139	第128図	1号墳出土金属製品	……………201
第91図	石器集中域外	出土石器(8)	……………140	第129図	2号墳石室実測図	……………204
第92図	石器集中域外	出土石器(9)	……………141	第130図	2号墳石室墓壇実測図	……………205
第93図	石器集中域外	出土石器00	……………142	第131図	3号墳全体図	……………206
第94図	石器集中域外	出土石器01	……………143	第132図	3号墳石室展開図・墓壇実測図	……………207
第95図	石器集中域外	出土石器02	……………144	第133図	3号墳遺物出土状況および出土遺物	……………208
第96図	石器集中域外	出土石器03	……………145	第134図	4号墳全体図	……………210
第97図	石器集中域外	出土石器04	……………146	第135図	4・5号墳周辺地形	……………211
第98図	石器集中域外	出土石器05	……………147	第136図	4号墳石室展開図・墓壇実測図	……………211
第99図	石器集中域外	出土石器06	……………148	第137図	4号墳出土遺物	……………212
第100図	石器集中域外	出土石器07	……………149	第138図	5号墳墓壇検出状況・完掘状況図	……………213
第101図	石器集中域外	出土石器08	……………150	第139図	1号方形周溝状遺構実測図	……………216
第102図	石器集中域外	出土石器09	……………151	第140図	2号方形周溝状遺構実測図	……………217
第103図	石器集中域外	出土石器00	……………152	第141図	2号方形周溝状遺構出土遺物	……………217
第104図	石器集中域外	出土石器01	……………153	第142図	古墳時代・律令期遺構外出土遺物	……………219
第105図	石器集中域外	出土石器02	……………154	第143図	時期不明土坑出土遺物	……………221
第106図	石器集中域外	出土石器03	……………155	第144図	時期不明遺構全体図	……………222
第107図	石器集中域外	出土石器04	……………156	第145図	時期不明遺構集中部(1)	……………223
第108図	石器集中域外	出土石器05	……………157	第146図	時期不明遺構集中部(2)	……………224
第109図	石器集中域外	出土石器06	……………158	第147図	時期不明焼土跡	……………225
第110図	石器集中域外	出土石器07	……………159	第148図	1号溝状遺構	……………225
				第149図	時期不明土坑	……………226

第150図	地下室実測図	227
第151図	その他の時期の出土遺物	229
第152図	縄文時代遺物分布状況	234
第153図	西尾根部の押型文土器と稜部磨石の分布	235
第154図	九州と秋葉林1号墳例の比較	238
第155図	一部のみ刃を付ける片刃箭式鉄鏃	239
第156図	秋葉林1号墳出土遺物の編年的位置	241
第157図	秋葉林1号墳の埋葬と副葬遺物の関係	241
第158図	方形周溝状遺構の諸例	244
第159図	暦年較正年代グラフ	252
第160図	両分布図(1)	256
第161図	両分布図(2)	257
第162図	X線回折図	264

挿表目次

第1表	周辺遺跡地名	7	第36表	弥生時代竪穴状遺構属性	186
第2表	集石属性	19	第37表	弥生時代土器属性	186
第3表	土坑属性	33	第38表	弥生時代石器属性	186
第4表	焼土跡属性	33	第39表	1号噴出土圭頭大刀觀察表	197
第5表	縄文土器属性	69	第40表	秋葉林遺跡古墳一覽	213
第6表	縄文時代全石器組成	75	第41表	1号墳出土鉄錐属性	214
第7表	石鏃の形態別分類	87	第42表	1号墳出土玉類属性	214
第8表	石匙の形態別分類	87	第43表	1号墳出土耳環属性	215
第9表	削器の形態別分類	88	第44表	1号墳出土兩頭金具属性	215
第10表	石核の形態別分類	88	第45表	古墳時代・律令期土器属性	215
第11表	打製石斧の形態別分類	88	第46表	秋葉林遺跡方形周溝状遺構一覽	219
第12表	礫器の形態別分類	88	第47表	出土土器点数表	229
第13表	敲石の形態別分類	89	第48表	出土陶器点数表	229
第14表	磨石の形態別分類	89	第49表	焼土跡(時期不明)属性	230
第15表	磨-敲石の形態別分類	89	第50表	溝状遺構属性	230
第16表	稜部磨石の形態別分類	89	第51表	土坑(時期不明)属性	230
第17表	敲石(凹石)の形態別分類	89	第52表	土坑(時期不明)出土土器属性	232
第18表	石器集中1 石器組成	90	第53表	その他の時期の遺物属性	232
第19表	石器集中2 石器組成	99	第54表	地区別土器個体数および黒曜石点数一覽	233
第20表	石器集中3 石器組成	108	第55表	西尾根部縄文土器層位別点数一覽	233
第21表	石器集中4 石器組成	116	第56表	秋葉林遺跡の樹種同定結果	245
第22表	石鏃属性	160	第57表	秋葉林遺跡の ¹⁴ C年代測定結果	250
第23表	石匙属性	162	第58表	秋葉林遺跡の ¹⁴ C年代測定結果(参考値)	251
第24表	削器属性	162	第59表	須恵器・土師器分析表	255
第25表	挿入削器・形器・石錐・打製石製品属性	163			
第26表	二次加工ある剥片・石刃・打面再生剥片・削片・微細剥離痕ある剥片 属性	163			
第27表	楔形石器属性	164			
第28表	石核属性	165			
第29表	打製石斧属性	166			
第30表	磨製石斧属性	168			
第31表	礫器・敲石・磨石・磨-敲石・稜部磨石・敲石(凹石) 属性	168			
第32表	石皿・台石属性	173			
第33表	石錘・磨製石製品属性	174			
第34表	剥片・原石属性	174			
第35表	剥片・細片属性	175			

挿写真目次

写真1	秋葉林遺跡出土炭化材	248
写真2	柄 サンプリング箇所	258
写真3	鞘 サンプリング箇所	258
写真4	樹脂で包埋した試料	258
写真5	研磨中の試料	258
写真6	完成したプレパラート標本	258
写真7	ヒノキ 木口	259
写真8	ヒノキ 柾目	259
写真9	ヒノキ 板目	259
写真10	アカガシ亜属 木口	259
写真11	アカガシ亜属 柾目	259
写真12	アカガシ亜属 板目	259
写真13	1号墳玉類分析試料	262
写真14	SEM-EDS観察領域	265
写真15	薄片	266
写真16	元素マッピング結果	267
写真17	簡易定量分析結果	268

写真图版目录

图版 1	秋葉林遺跡調査区遠景	12号土坑
图版 2	1号墳石室全景	13号土坑
图版 3	1号墳出土遺物	14号土坑
图版 4	圭頭大刀(1)	15号土坑
图版 5	圭頭大刀(2)	16号土坑
图版 6	甕集合	图版12 17号土坑
图版 7	1号集石(1)	18号土坑
	1号集石(2)	19号土坑
	2号集石(1)	20号土坑
	2号集石(2)	21号土坑
	3号集石(1)	22号土坑
	3号集石(2)	23号土坑
	4号集石	24号土坑
	5号集石	图版13 25号土坑
图版 8	6号集石	26号土坑
	7号集石	27号土坑
	8号集石	28号土坑
	9号集石	29号土坑
	10号集石	30号土坑
	11号集石	31号土坑
	12号集石	图版14 1号焼土跡
	13号集石	2号焼土跡
图版 9	14号集石	1号石斧集中
	15号集石	2号石斧集中
	16号集石	竪穴状遺構
	17号集石	图版15 1号墳全景
	18号集石	1号墳石室内遺物出土狀況
图版10	1号土坑	图版16 1号墳石室内遺物出土狀況(近景)(1)
	2号土坑	1号墳石室内遺物出土狀況(近景)(2)
	3号土坑	图版17 大刀出土狀況
	4号土坑	刀子出土狀況
	5号土坑	鉄鏃出土狀況
	6号土坑	耳環出土狀況(1)
	7号土坑	耳環出土狀況(2)
	8号土坑	玉出土狀況
图版11	9号土坑	土師器出土狀況
	10号土坑	图版18 1号墳石室段構造部分
	11号土坑	1号墳基底石檢出狀況

- 1号墳墓墳完掘状況
- 図版19 2号墳石室完掘状況
3号墳周辺(空撮)
3号墳全景
- 図版20 3号墳石室完掘状況
3号墳遺物出土状況
3号墳墓墳完掘状況
- 図版21 4号墳全景
4号墳石室完掘状況
4号墳墓墳完掘状況
- 図版22 5号墳検出状況
5号墳墓墳完掘状況
1号方形周溝状遺構
2号方形周溝状遺構
2号方形周溝状遺構遺物出土状況
地下室遺構
- 図版23 2号集石出土遺物
4号集石出土遺物
5号集石出土遺物
9号集石出土遺物
16号集石出土遺物
17号集石出土遺物
18号集石出土遺物
- 図版24 1号石斧集中出土遺物
2号石斧集中出土遺物
- 図版25 I群1類土器
I群2類土器
- 図版26 I群3類土器(1)
I群3類土器(2)・4類土器
- 図版27 II群1類土器(1)
II群1類土器(2)
- 図版28 II群2類・3類土器
II群4類・5類土器・6類土器(1)
- 図版29 II群6類土器(2)・7類土器
III群1類・2類土器
- 図版30 IV群1類土器
IV群2類・3類土器
- 図版31 IV群4類土器(1)
- 図版32 IV群4類土器(2)
IV群5類土器
- 図版33 IV群6類土器
- V群1類・2類土器
- 図版34 V群3類土器(1)
V群3類土器(2)・4類土器(1)
- 図版35 V群4類土器(2)
VI群・VII群土器
- 図版36 VIII群土器・土製品
- 図版37 石鏃(1)
石鏃(2)
- 図版38 石鏃(3)
石鏃(4)
- 図版39 石鏃(5)
石匙(1)
- 図版40 石匙(2)
削器(1)
- 図版41 削器(2)
彫器・石錐
打製石製品・剥片類
- 図版42 楔形石器
石核
- 図版43 打製石斧(1)
- 図版44 打製石斧(2)
- 図版45 打製石斧(3)
- 図版46 打製石斧(4)
- 図版47 打製石斧(5)
- 図版48 打製石斧(6)
- 図版49 打製石斧(7)・磨製石斧
礫器
- 図版50 磨石・蔽石類
稜部磨石
- 図版51 石皿・台石
石錘・磨製石製品
- 図版52 1号墳出土大刀
- 図版53 1号墳出土大刀(X線)
- 図版54 1号墳出土鉄鏃
- 図版55 1号墳出土鉄鏃(X線)
- 図版56 1号墳出土金属製品・土器・玉
- 図版57 古墳時代・律令期寛
- 図版58 弥生時代の出土遺物
その他の時代の出土遺物

第1章 遺跡の概要

第1節 調査の概要

秋葉林遺跡は静岡県沼津市青野字秋葉林に所在する（第1図）。第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として平成11年から発掘調査が行われた。資料整理は平成19年度から行われた。旧石器時代から縄文時代草創期にかけての調査成果は平成21年12月に『秋葉林遺跡Ⅰ』として刊行された。本報告書は縄文時代早期以降の調査成果について報告する。秋葉林遺跡の調査に至る経緯や調査方法・経過などについては『秋葉林遺跡Ⅰ』を参照されたい。本章では、秋葉林遺跡の縄文時代以降の土層堆積状況と歴史的環境について述べる。

第2節 土層堆積状況

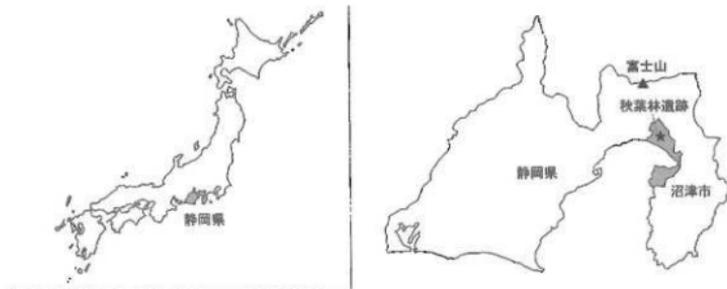
秋葉林遺跡の基本層序を第2図に示す。これについての詳しい説明は『秋葉林遺跡Ⅰ』に譲り、本節では縄文時代以降の調査にかかる土層堆積状況について述べる。

本遺跡は東西約420m、南北約360mにわたる広大な調査区であるため、5つの尾根と4つの谷にまたがっている。堆積状況は、概して尾根部で良好であり、谷部で不良であるといえるが、それぞれの尾根と谷で若干の相違が見られた。以下では、遺物出土状況に特筆すべきものがみられた箇所について若干の補足を加えたい（第3・4図）。

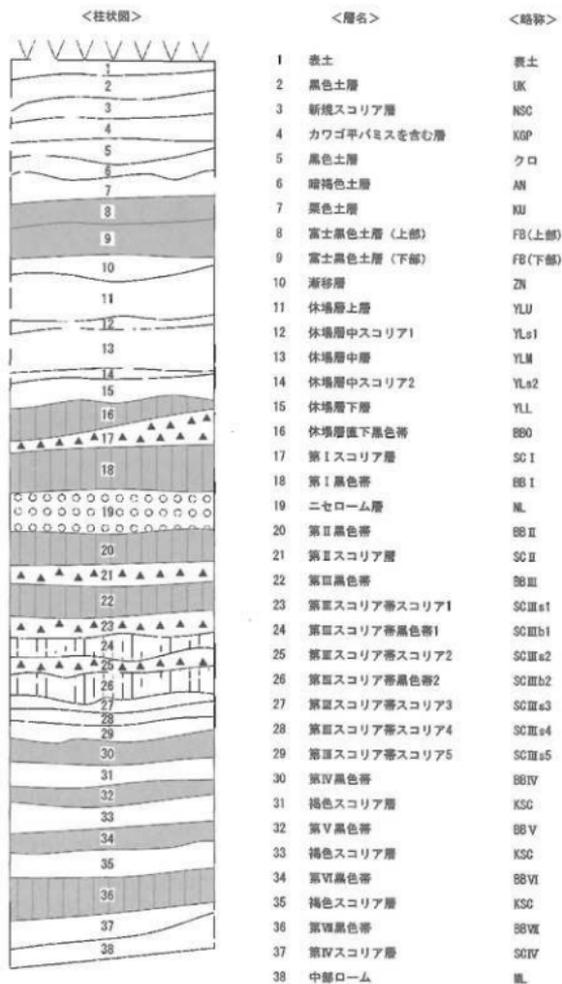
調査区の東尾根部は、休場層堆積以前は谷であったところが、縄文時代には広い平坦な尾根を形成していたものと考えられる。尾根頂部において主要な縄文包含層である栗色土層・富士黒色土層が確認できない箇所があったが、全般的に土層の堆積状況は良好といえ、早期中葉から中期前葉にかけての縄文土器が集中して出土している。

調査区の中央東尾根部は、南に傾斜する緩やかな尾根であり、広い平坦部を形成している。ここでも栗色土層・富士黒色土層の良好な堆積を確認でき、前期から中期にかけての土器が出土している。

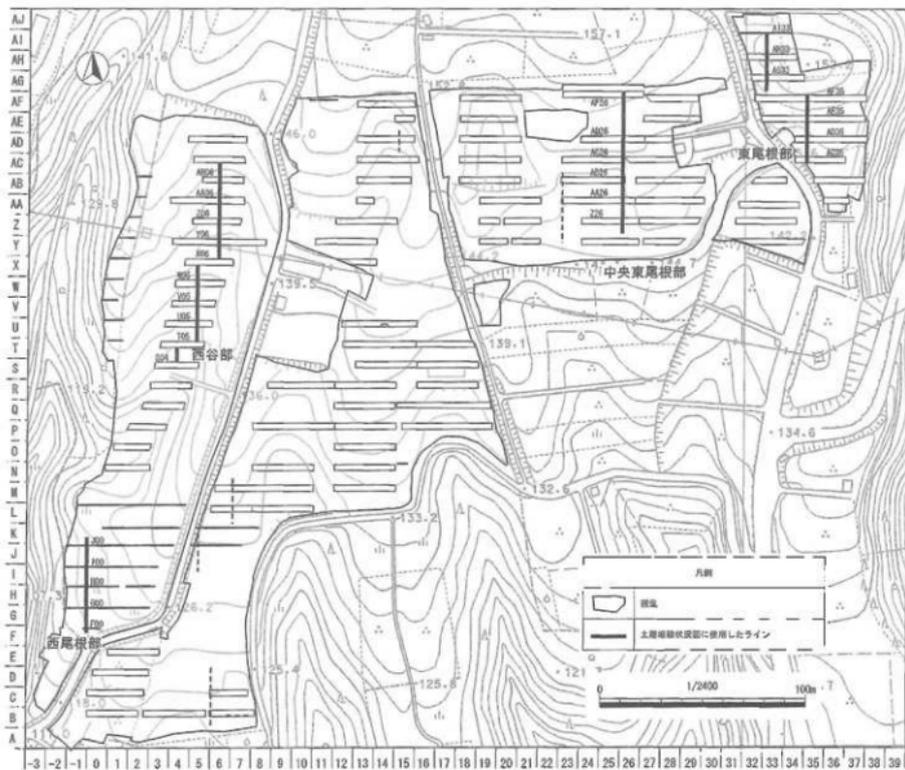
調査区の西尾根部は、南北にのびる尾根の頂部から西に傾斜する斜面上であり、尾根頂部において縄文包含層が削平されていたが、尾根を下るに従って栗色土層・富士黒色土層の堆積が厚くなっていく様



第1図 秋葉林遺跡の位置

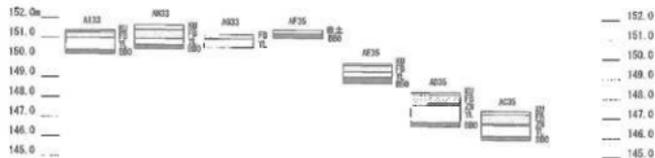


第2図 基本層序

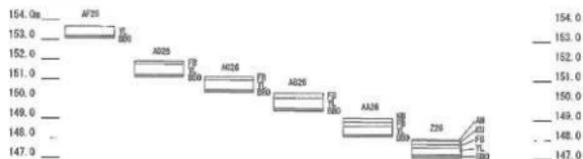


第3図 テストピット・トレンチ配置

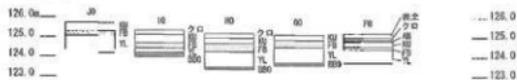
東尾根部



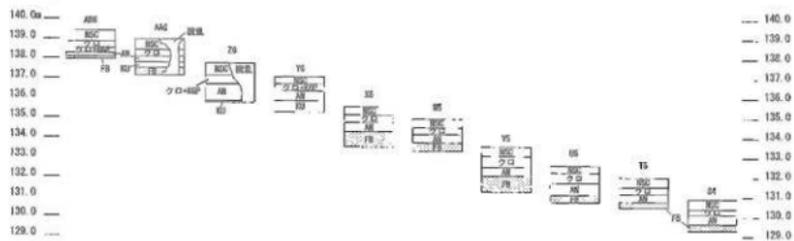
中央京尾根部



西尾根部



西谷部



第4図 土層堆積状況

子が確認できた。ここでは、早期中葉の押型文土器や縹糸文土器などが出土している。

西谷部では新期スコリア層や黒色土層、カワゴパバミス層など、縄文包含層よりも新しいと考えられる層が厚く堆積している様子が見られた。この層位に掘り込まれるかたちで時期不明の溝や土坑が大量に確認された。他の谷についても類同である。

第3節 歴史的環境

1 縄文時代

愛鷹南麓においては、縄文時代の遺跡は、草創期から中期にかけての遺跡が数多く発見されている。その多くは山麓域に集中しており、平野部では数が少ない。以下、愛鷹南麓の縄文時代の状況を、草創期から順を追って概観する。

草創期の遺跡は、近年発見例が増加している。尾上イラウネ遺跡、清水柳北遺跡、葛原沢第IV遺跡などがあげられる。特に、葛原沢第IV遺跡では住居跡が検出されたことが注目される。

早期になると、集落の数は爆発的に増加する。早期前半の押型文土器を伴う住居をもつ遺跡として、広合遺跡、西洞遺跡、尾上イラウネ遺跡、中見代第III遺跡などが挙げられる。それに続く条痕文土器の時期（鶴ヶ島台式～茅山上層式期）の住居をもつ遺跡として、尾上イラウネ遺跡や清水柳北遺跡などが挙げられる。

前期初頭の遺跡としては、清水柳北遺跡において木島式期の住居跡が40基以上、吹上遺跡では木島式期の住居跡が7基検出されていることが注目される。吹上遺跡は本遺跡の南西約3kmの標高35～37mという比較的低い土地において発見された。石器総数の約半数を石鏃が占めており、当時は後水期で縄文海進が頂点に達していたことから、遺跡の南にある浮島沼での漁撈を生業としていたと考えられている（沼津市史編さん委員会2002）。一方、前期中葉から後葉にかけて、諸磯式土器が出土する遺跡は数多く知られるが、住居跡の検出率は少ない。

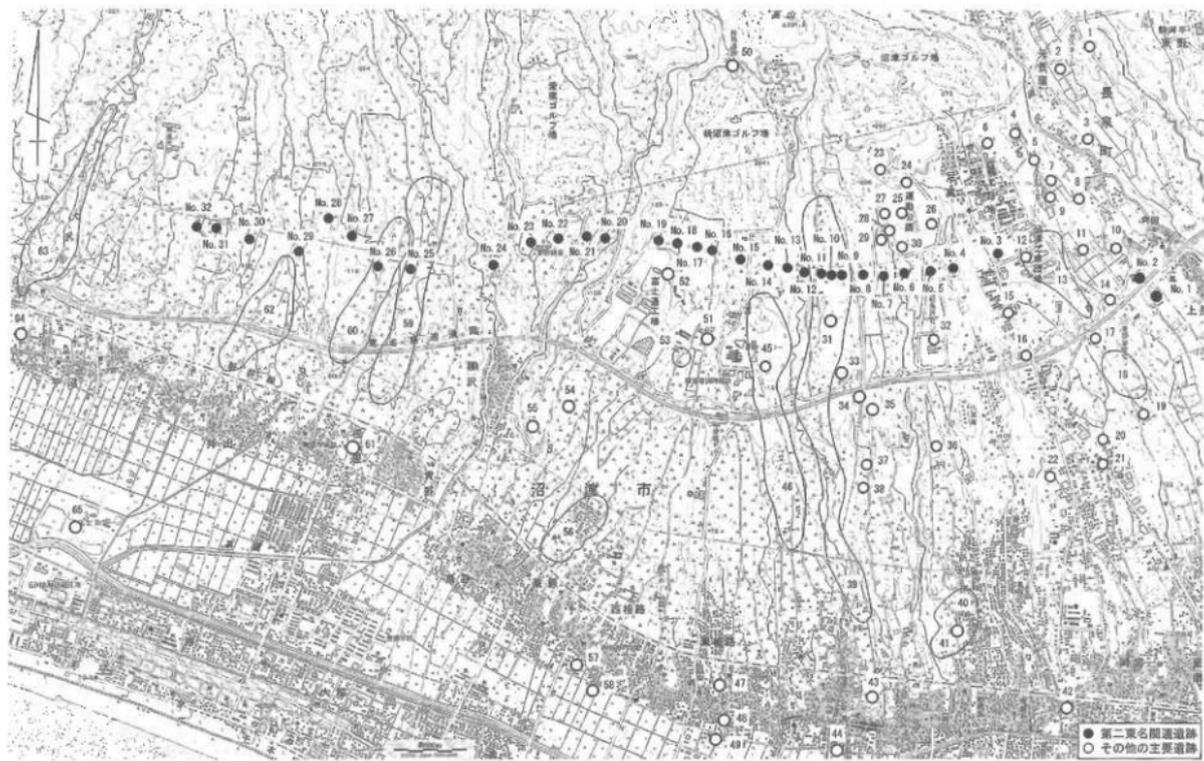
中期の遺跡としては、広合遺跡やニツ洞遺跡などで井戸尻式期の竪穴住居跡が検出されている。丸尾北遺跡や大谷津遺跡では、加曾利E4式や曾利V式土器とともに柄鏡形敷石住居跡が検出されている。柄鏡形敷石住居とは、中期後半から後期中葉にかけての遺跡において見られるもので、中部山岳地方や東京都多摩丘陵、静岡県東部・伊豆地方などで多くの検出事例が報告されている。

後期前葉以降、愛鷹山麓では集落の数が極端に減少する。寒冷化の影響によると考えられる。晩期になると愛鷹山麓の丘陵地帯にはまったく集落が見られなくなる。一方、浮島沼の砂州上に形成された遺跡である雌鹿塚遺跡では晩期後葉の土器が発見されている。

2 古墳時代

古墳時代前期から中期にかけては、沼津市西部から富士市東部の愛鷹山南西麓一帯に大型古墳がいくつか発見されている。後期後半以降になると群衆墳の造営が盛んとなる。石室の形態は無袖式の横穴式石室が主流である。

本遺跡の南西、標高約100mの尾根上には的場古墳が存在する。墳丘は調査時にはすでに消滅していたが、西側約半分の周溝が検出された。石室は無袖式長方形で、残存長は3.3m、最大幅は0.9mである。石室堀方の底面に休場ルーム層が見られることから、旧地表面から1mほど掘り下げた位置に石室を構築したと推測される。石室内には長さ2.2m、幅0.8mの組合せ式箱型石棺が1基発見された。遺物は出土していない（沼津市教育委員会1985）。



第5図 秋葉林遺跡周辺主要遺跡地図

第1表 周辺遺跡地名

番号	遺跡名	時代
No.1	畑畑上遺跡	旧石器・縄文・中世・近世
No.2	西山遺跡	旧石器・縄文
No.3	尾上第1遺跡	(沼津市教育委員会により調査中)
No.4	ニツ洞遺跡	(沼津市教育委員会により調査中)
No.5	飯出北遺跡	(沼津市教育委員会により調査中)
No.6	中見代第1遺跡	(沼津市教育委員会により調査中)
No.7	西洞遺跡	(沼津市教育委員会により調査中)
No.8	西洞遺跡	旧石器・縄文・古墳
No.9	八兵衛洞B遺跡	(沼津市教育委員会により調査中)
No.10	八兵衛洞A遺跡	(沼津市教育委員会により調査中)
No.11	八兵衛洞C遺跡	(沼津市教育委員会により調査中)
No.12	八兵衛洞D遺跡	旧石器・縄文
No.13	イタドリA遺跡	旧石器・縄文
No.14	イタドリB遺跡	旧石器・縄文
No.15	イタドリC遺跡	旧石器・縄文
No.16	七橋第1遺跡	(沼津市教育委員会により調査中)
No.17	七橋第2遺跡	(沼津市教育委員会により調査中)
No.18	七橋第3遺跡	(沼津市教育委員会により調査中)
No.19	元野遺跡	旧石器・縄文
No.20	井戸川遺跡	(沼津市教育委員会により調査中)
No.21	井戸川西遺跡	(沼津市教育委員会により調査中)
No.22	第二東名No.22地点	(遺跡なし)
No.23	赤野遺跡	(沼津市教育委員会により調査中)
No.24	内山遺跡	(沼津市教育委員会により調査中)
No.25	萩原林遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良
No.26	約場古墳群	旧石器・縄文・弥生・古墳・平安
No.27	洲ヶ沢遺跡	旧石器・縄文・中世・近世
No.28	鎌沢遺跡	旧石器・縄文
No.29	鏡神遺跡	旧石器・縄文・古墳～平安
No.30	若青沢遺跡	旧石器・縄文
No.31	藤ボヤ遺跡	旧石器・縄文・古墳～中世
No.32	藤ボヤ遺跡	旧石器・縄文・奈良

番号	遺跡名	時代
1	東廻尾遺跡	縄文(早・前)
2	西廻尾A遺跡	縄文(早・前)
3	西廻尾B遺跡	縄文(早・前)
4	尾上イラウネ北遺跡	縄文(早・前)
5	尾上イラウネ遺跡	旧石器・縄文(早・前・中)
6	拓南東遺跡	旧石器・縄文(早・前・中)
7	上イラウネ遺跡	縄文(早)
8	イラウネ遺跡	旧石器・縄文(早)
9	中塚遺跡	旧石器・縄文(早・前・中)
10	ハサマ遺跡	縄文(早)
11	野台遺跡	旧石器・縄文(早・前・中)
12	清水柳北遺跡	旧石器・縄文(早・前・中)
13	清水柳北古墳群	古墳
14	中塚遺跡	旧石器・縄文(早・前・中)
15	尾上第1遺跡	縄文(早・前)
16	土手頭遺跡	縄文(前)
17	清水柳遺跡	旧石器・縄文(早・中)
18	清水柳古墳群	古墳
19	丸尾北遺跡	旧石器・縄文(早～中)
20	寺林遺跡	旧石器・縄文(早・中)
21	寺林南遺跡	縄文(早・中)
22	上松沢平遺跡	旧石器・縄文(早・前・中)
23	葛原沢第IV遺跡	旧石器・縄文(早・前・中)
24	土手上遺跡	旧石器・縄文(早・前・中)
25	広合遺跡	旧石器・縄文(早・前・中)
26	ニツ洞遺跡	旧石器・縄文(早・前・中)
27	中見代第III遺跡	旧石器・縄文(早)
28	中見代第II遺跡	旧石器・縄文(早・前・中)
29	西洞遺跡	旧石器・縄文(早～中)
30	中見代第I遺跡	旧石器・縄文(早・前・中)
31	八兵衛原遺跡	弥生(後)・古墳
32	飯出遺跡	縄文・弥生
33	尾上田輪西遺跡	弥生・古墳

番号	遺跡名	時代
34	尾上田輪遺跡	縄文・弥生
35	大曲遺跡	縄文・弥生
36	木戸上遺跡	縄文・古墳
37	築地鼻北遺跡	縄文(早)
38	築地鼻遺跡	縄文(早)・弥生(後)
39	八兵衛原歌古墳群	古墳
40	長塚古墳	古墳
41	東沢田古墳群	古墳
42	御園免遺跡	古墳
43	子ノ神古墳	古墳
44	尾崎遺跡	古墳
45	西大曲遺跡	旧石器・縄文(早)
46	馬見塚古墳群	古墳
47	芝切遺跡	弥生
48	久保遺跡	弥生(後)
49	夢ノ木遺跡	弥生(後)・古墳
50	休場遺跡	旧石器・縄文(早)
51	元野第III遺跡	旧石器・縄文(早・中)
52	元野第II遺跡	縄文(早)
53	西ツ塚古墳群	古墳
54	大芝原遺跡	縄文(中)
55	大塚遺跡	旧石器・縄文(中)・古墳
56	東原古墳群	古墳
57	東久保遺跡	弥生(後)
58	百鬼舟遺跡	弥生(後)・古墳・鎌倉
59	根古原古墳群	古墳
60	約場古墳群	古墳
61	興田寺城跡	戦国
62	井出古墳群	古墳
63	石川古墳群	古墳
64	吹上遺跡	縄文・弥生・古墳
65	越鹿塚遺跡	弥生(後)

本遺跡の南西約1.5kmには井出古墳群と呼ばれる一群の古墳群が存在する。井出古墳群の一つ、二ツ塚古墳は、大正期に単層環頭柄頭が出土したことで知られるが、正確な位置は定かでない。段崎古墳では、ほぼ南に開口部をもつ無袖長方形の小型横穴式石室が確認された。また、石室内からは金環、ガラス丸玉・小玉、鉄鏃片などが出土している。その他、井出1号墳、井出丸山古墳などでも、南方向に開口部をもつ横穴式石室や、鉄刀、鉄鏃、須恵器などの遺物が確認されている。

石川古墳群は本遺跡の西約2.8kmに位置し、6世紀後半から7世紀中葉にかけて形成された古墳群である。古墳群は大沢川の谷に沿って南北に長く連なっており合計で146基を数える。昭和30年前後の踏査によりその存在が知られるようになり、昭和33年～49年に発掘調査が行われた。平成11年から13年にかけては、第二東名建設に伴う発掘調査が行われた。これらの調査により、石室はすべて横穴式石室であり、組合せ式箱型石棺を伴う石室も存在することなどが確認された。石室や石棺内から、大刀、須恵器、鉄鏃などの遺物が多数出土した（沼津市教育委員会2006）。

なお、本遺跡の1号墳では圭頭大刀が出土した。東駿河における圭頭大刀の出土例は、静岡市（旧由比町）の室ヶ谷3号墳、富士市の中里大久保古墳、沼津市（旧戸田村）の井田松江18号墳などでみられるが、本遺跡のものはほぼ完形であり、非常に貴重な出土例といえる。

参考文献

- 井鍋曾之 2003「東駿河の横穴式石室」『静岡県の横穴式石室』静岡県考古学会
入野康孝・中村徳紀・木村忠義 2009『丸尾北遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所
菊池吉修 2008「駿河における無袖式石室」『東国に伝う横穴式石室-駿河東部の無袖式石室を中心に-』静岡県考古学会
東海古墳文化研究会 2006『東海の馬具と鐃大刀』
沼津市教育委員会 1985『埋蔵文化財発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告第35集
沼津市教育委員会 2006『石川古墳群 第一分冊・第二分冊』沼津市教育委員会
沼津市史編さん委員会・沼津市教育委員会 2002『沼津市史 資料編 考古』

第2章 縄文時代の調査の成果

第1節 遺構

1 概要

検出した遺構は、集石18基、土坑31基、焼土跡2基、石斧集中2基である。本遺跡は東西420m、南北360mにまたがる広大な調査区であるため、遺構の分布も一様ではない。

調査区の南西側に位置する尾根には、集石11基、土坑5基、焼土跡1基が集中している。これは、早期中葉の押型文土器の集中域と重なる。本遺跡ではこのほかに、調査区の北東側に位置する尾根に早期後葉の条痕文系の土器が集中して出土しているが、集石・焼土跡は確認されず、土坑は2基のみが確認されるなど、南西尾根部と比較して遺構の分布は低調であるといえる。

調査区ほぼ中央部南の尾根上には2基の集石と5基の土坑が分布し、東に隣接する谷にも1基の集石と4基の土坑が分布するが、前述の南西尾根部に比較すると分布は散漫であるといえる。調査区中央部北に位置する谷には、逆茂木を持つ土坑が3基集中している。

以下、集石、土坑、焼土跡、石斧集中の順に詳細を述べる。

なお、土器の分類は第2節での分類に、石器の分類は第3節での分類に、それぞれ準ずる。

2 集石（第6・7図）

集石は18基検出した。うち、調査区の南西尾根部に12基が集中している。ここでは、掘込みのあるものをI群、掘込みのないものをII群とし、それぞれについて詳細を述べる。なお、遺構の性格上、遺構の検出面と構築面はほぼ同一と考えられるため、検出面の記述を本文中に記した。

(1) I群：掘込みのあるもの（第8～10図）

1号～7号集石が該当する。このうち、1～3号は比較的深い掘込みを持ち、礫が掘込み内部に充填されている。また、坑底には炭化物を検出した。4・5号は検出できた掘込みは浅いが、整理作業を進めていく段階で検出面上部に礫が分布する状況が確認できたため、本来の掘込みはもっと深かったものと考えられる。6・7号は掘込みは浅く、掘込み内部だけでなく外部にも礫が分布している状況が確認できた。各集石の詳細について、以下に述べる。

1号集石(SY11) J-1グリッドに位置する。遺構検出面はFBからYLにかけてである。礫143点で構成される。平面形は縦長の楕円形を呈している。

1号集石は2つの部分から構成される。1つは中央部の掘込みの中に礫が充填されている部分であり、もう1つは掘込みに隣接する焼土跡である。中央部掘込み部の覆土は炭化物粒や焼土を多く含む。特に3層は炭化物粒を多量に含んでおり、色調は黒色を呈している。3層下部に炭化材を検出し、放射性炭素年代測定を行ったところ、9490±50yrBP (25-1:IAAA-80604)、9570±40yrBP (25-5②:IAAA-80608)という年代値を得た。焼土跡部分は赤褐色～明黄褐色の色調を呈しており、焼土粒を多量に含んでいる。

2号集石(SY12) I/J-1グリッドに位置する。遺構検出面はFBである。礫192点で構成される。掘込みの平面形は円形を呈している。礫が土坑の上半部に充填されている。掘込み底面に炭化物を検出した。放射性炭素年代測定を行ったところ、9490±40yrBP (25-2:IAAA80605)という年代値を得た。本遺構に伴う遺物としては、角閃石安山岩製の稜部磨石が1点出土している(第14図)。1は三角状Ⅱb類に分類され、断面が三角形をしており、右側面と両平坦面に研磨痕が付く。

3号集石(SY17) J-2/-1グリッドに位置する。遺構検出面はFBから漸移層にかけてである。鎮底型を呈した土坑の中に、1118点の礫が充填されている。本調査で出土した集石の中で、最も礫が多い。覆土に焼土粒・炭化物粒などを含む。覆土上層と下層で炭化物を検出し、放射性炭素年代測定を行ったところ、上層のものは9310±50yrBP (25-3:IAAA-80606)、下層のものは9420±50yrBP (25-4:IAAA-80607)という年代値を得た。本遺構に伴伴する遺物としては、砂岩(細粒)製の剥片が2点出土している。

4号集石(SY08) E-2グリッドに位置する。遺構検出面はFBからYLにかけてである。161点の礫で構成される。現地調査では浅い掘込みの検出面に礫が集中していたが、整理作業を進めていく中で掘込みの上部にも礫が集中していることが確認できたため、本来の掘込み面はもっと高かったと考えられる。覆土は、第1層で炭化物粒を多量に含む。本遺構に伴伴する遺物としては、押型文土器の剥片が5点、黒曜石の石核が2点出土している。このうち、土器2点を図化した(第14図)。2は山形の押型文を縦位帯状に施文している。3は山形文を横位帯状に施文する。いずれも早期中葉のI群2類に分類される。

5号集石(SY05) E01グリッドに位置する。遺構検出面はFBである。35点の礫で構成される。掘込みの平面形は不整形を呈し、坑深は浅い。覆土は、第1層で焼土粒・炭化物粒を若干含む。本遺構に伴伴する遺物としては、押型文土器が5点、石器1点が出土している。このうち、土器2点と石器1点を図化した(第14図)。4aはRLの縄文を縦位密接に施文するもので、I群1類に分類される。5aは山形の押型文を帯状に施文するもので、内面にも押型文が確認できる。I群2類に分類される。4a、5aともに早期中葉に属し、同一個体と思われる破片が包含層からも出土している(第33図)。6は玄武岩製の礫器である。扁平な直角礫の2辺に片刃を作出している。片刃直角礫に分類される。

6号集石(SY04) N13グリッドに位置する。遺構検出面はFBである。24点の礫で構成される。礫はすべて赤化していた。現地調査において本来の掘込み面を確認できなかった。

7号集石(SY03) N/O13/14グリッドに位置する。遺構検出面はFBである。135点の礫で構成される。掘込みの平面形は円形を呈するが、坑深は非常に浅い。覆土には焼土粒・炭化物を多量に含む。

(2) II群：掘込みがないもの(第10～13図)

8号～18号までの集石が該当する。これらをさらに、半径約1m以内に礫が密集するものを1類、礫がやや散漫に分布するものを2類として報告する。

1類：半径約1m以内に礫が密集するもの

8号～15号が該当する。このうち、FBで検出したものが8・9・11・12・13号、KUで検出したものが10・14・15号である。

8号集石(SY16) F/G00グリッドに位置する。遺構検出面はFBである。47点の礫で構成される。本遺構に伴伴する遺物として、流紋岩製の磨-蔽石が2点出土している。

9号集石(SY07) G-1/00グリッドに位置する。遺構検出面はFBである。40点の礫で構成される。本遺跡に伴伴する遺物として、土器が3点、石器が3点出土している。土器はI群4類に位置づけられるものが1点、II群6類が1点、不明のもの1点、石器は、ホルンフェルス製の剥片1点、黒曜石製の微細剥離痕ある剥片1点、細片1点である。このうち土器1点を図化した(第14図)。7は尖底土器の底部である。無文のためII群6類に分類したが、器厚は薄く、早期中葉の押型文土器の底部と考えられる。

11号集石(SY09) H/I-1グリッドに位置する。遺構検出面はFBである。56点の礫で構成される。

12号集石(SY10) J-2/-1グリッドに位置する。遺構検出面はFBである。24点の礫で構成される。本遺構に伴伴する遺物としては、ホルンフェルスの剥片が1点出土している。

13号集石(SY18) L/M01グリッドに位置する。遺構検出面はFBである。56点の礫で構成される。本遺構に伴伴する遺物としては、ホルンフェルスの剥片が1点、輝石安山岩の磨-蔽石が1点出土している。

10号集石(SY14) H00グリッドに位置する。遺構検出面はKUである。34点の礫で構成される。礫はすべて赤化していた。

14号集石(SY13) U01グリッドに位置する。遺構検出面はKUである。131点の礫で構成される。

15号集石(SY02) K06グリッドに位置する。遺構検出面はKUである。遺構を構成する24点の礫がすべて赤化していた。

2類：礫がやや散漫に分布するもの

16号集石(SY15) G/H00グリッドに位置する。遺構検出面はKUである。221点の礫で構成される。本遺構に共伴する遺物としては、土器が12点、石器が7点出土している。土器はいずれもⅡ群6類に位置づけられるもので、石器は輝石安山岩の礫器・蔽石・磨-蔽石・石皿が各1点、黒曜石が2点（石鏃・剥片）、白雲母片岩の打製石斧が1点である。うち、土器2点を図化した（第15図）。8は胴部上位から底部付近までの部位で、10点の破片が接合した。9は口縁部破片である。どちらも内外面ともに条痕による調整が観察でき、早期後葉のⅡ群6類に分類される。

17号集石(SY06) P16/17グリッドに位置する。遺構検出面はYLである。58点の礫で構成される。本遺構に共伴する遺物としては、土器が2点、石器が5点出土している。土器はV群1類が1点、IV群6類の縄文を施文するものが1点である。石器は黒曜石の剥片が3点、砂岩（中粒）の打製石斧と珪化凝灰岩の磨製石製品が各1点である。このうち、土器1点、石器2点を図化した（第15図）。10はLRの縄文を横位に施文する。前期中葉のIV群6類に分類される。11は砂岩（中粒）製の打製石斧である。背面に自然面を残し、周縁に平坦剥離を施し撥形に整形している。刃部は折損している。12はオリブ灰色の珪化凝灰岩を用いた磨製石製品である。わずかにねじれる扁平な棒状のもので、研磨が施されている可能性がある。両端部に光沢が認められなくすんだ部分があり、何かに使用された可能性がある。

18号集石(SY01) H/106/07グリッドに位置する。遺構検出面はFBである。238点の礫で構成される。本遺構に共伴する遺物としては、石器4点が出土している。頁岩と砂岩（細粒）の剥片がそれぞれ1点、玄武岩の礫器が1点、砂岩（中粒）の磨-蔽石が1点である。このうち2点を図化した（第15図）。13は玄武岩製の礫器である。扁平な礫の端部に片刃を作出している。片刃直角礫に分類される。14は砂岩（中粒）製の磨-蔽石である。正面観が楕円形を呈する扁平礫の右側面に著しい蔽打痕、表裏に研磨痕が付く。円盤状平坦部Ⅱ類に分類される。

3 土坑（第16～24図）

縄文時代に帰属すると考えられる土坑は31基検出された。この中には、SCⅠやNLなどを検出面とする土坑が含まれるが、覆土などから縄文時代の所産と判断した。ここでは、逆茂木痕を持つものをⅠ群、持たないものをⅡ群とした。さらにそれぞれの群を覆土によって分類し、覆土の主体がYLであるものを1類、FBであるものを2類、KUよりも上層であるものを3類とした。さらに、Ⅱ群においては、覆土の堆積状況によって細分し、人為的な埋戻しが想定できる単一覆土のものをa種、自然堆積のものをb種とした。

(1) Ⅰ群：逆茂木痕を持つもの（第17図）

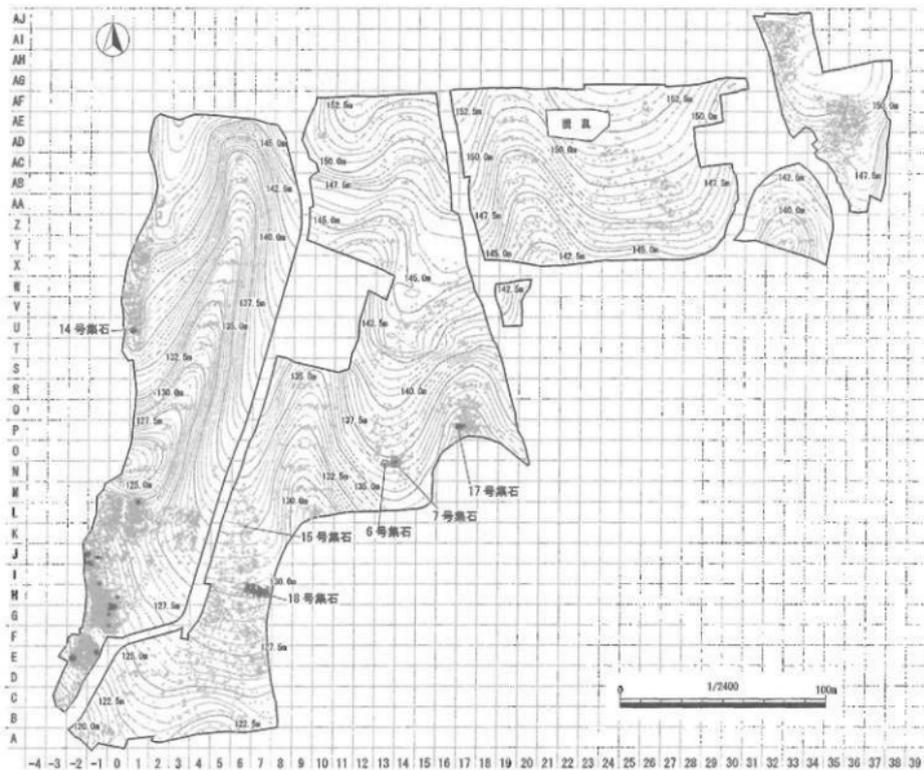
覆土により2類型に分類した。

1類：覆土がYL主体であるもの

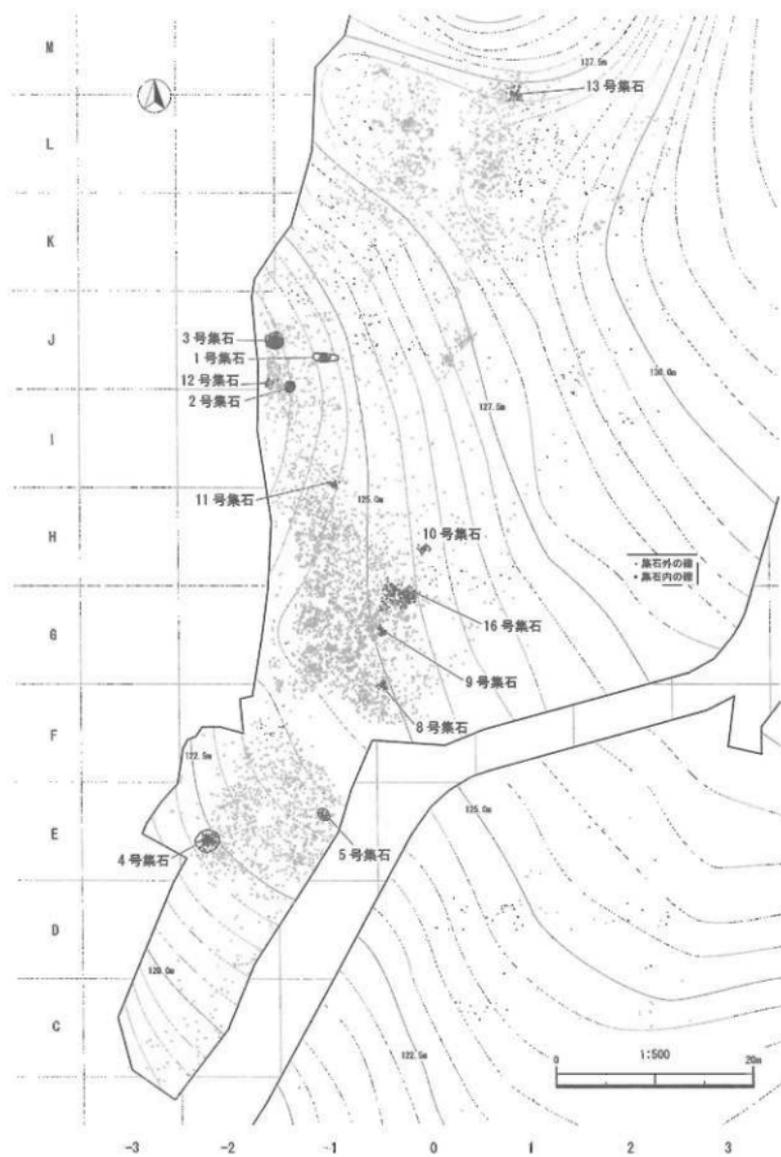
1号土坑(SF089) J07グリッドに位置し、SCⅠで掘込み面が検出された。楕円形を呈する。逆茂木ピットを4基有する。

2類：覆土がFB主体であるもの

2～4号土坑が該当する。これらは調査区中央北の谷に集中して分布している。

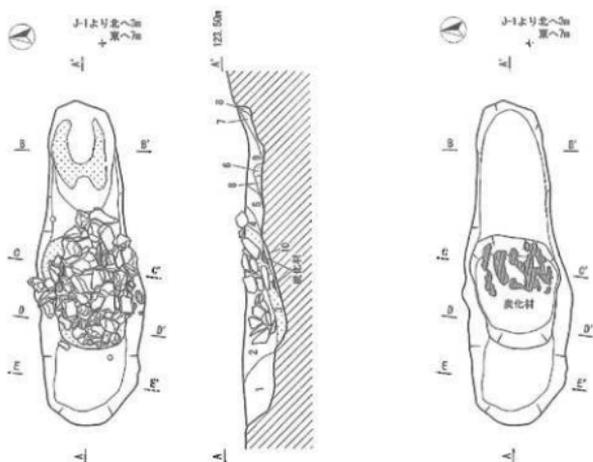


第6圖 集石・塚分布

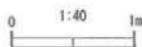


第7図 集石集中部

1号集石



- 1 暗褐色土 (7.5YR5/4) 粘やや弱い、締まり強い、YL粒(φ3~5mm)を多量に含む、FB多。
- 2 黒褐色土 (7.5YR5/2) 粘やや弱い、締まり強い、YL粒(φ2~3mm)を少量、焼土粒(φ1~2mm)を微量含む。
- 3 黒色土 (10YR2/1) 粘やや弱い、締まり強い、YL粒(φ2~3mm)、炭化物(φ2~3mm)、焼土粒(φ2~3mm)を多量に含む。
- 4 暗褐色土 (10YR3/4) 粘やや弱い、締まり強い、炭化物(φ2~5mm)を少量、焼土粒(φ2~3mm)を多量に含む。
- 5 黄褐色土 (10YR5/6) 粘やや弱い、締まりやや強い、焼土粒(φ2~3mm)を少量含む。
- 6 黄褐色土 (2.5YR5/6) 粘弱い、締まりやや強い、焼土。
- 7 黒色土 (10YR1.7/1) 粘やや弱い、締まり強い、炭化物(φ3~5mm)を多量、焼土粒(φ2~5mm)を少量含む。
- 8 明黄褐色土 (10YR7/6) 粘やや弱い、締まりやや弱い、焼土粒(φ2~3mm)を多量に含む。
- 9 暗褐色土 (10YR3/3) 粘やや弱い、締まりやや弱い、焼土粒(φ1~2mm)、炭化物(φ2~3mm)を少量含む。
- 10 黒褐色土 (10YR5/1) 粘やや弱い、締まり強い、炭化物(φ2~3mm)を多量に含む。



第8図 集石(1)

2号集石



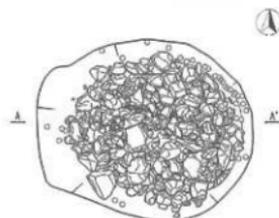
122.70m A A'



- 1 褐色土 (7.5YR6/3) 粘やや強い、締まりやや弱い、赤色粒(φ1~3mm)、炭化物を含む。
- 2 褐色土 (7.5YR4/4) 粘土、炭化物を若干含む。

3号集石

+ 4-1より北へ6m



122.30m A A'



- 1 明褐色土 (7.5Y5/2) 粘やや強い、締まりやや強い、赤色スロリアを多量に含む。地山層に類似する。
- 2 にがい褐色土 (7.5YR6/3) 粘やや強い、締まりやや強い、赤色粒、炭化物(φ1~3mm)を含む。
- 3 褐色土 (7.5YR4/4) 粘やや強い、締まりやや弱い、炭化物、焼土粒を若干含む。
- 4 暗褐色土 (7.5YR2/4) 粘強い、締まり強い、炭化物(φ10~30mm)、焼土粒(φ1~3mm)を多量に含む。薪の燻灰(カーボン付着)が著しい。
- 5 黒褐色土 (7.5YR1/2) 粘強い、締まりやや強い、炭化物(φ1~3mm、φ10~40mm)、焼土粒(φ1~3mm)を多量に含む。薪は大型のものが東西両側にくいつ込んで検出される。部分的にYI粒も検出される。

4号集石



122.50m A A'



- 1 暗褐色土 (10YR2/4) 粘やや強い、締まりやや強い、炭化物(φ1~3mm)を若干含む。
- 2 褐色土 (10YR4/6) 粘やや強い、締まりやや強い、YI粒が多量に混在する。

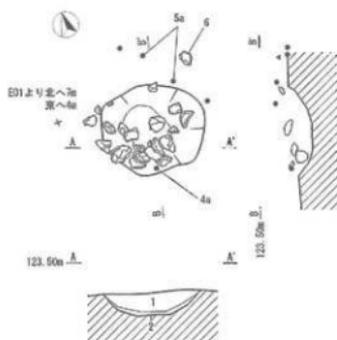


122.50m



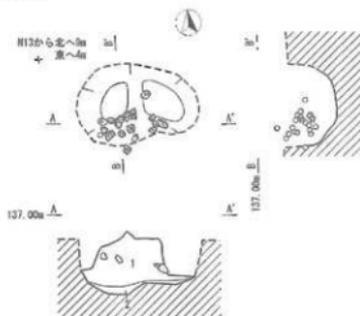
第9図 集石②

5号集石



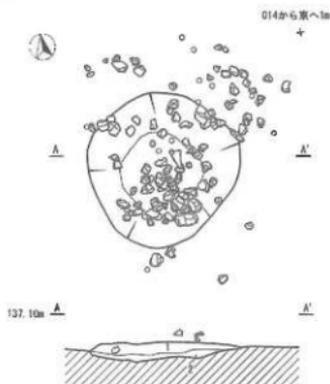
- 1 暗褐色土 (T07R2/3) 粘りや強い、粘まりや強い、焼土粒(φ:~3mm)、炭化物を若干含む。
- 2 黄褐色土 (T07R5/6) 粘りや強い、粘まりや強い、孔粒及びブロックが主成分となる。

6号集石



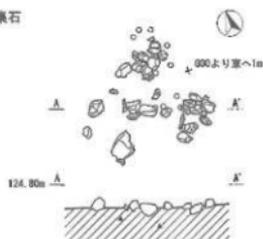
- 1 黄褐色土 (T07R4/5) 粘りや強い、粘まりや強い、焼土粒(φ:~2mm)、炭化物を若干含む。
- 2 明褐色土 (T07R6/7) 粘りや強い、粘まりや強い、PBブロック、焼土粒(φ:2~4mm)、炭化物を含む。

7号集石

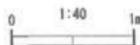
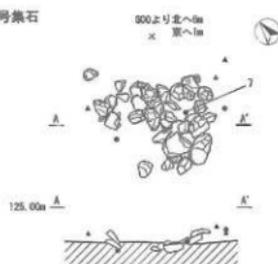


- 1 暗褐色土 (T07R2/3) 粘りや強い、粘まりや強い、焼土粒(φ:2~4mm)、炭化物を多量に含む。
- 2 明褐色土 (T07R5/6) 粘りや強い、粘まりや強い、PBブロック、焼土粒(φ:2~4mm)、炭化物を含む。

8号集石

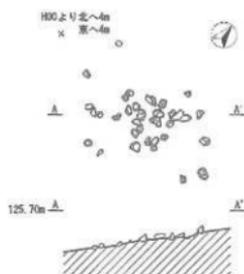


9号集石

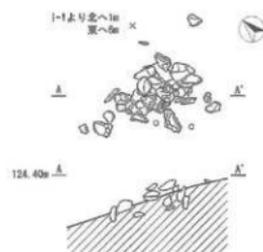


第10図 集石(3)

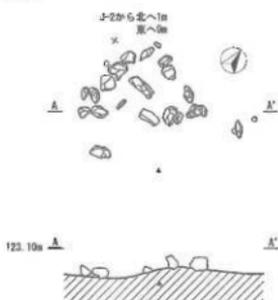
10号集石



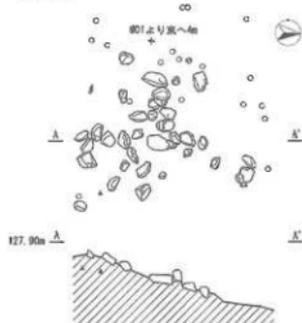
11号集石



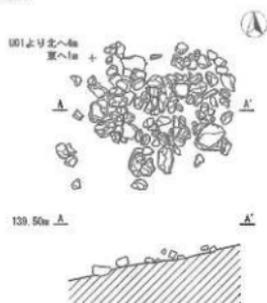
12号集石



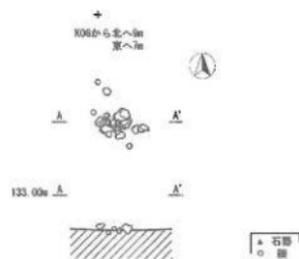
13号集石



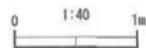
14号集石



15号集石

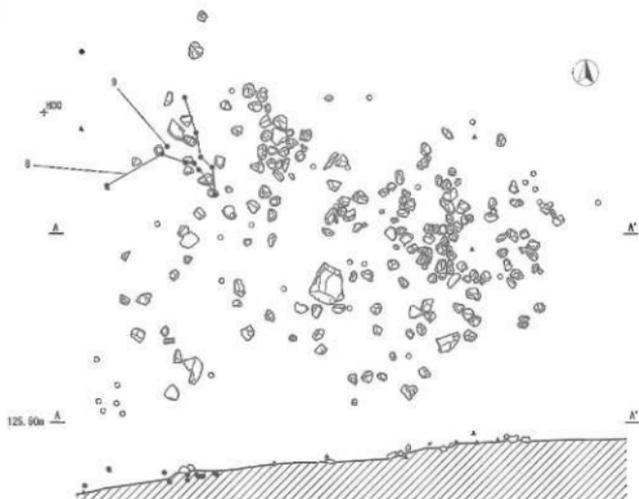


▲ 石群
○ 石

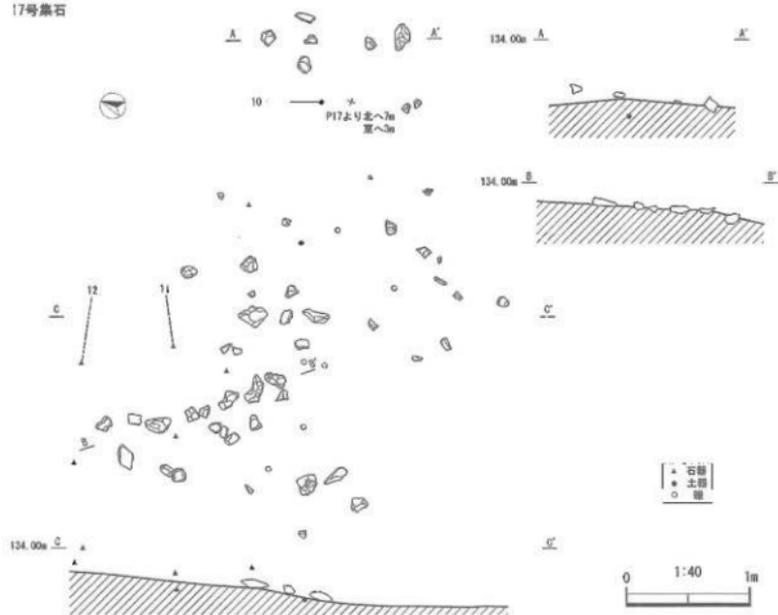


第11図 集石(4)

16号集石

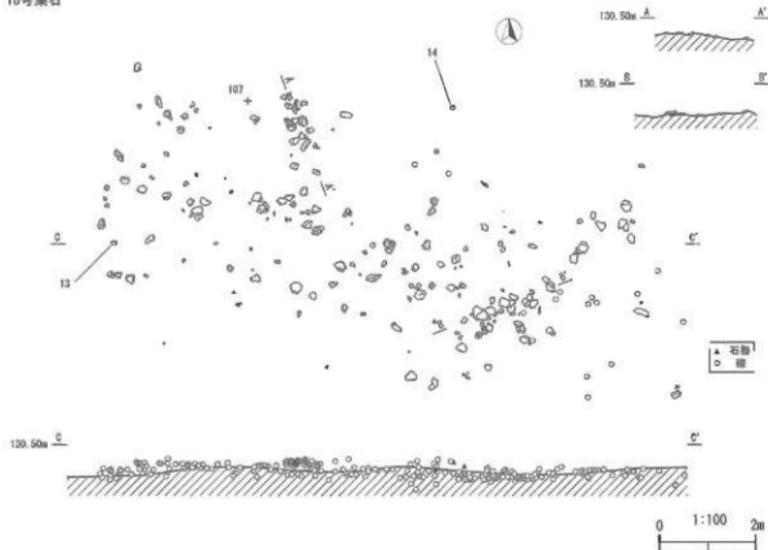


17号集石



第12図 集石(5)

18号集石



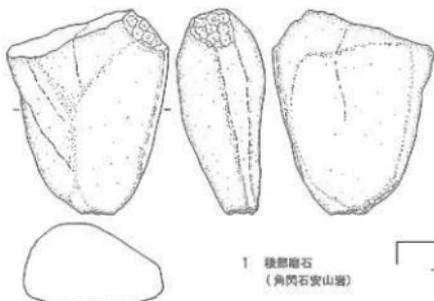
第13図 集石(6)

第2表 集石属性

遺構名	現場遺構名	グリッド	層位	構成礫数	長辺(m)	短辺(m)	最大深(m)	遺物
1号	SY11	J-1	FB~YL	143	2.68	0.92	0.40	
2号	SY12	I/J-1	FB	192	1.08	1.04	0.20	石器1点
3号	SY17	J-2/-1	FB~ZN	1,118	1.76	1.48	0.60	石器2点
4号	SY08	E-2	FB~YL	161	1.32	(1.04)	(0.40)	石器2点 土器5点
5号	SY05	E-1	FB	35	0.84	0.72	0.20	石器1点 土器5点
6号	SY04	N13	FB	24	(0.96)	(0.64)	(0.52)	
7号	SY03	N/O13/14	FB	135	1.26	1.24	(0.24)	
8号	SY16	F/G00	FB	47	-	-	-	石器2点
9号	SY07	G-1/00	FB	40	-	-	-	石器3点 土器3点
10号	SY14	H00	KU	34	-	-	-	
11号	SY09	H/I-1	FB	56	-	-	-	
12号	SY10	J-2/-1	FB	24	-	-	-	石器1点
13号	SY18	L/M01	FB	56	-	-	-	石器2点
14号	SY13	U01	KU	131	-	-	-	
15号	SY02	K06	KU	24	-	-	-	
16号	SY15	G/H00	KU	221	-	-	-	石器7点 土器12点
17号	SY06	P16/17	YL	58	-	-	-	石器5点 土器2点
18号	SY01	H/I06/07	FB	238	-	-	-	石器4点

(注) 括弧内は推定値

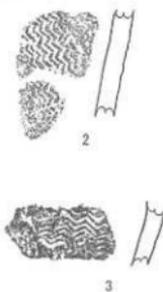
2号集石



1 狭部磨石
(角閃石安山岩)

0 1:3 10cm

4号集石

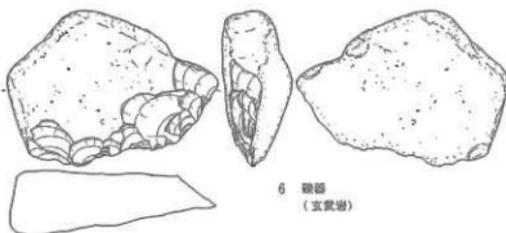


0 1:2 4cm

5号集石



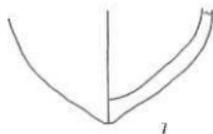
0 1:2 4cm



6 砥石
(玄武岩)

0 1:3 10cm

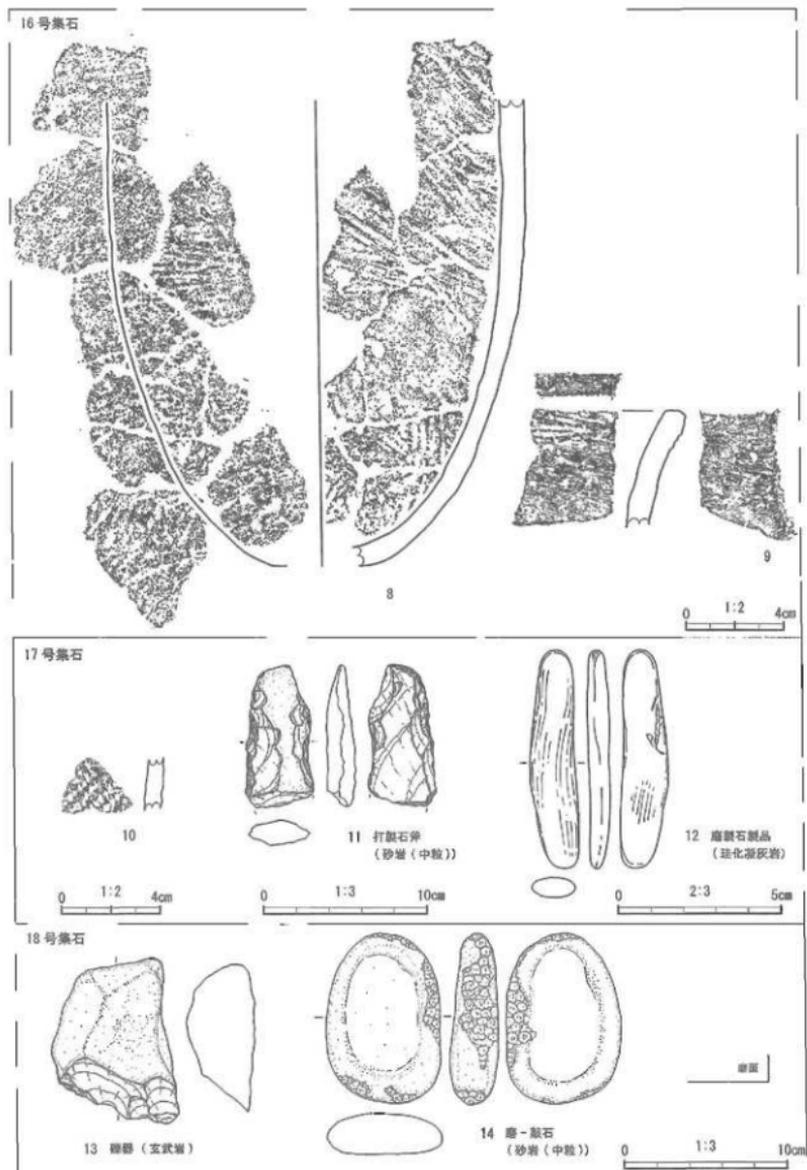
9号集石



7

0 1:2 4cm

第14図 集石出土遺物(1)



第15図 集石出土遺物(2)

2号土坑(SF098) AB14グリッドに位置し、YLで掘込み面が検出された。楕円形を呈する。逆茂木ピットを3基有する。

3号土坑(SF099) AB14グリッドに位置し、YLで掘込み面が検出された。楕円形を呈する。逆茂木ピットを2基有する。

4号土坑(SF100) AD14グリッドに位置し、YLで掘込み面が検出された。楕円形を呈する。逆茂木ピットを3基有する。

(2)Ⅱ群：逆茂木痕を持たないもの（第18～24図）

単一の覆土を持つものは人為的な埋戻しが行われた可能性が指摘できる。

1類a種：覆土がYL主体であり、単一の覆土であるもの（第18・19図）

5号土坑(SF124) O14グリッドに位置する。YLで掘込み面が検出された。ほぼ円形を呈する。

6号土坑(SF125) Q13グリッドに位置し、BB0で掘込み面が検出された。円形を呈する。

7号土坑(SF105) AE12グリッドに位置し、NLで掘込み面が検出された。不整形円形を呈する。

8号土坑(SF110) M15グリッドに位置し、SC Iで掘込み面が検出された。楕円形を呈する。

9号土坑(SF139) S13グリッドに位置し、SC Iで掘込み面が検出された。隅丸長方形を呈する。

10号土坑(SF094) Z20グリッドに位置し、FBで掘込み面が検出された。楕円形を呈する。

11号土坑(SF138) AF35グリッドに位置する。YLで掘込み面が検出された。不整形楕円形を呈する。

12号土坑(SF214) Q17グリッドに位置する。YLで掘込み面が検出された。不整形を呈する。

1類b種：覆土がYL主体であり、自然堆積であるもの（第19図）

13号土坑(SF235) H00グリッドに位置する。YLで掘込み面が検出された。楕円形を呈する。

14号土坑(SF111) N12グリッドに位置し、BB0で掘込み面が検出された。楕円形を呈する。

2類a種：覆土がFB主体であり、単一の覆土であるもの（第20図）

15号土坑(SF039) F04グリッドに位置する。YLで掘込み面が検出された。円形を呈する。

16号土坑(SF155) Q17グリッドに位置し、FBで掘込み面が検出された。楕円形を呈する。

17号土坑(SF104) AE12グリッドに位置し、NLで掘込み面が検出された。楕円形を呈する。

2類b種：覆土がFB主体であり、自然堆積であるもの（第20～23図）

18号土坑(SF225) H00グリッドに位置する。YLで掘込み面が検出された。ほぼ円形を呈する。

19号土坑(SF224) H00/01グリッドに位置する。YLで掘込み面が検出された。不整形円形を呈する。

20号土坑(SF154) AC37グリッドに位置する。YLで掘込み面が検出された。不整形楕円形を呈する。

21号土坑(SF097) AD19グリッドに位置する。YLで掘込み面が検出された。不整形円形を呈する。

22号土坑(SF106) AD19グリッドに位置する。YLで掘込み面が検出された。隅丸長方形を呈する。

23号土坑(SF049) AE26グリッドに位置し、KUで掘込み面が検出された。円形を呈する。

24号土坑(SF236) G-1グリッドに位置し、SC Iで掘込み面が検出された。隅丸長方形を呈する。覆土中で縄文土器が出土した。整理作業の結果、同様の土器が掘込みの検出面より上部から出土しており、本来の掘込み面はSC Iよりも上の層位であると考えられる。土坑外部の土器と接合関係にあることも判明した。15は口縁部破片で、山形文を縦位に密接施文する。16・17の胎土は類似しており、軽しうで、色調は灰黄褐色を呈する。16a・bは3条の横線と山形文を組み合わせた原体を縦位に密接施文している。17a・bは、格子目状の押型文を縦位に密接施文している。同一個体と考えられる破片が包含層からも出土している（第33図）。いずれも早期中葉のI群1類に位置づけられる。

25号土坑(SF040) C07グリッドに位置する。YLで掘込み面が検出された。楕円形を呈する。

26号土坑(SF215) Q16グリッドに位置する。YLで掘込み面が検出された。隅丸長方形を呈する。

27号土坑(SF216) Q17グリッドに位置する。YLで掘込み面が検出された。楕円形を呈する。

28号土坑(SF237) AB32グリッドに位置する。YLで掘込み面が検出された。不整楕円形を呈する。

3類：覆土がKUよりも上層の土を主体とするもの(第24図)

29号土坑(SF109) AC20グリッドに位置し、FBで掘込み面が検出された。楕円形を呈する。

30号土坑(SF096) N09グリッドに位置し、KUで掘込み面が検出された。不整円形を呈する。

31号土坑(SF093) AF13グリッドに位置する。YLで掘込み面が検出された。楕円形を呈する。

4 焼土跡(第25図)

焼土跡は2基検出された。いずれも遺物は伴っていない。

1号焼土跡(FP01) N06グリッドに位置する。FBで検出された。平面形態は不整楕円形を呈する。

2号焼土跡(FP03) G-1グリッドに位置する。YLで検出された。平面形態は楕円形を呈する。

5 石斧集中(第26・27・53図)

2基の石斧集中が認められた。それぞれの集中ごとに石斧の形態に差異があるため、時期差を有する可能性があるが明らかではない。

なお、石器の分類は第3節での内容に準ずる。

1号石斧集中

南北40cm、東西60cmの範囲で5点、4個体が不規則な配置で出土した。全体で出土数の少ない分銅形が大部分を占める点に特徴がある。4点は折損した状態で出土した。そのうち2点は集中内で接合し、1点は集中外のものと同接合した。

いずれも両側縁に敲打によるつぶれが認められることから、「両極敲打技法」(久保田 2004)によって成形がなされたと考えられる。18は掬形薄型b類である。右側縁刃部側が張り出すため右側縁はわずかに内湾する。腹面側への調整が主であるが、背面側にも部分的に剥離が認められる。特に背面刃部左半の調整が顕著だが、これは刃部の使用に伴うと考えられ、刃部の形状が左右で異なるのもそれに起因するものだろう。19と20は分銅形厚型b類である。19は、刃部側は平行な側縁で、中央よりも基部寄りに挟りをもつ。刃部中央に小さい挟りをもつが、偶発的に生じたものと考えられる。20は刃部が弧を描くのに対し、基部は直線的に成形される。腹面刃部右半は高まりを除去しきれず、いびつな形状になる。21は分銅形薄型c類である。両端を折損する。下端側が、上端側よりも張り出しが強いため、刃部側であったと考えられる。

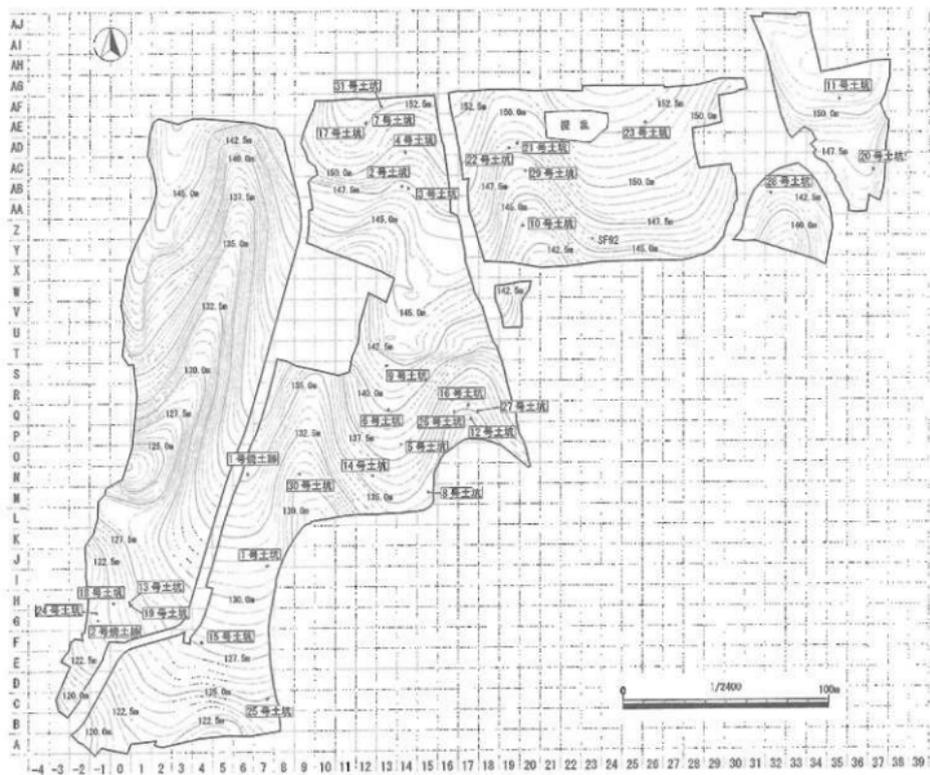
2号石斧集中

3点が平行し折り重なるかたちで出土した。いずれも短冊形薄型である。

いずれも両極敲打によって両側縁の成形がなされる。22は短冊形薄型a類である。扁平な円盤を素材とする。23は短冊形薄型b類である。節理面に沿って剥離した剥片を素材とする。刃部、基部ともに素材を生かし、調整は乏しい。24は短冊形薄型d類である。両面に広い剥離面を残し、厚さが均質であることから、素材獲得のために平坦な剥離が連続して行われたことが分かる。

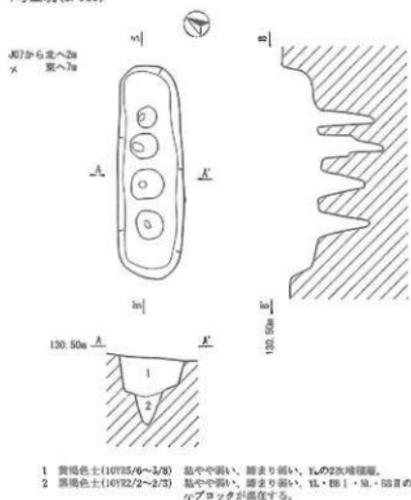
参考文献

久保田正寿 2004 「実験からみた敲打技法—打製石斧の製作技法の復元にむけて—」『石器づくりの実験考古学』学生社 pp.147-172

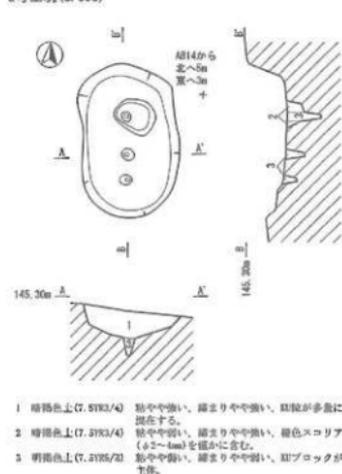


第16图 土坑·烧土跡分布

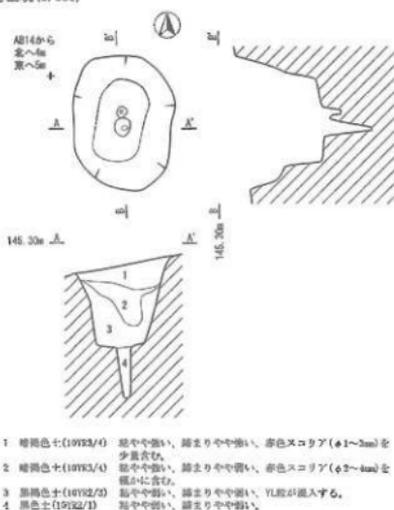
1号土坑(SF089)



2号土坑(SF088)



3号土坑(SF089)

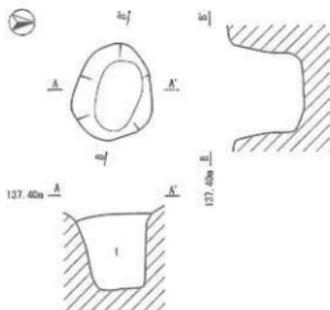


4号土坑(SF100)



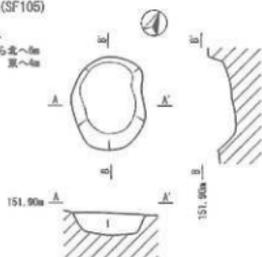
第17図 土坑(1)

5号土坑(SF124)

+ 0140から北へ5m
東へ1m

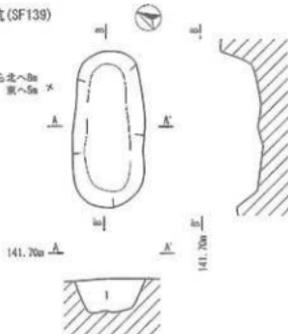
1 褐色土(10YR5/6) 粘やや強い、締まりやや強い、YLR段及びブロックが主体となる。

7号土坑(SF105)

* AE12から北へ5m
東へ4m

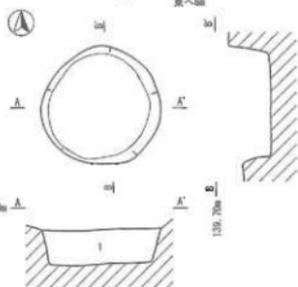
1 暗褐色土(10YR3/2) 粘やや強い、締まりやや強い、YLRブロックが散在する。

9号土坑(SF139)

* S12から北へ5m
東へ5m

1 黄褐色土(10YR5/6) 粘やや強い、締まりやや強い、YLR段及びブロックが主体となる。

6号土坑(SF125)

+ 0120から北へ7m
東へ4m

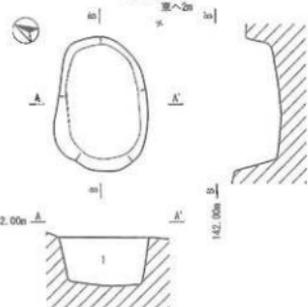
1 黄褐色土(10YR5/6) 粘やや強い、締まりやや強い、YLR段及びブロックが主体となる。

8号土坑(SF110)

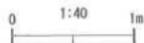


1 黄褐色土(10YR5/6) 粘やや強い、締まりやや強い、YLR段及びブロックが主体となる。

10号土坑(SF094)

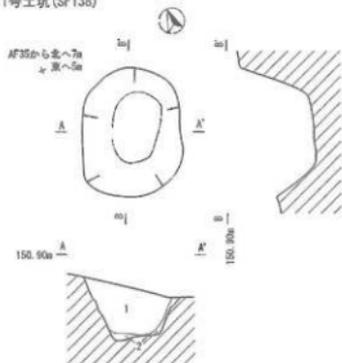
* Z29から北へ5m
東へ2m

1 黄褐色土(10YR5/6) 粘強い、締まりやや強い、YLRブロック(φ10~20mm)を含む。上層はYR主体。



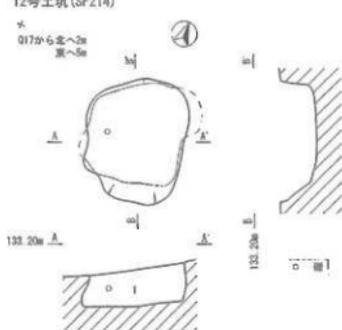
第18図 土坑(2)

11号土坑(SF138)



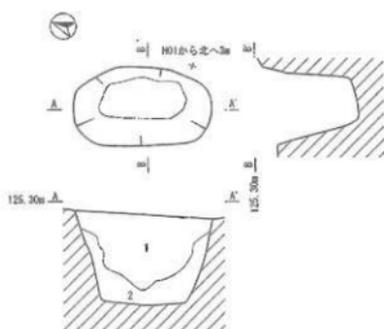
- 1 黄褐色土(10YR5/6) 粘やや強い、締まりやや強い、丸粒及びブロックが主体となる。
- 2 暗褐色土(10YR3/3) 粘やや弱い、締まりやや強い、300ブロックが混在する。

12号土坑(SF214)



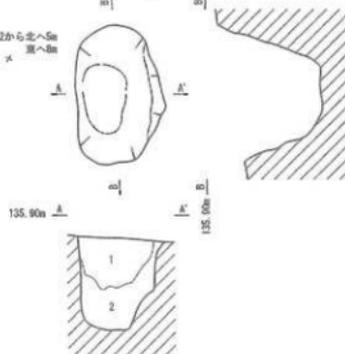
- 1 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘やや強い、締まりやや弱い、炭化物を少量含む。明褐色土ブロック(7.5YR5/5)を全体的に雜らに含む。風刺本により北側はかなり擾乱されており側壁は明確でない。

13号土坑(SF235)



- 1 明黄褐色土(10YR7/5) 粘やや強い、締まりやや弱い、丸粒に類似。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 粘弱い、締まりやや強い、FS層に類似。

14号土坑(SF111)

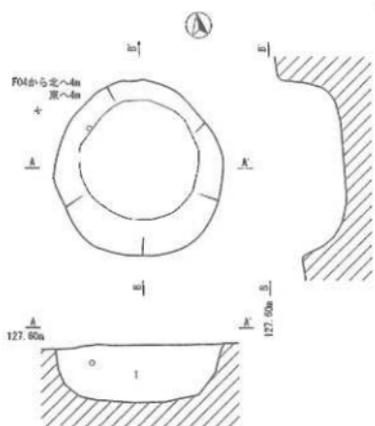


- 1 黄褐色土(10YR5/6) 粘やや強い、締まりやや強い、丸粒及びブロックが主体となる。
- 2 暗褐色土(10YR3/3) 粘やや弱い、締まりやや強い、丸粒ブロックが混在する。



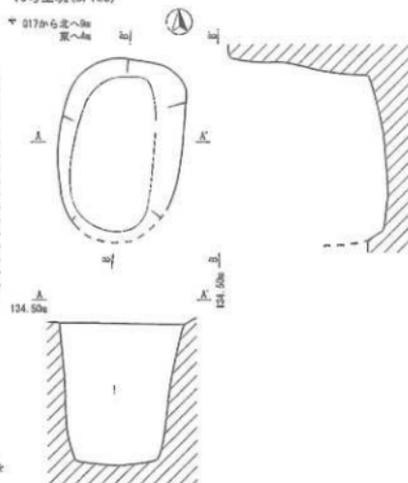
第19図 土坑(3)

15号土坑 (SF039)



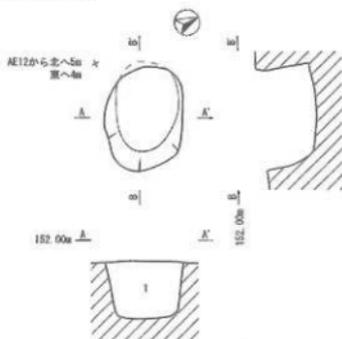
1 暗褐色土(10YR3/4) 粘やや強い、締まり強い、褐色コロア、炭の屑を少量含む。

16号土坑 (SF155)



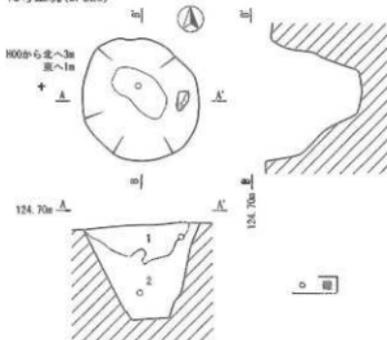
1 暗褐色土(7.5Y3/4) 粘弱い、締まりやや強い、F0層にRブロックが存在する。

17号土坑 (SF104)

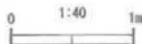


1 暗褐色土(10YR3/3) 粘やや強い、締まりやや強い、Rブロックが存在する。

18号土坑 (SF225)

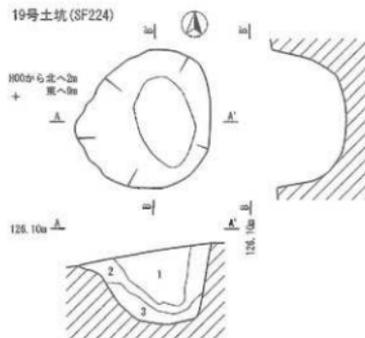


1 黒褐色土(10YR3/1) 粘やや強い、締まりやや強い、炭土粒(φ1~2mm)を少量含む。
2 暗褐色土(10YR3/4) 粘やや強い、締まりやや強い、炭土粒(φ2~3mm)、Y.L粒(φ2~3mm)を少量含む。



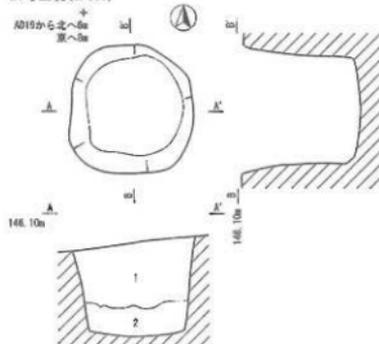
第20図 土坑(4)

19号土坑 (SF224)



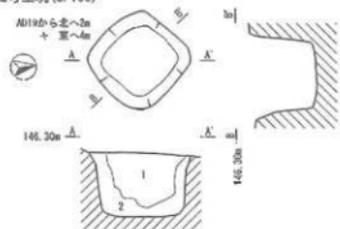
- 1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘りや強い、締まり強い、焼土粒(φ2~3mm)を少量含む。
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) 粘り、締まり強い、焼土粒(φ1~2mm)を少量含む。
- 3 黄褐色土 (10YR3/6) 粘りや強い、締まりやや強い、焼土粒(φ1~2mm)を少量含む、P3層。

21号土坑 (SF097)



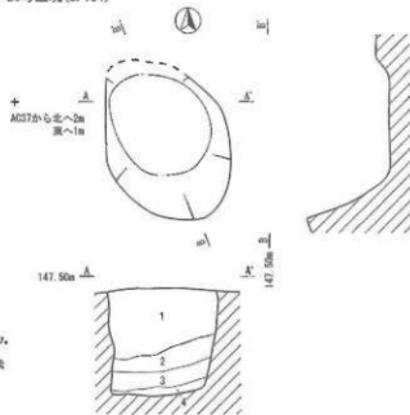
- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 粘りや強い、締まり強い、赤色スコリア(φ1~5mm)を少量含む。
- 2 褐色土 (10YR4/4) 粘りや強い、締まり強い、褐色スコリア(φ2~4mm)を少量含む。

22号土坑 (SF106)



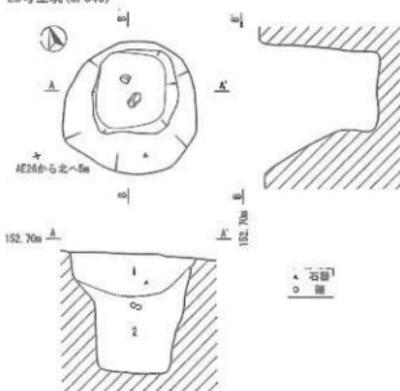
- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 粘りや強い、締まり強い、赤色スコリア(φ2~4mm)を少量に含む。
- 2 褐色土 (10YR4/4) 粘りや強い、締まり強い、褐色スコリア(φ2~4mm)を少量含む。

20号土坑 (SF154)

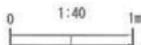


- 1 明褐色土 (7.5YR5/6) 粘りや強い、締まり強い、赤色スコリア(φ2~5mm)、赤色スコリア(φ2~5mm)を少量含む。
- 2 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘り、締まりやや強い、赤色スコリア(φ2~5mm)を少量に含む。
- 3 褐色土 (7.5YR4/4) 粘り、締まりやや強い、赤色スコリア(φ1~2mm)を少量含む。
- 4 黄褐色土 (10YR7/0) 粘りや強い、締まりやや強い。

23号土坑 (SF049)

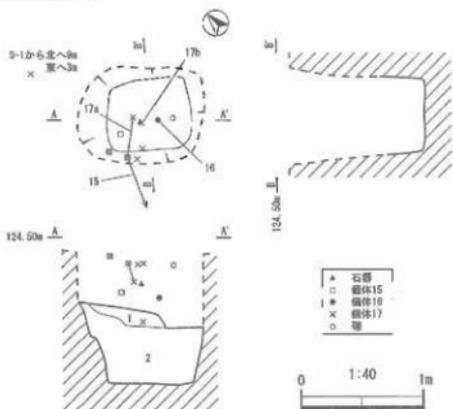


- 1 黒色土 (7.5YR2/2) 粘りや強い、締まりやや強い、スコリア(φ1~3mm)を多量に、炭化物(φ1~5mm)を若干含む、黒曜石チップ出土。
- 2 暗褐色土 (10YR3/2) 粘りや強い、締まりやや強い、炭化物(φ1~2mm)、スコリア(φ1~3mm)を多量に含む、K1-VLのブロッグが点在する。



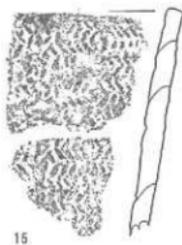
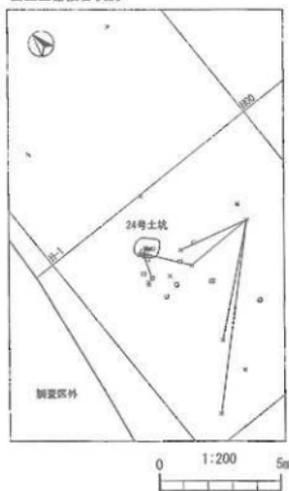
第21図 土坑(5)

24号土坑(SF236)



- 1 緑褐色土(10732/C) 粘りや強い、細まりや強い、赤色スコリア(φ2~3mm)を若干含む。
 2 褐色土(10734/O) 粘りや強い、細まり強い、細石粒を少量含む。

出土土器接合状況



15



16a



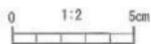
16b



17a

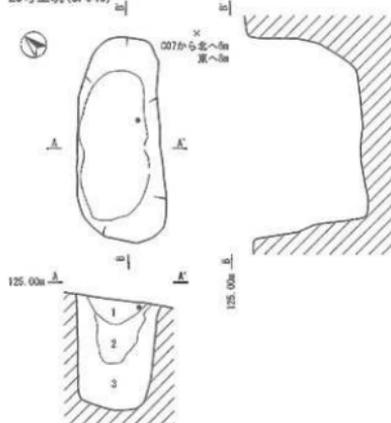


17b



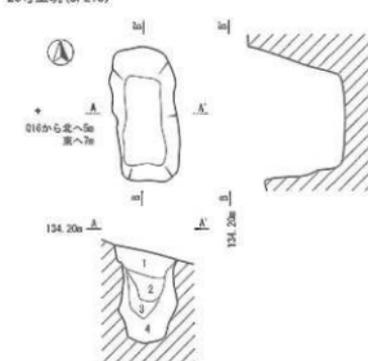
第22図 土坑(6)

25号土坑(SF040)



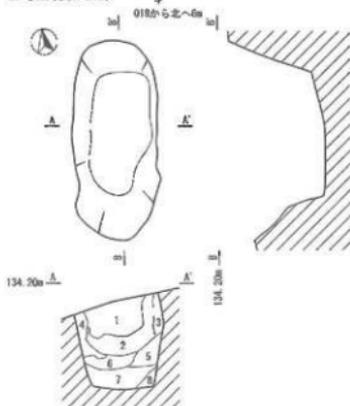
- 1 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘りや強い、締まりやや弱い、赤色スコリア(φ1~5mm)を若干含む。
- 2 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘りや強い、締まり強い、黄褐色土粒(φ3~6mm)を含む。
- 3 褐色土(7.5YR5/3) 粘りや強い、締まりやや強い、赤色スコリア(φ1~2mm)を含む。

26号土坑(SF215)



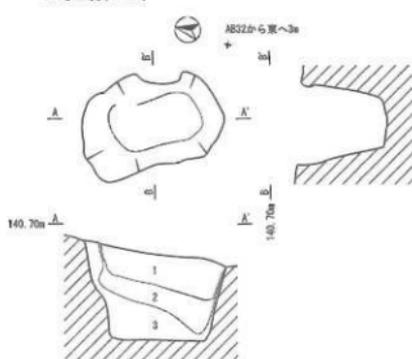
- 1 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘りや強い、締まりやや弱い、炭化物、赤色スコリアを少量含む。
- 2 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘りや強い、締まりやや強い、赤色スコリアを少量含む。
- 3 褐色土(7.5YR4/3) 粘りや強い、締まりやや強い、褐色土ブロック(7.5YR4/3)を少量含む。
- 4 褐色土(7.5YR4/4) 粘りや強い、締まりやや強い、褐色土ブロック(7.5YR4/3)を少量含む。

27号土坑(SF216)



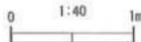
- 1 褐色土(7.5YR4/3) 粘りや強い、締まりやや弱い、赤色スコリアを少量含む。(特に下部に集中)
- 2 褐色土(7.5YR4/3) 粘りや強い、締まりやや弱い、褐色粘土ブロック(7.5YR4/4)を少量含む。
- 3 褐色土(7.5YR4/4) 粘りや強い、締まりやや弱い、赤色スコリアを少量含む。
- 4 褐色土(7.5YR4/4) 粘りや強い、締まりやや弱い、褐色土ブロック(7.5YR4/3)を含む、赤色スコリアを少量含む。
- 5 褐色土(7.5YR4/4) 粘りや強い、締まりやや強い、赤色スコリアを少量含む。
- 6 褐色土(7.5YR4/4) 粘りや強い、締まりやや強い、褐色土ブロック(7.5YR4/3)を少量含む。
- 7 褐色土(7.5YR4/4) 粘りや強い、締まりやや強い、赤色スコリアを少量含む。
- 8 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘りや強い、締まりやや強い、含有物はほとんど見られない。

28号土坑(SF237)



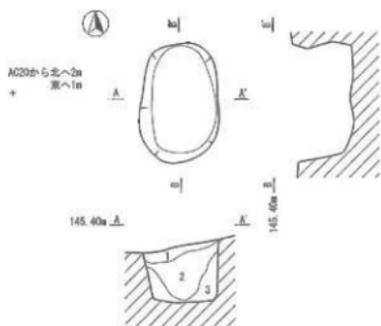
- 1 暗褐色土(10YR3/2) 粘りや強い、締まりやや強い、褐色スコリア(φ1~2mm)を少量含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 粘りや強い、締まりやや強い、赤色スコリア(φ3~4mm)、珪石を少量含む。
- 3 暗褐色土(10YR3/4) 粘りや強い、締まりやや強い、赤色スコリア(φ2~4mm)、珪石を少量含む。

● 土器



第23図 土坑(7)

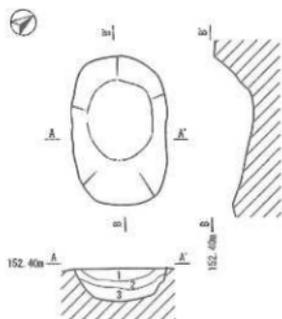
29号土坑 (SF109)



- 1 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘やや強い、締まりやや強い、印状が少量存在する。
- 2 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘やや強い、締まりやや強い、印ブロックを多数を含む。
- 3 暗褐色土(10YR3/4) 粘やや強い、締まりやや強い。

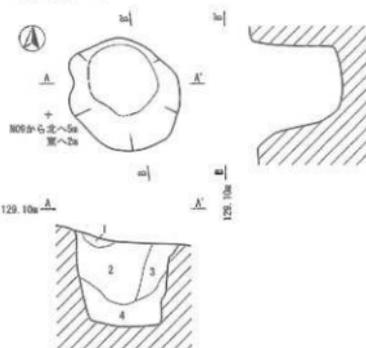
31号土坑 (SF093)

AF12から北へ4m
東へ1m



- 1 暗褐色土(7.5YR2/3) 粘やや強い、締まりやや強い、ISC層に類似する。スロリアを不規則に含む。
- 2 黒色土(7.5YR1/1~2/1) 粘やや強い、締まりやや強い、印ブロックを多数を含む。暗褐色土ブロックが存在する。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘強い、締まりやや強い、灰層の水漬、あるいは2層入したもので、きめ細かい。

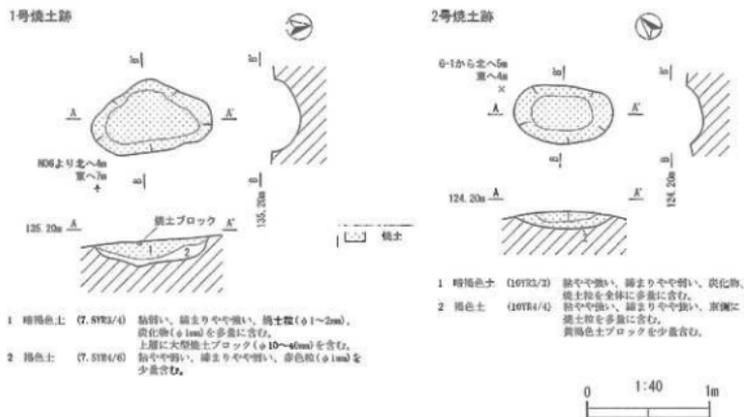
30号土坑 (SF096)



- 1 褐色土(10YR4/4) 粘強い、締まりやや強い、印ブロック(φ15~50mm)が存在する。
- 2 褐色土(10YR4/4) 粘やや強い、締まりやや強い、印ブロックを含む。
- 3 褐色土(10YR4/4) 粘やや強い、締まりやや強い、印ブロックを少量含む。
- 4 褐色土(10YR4/4) 粘強い、締まり弱い。

第24図 土坑(8)





第25図 焼土跡

第3表 土坑属性

遺構名	現場遺構名	長さ(m)	短辺(m)	最大深(m)	グリッド	平面	検出層位	覆土	堆積	小穴数	遺物
1号	SF059	1.74	0.50	0.28	J07	楕円形	SC1	YL主体	自然堆積	4	
2号	SF098	1.27	0.77	0.21	AB14	楕円形	YL	FB主体	自然堆積	3	
3号	SF099	1.11	0.78	0.66	AB14	楕円形	YL	FB主体	自然堆積	2	
4号	SF100	1.42	0.74	0.39	AD14	楕円形	YL	FB主体	自然堆積	3	
5号	SF124	0.80	0.74	0.59	O14	ほぼ円形	YL	YL主体	単一覆土	0	
6号	SF125	0.97	0.93	0.28	Q13	円形	BB0	YL主体	単一覆土	0	
7号	SF105	0.76	0.58	0.18	AE12	不整形円形	NL	YL主体	単一覆土	0	
8号	SF110	1.22	0.68	0.28	M15	楕円形	SC1	YL主体	単一覆土	0	石器1点
9号	SF139	1.27	0.56	0.27	S13	隅丸長方形	SC1	YL主体	単一覆土	0	
10号	SF094	1.09	0.69	0.29	Z30	楕円形	FB	YL主体	単一覆土	0	
11号	SF138	1.06	0.80	0.54	AF35	不整形楕円形	YL	YL主体	単一覆土	0	
12号	SF214	1.01	0.78	0.30	Q17	不整形	YL	YL主体	単一覆土	0	土器1点
13号	SF235	1.12	0.64	0.74	H00	楕円形	YL	YL主体	自然堆積	0	
14号	SF111	1.13	0.58	0.74	N12	楕円形	BB0	YL主体	自然堆積	0	
15号	SF039	1.45	1.33	0.44	F04	円形	YL	FB主体	単一覆土	0	土器1点
16号	SF155 (1.50)	1.00	1.18	Q17	楕円形	FB	FB主体	単一覆土	0		
17号	SF104	0.88	0.59	0.41	AE12	楕円形	NL	FB主体	単一覆土	0	
18号	SF225	1.06	0.93	0.72	H00	ほぼ円形	YL	FB主体	自然堆積	0	土器2点
19号	SF224	1.14	1.09	1.12	H00/O1	不整形円形	YL	FB主体	自然堆積	0	
20号	SF154 (1.46)	1.04	0.90	AC37	不整形楕円形	YL	FB主体	自然堆積	0		
21号	SF097	1.11	0.99	0.76	AD19	不整形円形	YL	FB主体	自然堆積	0	
22号	SF106	0.93	0.92	0.70	AD19	円形	YL	FB主体	自然堆積	0	
23号	SF049	1.17	1.04	0.98	AE26	円形	KU	FB主体	1自然堆積	0	石器1点 土器2点
24号	SF236 (1.00)	(0.80)	(1.10)	G-1	不整形楕円形	SC1	FB主体	自然堆積	0	土器1点	
25号	SF040	1.67	0.66	0.80	C07	楕円形	YL	FB主体	自然堆積	0	土器1点
26号	SF215	1.10	0.50	0.75	Q16	隅丸長方形	YL	FB主体	自然堆積	0	
27号	SF216	1.63	0.67	0.74	Q17	楕円形	YL	FB主体	自然堆積	0	
28号	SF237	1.17	0.77	0.74	AR32	不整形楕円形	YL	FB主体	自然堆積	0	
29号	SF109	0.99	0.61	0.48	AC20	楕円形	FB	KU主体	自然堆積	0	
30号	SF096	0.93	0.83	0.70	N09	不整形円形	KU	KU主体	自然堆積	0	
31号	SF093	1.22	0.76	0.36	AF13	楕円形	YL	KU主体	自然堆積	0	

(注) 楕円内は断面図

第4表 焼土跡属性

遺構名	現場遺構名	グリッド	検出層位	長さ(m)	短辺(m)	最大深(m)	平面
1号	FP01	N06	FB	0.99	0.59	0.20	不整形円形
2号	FP03	G-1	YL	0.81	0.50	0.14	楕円形

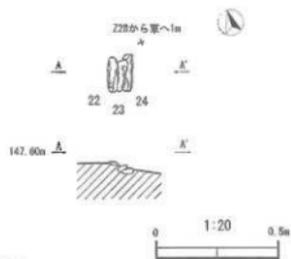
1号石斧集中

AC24から北へ1m
東へ0.5m

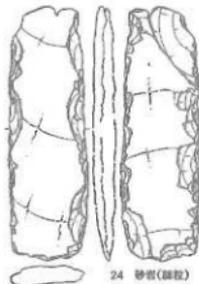
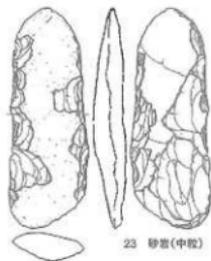
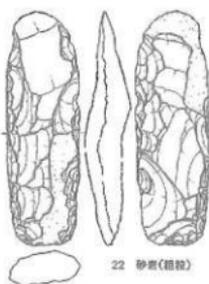
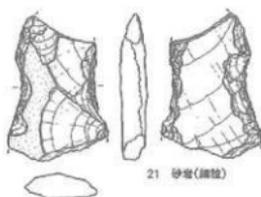
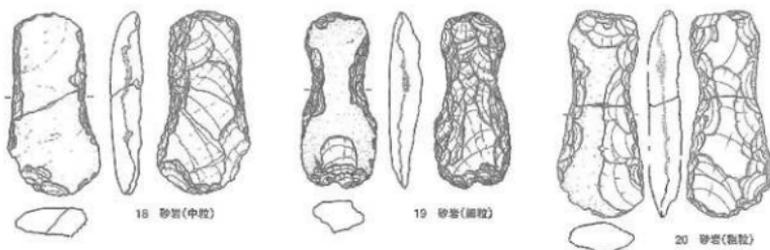


2号石斧集中

Z28から東へ1m



第26図 石斧集中検出状況



0 1:3 10cm

第27図 石斧集中出土遺物

第2節 土器

1 概要

秋葉林遺跡から出土した縄文土器は破片数で3515点にのぼる。これらを以下のように分類した。

第Ⅰ群 早期中葉	1類 押型文を縦位密接に施文するもの 2類 押型文を帯状に施文するもの 3類 押型文を異方向密接に施文するもの 4類 I群に併行すると思われる撚糸文を施文する土器 5類 I群に併行すると思われる沈線文を施文する土器
第Ⅱ群 早期後葉	1類 絡条体圧痕文を施文する土器（清水柳E類土器） 2類 野島式 3類 鶴ヶ島台式 4類 茅山下層式 5類 茅山上層式 6類 I・II群に併行すると思われる条痕文土器 7類 I・II群に併行すると思われる縄文を施文する土器
第Ⅲ群 早期末葉～前期前葉	1類 木島Ⅲ式 2類 下吉井式
第Ⅳ群 前期中葉～中期前葉	1類 諸磯b・c式 2類 十三菩提式 3類 北白川下層式 4類 五領ヶ台式 5類 北裏CⅡ式 6類 IV群に併行すると思われる縄文を施文する土器 7類 IV群1類に併行すると思われるその他土器
第Ⅴ群 中期前半	1類 角押文を施すもの 2類 三角押文を施すもの 3類 キャタピラー文を施すもの 4類 隆帯の上に刻みを施すもの
第Ⅵ群 中期後半	1類 曾利式 2類 加曾利E式
第Ⅶ群 後期	1類 称名寺式 2類 堀ノ内I式
第Ⅷ群 型式不明	

縄文土器の群別の分布を第28図に、分類別の分布状況を第29～32図に示した。調査区全体に早期から後期にかけての土器が分布するが、分布の中心はI群・II群に分類される早期中葉から後葉にかけての土器群と、IV群に分類される前期末葉から中期前葉にかけての土器群であり、他の時期の土器はやや散漫な分布状況である。

早期の土器群には二つの集中域が認められる。一つは西尾根部（E/J-2/01グリッド周辺）であり、ここには集石11基、土坑5基、焼土跡1基などが分布している。また、石器集中域1・2とも重なっており、後部磨石（後部に顕著な磨面が見られる礫石器）が多数出土している（第3節参照）。もう一つは東尾根部（AD/AF34/36グリッド周辺）であり、I群3類・II群1類の土器が特に濃集している。一方で、西尾根部に多く見られるI群1類・2類の土器が見られない。

前期末葉から中期前葉にかけての土器群には、二つの集中域が認められる。一つは東尾根部（AG/AJ31/33グリッド周辺）であり、IV群1類・2類・4類・5類土器が集中している。もう一つの集中域は中央東尾根部（Y/AC24/29グリッド周辺）であり、IV群4類が集中するほか、早期末葉から前期前葉に位置づけられるIII群1類の土器も見られる。また、2基の石斧集中遺構が検出された。

2 出土土器の検討

(1) 第I群 早期中葉

早期中葉に属する土器を本群とした。押型文土器が大半を占めるが、縹糸文や沈線文を施文するものも含まれる。以下の1～5類に分類した。

① 1類（第33図 写真図版25）

本類は、押型文を縦位密接に施文するものである。

15・25・26は山形文を縦位に密接施文している。15は口縁部～胴部の破片である。胎土はにぶい褐色を呈し、白色岩片と繊維を多く含む。24号土坑の覆土より出土した（第22図）。25は口縁部破片である。胎土に白色粒子を多く含む。26は胴部破片である。胎土に白色粒子をやや多く含む。器厚はやや薄い。16a・16b・4bの胎土は類似しており、灰黄褐色を呈する。胎土は軽しうであり、手に持ったとき他の土器と比較して軽い印象を受ける。器厚は厚い。16a・16bは3条の横線と山形文を組み合わせた原体を縦位に密接施文している。原体の長さは比較的短く、押型のつなぎ目を確認できる。これらも24号土坑の覆土より出土している（第22図）。4bは胴部破片である。山形文とLRの縄文を縦位密接に施文する。内面は丁寧にナデられている。同一個体と思われる、縄文を施文した破片が5号集石より出土している（第14図）。27a・27bは同一個体と考えられる。27aは口縁部破片である。外面には格子目文を縦位密接に施し、内面にも口縁部直下と同じ原体を横位に施文している。27bは胴部破片である。いずれも残存状況は悪い。28は胴部破片である。胎土は明黄褐色を呈し、白色粒子および岩片を多く含む。非常に細かい格子目の押型文を縦位に施文している。17cは16a・16b・4bと胎土が類似している。やや粗大な格子目の押型文を縦位に密接施文する。同一個体と思われる破片が、24号土坑覆土および周辺部より出土している（第22図）。

② 2類（第33～35図 写真図版25）

本類は、押型文を帯状に施文するものである。

29～32・5bは、いずれも口縁部では横位に、胴部では縦位に、山形文を帯状に施文している。また口縁部内面にも外面と同じ原体を横位に施文している。口縁に沿って山形文を1条施文するもの（29・31・32）と2条施文するもの（5b・30）に大別できる。29・30・32は口唇部にも外面・内面と同じ原体で山形文を施文している。5bは口唇部に刺突を施す。胎土はにぶい橙色を呈する。同一個体と思われる破片が、5号集石より出土している（第14図）。31は器厚が薄く、口唇部の施文が明確に確認できない。

32a・32b・32cは同一個体である。横位に1条と縦位に3条の山形文が確認できる。33・34・2は胴部破片である。2は4号集石より出土した(第14図)。35は底部に近い胴部破片と考えられる。36は底部で、尖底であることが確認できる。37は胴部破片である。格子目文を施文した後に磨り消しており、縦横の帯状に残っている。38は口縁部破片である。口縁に沿って楕円文を1条施文し、その下に無文部をはさんでもう1条、横位の楕円文を施文している。さらにその下部には楕円文を縦位に施文している。口唇部には篋状の工具で刻みを施している。39は胴部破片である。繊維を多量に含む。山形文を横位に施文している。29等と比べ、山形の文様が太い。

③3類(第35・36図 写真図版26)

本類は、押型文を異方向密接に施文するものである。

40a・40bは、口縁部の破片と、胴部から底部にかけての破片が残存する。器形は口縁部がやや外反し、胴部はやや張って底部は尖底である。楕円文を外面全体に施文する。胎土に繊維を多く含む。41は口縁部破片である。細長い楕円文を縦横に施文している。口縁部はやや外反する。42は口縁部破片である。楕円文を施文し、胎土に白色粒子を多量に含む。43～45は楕円文を施文する胴部破片である。44・45は胎土に繊維を含む。楕円文を縦位と横位に施文する。器厚はやや厚い。46～48は胎土に金雲母を多く含む。楕円文を施文する。46は口縁部破片である。楕円文を横位に密接して施文している。47は胴部破片である。胎土には金雲母のほか石英を多く含む。表面は褐色を呈する。48は底部に近い胴部の破片である。

④4類(第36図 写真図版26)

本類は、捻糸文を施文するものである。

49aは口縁部破片であり、3条の捻糸文を横位と縦位に帯状に施文している。口縁部内面にも捻糸文が横位に施文されている。49bは胴部破片である。50は縄文を短く施文するものであるが、便宜上ここに分類した。51はRの捻糸文を横位に施文するものである。胎土に金雲母を多量に含む。いずれの個体も胎土に繊維を含む。

⑤5類

本類は、沈線文を施文するものである。いずれも小片であるため、図化できなかった。

(2)第Ⅱ群

早期後葉に属すると思われる土器を第Ⅱ群とした。早期後葉はいわゆる条痕文土器が分布する時期に当たる。以下の1～5類に分類した。

①1類(第37・38図 写真図版27)

絡条体圧痕文を施文するものである。本類は、静岡県東部において清水柳E類土器と称されるものである。

52～57は口縁部を含む破片である。口縁に沿ってRの絡条体圧痕文が横位に施文される。胎土には繊維が含まれ、54以外は胎土に白色岩片を多量に含む。52は内面に横方向の擦痕が観察できる。54は口唇部に先端が平坦な棒状工具で押圧を加えている。55は内面に横方向の条痕による調整を行っている。56は口縁部から胴部下にかけて残存する。口縁部は緩やかに外反し、口縁形態は波状である。口縁部文様帯には口縁に平行して絡条体圧痕文列を施文する。胴部は無文である。57は口縁に平行する絡条体圧痕文列と、口縁から放射状にのびる絡条体圧痕文列が確認できる。

②2類(第39図 写真図版28)

本類は沈線を用いて幾何学的な文様を施文するものである。これらは野島式に併行すると思われる。

58は口縁部破片である。棒状工具により斜位の沈線を施文する。口唇部には棒状工具による押圧を加

えている。59は外面に斜位の沈線を施文し、内面には条痕による調整がみられる。60は縦位と斜位に沈線を施文する。内面には条痕による調整がみられる。61はやや細い棒状工具で二方向に斜位の沈線を施文した後、やや太い棒状工具で横位に刺突を加えている。62は二方向に斜位の沈線を施文した後、斜位と縦位の刺突列を施文している。胎土に繊維を多量に含む。58・61・62は内面に条痕による調整を確認できない。

③ 3類 (第39図 写真図版28)

本類は沈線や刺突文を用いて区画を充填し、交点に刺突を施すものである。胎土に繊維を多量に含んでいる。これらは轆ヶ島台式に相当すると思われる。

63aは、緩やかな波状口縁で、波頂部には棒状工具によって押圧を加えている。63bは、斜位の沈線列を左右から施文して、その交差する部分を菱形にナデつけることによって、幾何学状の文様を作っている。63cは沈線を交差させることによって区画を作っている。沈線の交差部付近には刺突を加えている。作られた区画の中に横位や縦位の沈線を充填して施文する。64aは中空の筒状把手である。器面に条痕と思われる調整を縦位に施した後、破片上部では沈線を横位に、下部では斜位に施文している。口縁端部には棒状工具による押圧を加えている。64bは斜位の沈線により区画を作って、その中を横位や縦位の沈線を充填する。また、棒状工具による刺突列を横位に配している。

④ 4類 (第39図 写真図版28)

茅山下層式に相当すると思われるものである。

65は表面に斜位の刺突列を施している。内面には横位の条痕による調整がみられる。胎土に多量の繊維を含む。

⑤ 5類 (第40図 写真図版28)

器面の内外に貝殻条痕による調整を施し、その上に刻みを入れた隆帯により区画を作るものを本類とした。これらは茅山上層式に相当すると思われる。

66は酒杯状突起を付けた波状口縁である。表面には、刻みを入れた断面三角形の隆帯を、縦位方向や斜位方向につなげて三角形にしている。器面の内外ともに貝殻条痕による調整が行われている。67は隆帯を口縁に沿って横位に配し、波頂部から縦位に垂下した隆帯と交差させている。

なお、66・67については、編集作業終了後に神ノ木台式ではないかとの指摘を小崎氏より受けたのでここに記す。

⑥ 6類 (第40・41図 写真図版28)

型式は不明だがⅠ・Ⅱ群の時期に併行すると思われる条痕文土器を一括した。

68は表面に条痕文を施文するもので、内面には擦痕が見られる。69は斜位に条痕文を施文し、口縁には篋状工具で刻みを加えている。焼成は悪い。70は表面には擦痕による調整が、内面には条痕による調整が見られる。胎土にやや大きな白色岩片を含み、繊維を多量に含む。71・72は表面、内面ともに条痕により調整がされている。73・74は胎土がにぶい黄橙色を呈する。73は器厚が本類の他のものと比べ薄い。74は底部に近い胴部の破片である。

⑦ 7類 (第41図 写真図版29)

型式は不明だがⅠ・Ⅱ群の時期に併行すると思われる縄文を施文する土器を一括した。75は緩やかな波状口縁で、LRの縄文を二方向から施文し、見た目羽状を呈している。胎土には白色粒子と繊維を多量に含む。76は結節縄文と思われる縦位の施文が観察できる。胎土には繊維を含む。

(3) 第Ⅲ群 早期末葉～前期前葉

早期末葉から前期前葉に属する土器を第Ⅲ群とした。以下の2類に分類した。

① 1類 (第41・42図 写真図版29)

器厚が数mmと薄く、器面に斜位または横位の細線文を施文するものを本類とした。胎土には繊維をほとんど含まない。木島Ⅲ式(池谷・増島 2006)に相当すると考えられる。

77は口縁部破片である。口唇部直下に横位の押し引き状の刺突列を加え、その下に羽状の細線文を施文する。内面にも横位の細線文を施文している。78・79は、縦位に記された隆帯に貝殻背圧痕による押し引きを加え、その隆帯を軸として、羽状の細線文を施文している。また78は隆帯の上部に、79は下部に、貝殻背圧痕を横位に施文している。80は先端が平坦な棒状工具による押し引きを、表面全面に施文している。81は上端には横位の、その下には斜位の細線文を施文する。82～86は細線文を二方向斜位に施文する。87は一方斜位の細線文を施文する。88～90は胎土や器厚、色調が77～87と同様だが、細線文が見られない無文のものである。

② 2類 (第42図 写真図版29)

91は貝殻背圧痕を施した隆帯を持つ。下吉井式に分類した。

(4) 第Ⅳ群 前期中葉～中期前葉

前期中葉から中期前葉に属する土器を本群とし、以下の7類に分類した。

① 1類

半截竹管文を多用することによって文様を描いている土器で、a種は踏磯b式に、b種は踏磯c式に相当する。

a種 (第42図 写真図版30)

縄文を地文とし、半截竹管状の工具で押し引文を施文するもので、踏磯b式に相当する。

92は口縁部破片である。口縁部のやや肥厚した部分の上半分を無文とし、下半分に二方向斜位の沈線を施す。その直下に、半截竹管状の工具を用いた押し引文を横位に2条施文している。93はRLの縄文を地文とし、破片上部に半截竹管状工具による押し引文が横位に施文されている。94は半截竹管状の工具で2条の押し引文を施文している。95は胴部破片であり、下部で大きく内側に屈曲する。RLの縄文を地文とし、半截竹管状の工具を用い、沈線で木の葉状の区画を作り出している。96a・96b・96cは同一個体と考えられる。96aは口縁部破片で2条の横位の押し引文が確認できる。96bはRLの縄文の地文が確認できる。96cは底部破片である。97は踏磯b式に併行すると思われる把手である。

b種 (第42図 写真図版30)

半截竹管状の工具による集合沈線を施文するもので、踏磯c式に相当する。

98はやや細い沈線を斜位異方向に施文している。99は半截竹管状の工具により、上端と下端に横位の沈線を施し、その間に羽状の沈線で施文している。100a・100bは同一個体である。胴部では縦方向に、底部では横方向に集合沈線が施文されている。101は底部破片である。底部から胴部がほぼ垂直に立ち上がっている。

② 2類 (第43図 写真図版30)

十三菩提式に相当するものである。

102は胴部破片である。破片中央部に3～4条の横位の沈線を施文し、それらを上下に挟むように三角文と縦位のレンズ状文を施文している。また、それらの内部を彫刻技法により削っている。103a・103bは口縁部から胴部にかけての破片である。結節浮線文を用いて、渦巻き状の幾何学的な文様を施文している。また、屈曲部より上に結節浮線文が、下にLRの縄文が施文されていることから、底部付近は縄文

が施文されていたと思われる。胎土に白色粒子・白色岩片を多く含む。

③3類 (第43図 写真図版30)

器厚が薄く、胎土の色調は褐色色を呈している。これらは関西系の北白川下層式に相当すると思われる。

104は刺突列を3条施文して、2条目と3条目の間、および3条目の下にやや大きめの爪形状の交互刺突列を施文している。北白川下層1b式に相当する可能性がある。105は縦位に沈線が何条も施文されている。

④4類 (第44・45図 写真図版31・32)

五領ヶ台式に相当するものである。

106a・106bは同一個体と考えられる。106aは口縁部破片であり、断面はS字状を呈している。器面には斜位および縦位と、横位の集合沈線が組み合わされ、施文されている。107は、口縁端部付近で急激に外側に屈曲する口縁部破片である。沈線が横位に4条施文され、2条目と3条目の間にできる凸面から下方に向かって楕状把手を貼付している。凸面には刻みが施されている。108は、縦位の集合沈線を施文してから、交差状の集合沈線、横位の沈線などが施文される。また、半截竹管状工具を上下交互に刺突することによって波状文を作出し、横位の沈線の間に施文している。109は、破片中央部に半截竹管状工具の連続刺突が加えられた陸帯が配される。陸帯の周囲には縦位または横位の集合沈線が施文される。110a・110bは同一個体と考えられる。110aは口縁部破片である。斜位の細線文を地文とし、口縁に平行して数条の沈線を運らせ、その間に鋸歯状の沈線を施文する。110bは胴部の破片である。斜位の細線文の上に、横位または縦位の平行沈線を組み合わせて施文している。111は口縁部破片である。斜位の細線文を地文とし、3条一組の横位または斜位の集合沈線で施文している。

112a・112bは同一個体と考えられる。112aは口縁部破片である。口縁上部には、楕円形の貫通孔が見られ、口唇部には刻みが施されている。口縁部直下には、横位に施文された沈線に沿って刺突列が加えられている。破片下部では3条の沈線が施文され、その間は細い竹管状工具による円形刺突で充填されている。112bは底部破片である。底部はほぼ垂直に立ち上がり、緩やかに外反する。113は口縁部破片である。口唇部から口縁端部にかけて刻みが施されている。口縁に平行するように沈線を1条施文し、それに沿うように刺突列が加えられている。地文はほとんど確認できない。114は口縁部破片である。口唇部に刻みを加える。口縁部文様帯は縄文、または鬚糸文を地文とし、縦位の集合沈線を施文する。破片中央部に2条の横位の沈線を施文して、それに沿うように刺突列を加える。破片下部は横位の鬚糸文を施文する。115aは口縁部破片である。口縁はやや肥厚し無文帯を形成している。口縁に平行するやや太い沈線より下部には縄文が施文される。115bは縄文を地文とし、Y字状の沈線を垂下させる。116は縄文を地文とし、口縁上端を肥厚させている。横位または斜位の沈線で施文し、それらに沿う形で刺突が加えられる。また、破片左下部には円形の突起が貼付されている。口縁肥厚部および円形突起には、上から地文と同じ原体で縄文が施文されている。117は外反する口縁部で、口唇部に紐状の粘土を貼り付け、波形を作り出している。器面は縄文を地文とし、横位の沈線、その下には弧状の沈線とそれに伴うやや深い刺突で施文されている。118は口縁部破片である。縄文を地文とし、口縁端部に篋状工具で刻みを加えている。119～121は縄文を地文とし、縦位に結節縄文を施文するものである。119は同一個体と思われる破片が17号集石より出土している。121は破片上部には縦位の集合沈線、下部には縦位の結節縄文を施文したのち、上下を区切るように2条の沈線を横位に施文している。122は底部中央が盛り上がっている。胎土に金雲母を多く含む。

⑤5類 (第46図 写真図版32)

色調が灰黄褐色を呈し、薄い器壁を有するもので、北裏CⅡ式に属すると考えられる。

123は、胴部が強く張り出すと思われる鉢の口縁である。口縁端部には横位2条の隆帯が貼付され、半截竹管状工具による連続爪形文が加えられている。124は、連続爪形文を加えた隆帯を用いて区画を作り、区画内には区画に沿った沈線と刺突を施文している。125aは、色調がにぶい橙色で他とは異なるが、連続爪形文を加えた隆帯が横位に2条貼付されている。125bは同一個体と思われる底部破片である。126a・126bは、低い隆帯を用いて区画を作っている。区画内は縄文を地文として、半截竹管状工具による平行沈線を用いて三叉文や波状文が施文されている。127a・127bは隆帯に筥状工具で刻みを加えている。また、隆帯の間を沈線で施文している。127aは隆帯を横位に3条、127bは隆帯を弧状に配している。128は底部破片である。縄文を施文している。

⑥6類 (第46・47図 写真図版33)

縄文を施文するもので、IV群に併行すると思われるものを一括した。

129・130ともに胴部破片で、RLの縄文を施文する。131は口縁部から胴部にかけての破片である。口縁は緩やかに外反する。表面全体にRLの縄文を施文する。132は浅鉢の胴部破片である。屈曲部より下部にはRLの縄文を施文し、上部は無文である。133a・133bは同一個体と考えられる。LRの縄文を施文する。133aは胴部破片、133bは底部破片である。ほぼ垂直に立ち上がる。134は細かいLRの縄文を施文する。135はLRの縄文を施文する。胎土に金雲母を多量に含む。

⑦7類

IV群1類に併行すると思われる土器を一括した。小片につき図化できなかった。

(5)第V群 中期中葉

中期中葉に属するものを第V群とし、以下の1～5類に分類した。

①1類 (第47図 写真図版33)

角押文を施文するものを本類とした。

136aは胴部破片である。沈線によって横位の楕円区画を形成し、その中に縦位・斜位の角押文を充填する。胎土に白色岩片・金雲母を多く含む。136bは同一個体と思われる底部である。137は胴部破片である。角押文を同心円状に施文する。破片上部には指頭圧痕を施した隆帯を貼付している。

②2類 (第48図 写真図版33)

三角押文を施文するものを本類とした。

138は口縁部破片である。口縁直下に角押文を横位に施文し、その下に三角押文を併走させて区画を作り、その中を羽状の三角押文で充填していると考えられる。139は口縁端部を肥厚させ、無文帯としている。口縁部下部に低い隆帯による横位の楕円区画文を作り、その中に三角押文で充填している。140は、隆帯による弧状の区画文の脇を、三角押文で押さえるように施文している。破片下部はRLの縄文を施文する。141は内湾する口縁部の破片で、三角押文により作られた区画内を棒状工具による縦方向の角押文で充填していると考えられる。破片中央部には粘土紐の束をねじったような隆帯が貼付され、その脇にも三角押文を施文している。

③3類 (第48図 写真図版34)

キャタピラー文を施文するものを本類とした。

142a・142b・142cは同一個体と考えられる。どちらも隆帯に沿ってキャタピラー文を施文しており、キャタピラー文は隆帯の半分にかかっている。142aは口縁部破片である。口唇部が肥厚し、大きく内側に折り返されている。口縁に平行して配された隆帯の脇をキャタピラー文で施文する。142cはいわゆる

ミミズク把手である。把手内面端部には刺突列が加えられる。右側面と左側面を貫通する孔があいている。143は口縁部破片である。横位のキャタピラー文で区画を作り、区画の中を縦位のキャタピラー文で充填する。144a・144bは隆帯脇をキャタピラー文で施文することで楕円の区画を作っている。145も隆帯脇をキャタピラー文で施文することで横長の楕円区画を作り、その中を三角押文や波状沈線で充填している。146は中央の隆帯の脇にやや幅広のキャタピラー文を施文する。隆帯は中央部突起の右側で上下に分岐し、下側の隆帯は押しつぶされ、その上から半截竹管状工具による刺突列が施文される。残った上側の隆帯上にも刺突列が施文される。147は縦位に垂下された1本の隆帯の上に、3本の粘土紐を横位に貼付して橋状の把手としている。148は隆帯によって作られた区画内を集合沈線で充填している。破片上部は、横位の隆帯の脇を幅広のキャタピラー文で施文し、その後隆帯上にも半截竹管状工具による連続爪形文を加えている。

④4類 (第49図 写真図版34・35)

主に隆帯の上に刻みを加えるものを本類とした。井戸尻式に相当すると考えられる。

149は縦位に垂下させた隆帯上に刻みを施し、その両側を斜位の角押文で充填している。口唇部には部分的に棒状工具で刻みを加えている。150は、刻みを加えた隆帯を、間隔をあけて縦位に貼付し、その間には削り取りによる三角形の文様が見られる。151は、横位に隆帯を貼付し、棒状工具による押圧状の刻みを加えた隆帯を数条垂下している。152は地文にLRの縄文を施し、隆帯により三角形の区画を作っている。区画内を棒状工具による沈線や半截竹管状工具による刺突などで充填している。153は、口縁部は緩やかな4単位の波状口縁となっており、口縁部は無文で、胴部との境目に円形の押圧を加えた隆帯を横位に貼付する。波頂部から刻み、または円形の押圧を加えた隆帯が垂下する。胴部には縦位の集合沈線が施文される。154は装飾把手の一部である。竹管状の工具で刺突を施している。155は渦巻状把手のついた口縁部破片である。粘土紐を渦巻状に貼付し、把手部分の内側は円形に窪んでいる。

(6)第VI群 中期後葉

中期後葉に属すると思われるものを第VI群とし、以下の2類に分類した。

①1類 (第50図 写真図版35)

曾利式に相当するものを1類とした。

156aは、把手の正面に2つ、内面に1つの孔があいている。また、把手の先端部には渦巻文が施文される。156bは同一個体の底部破片である。沈線によって弧状の区画を作り、区画内には集合沈線を充填する。157は、竹管状の工具により円形の刺突を施した後、同じ工具で沈線により横位の楕円形の区画を作り、内部を縦位の沈線で充填している。158は、低い隆帯を縦位に貼付し、その隆帯を幅広の沈線が挟む。その脇には斜位の沈線が施文される。159は底部破片である。縄文を地文とし、縦位の沈線を3条配している。これらは曾利Ⅲ式に相当すると思われる。

②2類 (第50図 写真図版35)

加曾利E式に相当するものを2類とした。

160は胴部破片で、縄文を地文とし、微隆起帯で文様を区画している。161は口縁部を無文とし、胴部文様帯との境目に隆帯を貼付している。胴部文様帯は縄文を地文とし、沈線で楕円形を描き、区画内を磨り消している。162は、破片上部に指頭によってナデつけたと考えられる幅広の沈線を横位に施文し、凹線状にしている。凹線以下は縄文を地文とし、3条の連弧文状の沈線を施文している。

(7) 第Ⅶ群 後期

① 1類 (第50図 写真図版35)

163は磨消縄文によって渦巻状の文様を作出している。色調はにぶい橙色を呈している。称名寺Ⅰ式に相当すると考えられる。

② 2類 (第50図 写真図版35)

164は、口縁部に幅広い工具で縦位2列の刺突を施し、それを挟むように竹管状工具で円形の刺突を施文している。口縁部内面にも円形の刺突が見られる。にぶい橙色の色調を呈している。堀ノ内Ⅰ式に相当すると考えられる。

(8) 第Ⅷ群 型式不明 (第51・52図 写真図版36)

第Ⅰ群～第Ⅶ群までの時期に属するものの、型式等の判断が困難であるものを本群とした。

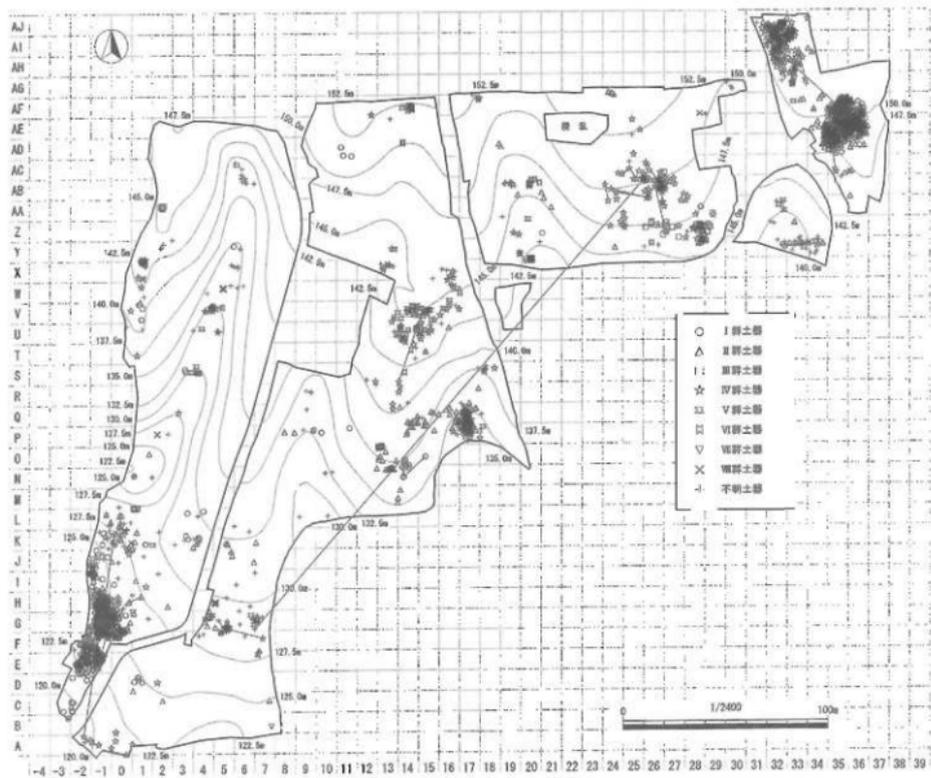
165a・165b・165cは同一個体と考えられる。165a・165bは口唇部に刻みを加え、口縁直下に角棒状工具で2条の押し文を施文し、その下位に放射状の沈線を施文する。165cは縄文を地文とし、斜位の沈線を2条施文する。166a・166b・166cは同一個体と考えられる。166a・166bは棒状工具で波形の沈線を横位に2条施文した後、集合沈線を施文したものである。166cは集合沈線を斜位に施文する。167は棒状工具による沈線を横位に2条引いた後、その下をくの字型に施文している。168は胴部破片である。棒状の工具による沈線が横位に3条配され、その下に弧状と思われる沈線が見られる。169は無文である。胴部は底部から緩やかに立ち上がっている。170は底部破片である。171は波状口縁で、5つある波頂部が平らになっている口縁形態を呈する。器形は胴部上位でゆるく外湾し、口縁部で内湾する。外面には条痕が明瞭に残り、口縁部から胴部にかけての屈曲部分に隆帯を横位に貼付し、竹管状工具で刺突を加えている。また、内面は全面を篋状のものでナデて調整している。172は胎土に砂粒を多く含む。表面・内面ともに擦痕による調整を行っている。173は底部である。網代痕が明瞭に残る。後期に属する可能性を指摘しておく。

(9) 土製品 (第52図 写真図版36)

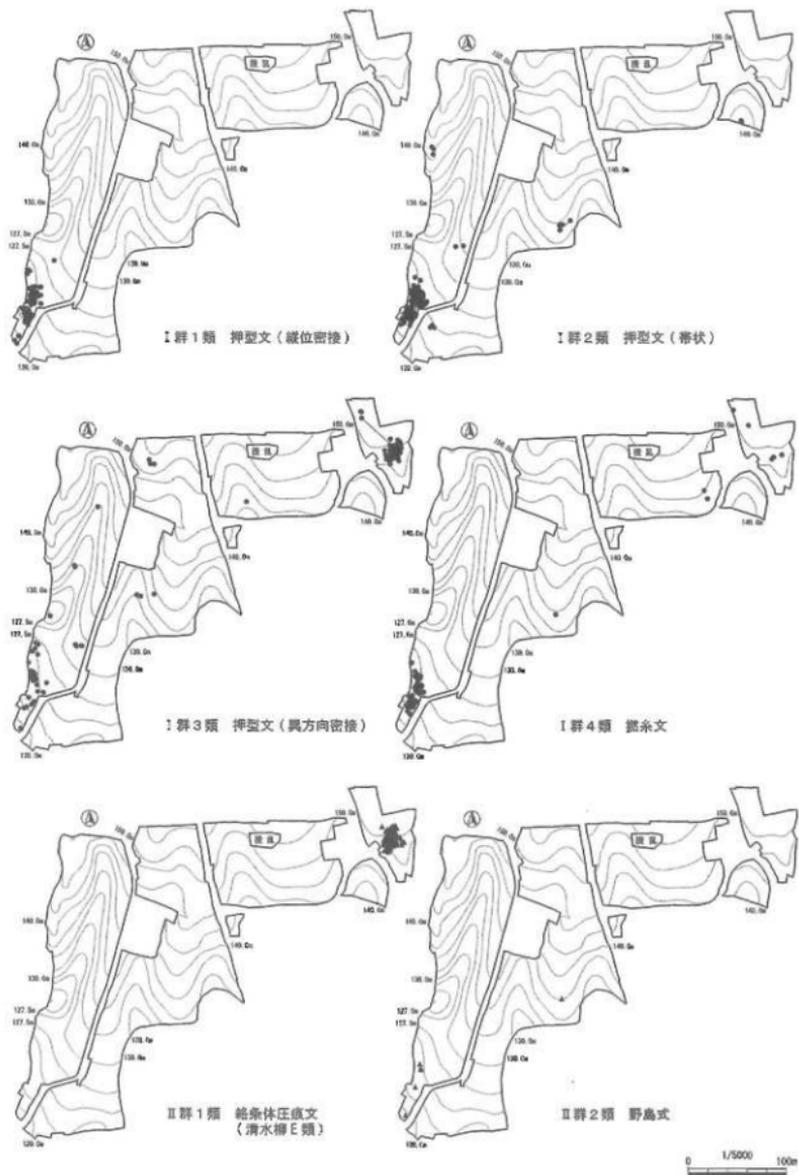
174は土器円盤である。胎土に石英・雲母などを多く含む、Ⅳ群4類の土器と類似する。

参考文献

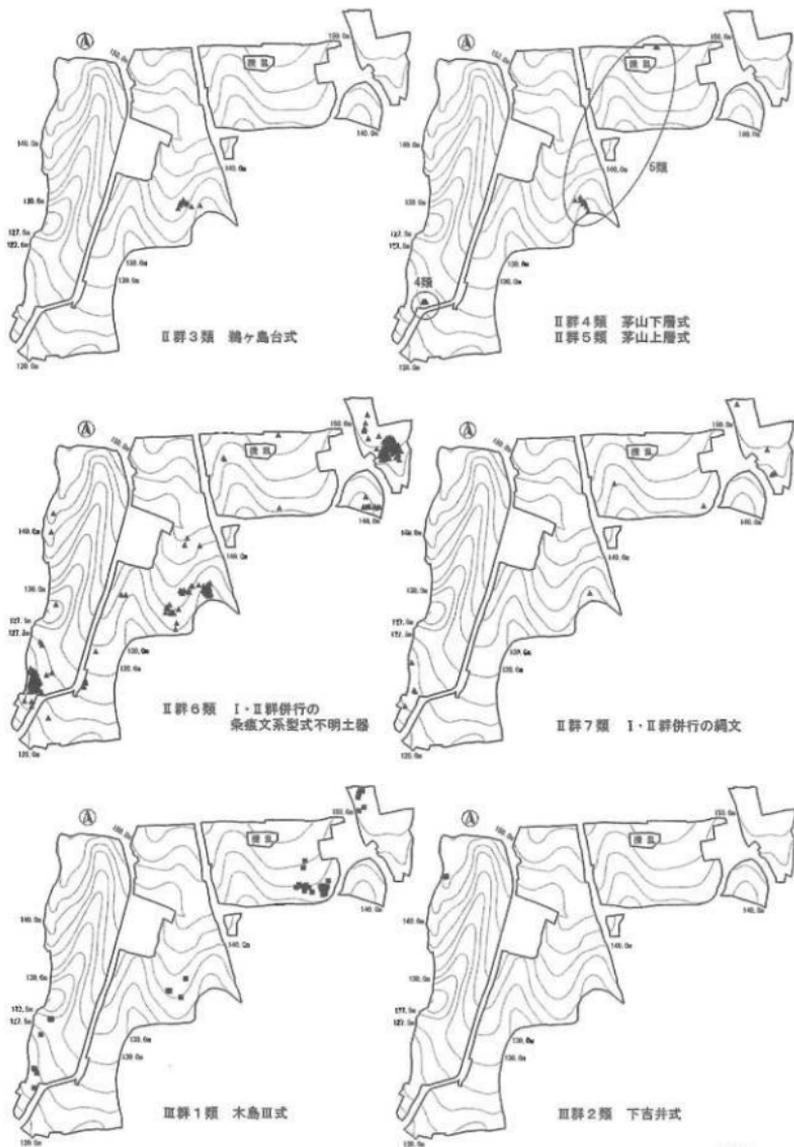
- 池谷信之 2003 「縦位密接施文から異方向帯状施文へ—畿内地方押型文土器の変遷と立野式—」『利根川24・25』利根川同人
池谷信之・増島淳 2006 「アカホヤ火山灰下の共生と相克」『伊勢湾考古第20号』知多古文化研究会
シンポジウム実行委員会 1998 『縄文時代中期前半の東海系土器群について—北尾敷式土器の成立と展開—』静岡県考古学会



第28圖 縄文土器分布

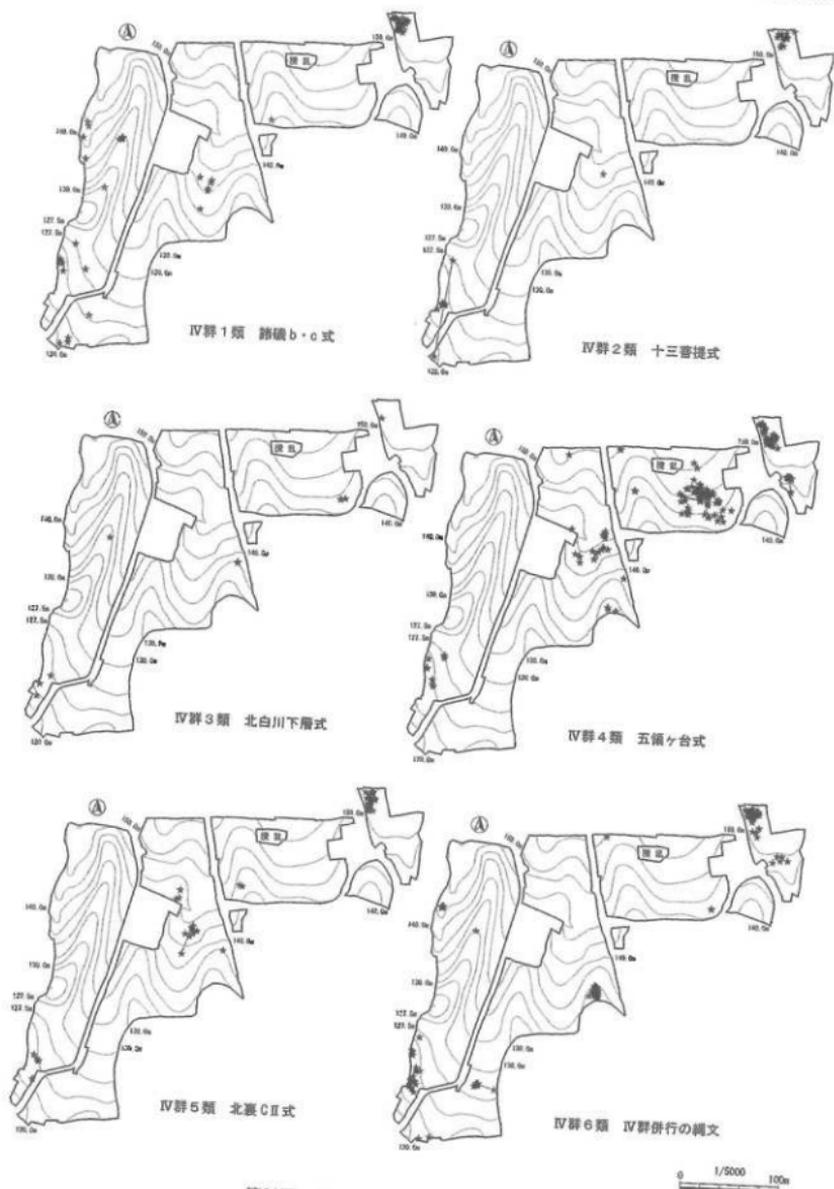


第29図 縄文土器の分布状況(分類別)(1)

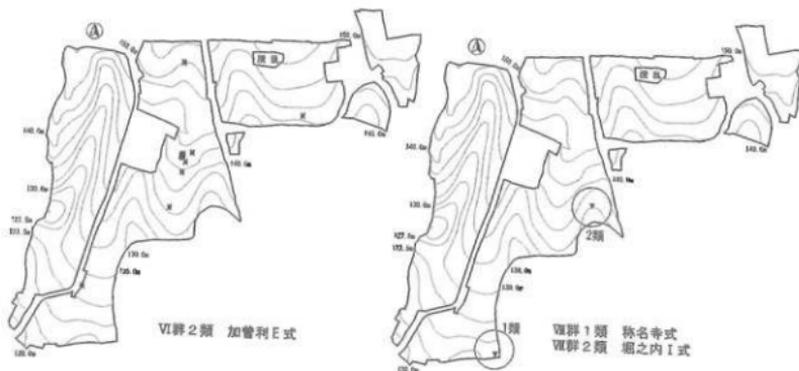
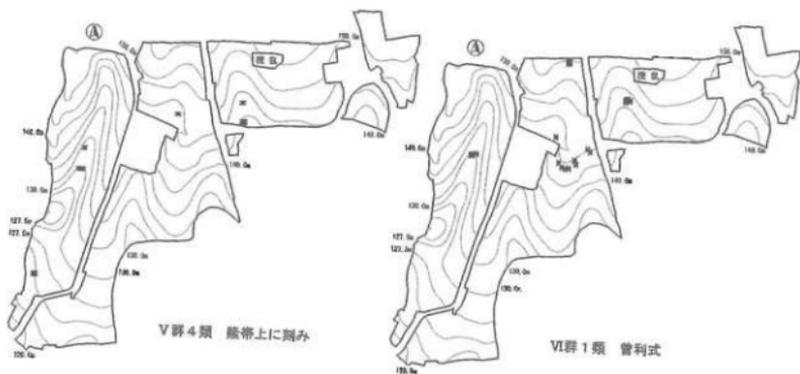
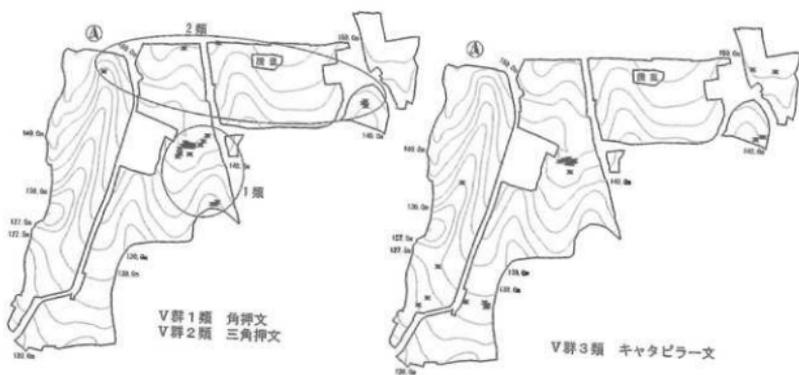


0 1/5000 100m

第30図 縄文土器の分布状況(分類別)(2)

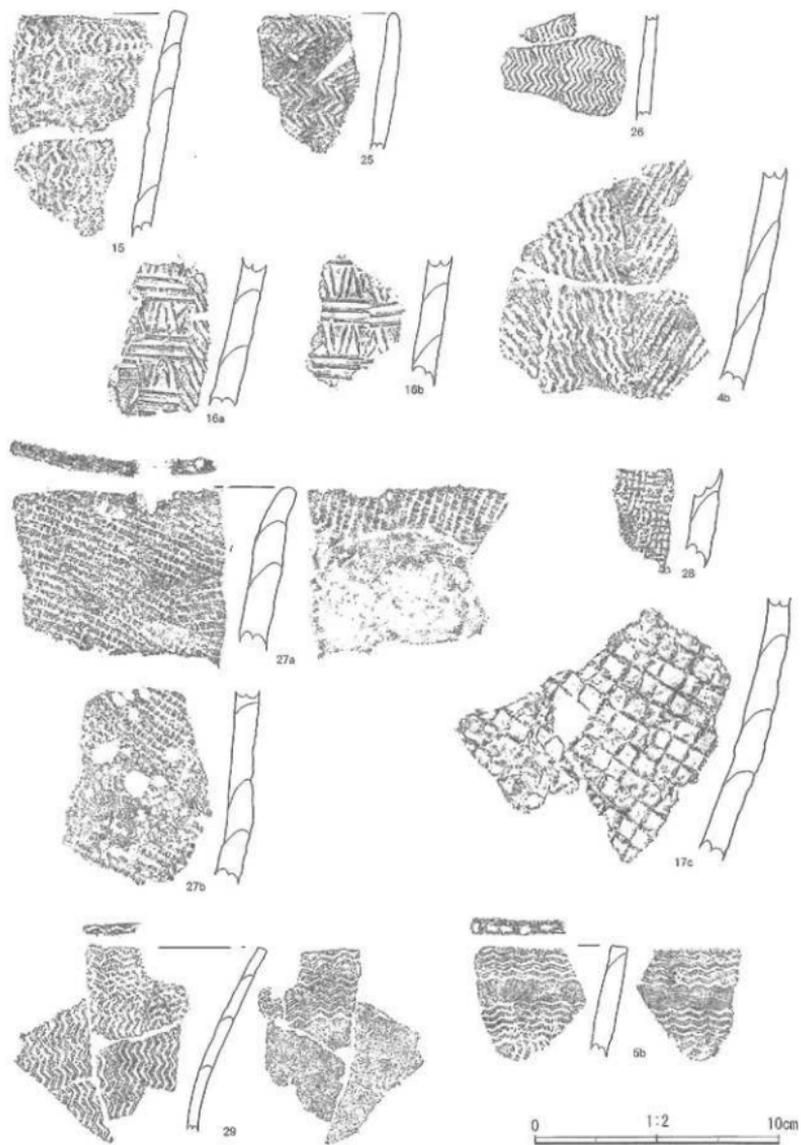


第31図 縄文土器の分布状況(分類別)(3)

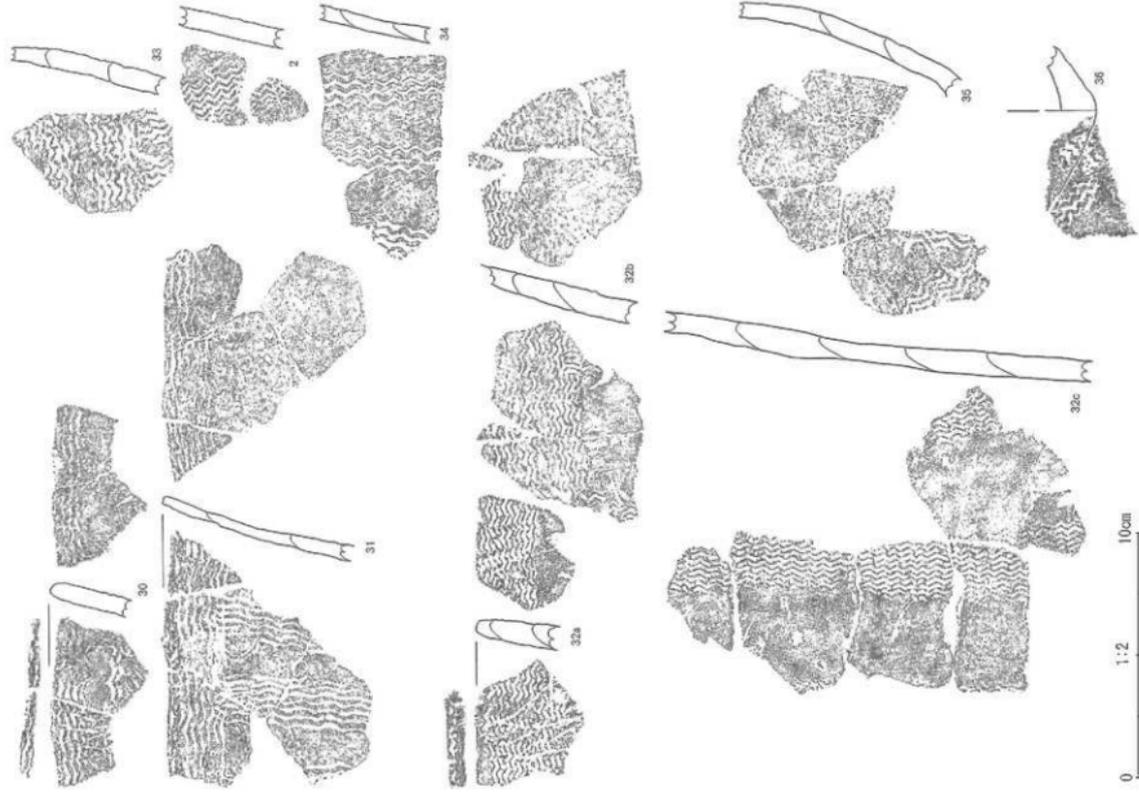


第32図 縄文土器の分布状況(分類別)(4)

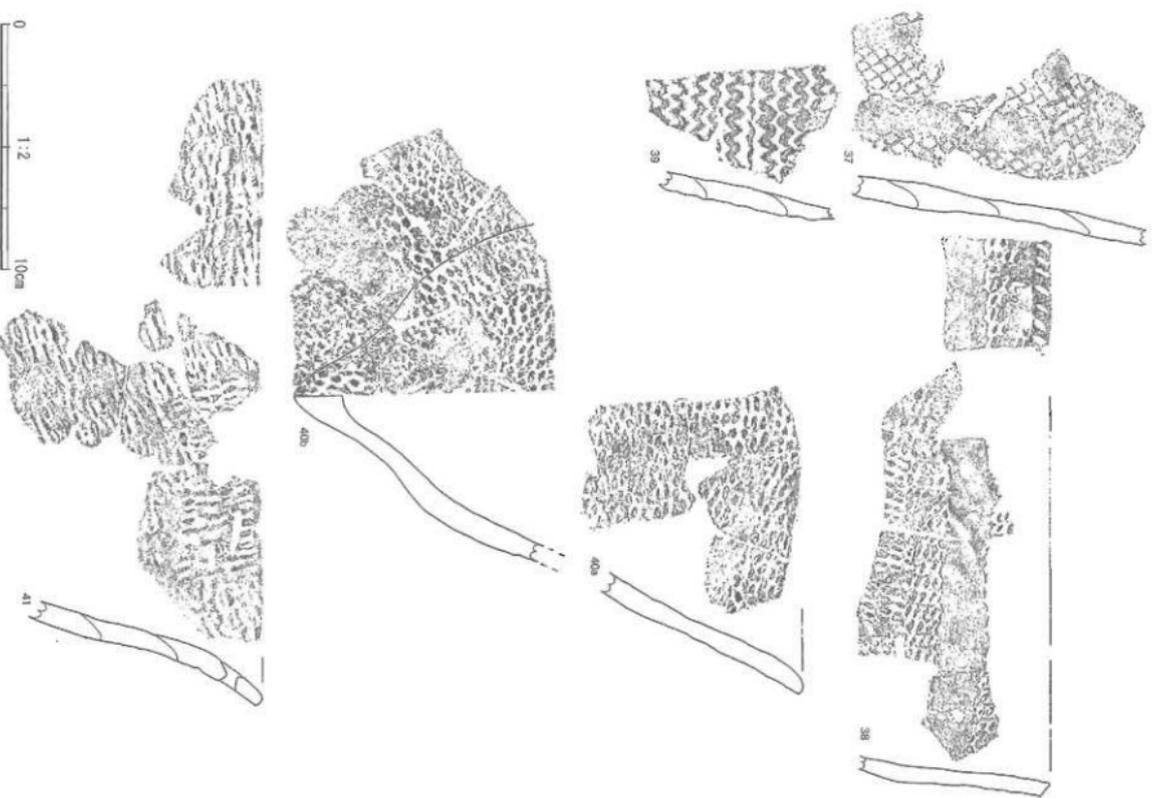
0 1/5000 100m



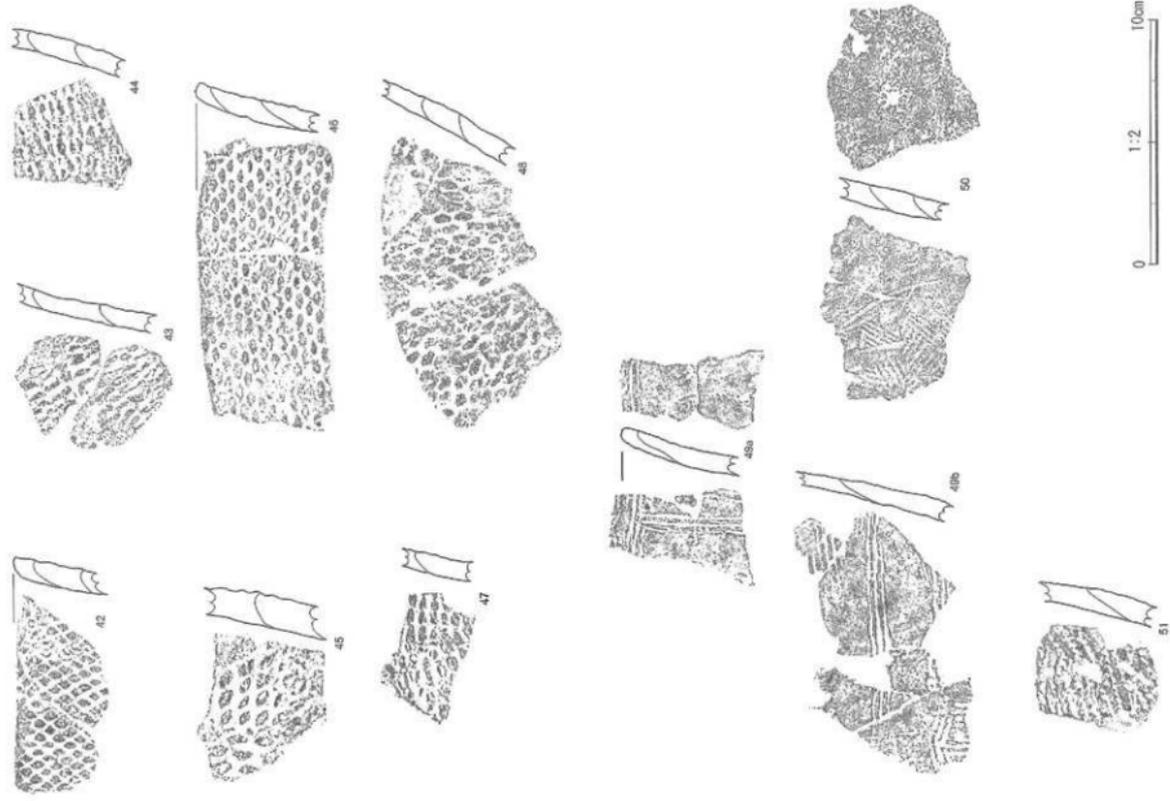
第33図 縄文土器 第I群(1)



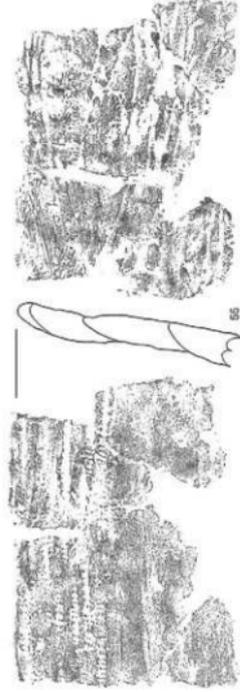
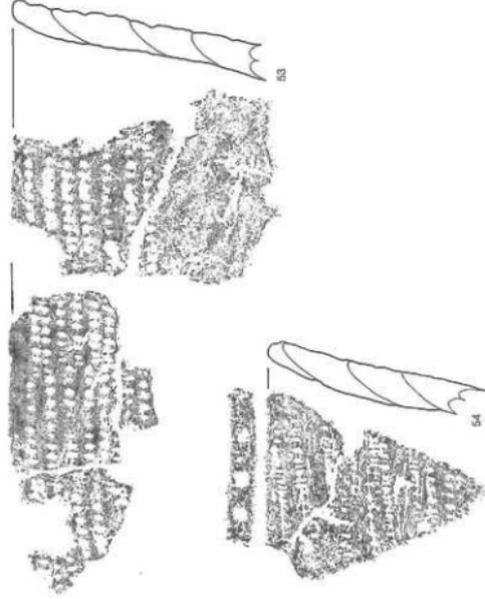
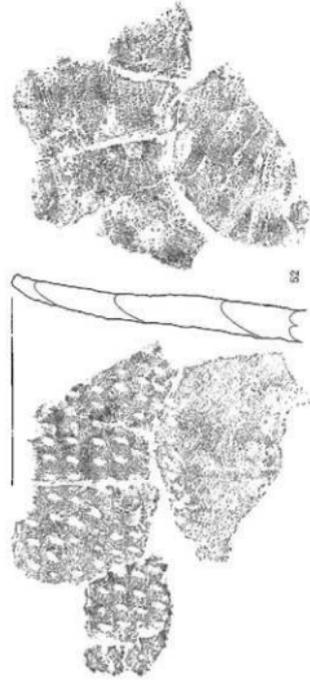
第34圖 織文土器 第1群(2)



第35図 縄文土器 第1群(3)



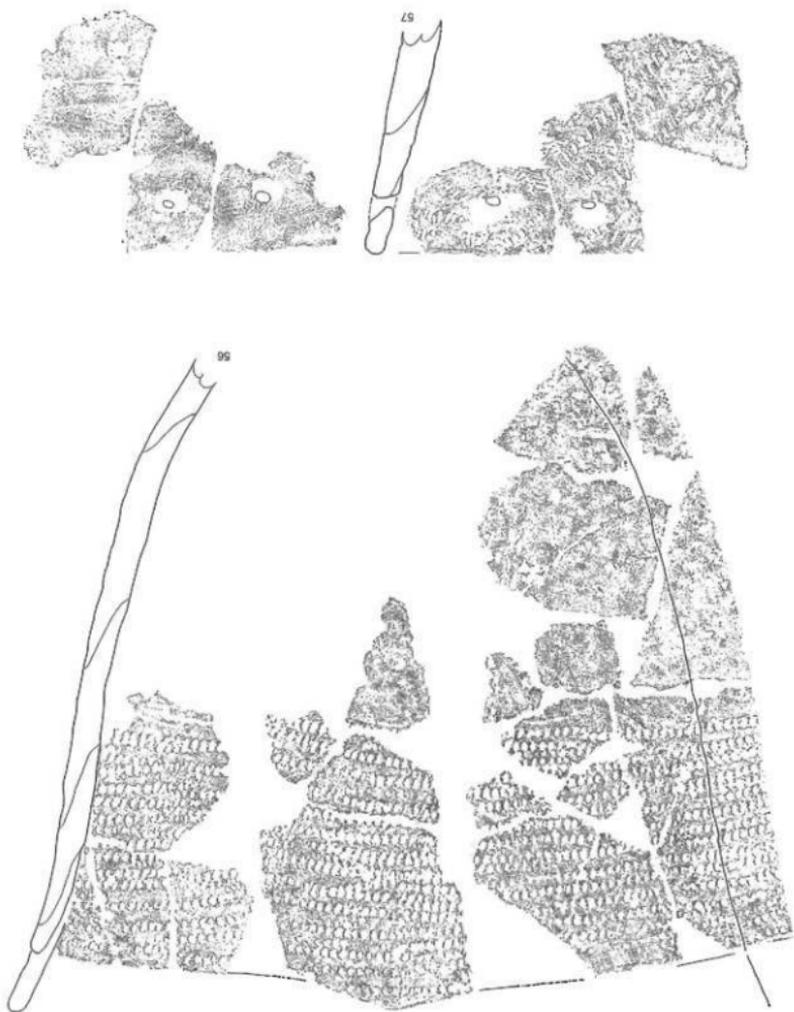
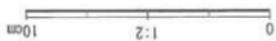
第36回 縄文土器 第I群(4)

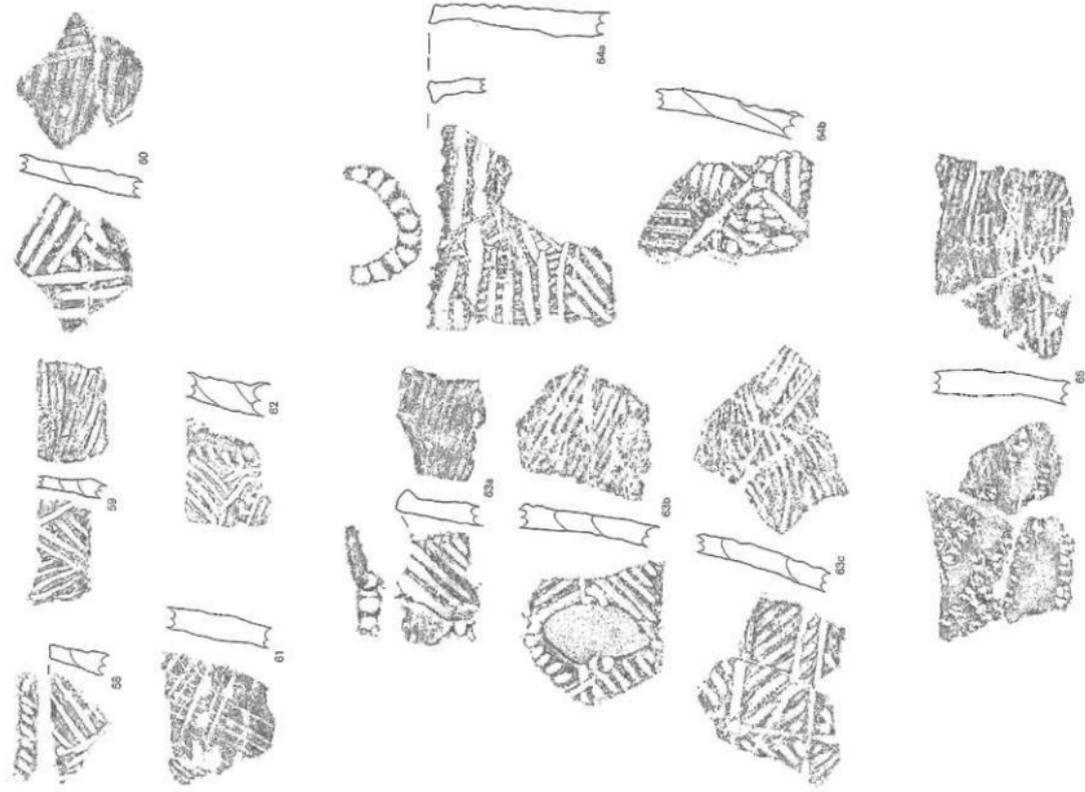


0 1:2 10cm

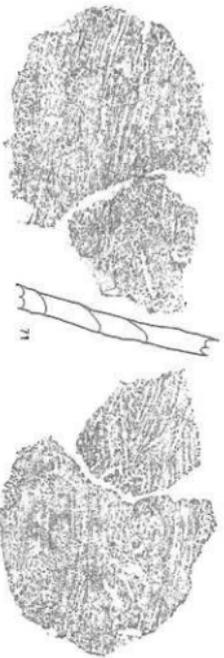
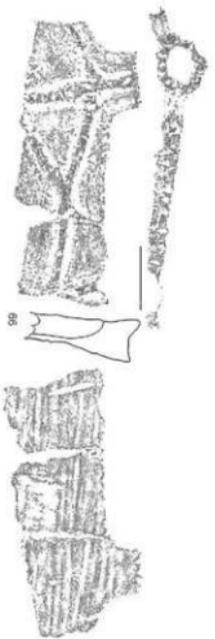
第37図 縄文土器 第Ⅱ群(1)

第38圖 縄文器 第Ⅱ群(2)

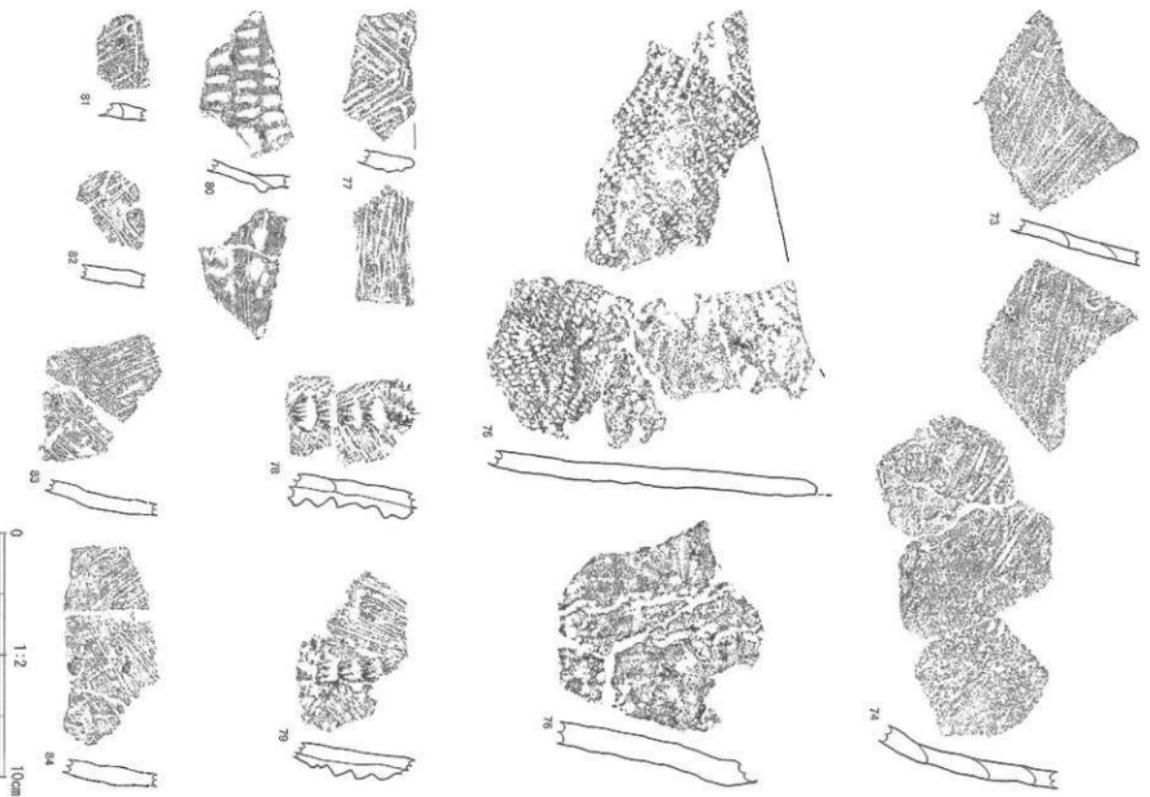




第39図 縄文土器 第二群(3)

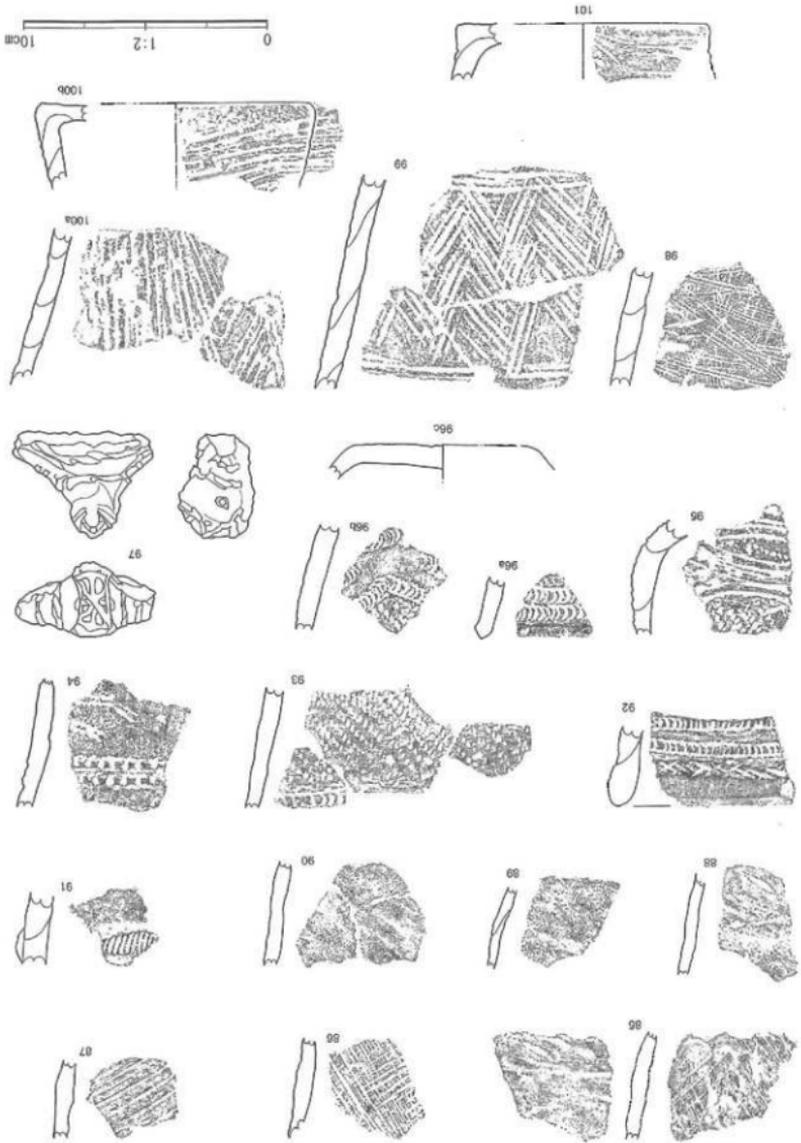


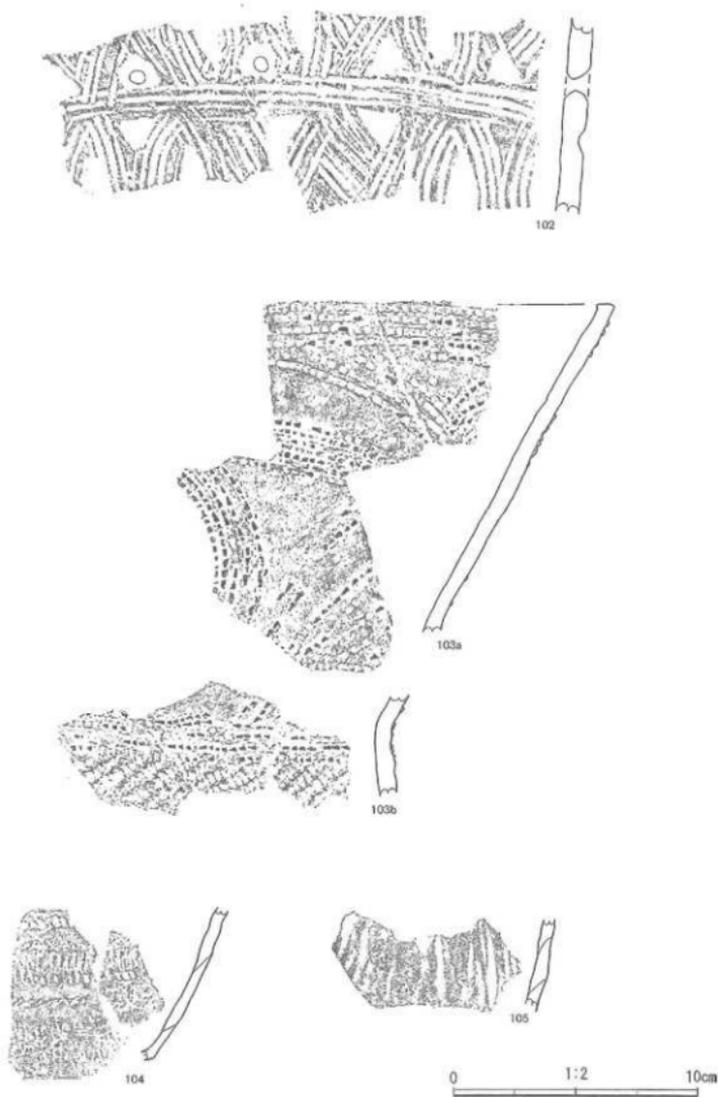
第40圖 織文土器 第II群(A)



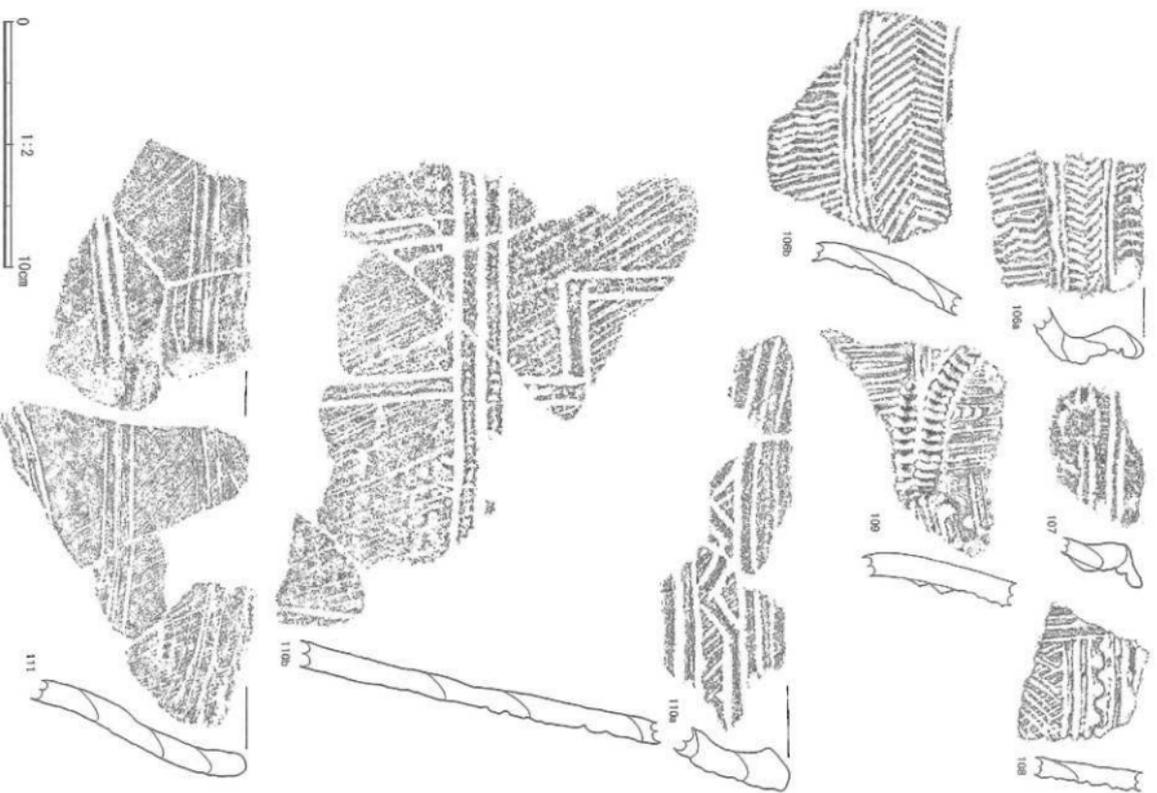
第41図 縄文土器 第Ⅱ群(S)・第Ⅲ群(I)

第42圖 縄文器 第三群(2)・第四群(1)



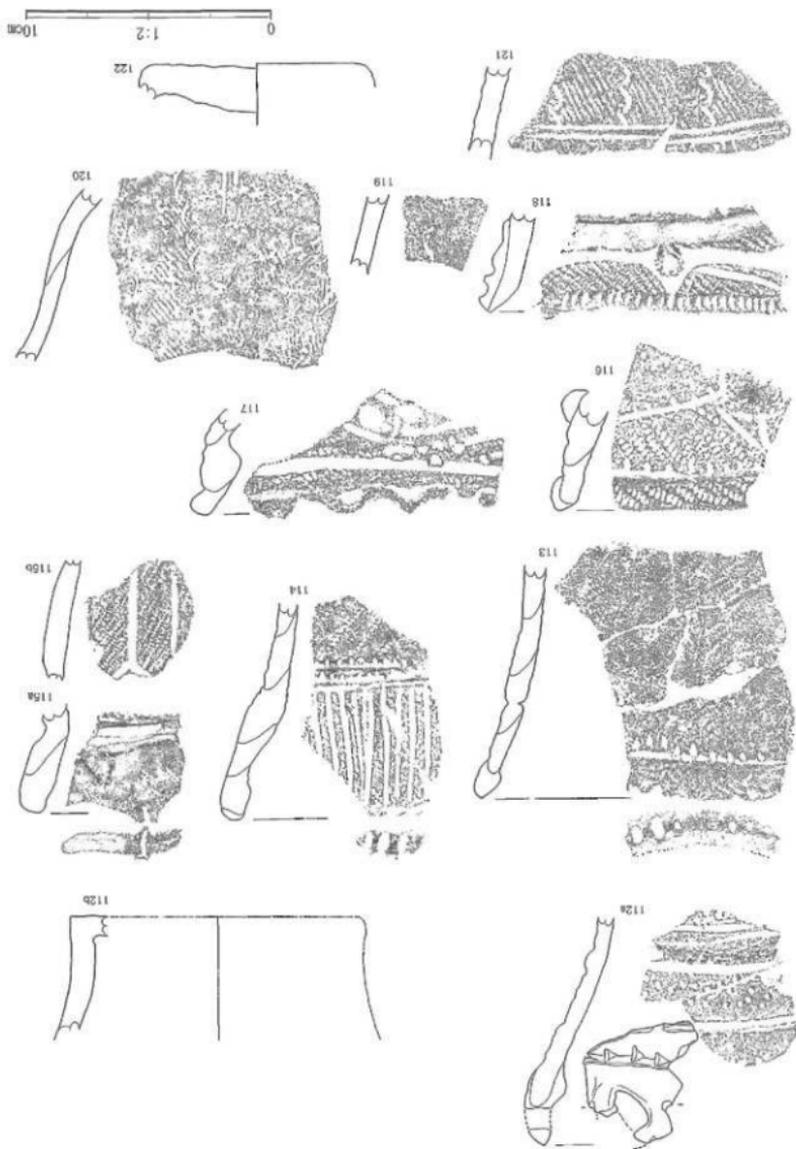


第43図 縄文土器 第IV群(2)

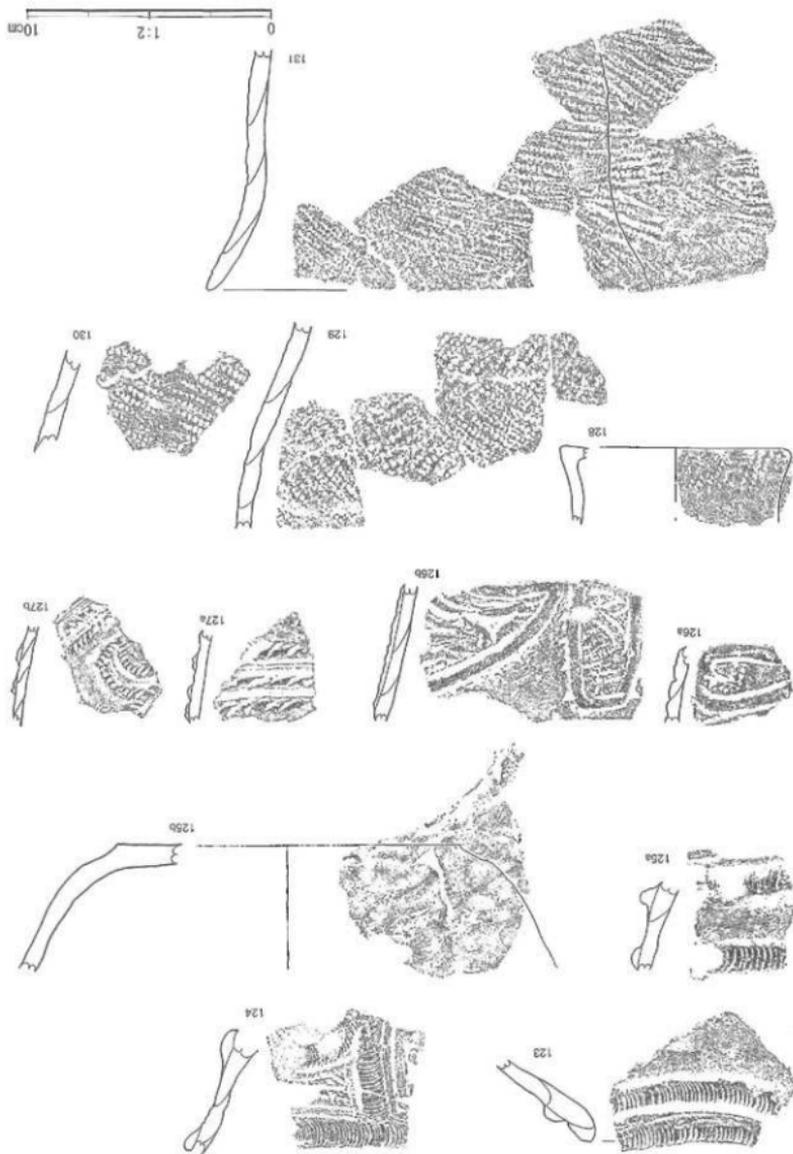


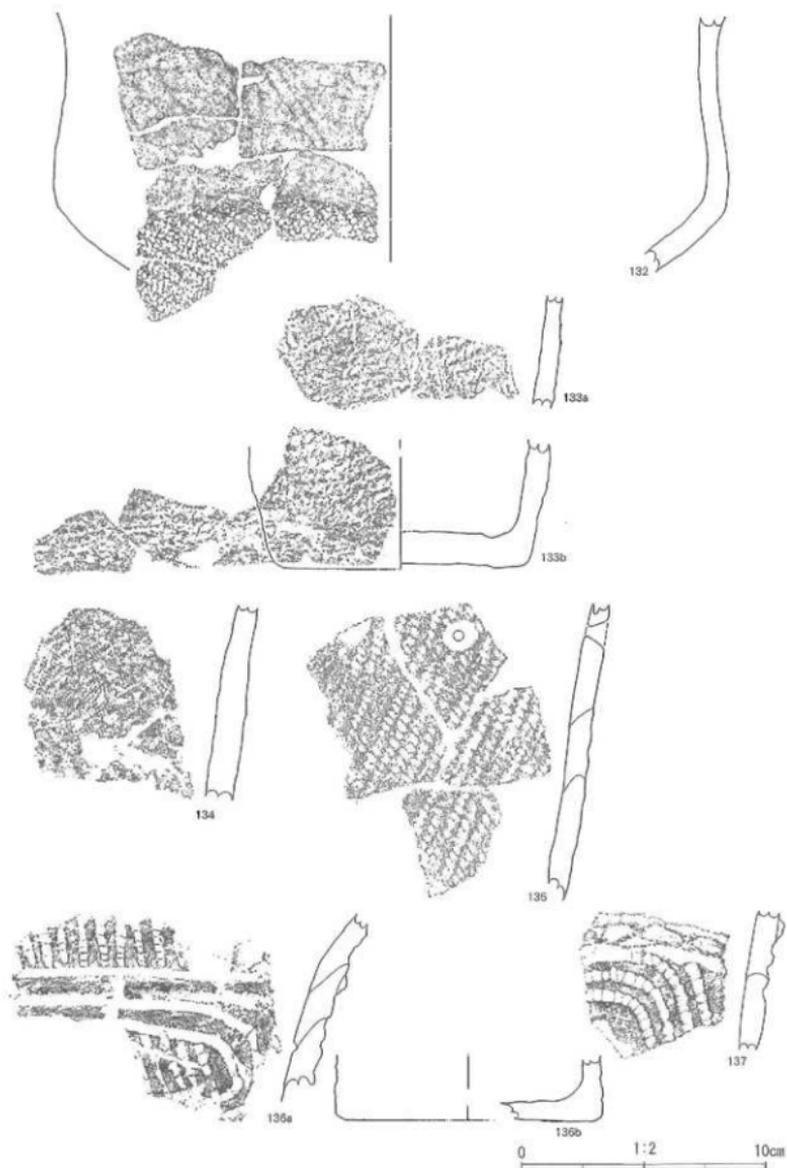
第44圖 織文土器 第四群(3)

第45図 縄文器 第IV群(4)

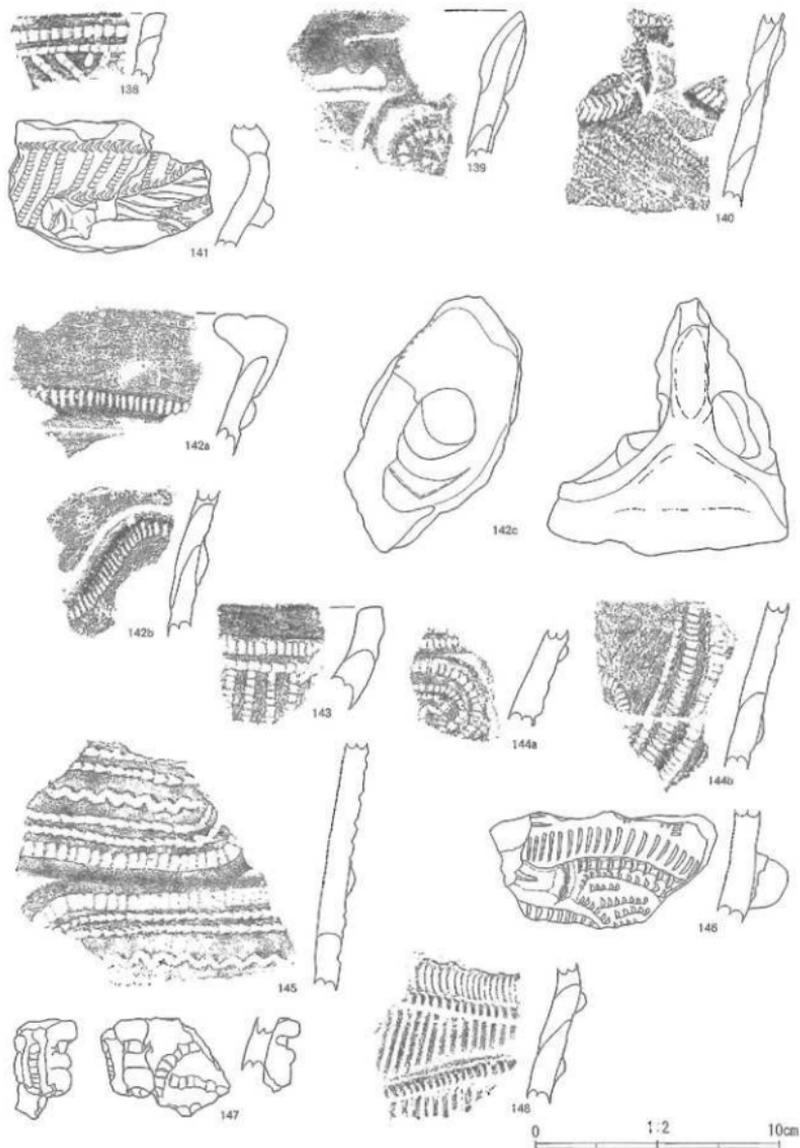


第46圖 縄文土器 第IV群(5)

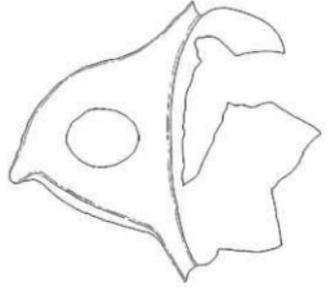
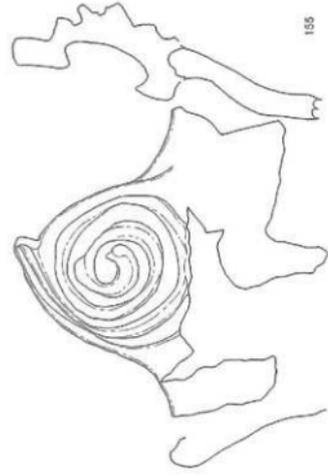
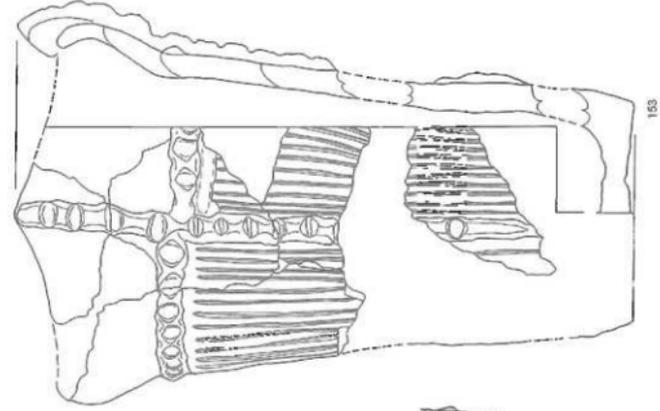




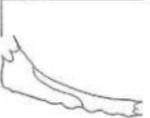
第47図 縄文土器 第IV群(6)・第V群(1)



第48圖 縄文土器 第V群(2)



第49図 縄文土器 第V群(3)



156a

156b



157



158



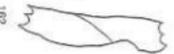
159



160



161



162



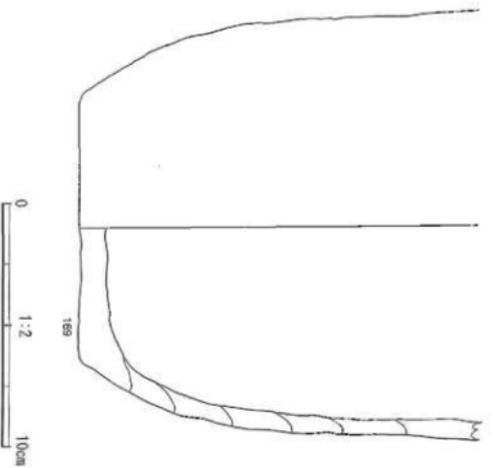
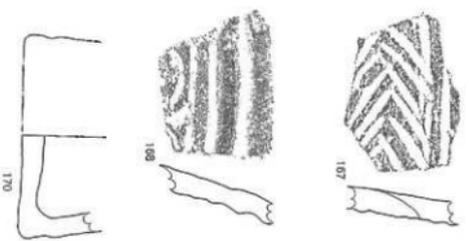
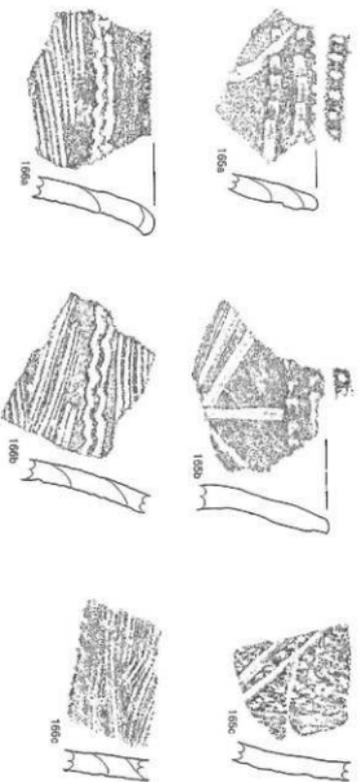
163



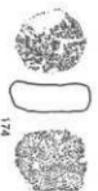
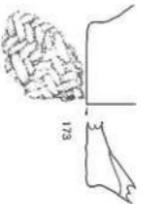
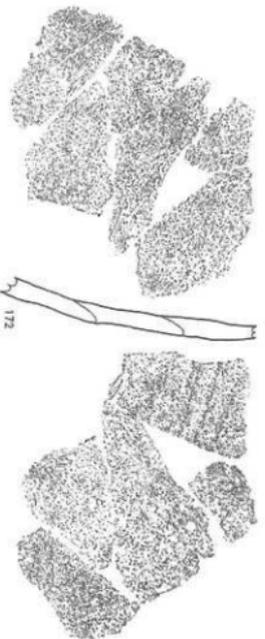
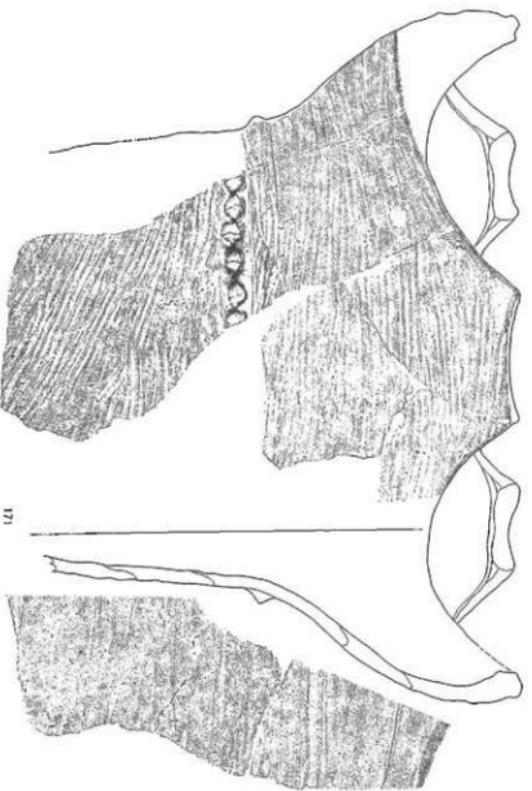
164



第50圖 縄文土器 第六群・第四群



第51図 縄文土器 第Ⅱ群(1)



第52圖 織文土器 第Ⅱ群群(2)・土製品

第5表 縄文土器属性

5-1表 遺構出土の遺物

遺構名	押出番号	図版番号	時期	分類 群 別 種	残存部位	胎 土		組織感	色 調	文様、調整等	焼成
						石灰少 白色粒子多 白色岩片	黒色粒子 灰色岩片				
4号集石	2	23	早期中葉	I 2	胴部	石灰少 白色粒子多 白色岩片	黒色粒子		10YR 5/4 に近い黄褐色	押型文 帯状	良
4号集石	3	23	早期中葉	I 2	胴部	白色粒子 白色岩片	黒色粒子	有	10YR 6/4 に近い黄褐色	押型文 帯状	良
5号集石	4a	23	早期中葉	I 1	胴部	白色粒子 白色岩片			10YR 5/2 灰黄褐色	押型文 縦位密接	良
5号集石	5a	23	早期中葉	I 2	胴部	石灰 白色粒子多 白色岩片	黒色粒子	有	7.5YR 6/4 に近い黄褐色	押型文 帯状	良
9号集石	7	23	早期後葉	II 6	底部	白色粒子多 白色岩片	黒色粒子 灰色岩片	有	7.5YR 4/4 褐色	条痕文土器 無文	良
16号集石	8	23	早期後葉	II 6	胴部 底部	石灰 白色粒子多 白色岩片	黒色粒子 灰色岩片	有	7.5YR 4/6 褐色	条痕文土器	良
16号集石	9	23	早期後葉	II 6	口縁部	石灰少 白色粒子多 白色岩片	黒色粒子	有	7.5YR 4/6 褐色	条痕文土器	良
17号集石	10	23	前期～中期	IV 6	胴部	石灰少 白色粒子 白色岩片	黒色粒子 赤色岩片		7.5YR 4/3 褐色	吉祥印付の縄文	良
24号土坑	15	25	早期中葉	I 1	口縁部	石灰少 白色粒子多 白色岩片		有	7.5YR 5/4 に近い黄褐色	押型文 縦位密接	良
24号土坑	16a	25	早期中葉	I 1	胴部	白色粒子 白色岩片			10YR 4/2 灰黄褐色	押型文 縦位密接	良
24号土坑	16b	25	早期中葉	I 1	胴部	白色粒子 白色岩片			10YR 4/2 灰黄褐色	押型文 縦位密接	良
24号土坑	17a		早期中葉	I 1	胴部	白色粒子 白色岩片		有	10YR 5/2 灰黄褐色	押型文 縦位密接	良
24号土坑	17b		早期中葉	I 1	胴部	白色粒子 白色岩片		有	10YR 5/2 灰黄褐色	押型文 縦位密接	良

5-2表 遺構外出土の遺物

押出番号	図版番号	時期	分類 群 別 種	残存部位	胎 土		組織感	色 調	文様、調整等	焼成
					石灰少 白色粒子多 白色岩片	黒色粒子 灰色岩片				
25	25	早期中葉	I 1	口縁部	白色粒子多 黒色粒子	白色岩片		7.5YR 5/4 に近い黄褐色	押型文 縦位密接	良
26	25	早期中葉	I 1	胴部	石灰少 白色粒子	白色岩片		7.5YR 5/2 灰黄褐色	押型文 縦位密接	良
4b	25	早期中葉	I 1	胴部	白色粒子 白色岩片			10YR 5/2 灰黄褐色	押型文 縦位密接	良
27a	25	早期中葉	I 1	口縁部 胴部	白色粒子多 赤色粒子	灰色岩片	有	7.5YR 5/4 に近い黄褐色	押型文 縦位密接	良
27b	25	早期中葉	I 1	胴部	白色粒子多 灰色岩片		有	7.5YR 5/4 に近い黄褐色	押型文 縦位密接	良
28	25	早期中葉	I 1	胴部	白色粒子多 白色岩片多	灰色岩片		7.5YR 5/6 明褐色	押型文 縦位密接	良
17c	25	早期中葉	I 1	胴部	白色粒子		有	10YR 5/2 灰黄褐色	押型文 縦位密接	良
29	25	早期中葉	I 2	口縁部	雲母多 白色粒子	黒色粒子	有	7.5YR 4/4 褐色	押型文 帯状	良
5b	25	早期中葉	I 2	口縁部	白色粒子	黒色粒子	有	7.5YR 6/4 に近い黄褐色	押型文 帯状	良
30	25	早期中葉	I 2	口縁部	白色粒子多 白色岩片		有	7.5YR 5/4 に近い黄褐色	押型文 帯状	良
31	25	早期中葉	I 2	口縁部 胴部	白色粒子	黒色粒子 白色岩片	有	7.5YR 5/4 に近い黄褐色	押型文 帯状	良
32a	25	早期中葉	I 2	口縁部	石灰少 白色粒子	白色岩片 灰色岩片		7.5YR 5/4 に近い黄褐色	押型文 帯状	良
32b		早期中葉	I 2	胴部	石灰少 白色粒子多	黒色粒子 白色岩片	有	7.5YR 5/4 に近い黄褐色	押型文 帯状	良
32c	25	早期中葉	I 2	胴部	石灰少 白色粒子多	黒色粒子 白色岩片	有	7.5YR 5/4 に近い黄褐色	押型文 帯状	良
33	25	早期中葉	I 2	胴部	白色粒子 白色岩片	灰色岩片	有	5YR 5/6 明赤褐色	押型文 帯状	良
34	25	早期中葉	I 2	胴部	石灰少 白色粒子多	黒色粒子 白色岩片	有	10YR 4/4 褐色	押型文 帯状	良
35	25	早期中葉	I 2	胴部	雲母少 白色粒子	黒色粒子 白色岩片	有	7.5YR 5/4 に近い黄褐色	押型文 帯状	良
36	25	早期中葉	I 2	底部	雲母少 白色粒子多	白色岩片 灰色岩片		10YR 5/6 黄褐色	押型文 帯状	良
37	26	早期中葉	I 2	胴部	白色粒子	黒色粒子 白色岩片	有	7.5YR 5/4 に近い黄褐色	押型文 帯状	良
38	26	早期中葉	I 2	口縁部 胴部	石灰 雲母多	白色粒子 白色岩片		7.5YR 4/4 褐色	押型文 帯状	良
39	26	早期中葉	I 2	胴部	石灰多 白色粒子	白色岩片	有	10YR 6/4 に近い黄褐色	押型文 帯状	良
40a	26	早期中葉	7 3	口縁部 胴部	白色粒子 白色岩片		有	5YR 4/6 赤褐色	押型文 両方向密接	良
40b	26	早期中葉	I 2	胴部 底部	黒色粒子 白色岩片		有	5YR 4/6 赤褐色	押型文 両方向密接	良

採掘番号	図版番号	時期	分期	採掘層	産出層位	治	止	継接痕	色	調	文様、調紋等	焼成
41	26	早期中期	I 3	口縁部	剥部	石英 白色粒子 黒色粒子		有	10YR 6/4	にぶい黄緑	押型文 異方向密接	良
42	26	早期中期	I 3	口縁部	剥部	石英 白色粒子 黒色粒子			10YR 5/2	にぶい黄緑	押型文 異方向密接	良
43	26	早期中期	I 3	剥部	剥部	石英多 白色粒子 白色岩片		有	10YR 5/4	にぶい黄緑	押型文 異方向密接	良
44	26	早期中期	I 3	剥部	剥部	石英 白色粒子		有	10YR 6/4	にぶい黄緑	押型文 異方向密接	良
45	26	早期中期	I 3	剥部	剥部	石英 輝石少 白色粒子 黒色粒子		有	7.5YR 6/4	にぶい黄緑	押型文 異方向密接	良
46	26	早期中期	I 3	口縁部	剥部	石英 雲母多 白色粒子			7.5YR 5/4	にぶい黄緑	押型文 異方向密接	良
47	26	早期中期	I 3	剥部	剥部	石英多 雲母多			10YR 5/1	濁灰	押型文 異方向密接	良
48	26	早期中期	I 3	剥部	剥部	石英 雲母多 白色粒子 黒色粒子			7.5YR 5/4	にぶい黄緑	押型文 異方向密接	良
49a	26	早期中期	I 4	口縁部	剥部	白色粒子 白色岩片		有	10YR 5/3	にぶい黄緑	捺染文 帯状	良
49b	26	早期中期	I 4	剥部	剥部	白色粒子 白色岩片		有	10YR 5/3	にぶい黄緑	捺染文 帯状	良
50	26	早期中期	I 4	剥部	剥部	白色粒子 黒色粒子 白色岩片 灰色岩片		有	7.5YR 6/4	にぶい黄緑	捺染文	良
51	26	早期中期	I 4	剥部	剥部	石英 雲母 輝石少 白色粒子 黒色粒子		有少	7.5YR 5/4	にぶい黄緑	捺染文	良
52	27	早期後葉	II 1	口縁部	剥部	白色粒子 黒色粒子 灰色岩片 赤色岩片		有少	7.5YR 5/4	にぶい黄緑	高奈林任成文(清水御区)	良
53	27	早期後葉	II 1	剥部	剥部	石英少 白色粒子多 赤色粒子 黒色粒子 白色岩片多 赤色岩片		有少	7.5YR 5/4	にぶい黄緑	高奈林任成文(清水御区)	良
54	27	早期後葉	II 1	剥部	剥部	石英多 輝石少 白色粒子 赤色粒子 黒色粒子		有少	5YR 6/6	黄	高奈林任成文(清水御区)	良
55	27	早期後葉	II 1	剥部	剥部	石英少 白色粒子 白色岩片多 赤色岩片		有少	5YR 5/4	にぶい赤濁	高奈林任成文(清水御区)	良
56	27	早期後葉	II 1	口縁部	剥部	石英 輝石少 白色粒子多 黒色粒子 白色岩片多		有少	7.5YR 6/4	にぶい黄緑	高奈林任成文(清水御区)	良
57	27	早期後葉	II 1	剥部	剥部	石英少 輝石少 白色粒子 白色岩片		有少	5YR 4/4	にぶい赤濁	高奈林任成文(清水御区)	良
58	28	早期後葉	II 2	口縁部	剥部	石英少 黒色粒子 黒色岩片 赤色岩片		有	5YR 5/6	明赤濁	野島式	良
59	28	早期後葉	II 2	剥部	剥部	白色粒子 灰色岩片 赤色岩片			2.5Y 4/2	暗灰濁	野島式	良
60	28	早期後葉	II 2	剥部	剥部	石英 白色粒子多 白色岩片		有	5YR 6/6	黄	野島式	良
61	28	早期後葉	II 2	剥部	剥部	石英多 雲母 白色粒子 黒色粒子 白色岩片			5YR 5/6	明赤濁	野島式	良
62	28	早期後葉	II 2	剥部	剥部	白色粒子 黒色粒子 白色岩片		有少	7.5YR 6/4	にぶい黄緑	野島式	良
63a	28	早期後葉	II 3	口縁部	剥部	石英少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		有少	10YR 4/2	にぶい黄濁	野島台台式	良
63b	28	早期後葉	II 3	剥部	剥部	石英 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		有少	10YR 3/3	黒濁	野島台台式	良
63c	28	早期後葉	II 3	剥部	剥部	石英少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		有少	7.5YR 6/4	にぶい黄緑	野島台台式	良
64a	28	早期後葉	II 3	剥部	剥部	石英少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		有少	10YR 5/4	にぶい黄濁	野島台台式	良
64b	28	早期後葉	II 3	剥部	剥部	石英少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		有少	10YR 5/4	にぶい黄濁	野島台台式	良
65	28	早期後葉	II 4	剥部	剥部	石英少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		有少	5YR 6/6	黄	茅山下層式	良
66	28	早期後葉	II 5	口縁部	剥部	石英少 石英少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片			5YR 5/6	明赤濁	茅山上層式	良
67	28	早期後葉	II 5	剥部	剥部	白色粒子 白色岩片			5YR 5/4	にぶい赤濁	茅山上層式	良
68	28	早期後葉	II 6	剥部	剥部	石英少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片 赤色岩片		有	5YR 5/6	明赤濁	糸底文土器	良
69	28	早期後葉	II 6	剥部	剥部	石英少 石英少 輝石 白色粒子多 白色岩片多 黒色岩片			10YR 3/3	暗濁	糸底文土器	不良
70	28	早期後葉	II 6	剥部	剥部	石英少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片 赤色岩片		有少	5YR 4/6	赤濁	糸底文土器	良
71	28	早期後葉	II 6	剥部	剥部	白色粒子 赤色粒子 黒色粒子 赤色岩片		有	5YR 5/4	にぶい赤濁	糸底文土器	良
72	28	早期後葉	II 6	剥部	剥部	白色粒子 白色岩片 赤色岩片		有	5YR 5/6	明赤濁	糸底文土器	良
73	28	早期後葉	II 6	剥部	剥部	石英多 輝石少 白色粒子 黒色粒子		有	10YR 6/4	にぶい黄濁	糸底文土器	良
74	28	早期後葉	II 6	剥部	剥部	石英 輝石少 白色粒子 黒色粒子		有	10YR 7/4	にぶい黄濁	糸底文土器	良
75	28	早期後葉	II 7	口縁部	剥部	石英多 白色粒子 白色岩片 赤色岩片		有少	5YR 5/4	にぶい赤濁	I・II群併行の縄文	良
76	28	早期後葉	II 7	剥部	剥部	石英少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		有少	7.5YR 5/6	明濁	I・II群併行の縄文	良
77	29	早末～前期	III 1	口縁部	剥部	石英 輝石少 白色粒子 白色岩片			10YR 6/4	にぶい黄濁	木島皿式	良
78	29	早末～前期	III 1	剥部	剥部	石英多 白色粒子 白色岩片			10YR 4/1	濁灰	木島皿式	良
79	29	早末～前期	III 1	剥部	剥部	石英多 白色粒子 赤色粒子 白色岩片			7.5YR 5/4	にぶい黄濁	木島皿式	良
80	29	早末～前期	III 1	剥部	剥部	石英 輝石少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片			10YR 6/4	にぶい黄濁	木島皿式	良
81	29	早末～前期	III 1	剥部	剥部	石英 白色粒子			10YR 6/4	にぶい黄濁	木島皿式	良
82	29	早末～前期	III 1	剥部	剥部	石英 白色粒子 白色岩片 赤色岩片			10YR 3/2	黒濁	木島皿式	良
83	29	早末～前期	III 1	剥部	剥部	石英多 白色粒子 白色岩片 赤色岩片			10YR 4/2	灰濁	木島皿式	良
84	29	早末～前期	III 1	剥部	剥部	石英多 白色粒子 赤色岩片			10YR 4/1	濁灰	木島皿式	良
85	29	早末～前期	III 1	剥部	剥部	石英 白色粒子 白色岩片 赤色岩片			10YR 3/1	黒濁	木島皿式	良
86	29	早末～前期	III 1	剥部	剥部	石英多 白色粒子 赤色粒子 赤色岩片			10YR 5/4	にぶい黄濁	木島皿式	良

神代 番号	図版 番号	時期	分類		発見部位	胎 土	線線痕	色 調	文様、調査等	焼成
			群	層						
87	29	早末～前期	Ⅲ	1	胴部	石英多 輝石少 白色粒子 赤色粒子 白色岩片		10YR 5/3 に近い黄褐色	木島直式	良
88		早末～前期	Ⅲ	1	胴部	石英多 雲母多 白色粒子 黒色粒子		10YR 4/2 灰黄褐色	木島直式	良
89		早末～前期	Ⅲ	1	胴部	石英多 雲母少 白色粒子 白色岩片		10YR 5/3 に近い黄褐色	木島直式	良
90		早末～前期	Ⅲ	1	胴部	石英多 白色粒子		10YR 6/3 に近い黄褐色	木島直式	良
91	29	早末～前期	Ⅲ	2	胴部	石英少 輝石少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		7.5YR 6/4 に近い褐色	下井吉式	良
92	30	前中～中期	Ⅳ	1	a	口縁部	石英多 雲母 白色粒子 黒色粒子	7.5YR 4/3 褐色	精緻b式	良
93	30	前中～中期	Ⅳ	1	a	胴部	石英多 白色粒子 黒色粒子 白色岩片	7.5YR 4/4 褐色	精緻b式	良
94	30	前中～中期	Ⅳ	1	a	胴部	石英多 輝石少 白色粒子 黒色粒子	7.5YR 4/4 褐色	精緻b式	良
95	30	前中～中期	Ⅳ	1	a	胴部	石英多 白色粒子 白色岩片	7.5YR 4/3 褐色	精緻b式	良
96a	30	前中～中期	Ⅳ	1	a	口縁部	石英多 白色粒子 黒色粒子	7.5YR 5/6 明褐色	精緻b式	良
96b	30	前中～中期	Ⅳ	1	a	胴部	石英多 白色粒子 黒色粒子	7.5YR 5/6 明褐色	精緻b式	良
96c		前中～中期	Ⅳ	1	a	底面	石英多 白色粒子 黒色粒子	7.5YR 5/6 明褐色	精緻b式	良
97	30	前中～中期	Ⅳ	1	a	把手	石英多 輝石少 白色粒子多 黒色粒子 白色岩片	7.5YR 4/4 褐色	精緻b式	良
98	30	前中～中期	Ⅳ	1	b	胴部	石英多 長石少 白色粒子 黒色粒子	7.5YR 5/6 に近い褐色	精緻c式	良
99	30	前中～中期	Ⅳ	1	b	胴部	石英多 長石少 輝石少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片 赤色岩片	7.5YR 4/4 褐色	精緻c式	良
100a	30	前中～中期	Ⅳ	1	b	胴部	石英多 雲母多 白色粒子 黒色粒子	7.5YR 5/4 に近い褐色	精緻c式	良
100b	30	前中～中期	Ⅳ	1	b	底面	石英多 雲母多 白色粒子 黒色粒子	7.5YR 5/4 に近い褐色	精緻c式	良
101	30	前中～中期	Ⅳ	1	b	底面	石英 輝石少 白色粒子 黒色粒子 赤色岩片	7.5YR 5/4 に近い褐色	精緻c式	良
102	30	前中～中期	Ⅳ	2	胴部	石英多 輝石少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片 赤色岩片		5YR 5/4 に近い赤褐色	十二番模式	良
103a	30	前中～中期	Ⅳ	2	口縁部 胴部	石英多 雲母 輝石少 白色粒子多 白色岩片多		10YR 6/4 に近い黄褐色	十三番模式	良
103b	30	前中～中期	Ⅳ	2	胴部	石英多 雲母 輝石少 白色粒子多 白色岩片多		10YR 6/4 に近い黄褐色	十三番模式	良
104	30	前中～中期	Ⅳ	3	胴部	石英多 白色粒子 白色岩片		10YR 4/1 褐色	北白川下層式	良
105	30	前中～中期	Ⅳ	3	胴部	石英多 白色粒子 白色岩片 赤色岩片		10YR 5/2 灰黄褐色	北白川下層式	良
106a	31	前中～中期	Ⅳ	4	口縁部	石英 輝石少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		7.5YR 5/4 に近い褐色	五郎ヶ台式 沈澱式	良
106b	31	前中～中期	Ⅳ	4	胴部	石英多 長石少 輝石少 白色粒子 白色岩片		10YR 5/4 に近い黄褐色	五郎ヶ台式 沈澱式	良
107	31	前中～中期	Ⅳ	4	口縁部	石英多 雲母 白色粒子 黒色粒子		10YR 5/4 に近い黄褐色	五郎ヶ台式 沈澱式	良
108	31	前中～中期	Ⅳ	4	胴部	石英多 雲母多 白色粒子 赤色粒子 黒色粒子		7.5YR 4/3 褐色	五郎ヶ台式 沈澱式	良
109	31	前中～中期	Ⅳ	4	胴部	石英多 雲母多 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		7.5YR 4/3 褐色	五郎ヶ台式 沈澱式	良
110a	31	前中～中期	Ⅳ	4	口縁部	石英多 雲母多 輝石少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片 赤色岩片		7.5YR 5/4 に近い褐色	五郎ヶ台式 沈澱式	良
110b	31	前中～中期	Ⅳ	4	胴部	石英多 雲母多 輝石少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片 赤色岩片		7.5YR 5/4 に近い褐色	五郎ヶ台式 沈澱式	良
111	31	前中～中期	Ⅳ	4	口縁部 胴部	石英多 雲母多 白色粒子 白色岩片		7.5YR 4/2 灰褐色	五郎ヶ台式 沈澱式	良
112a	32	前中～中期	Ⅳ	4	口縁部 胴部	石英 雲母 白色粒子 赤色粒子		7.5YR 5/4 に近い褐色	五郎ヶ台式 沈澱式+刺突式	良
112b	32	前中～中期	Ⅳ	4	底面	石英 雲母 白色粒子 赤色粒子		7.5YR 5/4 に近い褐色	五郎ヶ台式 沈澱式+刺突式	良
113	32	前中～中期	Ⅳ	4	口縁部 胴部	石英多 雲母多 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		7.5YR 5/4 に近い褐色	五郎ヶ台式 縄文式	良
114	32	前中～中期	Ⅳ	4	口縁部	石英多 雲母多 白色粒子 赤色粒子 黒色粒子		7.5YR 5/4 に近い褐色	五郎ヶ台式 縄文式	良
115a	32	前中～中期	Ⅳ	4	口縁部	石英多 雲母多 白色粒子 黒色粒子		7.5YR 5/4 に近い褐色	五郎ヶ台式 縄文式	良
115b	32	前中～中期	Ⅳ	4	胴部	石英多 雲母多 白色粒子 黒色粒子		7.5YR 5/1 に近い褐色	五郎ヶ台式 縄文式	良
116	32	前中～中期	Ⅳ	4	口縁部	石英多 雲母多 白色粒子 黒色粒子		5YR 5/4 に近い赤褐色	五郎ヶ台式 縄文式	良
117	32	前中～中期	Ⅳ	4	口縁部	石英多 雲母多 白色粒子 黒色粒子 白色岩片 黒色岩片		7.5YR 5/4 に近い褐色	五郎ヶ台式 縄文式	良
118	32	前中～中期	Ⅳ	4	口縁部	石英多 雲母多 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		7.5YR 4/5 褐色	五郎ヶ台式 縄文式	良
119	32	前中～中期	Ⅳ	4	胴部	石英多 雲母多 白色粒子 赤色粒子		7.5YR 5/6 明褐色	五郎ヶ台式 縄文式	良
120	32	前中～中期	Ⅳ	4	胴部	石英多 雲母多 白色粒子 黒色粒子		7.5YR 5/1 に近い褐色	五郎ヶ台式 縄文式	良
121	32	前中～中期	Ⅳ	4	胴部	石英多 雲母多 白色粒子 黒色粒子 赤色岩片		7.5YR 5/6 明褐色	五郎ヶ台式 縄文式	良
122		前中～中期	Ⅳ	4	底面	石英多 雲母多 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		5YR 5/4 に近い赤褐色	五郎ヶ台式 縄文式	良

押出番号	原厚番号	時期	分類 部 類 種	造形部	胎 上	線線数	色 調	文様、調位等	地成
123	32	前中～中前	IV 5	口縁部	石英多 雲母 白色粒子 黒色粒子		10YR 5/2 灰黄褐	北流CⅡ式	良
124	32	前中～中前	IV 5	胴部	石英多 雲母少 黒色粒子		10YR 6/4 にぶい黄褐	北流CⅡ式	良
125a	32	前中～中前	IV 5	胴部	石英多 輝石少 白色粒子 白色岩片 赤色岩片		7.5YR 6/4 にぶい黄	北流CⅡ式	良
125b	32	前中～中前	IV 5	底部	石英多 白色粒子 白色岩片		7.5YR 5/3 にぶい黄	北流CⅡ式	良
126a	32	前中～中前	IV 5	胴部	石英 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		7.5YR 5/1 黄灰	北流CⅡ式	良
126b	32	前中～中前	IV 5	胴部	石英多 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		10YR 5/3 にぶい黄褐	北流CⅡ式	良
127a	32	前中～中前	IV 5	胴部	石英 輝石少 白色粒子 白色岩片		10YR 6/4 にぶい黄褐	北流CⅡ式	良
127b	32	前中～中前	IV 5	胴部	石英 輝石少 白色粒子 白色岩片		10YR 6/3 にぶい黄褐	北流CⅡ式	良
128	32	前中～中前	IV 5	底部	石英 白色粒子 白色岩片		10YR 5/2 灰黄褐	北流CⅡ式	良
129	33	前中～中前	IV 6	胴部	石英多 輝石少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		7.5YR 4/3 黄	IV群移行の縄文	良
130	33	前中～中前	IV 6	胴部	石英 輝石少 白色粒子 黒色粒子		10YR 5/2 灰黄褐	IV群移行の縄文	良
131	33	前中～中前	IV 6	口縁部 胴部	石英多 雲母少 白色粒子 黒色粒子 赤色岩片		7.5YR 5/4 にぶい黄	IV群移行の縄文	良
132	33	前中～中前	IV 6	胴部	石英多 雲母 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		5YR 5/4 にぶい赤褐	IV群移行の縄文	良
133a	33	前中～中前	IV 6	胴部	石英 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		7.5YR 5/4 にぶい黄	IV群移行の縄文	良
133b	33	前中～中前	IV 6	底部	石英 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		7.5YR 5/4 にぶい黄	IV群移行の縄文	良
134	33	前中～中前	IV 6	胴部	石英多 雲母多 白色粒子 黒色粒子	有	7.5YR 5/6 明褐	IV群移行の縄文	良
135	33	前中～中前	IV 6	胴部	石英多 雲母多 輝石多 黒色粒子		7.5YR 5/4 にぶい黄	IV群移行の縄文	良
136a	33	中期前半	V 1	胴部	石英多 雲母多 黒色粒子 白色岩片多		5YR 5/4 にぶい赤褐	角押文	良
136b	33	中期前半	V 1	底部	石英多 雲母多 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		7.5YR 5/4 にぶい黄	角押文	良
137	33	中期前半	V 1	胴部	石英 白色粒子 黒色粒子 白色岩片 黒色岩片		10YR 6/4 にぶい黄褐	角押文	良
138	33	中期前半	V 2	口縁部	石英 輝石少 白色粒子 白色岩片		10YR 5/3 にぶい黄褐	三角押文	良
139	33	中期前半	V 2	口縁部	石英 輝石少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		10YR 5/6 黄褐	三角押文	良
140	33	中期前半	V 2	胴部	石英多 白色粒子 黒色粒子		5YR 5/4 にぶい赤褐	三角押文	良
141	33	中期前半	V 2	胴部	石英多 雲母少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片 赤色岩片		5YR 5/4 にぶい赤褐	三角押文	良
142a	34	中期前半	V 3	口縁部	石英少 白色粒子 黒色粒子 赤色粒子		10YR 6/4 にぶい黄褐	キタビラー文	良
142b	34	中期前半	V 3	胴部	石英少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		10YR 6/4 にぶい黄褐	キタビラー文	良
142c	34	中期前半	V 3	把手	石英少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		10YR 6/4 にぶい黄褐	キタビラー文	良
143	34	中期前半	V 3	口縁部	石英多 輝石少 白色粒子 黒色粒子		7.5YR 5/6 明褐	キタビラー文	良
144a	34	中期前半	V 3	胴部	石英 輝石 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		7.5YR 5/4 にぶい黄	キタビラー文	良
144b	34	中期前半	V 4	胴部	石英 輝石 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		7.5YR 6/4 にぶい黄	キタビラー文	良
145	34	中期前半	V 3	胴部	石英多 輝石少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		7.5YR 5/4 にぶい黄	キタビラー文	良
146	34	中期前半	V 3	胴部	石英 白色粒子 赤色粒子 黒色粒子 白色岩片 黒色岩片		7.5YR 5/4 にぶい黄	キタビラー文	良
147	34	中期前半	V 3	胴部	石英 雲母 白色粒子 黒色粒子 白色岩片 黒色岩片		5YR 5/6 明赤褐	キタビラー文	良
148	34	中期前半	V 3	胴部	石英多 雲母 白色粒子 黒色粒子		5YR 5/4 にぶい赤褐	キタビラー文	良
149	34	中期前半	V 4	口縁部	石英多 白色粒子 黒色粒子		7.5YR 5/4 にぶい黄	胎帯上に刻み	良
150	34	中期前半	V 4	胴部	石英少 輝石少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		5YR 6/6 黄	胎帯上に刻み	良
151	34	中期前半	V 4	胴部	石英 白色粒子 黒色粒子 赤色粒子		5YR 5/6 明赤褐	胎帯上に刻み	良
152	34	中期前半	V 4	胴部	石英 雲母多 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		7.5YR 5/4 にぶい黄	胎帯上に刻み	良
153	35	中期前半	V 4	口縁部 胴部	石英 輝石 白色粒子 黒色粒子 白色岩片 黒色岩片		5YR 5/4 にぶい赤褐	胎帯上に刻み	良
154	35	中期前半	V 4	把手	石英多 雲母少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片 赤色岩片		7.5YR 5/6 明褐	胎帯上に刻み	良
155	35	中期前半	V 4	把手	石英 白色粒子 黒色粒子 白色岩片 黒色岩片		10YR 5/4 にぶい黄褐	胎帯上に刻み	良
156a	35	中期後半	VI 1	把手	石英多 白色粒子 赤色粒子 白色岩片 赤色岩片		5YR 5/4 にぶい赤褐	背刺式	良
156b	35	中期後半	VI 1	底部	石英多 白色粒子 赤色粒子 白色岩片		5YR 5/4 にぶい赤褐	背刺式	良
157	35	中期後半	VI 1	胴部	石英少 輝石少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		7.5YR 5/4 にぶい黄	背刺式	良
158	35	中期後半	VI 1	胴部	石英多 雲母 白色粒子 赤色粒子 黒色粒子 白色岩片 赤色岩片		7.5YR 6/4 にぶい黄	背刺式	良

神田 番号	図版 番号	時期	分類		存在部位	胎 土	織地感	色 調	文様、調整等	織成
			群	種						
159	35	中期後半	VI	1	底部	石英多 雲母多 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		5YR 5/4 にぶい赤褐	菅刈式	良
160	35	中期後半	VI	2	胴部	石英多 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		10YR 6/4 にぶい黄緑	加管刈E式	良
161	35	中期後半	VI	2	口縁部	石英多 雲母 白色粒子 白色岩片		10YR 6/4 にぶい黄緑	加管刈E式	良
162	35	中期後半	VI	2	胴部	石英多 雲母多 白色粒子 黒色粒子		7.5YR 5/4 にぶい褐	加管刈E式	良
163	35	後期	VII	1	胴部	石英 白色粒子 赤色粒子 黒色粒子 白色岩片 黒色岩片		7.5YR 7/4 にぶい黄	赤名寺式	良
164	35	後期	VII	2	口縁部	石英 炭石少 白色粒子 赤色粒子 黒色粒子 白色岩片		7.5YR 6/4 にぶい黄	堀之内1式	良
165a	36		VII		口縁部	石英多 輝石少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		7.5YR 5/4 にぶい褐		良
165b	36		VII		口縁部	石英多 雲母多 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		7.5YR 5/4 にぶい褐		良
165c	36		VII		胴部	石英多 雲母 輝石少 白色粒子 黒色粒子		7.5YR 4/3 褐		良
166a	36		VII		口縁部	石英 雲母 輝石少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		10YR 5/4 にぶい黄褐		良
166b	36		VII		胴部	石英多 雲母少 輝石少 白色粒子 黒色粒子 白色岩片 黒色岩片		2.5Y 5/2 暗灰黄		良
166c	36		VII		胴部	石英多 雲母少 白色粒子 赤色粒子 黒色粒子 白色岩片 赤色岩片		7.5YR 6/4 にぶい黄		良
167	36		VII		胴部	石英多 雲母多 輝石少 白色粒子 赤色粒子 黒色粒子 白色岩片 赤色岩片		5YR 5/4 にぶい赤褐		良
168	36		VII		胴部	石英多 雲母多 白色粒子 黒色粒子 赤色粒子 白色岩片		7.5YR 5/4 にぶい褐		良
169	36		VII		胴部 底部	石英 白色粒子 黒色粒子 白色岩片 黒色岩片		5YR 5/4 にぶい赤褐		良
170			VII		底部	石英多 雲母多 白色粒子 黒色粒子 赤色粒子 白色岩片	有	5YR 5/4 にぶい赤褐		良
171	36		VII		口縁部 胴部	石英 雲母少 白色粒子 黒色粒子 赤色粒子 灰色岩片		10YR 5/4 にぶい黄褐		良
172	36		VII		胴部	石英 輝石 黒色粒子多 白色粒子 黒色岩片		10YR 6/4 にぶい黄緑		良
173	36		VII		底部	石英 白色粒子 赤色粒子 白色岩片		7.5YR 6/4 にぶい黄	割代式	良
174	36					石英多 雲母多 白色粒子 黒色粒子 白色岩片		5YR 5/6 明赤褐	土器内盤	良

第3節 石器

1 概要

縄文時代の石器は総点数2886点で、剥片石器類2312点、礫石器類574点である。石鏃215点、打製石斧148点、石核113点、削器72点などが主な器種としてあげられる（第6表、第53・54図）。

調査範囲全体の石器分布をみた際に、特に石器の出土が集中する箇所を石器集中域として設定した。この4つの石器集中域は数十mの直径をもっており、石器ブロックとは異なる。生活の中心的位置としての利用が重ねられた結果、石器の集中が生じたものであろう。調査範囲南西に位置する石器集中域1と2は早期中葉に位置付けられる。押型文土器と供伴するとされる稜部磨石を多量に含むことも整合する。石器集中域3は前期中葉から中期前葉に位置付けられる。石器集中域4は早期後葉に位置付けられる。範囲内には、他の時期の石器が混ざりこんでいる可能性は大いにあるが、分別が困難であり、分けられていない。ただし、特に石器集中域における組成率が低い打製石斧については、石器集中域から出土していても、遺構外出土の石器として扱った。

なお、以下の器種については、出土点数が膨大であるため形態によって分類を行った。分類の基準は以下の通りである。各分類と石材別の形態別分類表は第7～17表に、分布図は第55～61図に掲げる。

(1) 石鏃

茎の有無やかえしの形態をもとに、以下のように分類を行った。

有茎：茎を有するもの

凸茎：かえしが抉られず、かえしから基部になだらかにつながるもの

凹茎：かえしに抉りをもつもの

無茎：茎をもたないもの

凹基：基部が抉れているもの

尖脚：脚部の先端が尖るもの

I：最大幅が脚部の末端にあるもの

a：脚部の長さが全長の1/4以上のもの

b：脚部の長さが全長の1/4以下のもの

II：最大幅が脚部の末端よりも先端部寄りにあるもの

円脚：脚部に角がなく、丸く作られているもの

平脚：脚部末端に平坦部をもつもの（鏃形鏃）

微脚：身上半に最大幅をもち、基部にわずかな抉りをもつもの。必ずしも全てがこの条件には当てはまらないが、珪質粘板岩を用いたものを全てここに分類した。（五角形鏃）

平基：基部が平坦に近いもの

不明：基部形態が不明のもの

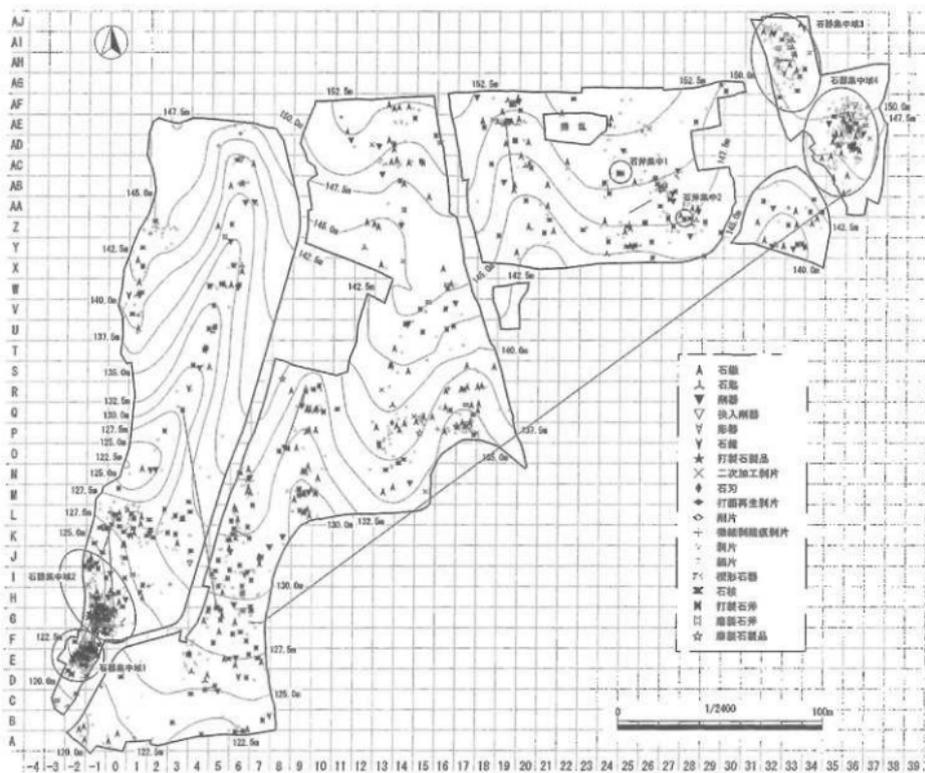
未製品：製作途中で遺棄されたもの

折損：折損により基部が失われているもの

(2) 石匙

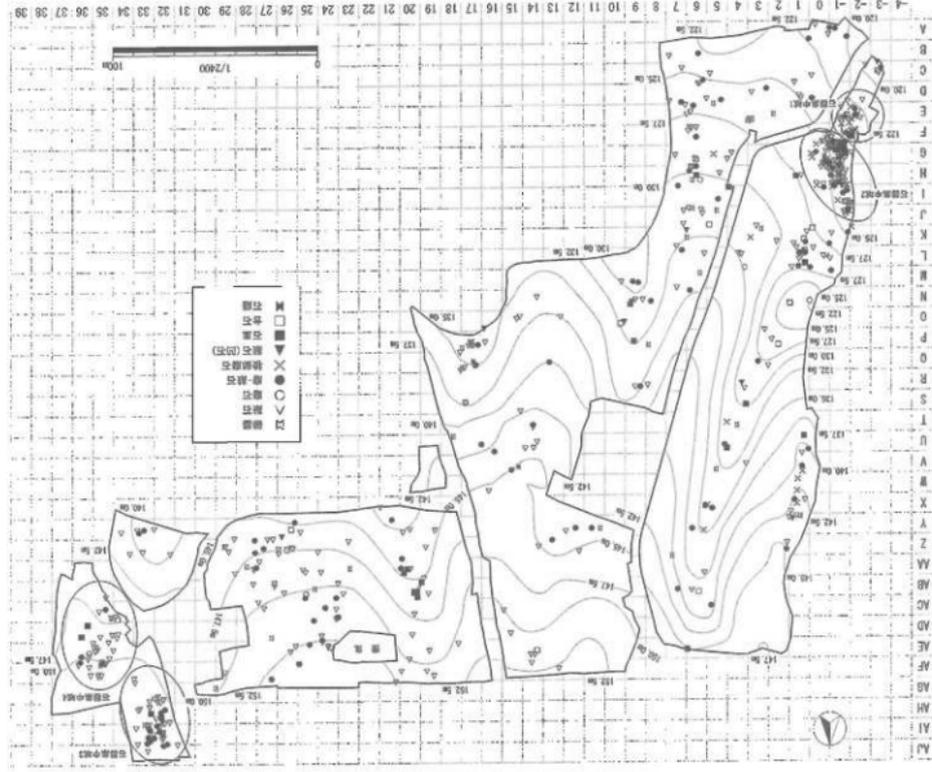
長幅比と形態をもとに以下のように分類を行った。

楕型：つまみ部を上にしたとき、幅が長さの1/2以上のもの



第53图 剥片石器類 器種別分布

第54図 礫石器類 器種別分布



左右非対称：身部が比較的左右非対称のもの

左右対称：身部が比較的左右対称のもの

縦型：つまみ部を上にしたとき、幅が長さの1/2以下のもの

(3) 削器

刃部の加工と加工の範囲をもとに以下のように分類を行った。

両刃：両面への調整剥離で刃部が作り出されるもの

片刃：主に片面への調整剥離で刃部が作り出されるもの

側縁：剥片の側縁に刃部を有するもの

端部：剥片の末端部または打点周辺に刃部を有するもの

全周：周縁全体に刃部を有するもの

石核素材：石核を素材とするもの

(4) 石核

剥片剥離の方法や素材をもとに以下のように分類を行った。

転移：打面と作業面を頻繁に転移しながら剥片剥離を進行させるもの

交互：打面と作業面を入れ替えながら剥片剥離を進行させるもの

一端：剥片剥離を一端から行うもの

全周：周囲全体から剥片剥離を行うもの

固定：作業面を固定して剥片剥離を進行させるもの

長形：長さが幅や厚さより大きいもの

幅広：幅が長さや厚さより大きいもの

厚形：厚さが長さや幅より大きいもの

I：礫を素材とするもの

II：剥片を素材とするもの

a：長さ・幅・厚さのいずれかの値が他の2つの値の3/2より大きいもの

b：aにあてはまらないもの

(5) 打製石斧

外形と厚さ、自然面の残存の程度をもとに以下のように分類を行った。

短冊形：両側縁が平行するもの

撥形：側縁が直線的で、刃部にむかって広がるもの

分銅形：側縁が内湾するもの

尖頭形：基部が尖るもの

厚型：厚さが幅の1/2以上のもの

薄型：厚さが幅の1/2以下のもの

a：表裏に自然面が残存するもの。1個の礫から1個の石斧が作られたと考えられる。

b：片面の大部分に自然面が残存するもの

c：片面の一部に自然面が残存するもの

d：自然面が残存していないもの

ただし、幅は、短冊形と尖頭形が最大幅、撥形が器体中央、分銅形が抉れた部分で計測した。

(6) 礫器

刃部の形態と素材形状をもとに以下のように分類を行った。

両刃：両面への調整剝離で刃部が作り出されるもの

片刃：主に片面への調整剝離で刃部が作り出されるもの

尖頭状：機能部が尖るもの

円礫：円礫を素材とするもの

歪円礫：歪円礫を素材とするもの

歪角礫：歪角礫を素材とするもの

角礫：角礫を素材とするもの

(7) 敲石

礫に敲打痕が認められるもののうち、手に持って使用可能と考えられる2kg以下のものを敲石とした。

素材形状と敲打痕の範囲をもとに以下のように分類を行った。

球状：厚さが幅の3/4以上で、幅が長さの2/3以上のもの

部分：一部分に敲打痕が認められるもの

円盤状：厚さが幅の3/4以下で、幅が長さの2/3以上のもの

部分：周縁の一部分に敲打痕が認められるもの

全周：周縁の全周に敲打痕が認められるもの

平坦部：平坦部に敲打痕が認められるもの

棒状：幅が長さの2/3以下のもの

端部：端部に敲打痕が認められるもの

側縁：側縁に敲打痕が認められるもの

平坦部：平坦部に敲打痕が認められるもの

歪角礫：歪角礫を素材とするもの

端部：比較的尖った端部に敲打痕が認められるもの

側縁：側縁に敲打痕が認められるもの

平坦部：稜ではない平坦な部分に敲打痕が認められるもの

(8) 磨石

礫に磨面が認められるもののうち、手に持って使用可能と考えられる2kg以下のものを磨石とした。

素材形状と磨面の範囲をもとに分類した。分類は敲石の分類と同様である。

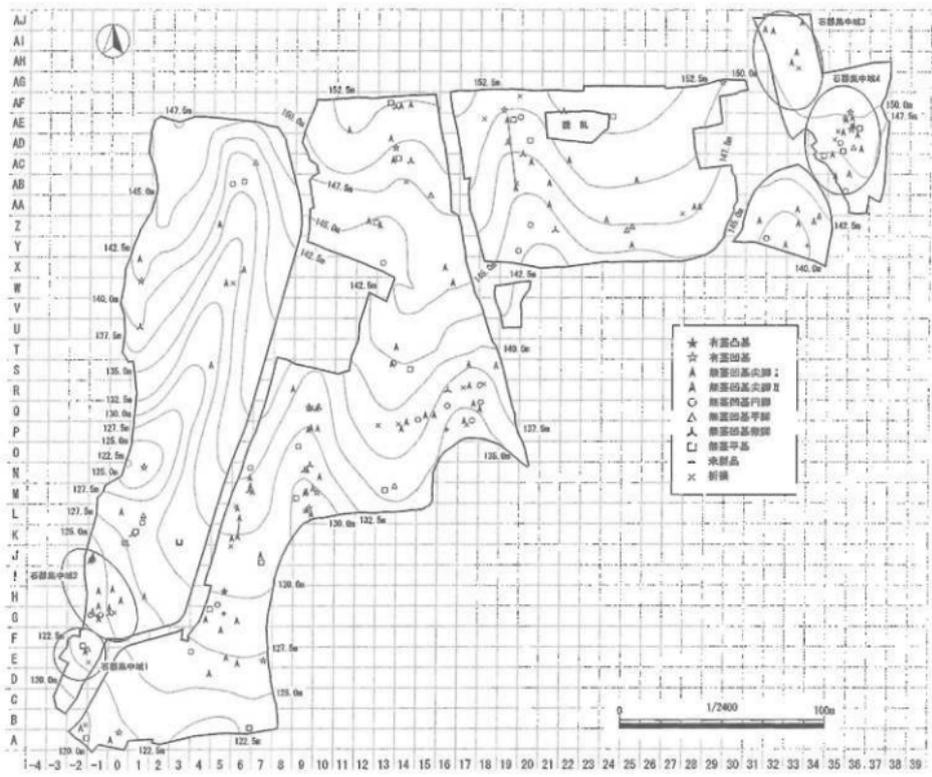
(9) 磨-敲石

礫に磨面と敲打痕の両方が認められるもので、手に持って使用可能と考えられる2kg以下のものを磨-敲石とした。素材形状と磨面及び敲打痕の範囲をもとに分類を行った。まず、磨面の範囲から磨石と同じように分類し、さらに敲打痕の範囲から以下のように分類した。

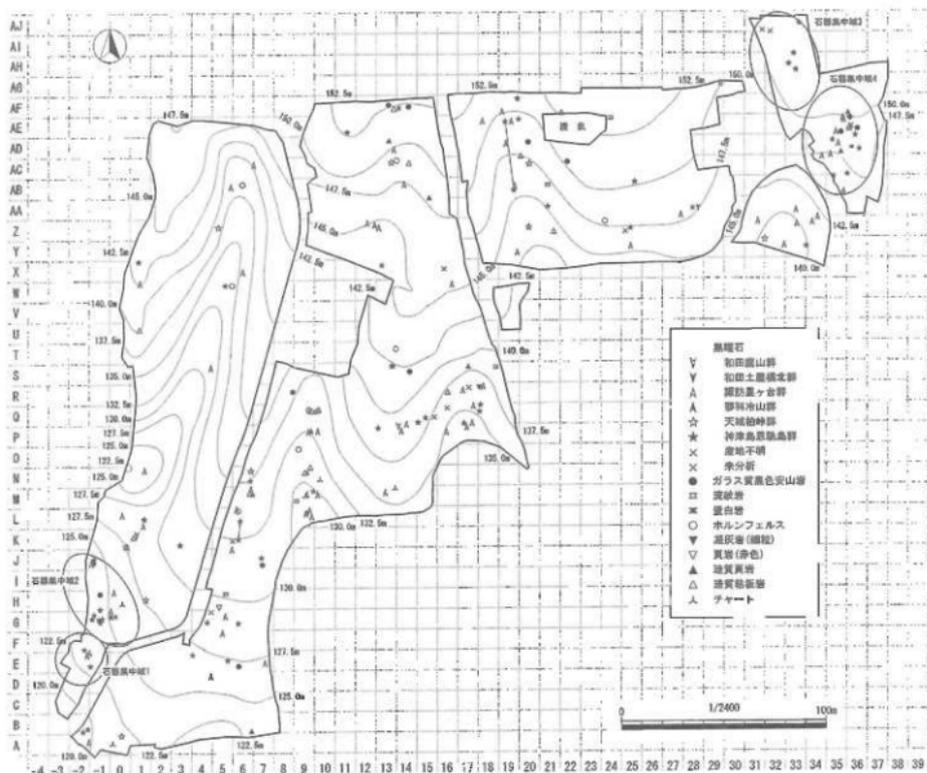
I：磨面と同じ位置に敲打痕が認められるもの

II：磨面と異なる位置に敲打痕が認められるもの

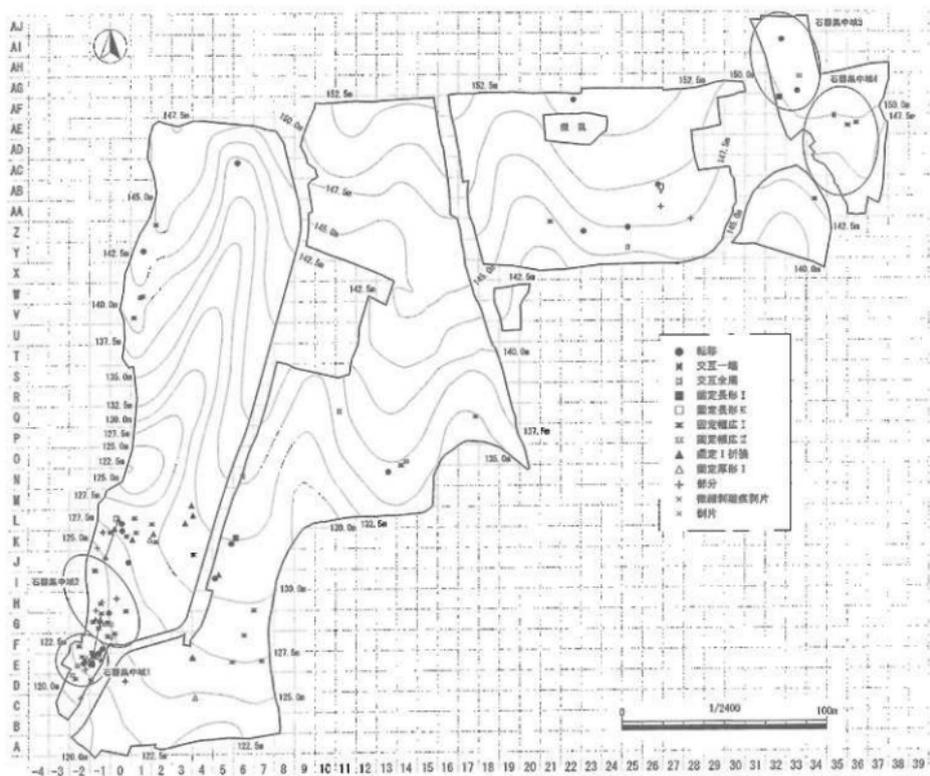
III：磨面と同じ位置と異なる位置の双方に敲打痕が認められるもの



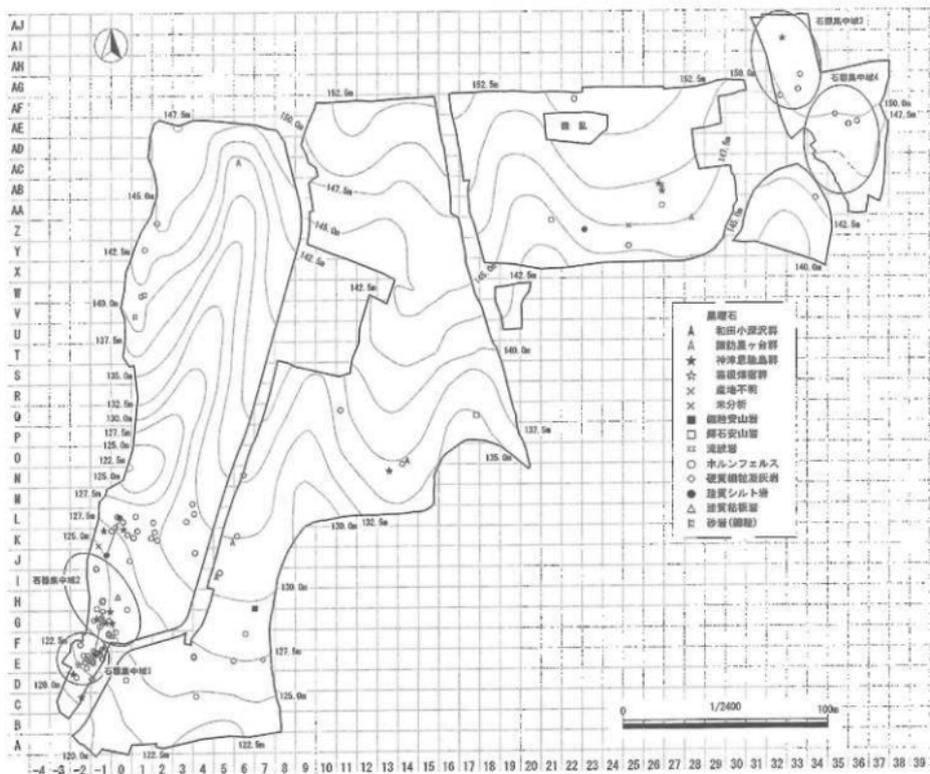
第55圖 石巖 形態分類別分布



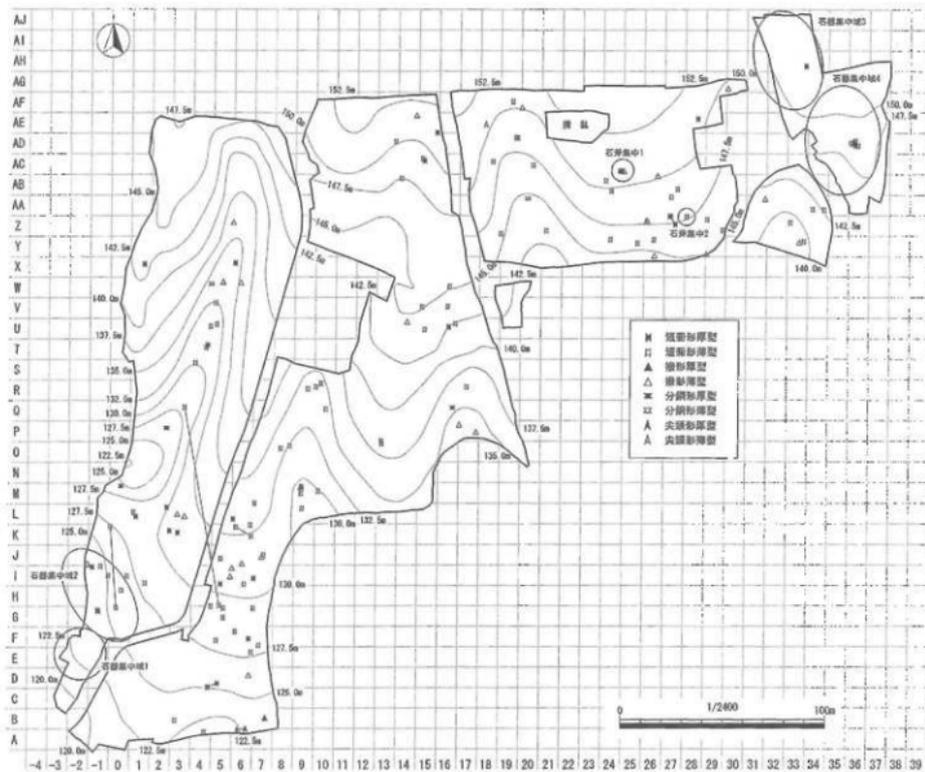
第56図 石蔵 石材別分布



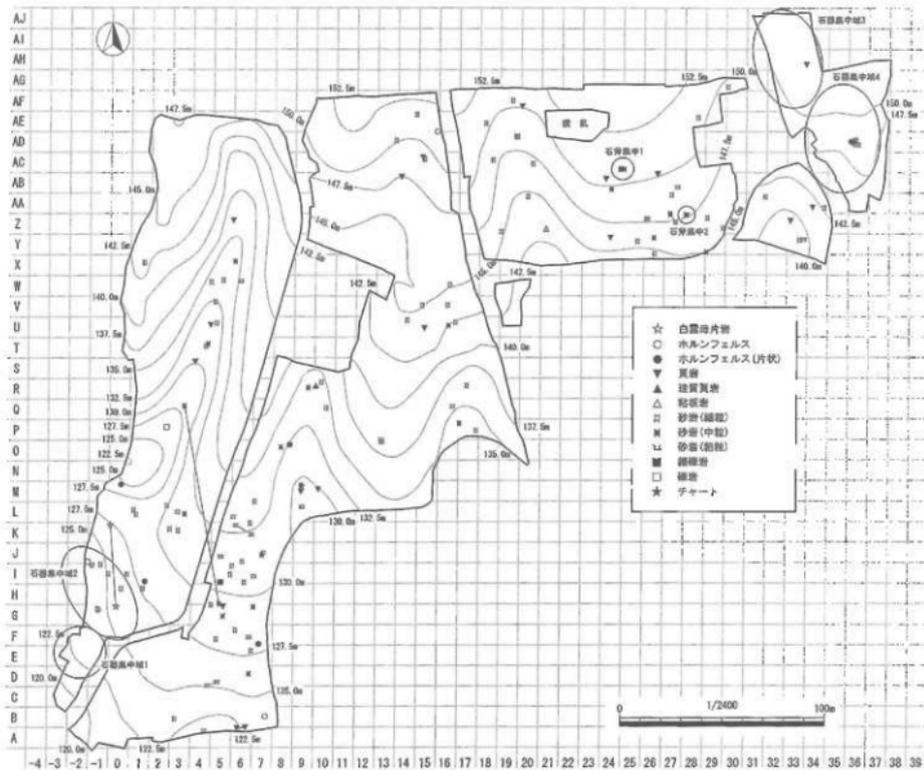
第57圖 石核 形態分類分布



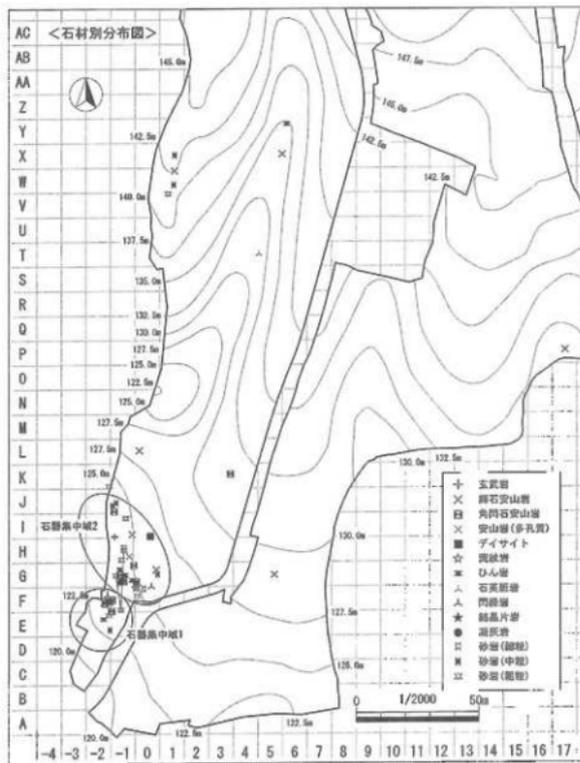
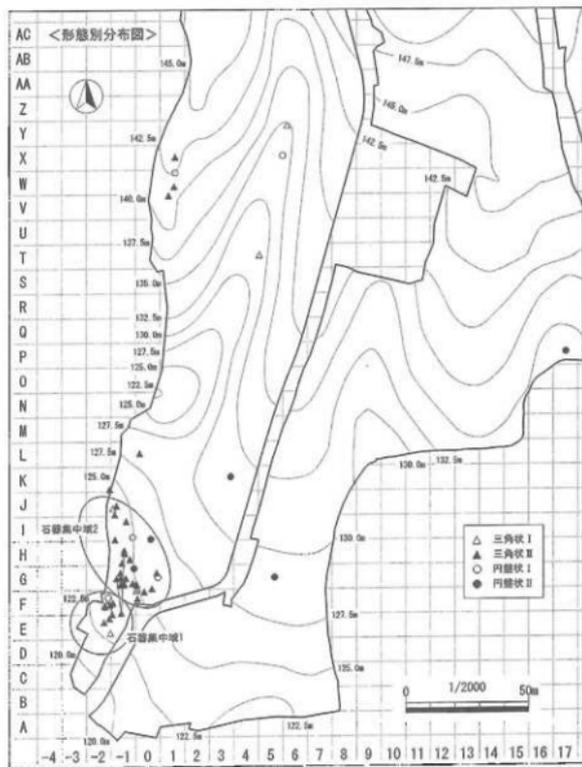
第58図 石核 石材別分布



第59圖 打製石斧 形態分類別分布



第60図 打製石斧 石材別分布



第61図 稜部磨石 形態分類・石材別分布

(10) 稜部磨石

礫の稜線部に磨面をもつものである。これまで特殊磨石と呼ばれてきたものであるが、特殊磨石という用語が他地域では異なる形態のものに使われているといった問題があるため、ここでは稜部磨石と呼称することにした。それに伴い稜部に形成された磨面を稜部磨面とよぶ。稜部磨面は滑らかなものとややザラつくものがある。稜部磨面と接する平坦部にも研磨がなされる例がある。また、稜部磨面の周囲に敲打痕や剥離痕など加撃の痕跡が残されるものがある。縄文時代早期中葉の押型文土器に伴う可能性が高い。

素材形状と平坦面の磨面の有無、加撃痕の位置をもとに以下のように分類を行った。

三角状：横断面が隅丸三角形の礫を用いるもの

円盤状：円盤状の礫を素材とし、横断面がD字状になるもの

I：平坦部に磨面が認められないもの

II：平坦部に磨面が認められるもの

- a：稜部磨面の側縁の平坦部と接する部分に加撃痕が認められるもの
 b：稜部磨面の端部に敲打痕が認められるもの
 c：礫の端部に敲打痕が認められるもの
 d：礫の平坦部に敲打痕が認められるもの
 e：加撃痕が認められないもの

(11) 敲石(凹石)

凹みがある面と凹みの数をもとに以下のように分類を行った。

片面：1面に凹みが認められるもの

両面：表裏2面に凹みが認められるもの

多面：3面以上に凹みが認められるもの

単数：1面に1つの凹みが認められるもの

複数：1面に複数の凹みが認められるもの

第7表 石鏃の形態別分類

	品 類										計							
	和石(鹿山群)																	
有蓋凸蓋									1		1							
有蓋凹蓋		10		1							13							
無蓋凹蓋尖脚Ⅰa		7		1	1	1	1				11							
無蓋凹蓋尖脚Ⅰb	1	1	19	1	6	27	2	3	6	1	31							
無蓋凹蓋尖脚Ⅱ	1	6			5	1		2	1		17							
無蓋凹蓋内脚		5	3	9	1	1			2	1	24							
無蓋凹蓋平脚		3			2	1			1		9							
無蓋凸蓋無脚					1					15	16							
無蓋平蓋	1	5	1	4	1		5	2	1		22							
未製品		2			2						4							
折損	1	12		7		1			1		22							
計	4	4	70	1	11	58	6	7	12	6	1	9	1	1	7	15	5	215

第8表 石匙の形態別分類

	品 類				計		
	和石(鹿山群)	和石(鹿山群)	和石(鹿山群)	和石(鹿山群)			
横置左右非対称	1	2			1	11	
縦置左右対称			5	1		6	
縦置	1	1	1			3	
計	1	3	13	2		1	20

第9表 削器の形態別分類

	黒曜石 阿波野山群	黒曜石 神津島系黒曜石 文城峠群	玄武岩 ガウス系色安山岩 系	輝石安山岩	表板岩	粘板岩	ホルンフェルス	頁岩	砂岩(粗粒)	砂岩(中粒)	砂岩(細粒)	頁岩	計	
両方刃縁		6					1		1				8	
両方端部		1					1	4	1				7	
両方全周	1												2	
両方石核密材							1						1	
片方刃縁		12	21	3	2	1	3		7			1	32	
片方端部	1	7					2	1	3	1			15	
片方全周		1					1	2	1				5	
片方石核密材									1				1	
不明			1										1	
計	2	1	26	1	2	3	2	1	10	7	13	2	1	72

第10表 石核の形態別分類

	黒曜石 相田小幡山群	黒曜石 神津島系黒曜石 阿波野山群	玄武岩 ガウス系色安山岩 系	輝石安山岩	表板岩	粘板岩	ホルンフェルス	頁岩	砂岩(粗粒)	砂岩(中粒)	砂岩(細粒)	頁岩	計		
転移		3	8	1									12		
交互一端												2	1	3	
交互全周												3		3	
固定長形 I b												3		3	
固定長形 II b												1		1	
固定幅広 I a				2		1	1	2						6	
固定幅広 I b												1		1	
固定幅広 II a		1	2									2		5	
固定幅広 II b	1	1	1	1								1		5	
固定厚薄 I a												2		2	
固定厚薄 I b												6	2	8	
固定 I 折痕												6		6	
部分		2	3									6	1	11	
不明									1					1	
計	1	6	15	1	5	1	2	1	1	1	1	73	1	4	113

第11表 打製石斧の形態別分類

	白雲片岩	ホルンフェルス片状	玄武岩	粘板岩	砂岩(粗粒)	砂岩(中粒)	砂岩(細粒)	頁岩	黒曜石	粘板岩	チャート	計	
短冊形厚型a									1			1	
短冊形厚型b	1		1		1	2	3	1				9	
短冊形厚型c					6	2						7	
短冊形厚型d	1				4							5	
短冊形薄型a					1							2	
短冊形薄型b		1	5		21	6	7			1		44	
短冊形薄型c			3		7	3	4					14	
短冊形薄型d	1	3	2	1	1	17						25	
楕円形厚型a	1											1	
楕円形厚型b			1		7	7	3		1			19	
楕円形厚型c			1		2	1						4	
楕円形厚型d			1		2							3	
分銅形厚型a						1	1					2	
分銅形厚型b						1	7					8	
分銅形厚型d		1										1	
分銅形薄型a						1						1	
分銅形薄型b						2						2	
尖頭形厚型a			1									1	
尖頭形厚型b					1							1	
尖頭形厚型c					1							1	
不明						1						1	
計	1	3	6	1	18	1	1	75	21	18	1	2	148

第12表 礫の形態別分類

	玄武岩	ホルンフェルス	砂岩(粗粒)	砂岩(中粒)	砂岩(細粒)	頁岩	粘板岩	計
両方刃縁					1			1
両方直刃縁		1						2
両方直角縁		1						1
両方角縁								1
片方刃縁		1			3			5
片方直刃縁		1	2		1			7
片方直角縁	4	11	1					17
片方角縁		4						4
尖頭状内縁		1						1
尖頭状直内縁					1			1
計	4	19	5	1	1	6	3	40

第13表 敲石の形態別分類

	玄武岩	立玄武岩(多孔隙)	黒石(玄武岩)	安山岩(多孔隙)	アノキヤイト	流紋岩	輝綠岩	ひん岩	閃長岩	閃長岩レイ層	結晶片層	結晶岩	黒色頁岩	黒色頁岩	火山凝結灰岩	粘土凝結灰岩	砂岩(粗粒)	砂岩(中粒)	砂岩(細粒)	頁岩	計
球状部分	11	14	3	16	3										1		2				50
円盤状部分	8	21	1	37	1	1	6	1	3	2	1	1	1	1	1	1	1	12	1	1	137
円盤状全面	3			1						1											6
円盤状平坦部	3	2	1	5			1														13
球状端部	4	2		13		2	1			1								12			36
球状側縁				1													1	2			5
球状平坦部				2						1											4
直角端部	4	2	1	25		4	1														39
直角側縁				3											1						1
直角平坦部				3																	3
折痕		1		3											1						11
計	33	42	6	126	1	19	1	8	1	1	5	2	1	1	1	2	1	1	2	31	203

第14表 磨石の形態別分類

	玄武岩	立玄武岩(多孔隙)	黒石(玄武岩)	安山岩(多孔隙)	アノキヤイト	流紋岩	輝綠岩	ひん岩	閃長岩	閃長岩レイ層	結晶片層	結晶岩	黒色頁岩	砂岩(粗粒)	砂岩(中粒)	砂岩(細粒)	頁岩	計
球状部分		1																1
円盤状平坦部	3			1	1		2	2	7									13
球状平坦部				1	1				2									3
折痕			1	1			1		3									3
計	3	1	1	3	2	1	2	2	23									33

第16表 稜部磨石の形態別分類

	玄武岩	立玄武岩(多孔隙)	黒石(玄武岩)	安山岩(多孔隙)	アノキヤイト	流紋岩	輝綠岩	ひん岩	閃長岩	閃長岩レイ層	結晶片層	結晶岩	黒色頁岩	砂岩(粗粒)	砂岩(中粒)	砂岩(細粒)	頁岩	計
三角状Ia							1	1			1							3
三角状Ib																1		1
三角状Ic	1	2				1												4
三角状Ie																1		1
三角状IIa	1	4												1		2		8
三角状IIb															1	1		2
三角状IIc	2	3				1	1		1	1	1	1	1	1	1	1	1	12
三角状IId																		1
三角状IIf	1			1										1				7
円盤状Ia	2																	2
円盤状Ic	1								1						1			3
円盤状IIa	1																	1
円盤状IIc	1	1																2
円盤状IId		1		1														2
計	2	10	9	1	1	1	5	1	2	1	1	1	1	6	8	8		49

第15表 磨-敲石の形態別分類

	玄武岩	立玄武岩(多孔隙)	黒石(玄武岩)	安山岩(多孔隙)	アノキヤイト	流紋岩	輝綠岩	ひん岩	閃長岩	閃長岩レイ層	結晶片層	結晶岩	黒色頁岩	砂岩(粗粒)	砂岩(中粒)	砂岩(細粒)	頁岩	計
球状部分I	1			1														2
球状部分II	2	5		2												1		10
球状部分III	1																	1
円盤状部分I				1														1
円盤状部分II				1														1
円盤状平坦部I	1	2	6															9
円盤状平坦部II	3	3	29	2	1	1	1	2	1	1						2	3	56
円盤状平坦部III																2	2	2
球状平坦部I																		1
球状平坦部II	2		9	1												6	2	20
直角平坦部II			4	1														5
不明															1			1
計	10	8	2	55	3	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	3	104

第17表 敲石(凹石)の形態別分類

	玄武岩	立玄武岩(多孔隙)	黒石(玄武岩)	安山岩(多孔隙)	計
片割華敷	1	1	1	2	5
両面華敷	1		2	3	3
両面華敷			1	1	1
多面華敷		1			1
多面華敷			1		1
計	2	2	5	2	11

2 石器集中域の石器

(1) 石器集中域 1

調査範囲の南西の隅に位置し、石器集中域2の南に接する。直径約25mの範囲に分布する。この範囲にはI群1類土器(押型文縦位密接施文)・2類土器(押型文帯状施文)の出土が多く認められるため、縄文時代早期中葉に位置付けられる。

319点の石器で構成され、うち27点が礫石器類である。剥片石器類は292点(石核を含む)で、使用石材別に見ると黒曜石が194点、ホルンフェルスが72点である。黒曜石は産地分析を行った42点のうち、神津島恩馳島群が28点、諏訪星ヶ台群が9点、箱根烟宿群が5点であり、神津島恩馳島群が多く含まれている。ホルンフェルスは剥片56点と石核16点のみが出土しており、剥片の点数と比して石核の点数が多い。礫石器類では緩部磨石が特徴的に組成する。

第18表 石器集中域1 石器組成 (総点数 319点)

石材名	黒曜石(Ob)		未分析	玄武岩	ガラス質黒色安山岩	輝石安山岩	角閃石安山岩	安山岩(多気質)	緑石	ひん岩	閃緑岩	紫玉石	絹絹片岩	ホルンフェルス	緑色硬岩	頁岩	頁岩(赤色)	粘板岩	粘岩(黒色)	砂岩(中粒)	砂岩(粗粒)	計
	諏訪星ヶ台群 SW HD	神津島恩馳島群 KZ OB																				
石核	2	2																				4
石匙					1																	1
両器	1	4																			1	7
石錐		1																				1
二次加工剥片	1	2	3																			6
石刃		1																				1
微細剥片	2	2																				4
剥片	1	8	1	89	1	2			2	1	1	1		56	2	1	1	3	1	6		177
剥片				62																		63
標準石器	1	3	1																			5
石錐	1	9	1											16								23
計	9	28	5	152	1	2	2		2	1	1	1		72	2	1	1	4	1	7		292
礫石器類					1		1															2
磨石							3		1													3
磨石							1															1
磨一般石							3			1												5
緩部磨石							2	3		1	1		1									10
計					1		9	4	1		2	1	1									27

①石匙 (第66図175~178)

4点出土した。175・176が諏訪星ヶ台群、177・178が神津島恩馳島群の黒曜石を用いる。

176は無茎凹基尖脚I a類である。鋸齒縁加工が施される。176は無茎凹基平脚類である。ただし、基部側の大部分に、挟り部から生じた折れが認められる。177は無茎平基類である。基部にわずかな折れが認められるが、折れて失われた部分は少ない。178は折損により基部が失われている。裏面に素材面が残存する。

②石匙 (第66図179)

1点出土した。縦型で、ガラス質黒色安山岩の石刃を用いる。両面調整で成形されている。

③削器 (第66図180～184)

7点出土し、5点を図化した。180～183が神津島恩馳島群、184が諏訪星ヶ台群の黒曜石を用いる。

180は両刃削器類である。2辺に折面を有する厚い剥片を素材とする。折面はポットリット状であり、熱による破砕と考えられる。181～183は片刃削器類である。181は打点側、末端側、右側縁が折れた剥片を素材とする。腹面右側縁に急斜度の調整剥離を施す。また、腹面打点側には折面を加撃した剥離が認められる。182は不定形な剥片を素材とし、右側縁下端部に急斜度の調整剥離を施す。また、左側縁の鋭い縁辺には背腹両面に微細剥離痕が並ぶ。183は左上部を大きく折損する。背面右側縁に比較的小さい調整剥離が連続する。腹面右上端部には稜に沿った剥離が認められるが、偶発的に生じたものと考えられる。184は片刃端部類である。打面から左側縁に角礫の自然面が残存し、末端部がわずかにステップする剥片を素材とする。末端部に急斜度の調整剥離を施す。右側縁には背面と腹面で場所を違えて、小さい調整剥離を施す。

④石錐 (第66図185)

1点出土した。神津島恩馳島群黒曜石を用いる。上下両端が折損するため全体の形態は明らかでない。縁辺は鋸歯状に調整される。

⑤二次加工ある剥片 (第66図186・187)

6点出土し、2点を図化した。186・187とも箱根畑宿群黒曜石を用いる。186は薄い剥片を素材とし、右側縁の背腹両面に押し剥離を施す。左側縁が折れていることもあり全体形は不明であるが、石礫の未製品の可能性がある。187は折れた剥片の上半を二次加工ある剥片として利用しており、下半部と接合した状態で図化している。素材剥片の主要剥離面はウートラパッセになっている。角礫素材で、礫面に明瞭な稜がある。折れた剥片の上半の折面と自然面が接する部分で、自然面側に調整剥離を施す。

⑥石刃 (第66図188)

1点出土した。神津島恩馳島群黒曜石を用いる。背面にトサカ状の稜がある稜付き石刃である。背面右半は大きい調整剥離の跡が残り、左半は広いポジティブの剥離面に、稜上から長さ5mm程度の細かい剥離が施される。

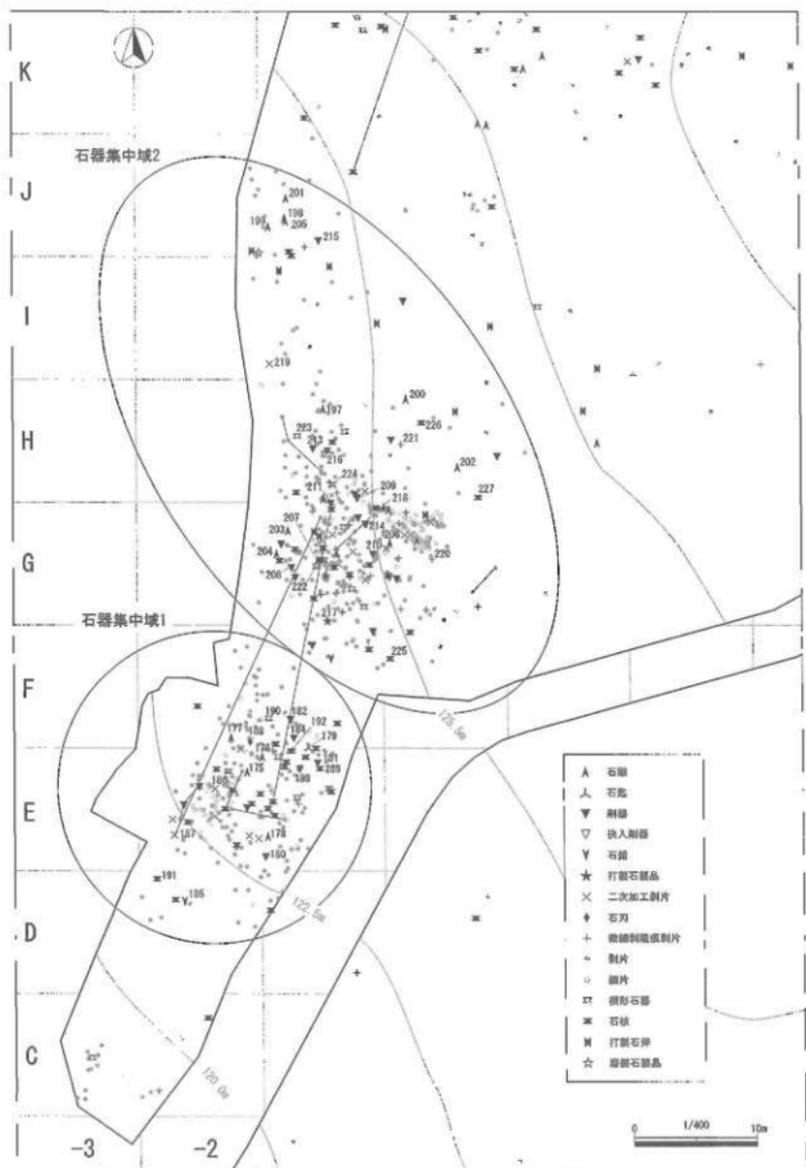
⑦楔形石器 (第66図189・190)

5点出土し、2点を図化した。189・190とも神津島恩馳島群黒曜石を用いる。189は3辺に折面を有する剥片を素材とする。下端の折面は背腹両面の剥離の後に生じたもので、この折面の後に剥離されたことが明確な剥離は左側縁の折面への剥離のみである。背面の打点側には潰れを伴う剥離が認められる。腹面右側縁と背面右下端にも剥離が認められるが、潰れは認められない。190は上下からの剥離が両面に残されている。上辺には潰れが認められる。表面には右辺からの剥離も認められる。左右の辺には比較的古い平坦な剥離面が残されている。

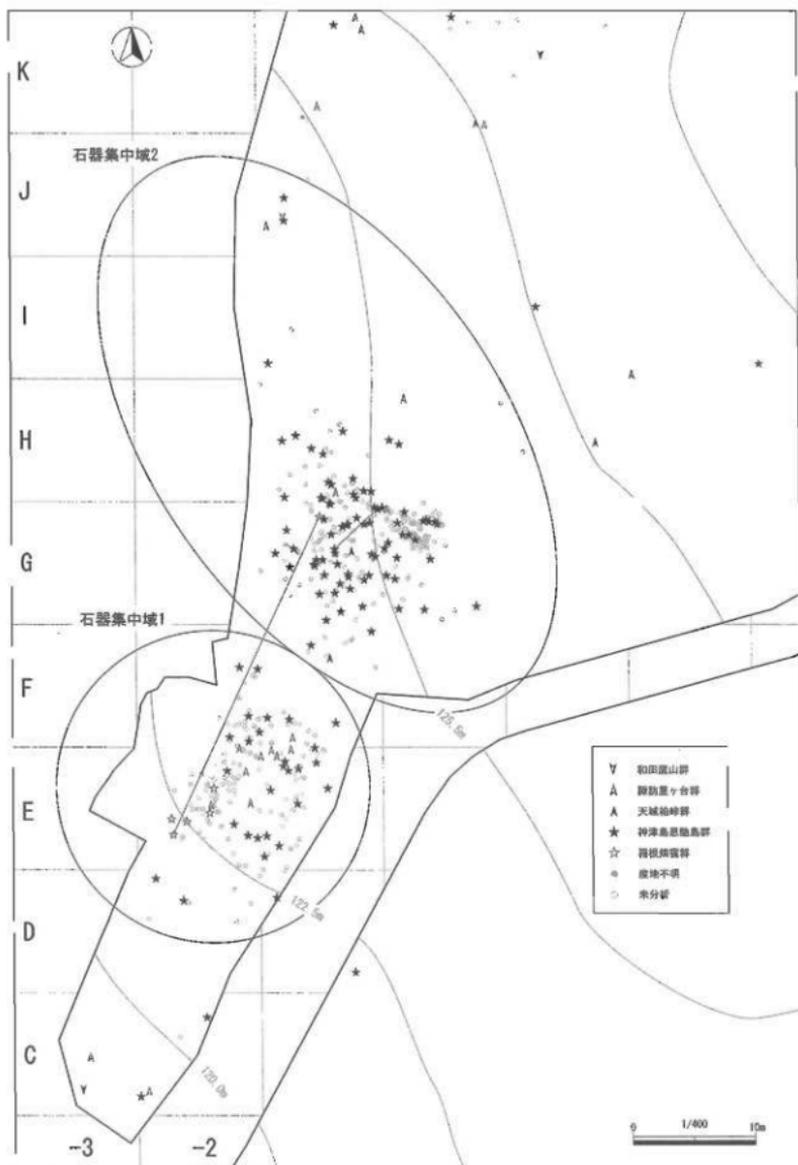
⑧石槌 (第67図191・192)

23点出土し、2点を図化した。191が神津島恩馳島群黒曜石、192はホルンフェルスを用いる。

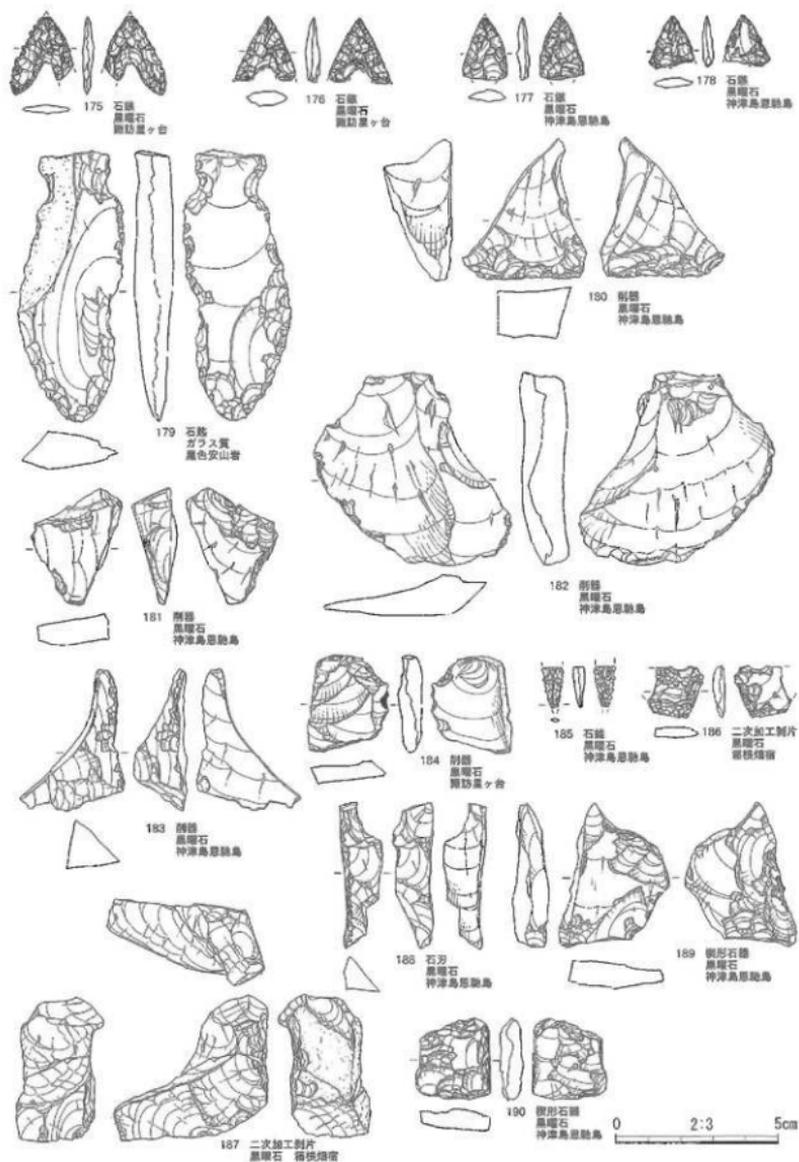
両者とも大きい剥片を素材とし、主にその背面で剥片剥離を行う固定幅ⅡA類である。191は作業面中央に残された大きい剥離が最後になされたものである。その剥離の右下に接する剥離面は素材面であり、左隣の剥離は先行する剥片剥離作業によるものである。左の剥離に伴う割れが、素材剥片の打面に



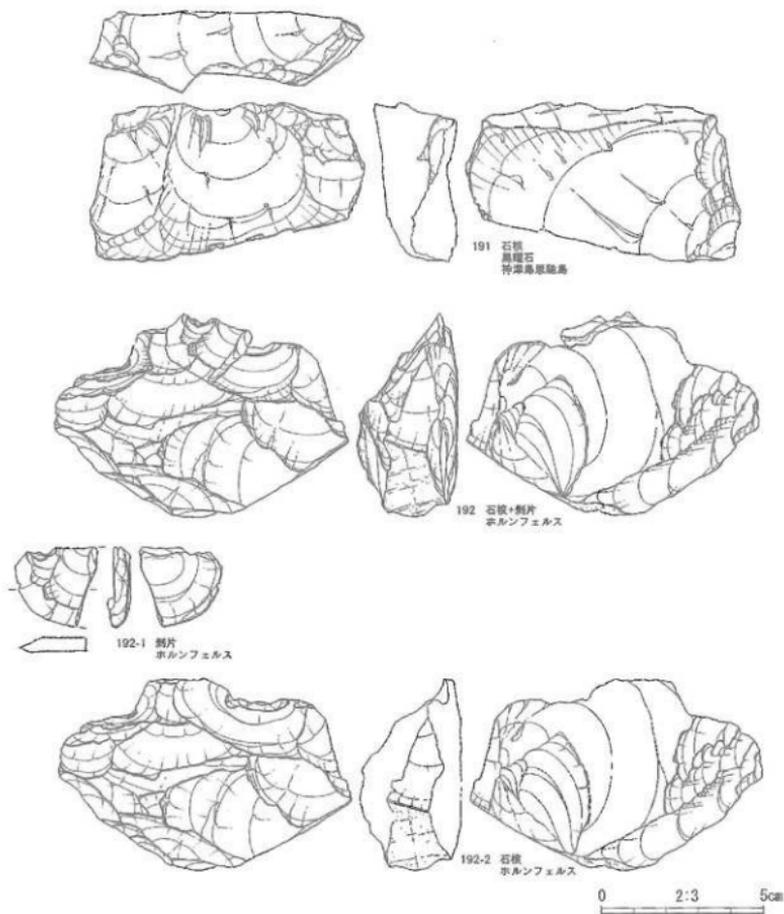
第62圖 石器集中域1・2 剥片石器類 器種別分布



第65図 石器集中域1・2 黒曜石 産地別分布



第66図 石器集中域1 出土石器(1)

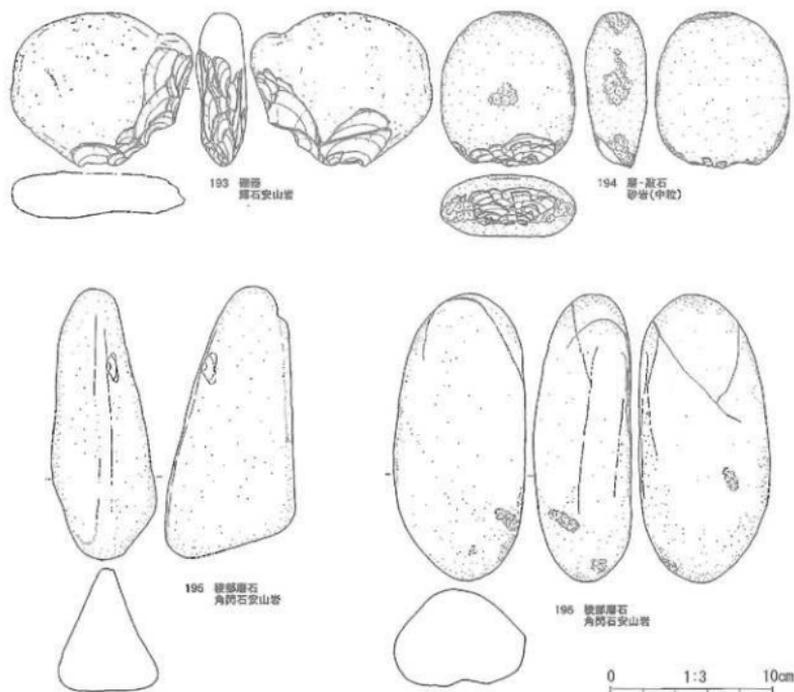


第67図 石器集中域1 出土石器(2)

及んでいる。192-2には剝片(192-1)が接合する。素材剝片の平坦な主要剝離面を打面に右側縁で剝片剝離を行う。腹面末端部でも剝離が行われている。

⑨礫器(第68図193)

2点出土し、1点を図化した。193は両刃垂角礫類である。一部がピンク色に赤化する。



第68図 石器集中域1 出土石器③

⑩磨-敲石 (第68図194)

5点出土し、1点を図化した。194は円盤状平坦部Ⅲ類である。磨面の中央にわずかに敲打痕が認められる。周縁部には断続的に敲打痕が残され、一端は強い加撃によって剥離が生じている。

⑪稜部磨石 (第68図195・196)

10点出土し、2点を図化した。195は三角状Ⅱa類である。両平坦面に磨面をもつ。稜部磨面は極めて狭小で、平坦面にむけて1枚の剥離痕が認められる。196は三角状Ⅱc類である。主に一端に敲打痕が認められる。

(2)石器集中域2

調査範囲の南西の隅に位置し、石器集中域1の北に接する。直径約40mの範囲に分布する。この範囲にはⅠ群1類土器(押型文縦位密接施文)・2類土器(押型文带状施文)の出土が多く認められるため、縄文時代早期中葉に位置付けられる。

653点の石器で構成され、うち124点が礫石器類である。剥片石器類は529点(石核を含む)で、使用石材別に見ると黒曜石が309点、ホルンフェルスが144点である。黒曜石は、産地分析を行った88点のう

第19表 石器集中2 石器組成 (総点数 653点)

石材名	石(Ob)					未分類	玄武岩	玄武岩(含孔状)	玢岩玄武岩	ガラス質黒色安山岩	輝石安山岩	角閃石安山岩	安山岩(含孔状)	デイサイト	流紋岩	ひん岩	閃緑岩	緑色岩	垂石	結晶片岩	角閃石	ホルンフェルス	輝石岩	硬質輝石岩	緑色面状岩	頁岩	造岩頁岩	粘板岩	地質粘板岩	砂岩(面状)	砂岩(中粒)	砂岩(粗粒)	チャート	計
	WD TY	SW HD	AG KT	KZ OB	HN HU																													
片	石胆	1	3	10					1																								1	16
	削片			12						1																2								17
	快入削片			1																														1
	石鏡			1																														1
片	打製石製品			2																														2
	二次加工削片			1	11																													12
片類	微細削片(削片)	1		25	1														1															26
	削片			6	1	108	2		5	11				1								128	1	1	1	3	6	2		20	2	5	301	
	削片			3		212																											124	
	微研石器			8																													8	
	石鏡			4					1					1																			21	
	計	1	4	2	80	1	221	2		4	13			2		1			1	1		144	1	1	5	6	2	1	27	3	5	1	529	
片類	磁器						1			5																					3		7	
	磁石						4	6	1	16	1	3		5		1	1									1				1	11	3	56	
	磨石									2																							5	
	磨-磁石								2		9																				2	2	15	
	微研磨石						1			3	5	1	1	1	3	1							1							1	3	5	26	
	磨石(削石)								1																								1	
	石鏡										6																						6	
	金石						1				6																						7	
	石鏡																															1	1	
	計						7	9	1		42	8	4	1	6	3	4	1	1			1								6	16	11	124	

ち、神津島恩馳島群が80点と極めて多い。神津島恩馳島群黒曜石の石器は、石鏃が10点、削器が12点と石核に対して製品が占める割合が大きい。また、何らかの形状をかたどった可能性のある打製石製品が2点認められる。ホルンフェルスの石器は、剥片が128点、石核が14点、削器が1点で、製品が少ない。礫石器類では後部磨石が特徴的に組成する。

①石鏃（第69図197～207）

16点出土した。神津島恩馳島群黒曜石（201・203～207）が10点、諏訪屋ヶ台群黒曜石（199・200）が3点、和田鷹山群黒曜石（198）、ガラス質黒色安山岩（197）、チャート（202）がそれぞれ1点である。

197は無茎凹基尖脚Ⅰa類である。両面に素材面が残存している。表面は調整剥離がステップし、中央まで到達せず、高まりが残っている。198～202は無茎凹基尖脚Ⅰb類である。199は脚部が外にむかって若干張り出す。200は側縁が鋸歯状に加工される。表面に素材面が残存する。202は両側縁が内湾し、脚部が外側にむかって張り出す。灰色に黒く縞が入ったチャートを用いる。203は無茎凹基尖脚Ⅱ類である。表面には素材面が残存している。204・205は無茎凹基円脚類である。204の表面先端部には小さい衝撃剥離が認められる。205の裏面中央には夾雑物から生じた割れが残されている。206は無茎凹基微脚類である。この形態はこの1点を除いて、全て珪質粘板岩を用いる。片方の脚を折損している。錐に転用されたらしく、先端部には摩滅が認められる。207は未製品である。片方の脚は折損し、もう一方は端部に平坦な剥離面を残す。先端部は尖らされているものの、石鏃ではない可能性もある。

②削器（第69図208～215）

17点出土した。神津島恩馳島群黒曜石（208～214）が12点、頁岩（215）が2点、輝石安山岩、結晶片岩、ホルンフェルスがそれぞれ1点である。208は両刃側縁類である。下と左を折損する剥片を素材とし、右側縁に刃部を設ける。209は両刃端部類である。剥片の折れた末端部を素材とする。折面と刃部が接する部分は錐状に尖る。210～212は片刃側縁類である。210は上部を折損した剥片を素材とする。左の折面は刃部作出の後に生じたもので、ポットリット状で、熱破砕の可能性が高い。上部の折面を加撃して剥離が行われているがその意図は不明である。211は折れた剥片の上部を素材とする。腹面右側縁に粗い調整剥離で刃部を作り出す。左側縁にも小さい剥離が連続する。212は腹面左側縁に急斜度剥離が認められる。213・214は片刃端部類である。213は上端を折損した剥片を素材とする。素材剥片の末端部左側を背面側に、右側を腹面側に調整剥離する。214は末端部を腹面側に、左側縁を背面側に調整剥離を施す。215は片刃全周類である。右側縁は背面に、左側縁から打点側にかけては腹面に調整剥離を施し、鋭い刃部を作り出す。末端部側は節理による階段状の剥離となっており、有効な刃部ではない。

③抉入削器（第69図216）

1点出土した。神津島恩馳島群黒曜石を用いる。薄い剥片を素材とし、その背面右側縁に比較的平坦な剥離で抉りを作り出す。抉りの下部には、抉入部の作出に先行する腹面にむけた急斜度の剥離が認められる。

④打製石製品（第69図217・218）

2点出土した。両者とも神津島恩馳島群黒曜石を用いる。217は大形の石鏃状の形態であるが、石鏃ではない可能性が高い。三脚石器と呼ばれる器種に似る。脚部から先端部にかけて、ごく緩やかに内湾し、先端部で外湾する。左の脚部は折損したと考えられるが、折損後に左右から調整剥離が行われており、わずかに折面が残されるのみである。右脚部末端の表面には素材剥片の主要剥離面と考えられる剥離面、

表面には自然面が認められる。また、脚部の突出の先端にみられる平坦な剥離面は素材面である。218は上下両端を折損しており、全体形は不明である。上下の折損後も利用されたらしく、折面にも微細剥離痕が多く残されている。表裏面の中央には比較的広い剥離面を残す。定かではないが、人形や茎に刺をもつ尖頭器の基部であった可能性が指摘できる。

⑤二次加工ある剥片（第70図219）

12点出土した。神津島恩馳島群黒曜石（219）が11点、天城柏峠群黒曜石が1点である。219は菱形で厚い剥片の末端部背面側に調整剥離を施す。また右下側縁には微細剥離痕が認められる。

⑥微細剥離痕ある剥片（第70図220・221）

26点出土した。神津島恩馳島群黒曜石（220・221）が23点、諏訪星ヶ台群黒曜石、未分析の黒曜石、赤玉石がそれぞれ1点である。220は背面に広い1枚の剥離面をもつ、幅広の剥片を用いる。鋭い末端部に微細剥離痕が連続する。221は厚い縦長剥片を素材とし、打面を除くほぼ全ての縁辺に微細剥離痕が認められる。

⑦楔形石器（第70図222～224）

8点出土した。いずれも神津島恩馳島群黒曜石を用いる。うち3点を図化した。222は上辺に自然面、左辺と下辺に折面が残される。右辺では両面に、上辺では表面に、左辺では裏面に剥離がみられる。223は上辺には潰れが認められ、それ以外の辺は鋭い。224は末端部がステップする剥片を素材とする。ステップした末端部から背面にむけて顕著な剥離痕が残される。腹面右下端にも剥離痕が認められ、それと相対する左上端部はわずかに潰れる。

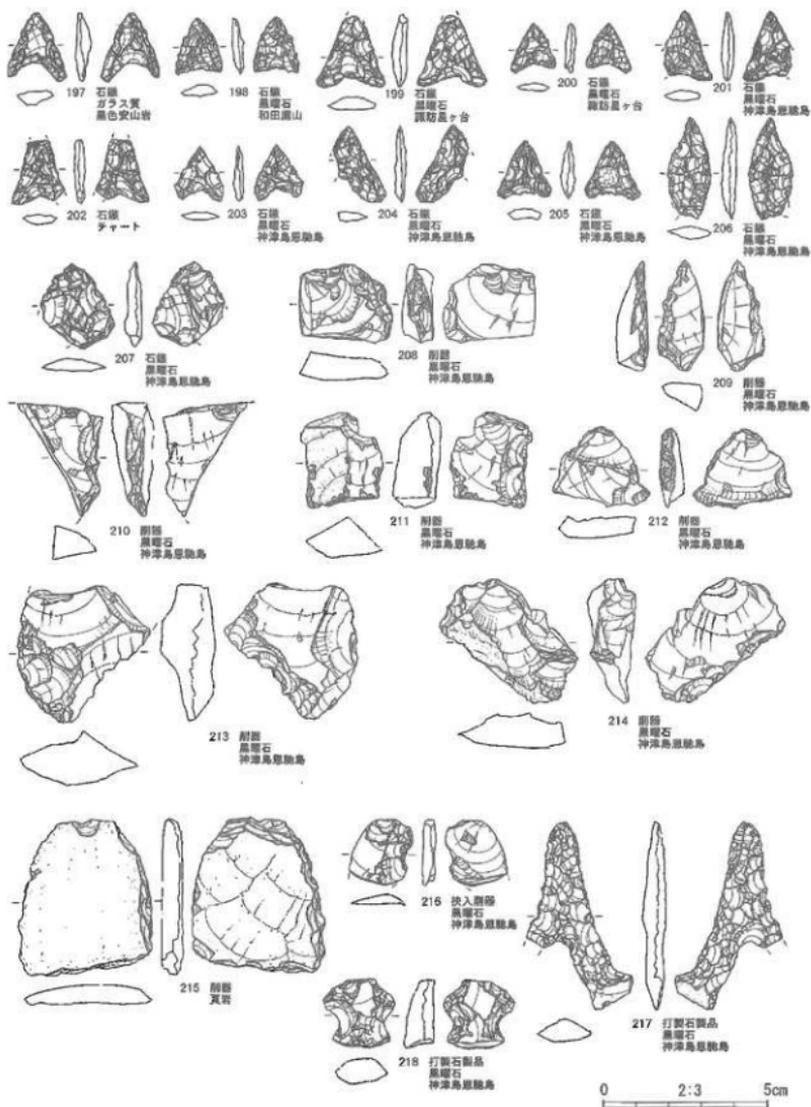
⑧石核（第70・71図225～227）

21点出土した。ホルンフェルス（227）が14点、神津島恩馳島群黒曜石が4点、流紋岩（225）、珪質粘板岩（226）、輝石安山岩がそれぞれ1点である。

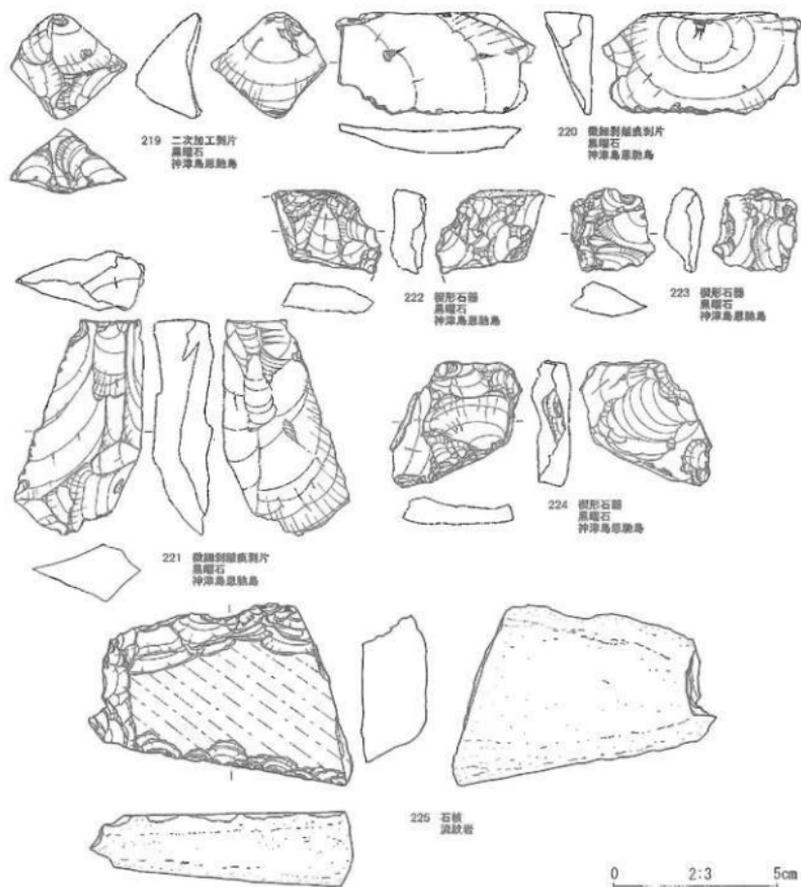
225と226は節理に沿って割れた礫を素材とし、縁辺から節理面にむけて剥片剥離を行う部分類である。225は歪角礫を素材とする。上からの剥離に比べて、下からの剥離は小さく、下縁は削器のように用いられた可能性がある。また、左端にも小さい剥離痕が認められる。226は1辺から平坦な剥片剥離が行われる。石材は無茎凹基微脚類の特徴的な石礫と同質のものであり、この石礫の時期的位置付けを考える上で重要な資料である。227は自然面を打面に据えて、約3/4周で剥片剥離を行う固定幅広I b類である。

⑨礫器（第72図228～231）

7点出土し、4点を図化した。228は片刃円礫類である。1辺を除いて、弧状の刃部が作出される。一部裏面にも調整剥離が認められる。刃部下端は潰れ、あるいは摩滅が生じている。229・230は片刃歪角礫類である。229は左半を折損している。230は下部から右側縁にかけて有効な刃部が作出される。231は片刃角礫類と考えた。表面の風化が激しく、広い面が剥離面か自然面か判別できない。下部から右側縁にかけて有効な刃部が作出される。



第69図 石器集中域2 出土石器(1)



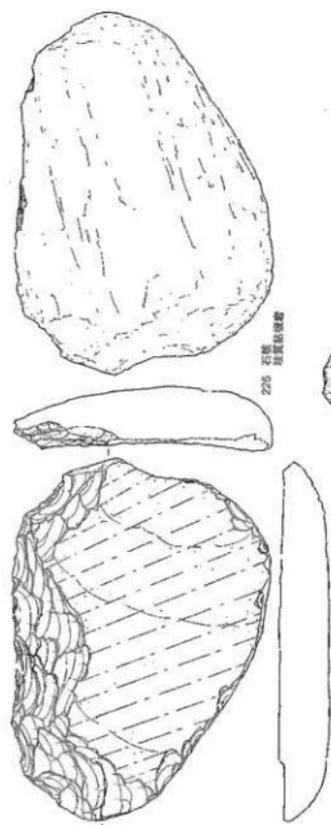
第70図 石器集中域2 出土石器②

⑩ 敷石 (第72図 232・233)

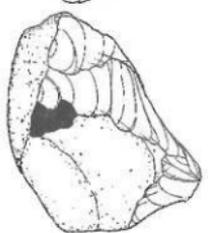
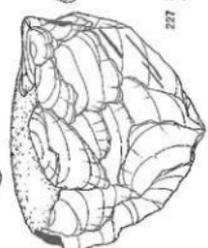
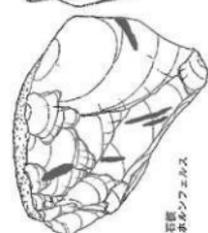
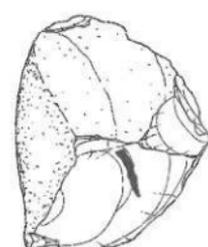
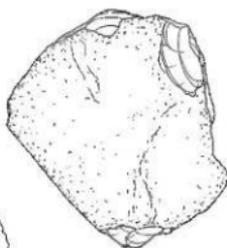
56点出土し、2点を図化した。232は円盤状部分類である。敷打底は端部に残されたものが顕著であるが、側縁や平坦面にも認められる。233は円盤状部分類である。周縁に断続的に敷打底が認められる。

⑪ 稜部磨石 (第72・73図 234～240)

26点出土し、7点を図化した。234～236・238・240は稜部磨面が周辺よりもザラつき、237・239は風化のため表面の状態が明瞭でない。総体として稜部磨面がザラつくもので構成されるといえる。234・235



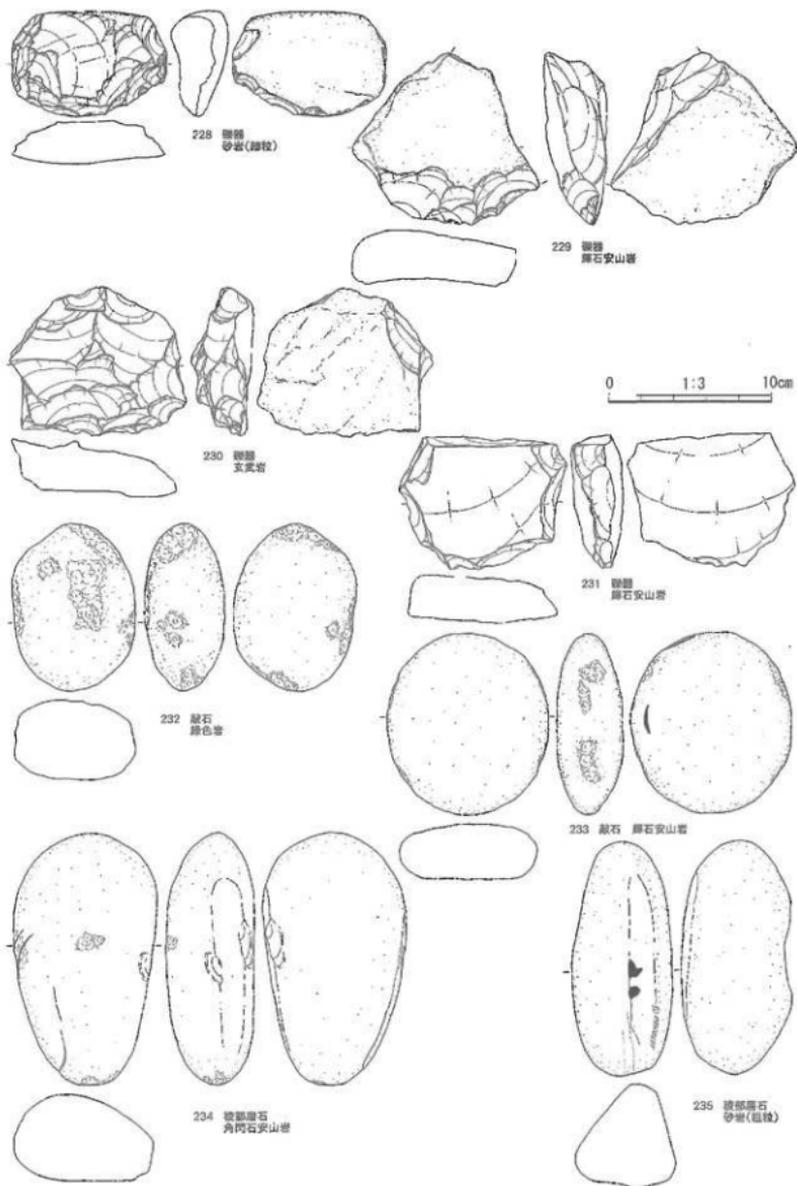
226 石製
短剣状石片



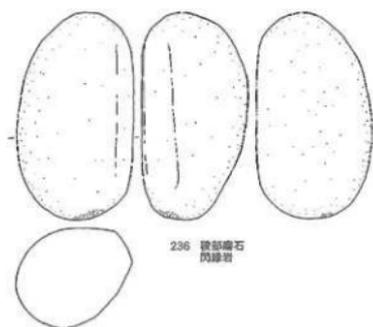
227 石製
多角形エッジ



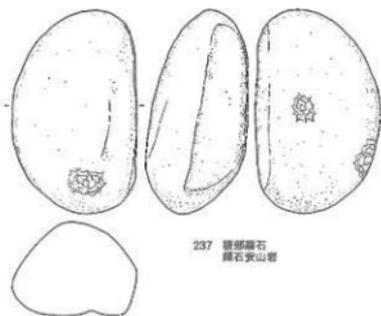
第71図 石器集中域2 出土石器(3)



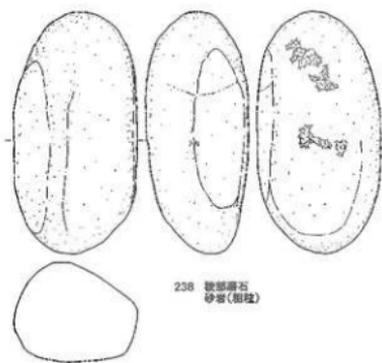
第72図 石器集中域2 出土石器(4)



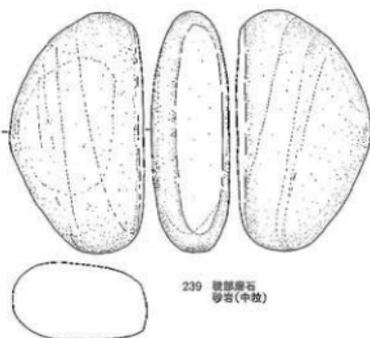
236 磨部磨石
閃綠岩



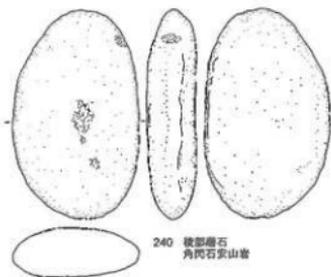
237 磨部磨石
輝石玄山岩



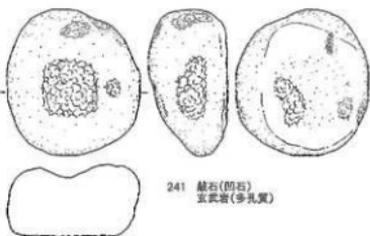
238 磨部磨石
砂岩(粗粒)



239 磨部磨石
砂岩(中粒)



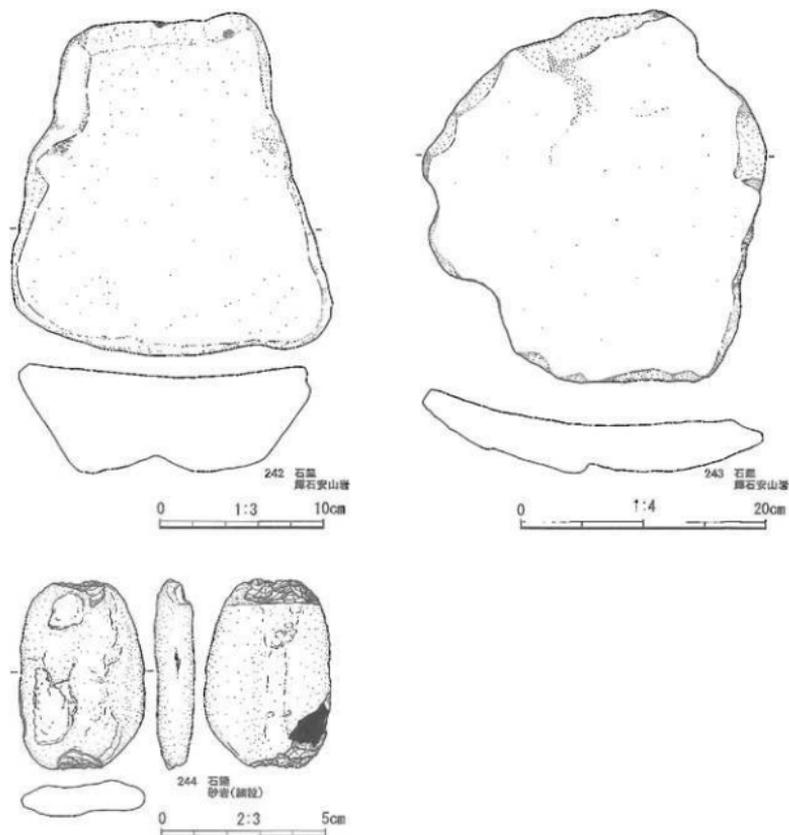
240 磨部磨石
角閃石玄山岩



241 磨石(即石)
玄武岩(多孔質)

0 1:3 10cm

第73圖 石器集中城2 出土石器(5)



第74図 石器集中域2 出土石器(6)

は三角状Ⅱ a類である。両平坦面に磨面をもつ。234は稜部磨面の両側縁から剝離痕が生じる。また、細い方の端部と稜部磨面の反対側の辺にも強い敲打痕が認められる。また、平坦部にあるわずかな稜にも敲打痕が残されている。235は稜部磨面の端に敲打痕が認められる。236・237は三角状Ⅱ c類である。両平坦面に磨面をもつ。236は一端に敲打痕が認められる。237は稜部磨面と接しない端部に敲打痕が残される。238は三角状Ⅱ d類である。両平坦面に磨面が認められ、片面の一部に敲打痕が残される。239は円盤状Ⅰ c類である。一端に敲打痕が残される。240は円盤状Ⅱ d類である。薄い礫を素材とし、稜部磨面は狭小である。一方の平坦面の中央に敲打痕が認められる。もう一方の平坦面には磨面が残され、黒いス状の付着物が認められる。

⑫敲石(凹石) (第73図241)

1点出土した。片面単数類である。凹みが作られる面の裏面は平坦で、磨面の可能性がある。周縁部は厚みもち、敲打によりわずかに凹むところもある。

⑬石皿 (第74図242・243)

6点出土し、2点を図化した。角礫ないし亜角礫を素材とし、両者とも素材の形状を大きく改変せず、平坦な面を使用する。

⑭石錘 (第74図244)

1点出土した。扁平な亜円礫を用いる。両端部に剥離を施して袈りを作り出す打欠石錘である。

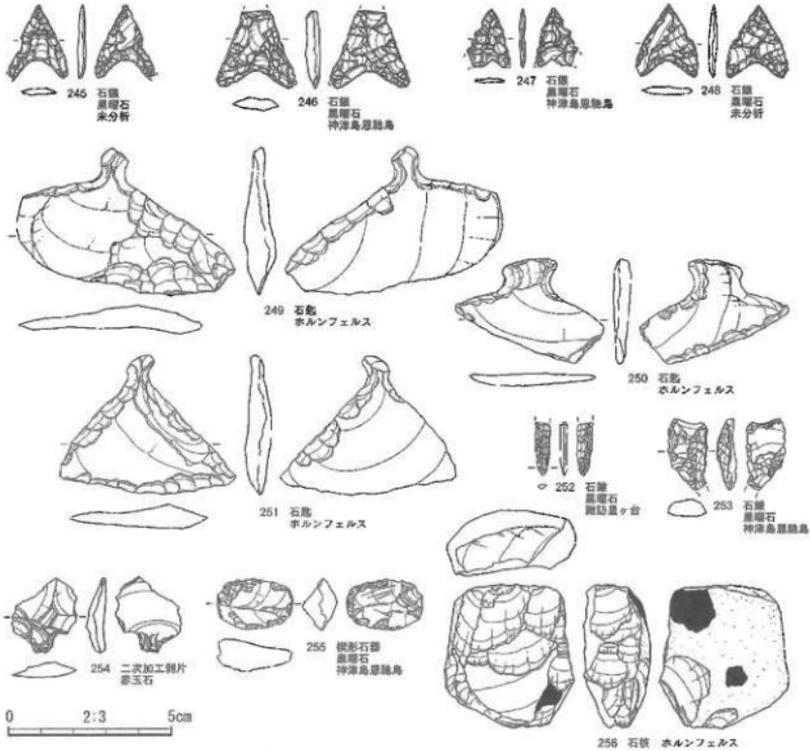
(3) 石器集中域3

調査範囲の北東の隅に位置し、石器集中域4の北西に接する。直径約40mの範囲に分布する。この範囲にはIV群土器(踏碓b・c式、五領ヶ台式など)の出土が多く認められるため、縄文時代前期中葉から中期前葉に位置付けられる。

169点の石器で構成され、うち54点が礫石器類である。剥片石器類は115点(石核を含む)であり、使用石材別に見ると黒曜石が30点、ホルンフェルスが56点である。産地分析を行った黒曜石は13点であり、内訳は神津島恩馳島群が7点、諏訪星ヶ台群が5点、夢科冷山群が1点である。神津島恩馳島群黒曜石を用いた石器は、石鎌が4点、石錘が1点、石核が1点であり、石鎌の割合が多い。諏訪星ヶ台群黒曜石を用いた石器は、石鎌が1点である。ホルンフェルスを用いた石器は、剥片が48点、石匙が3点、二次加工のある剥片が1点、石核が3点、他の石器集中域と比べて製品が多く含まれる。

第20表 石器集中域3 石器組成 (総点数 169点)

石材名	黒曜石(Ob)										文文打	玄武岩(多孔質)	ガラス質黒色安山岩	細粒安山岩	粗粒安山岩	安山岩(多孔質)	安山岩(多孔隙)	デイサイト	細粒流紋岩	メノウ	赤玉石	ホルンフェルス	火山礫凝灰岩	頁岩	珪質頁岩	砂岩凝灰岩	砂岩凝灰岩	計
	SW	HD	TS	TY	KZ	OB	Ba	VBa	GAn	FAn																		
石錘					4	2																						6
石匙																												3
踏碓																												1
石錘																												2
二次加工剥片																												2
数加剥離痕剥片																												3
剥片類																												83
剥片類																												7
視察石器																												4
石核																												4
計	5	1	7	17						8	2	5								2	1	56			5	3	3	115
礫類																												1
礫石																												41
磨礫石																												9
礫石類																												1
石皿																												2
計										6	12	29	3	1	1													54



第75図 石器集中域3 出土石器(1)

①石鏃 (第75図245～248)

6点出土した。神津島恩馳島群黒曜石(246・247)が4点、未分析の黒曜石(245・248)が2点である。245は無茎凹基尖脚Ⅰa類である。裏面に素材面が残存する。246・247は無茎凹基尖脚Ⅰb類である。247は鋸齒縁加工を施そうとしたらしい。248は無茎凹基尖脚Ⅱ類である。表面に素材面が残存する。

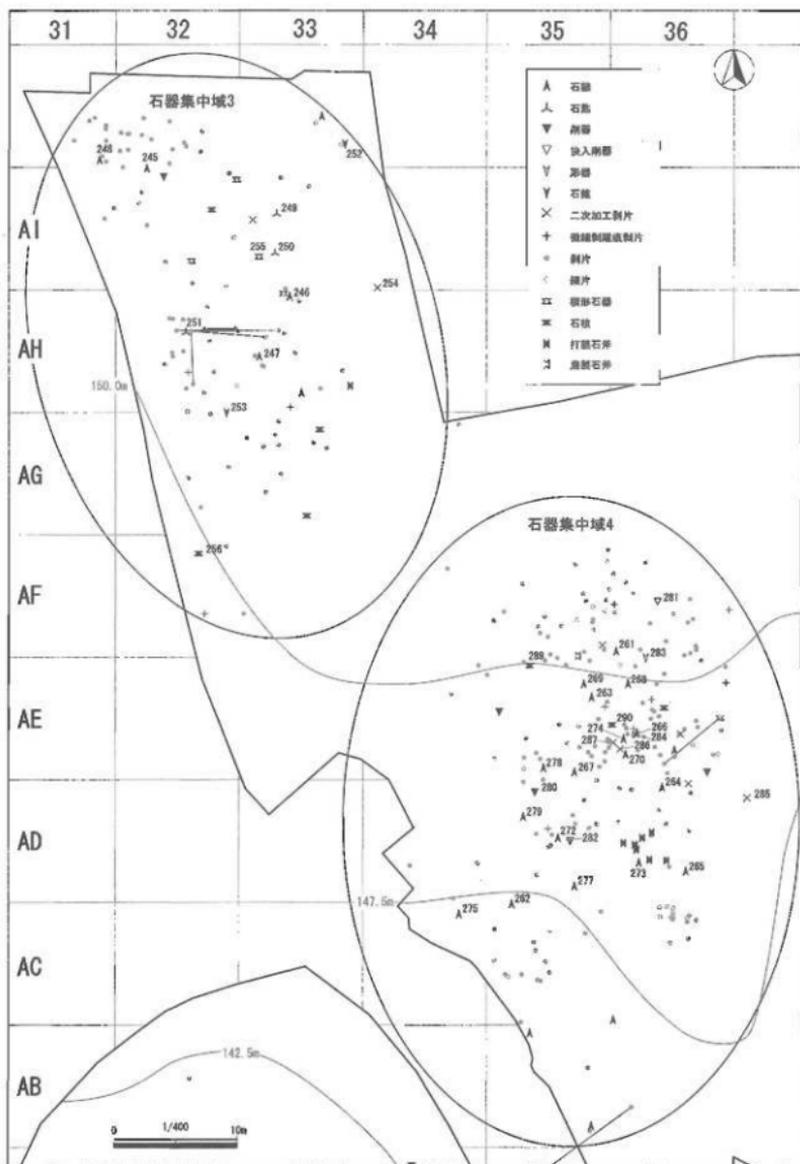
②石匙 (第75図249～251)

3点出土し、いずれも横型でホルンフェルスを用いる。

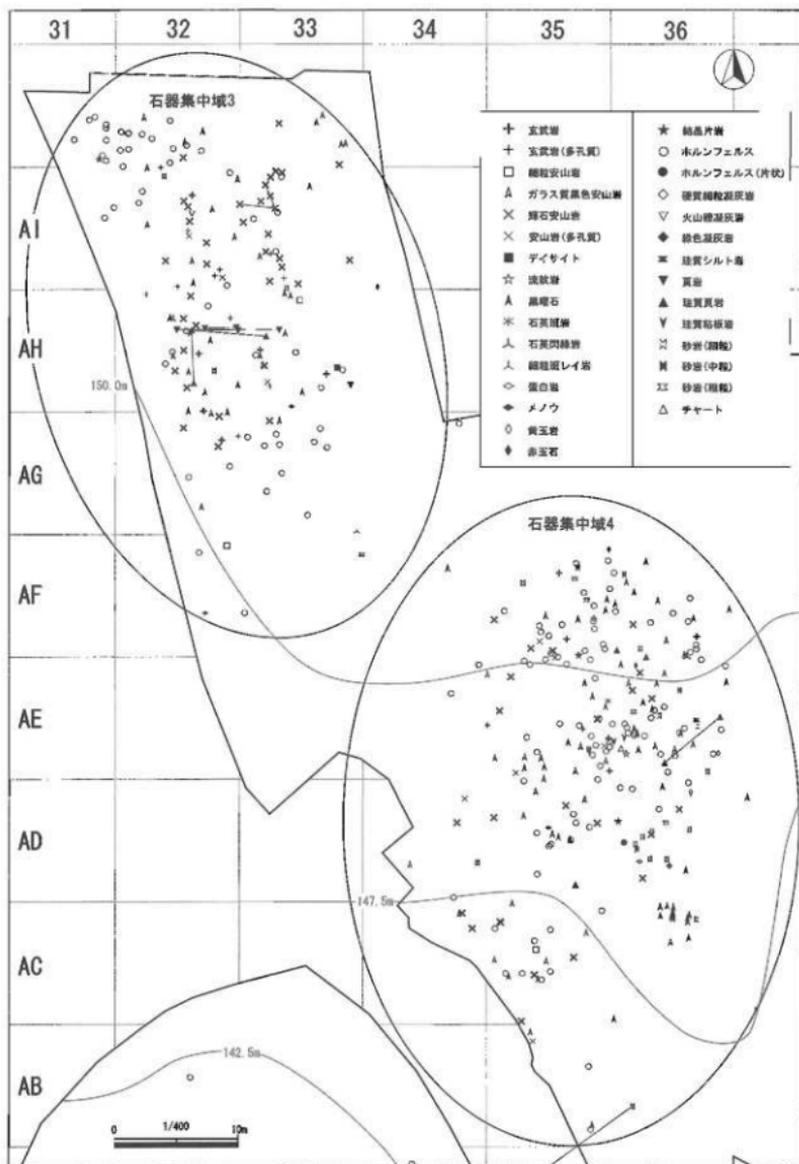
249と250は左右非対称である。249は右下部を片面調整で、右上部を両面調整で成形する。素材が薄いためいずれの調整剥離も平坦剥離となっている。250は大きいつまみをもつ。全体を主に片面調整で成形する。251は左右対称である。つまみとその右の辺を両面調整で、ほかの辺は片面調整で成形する。

③石鏃 (第75図252・253)

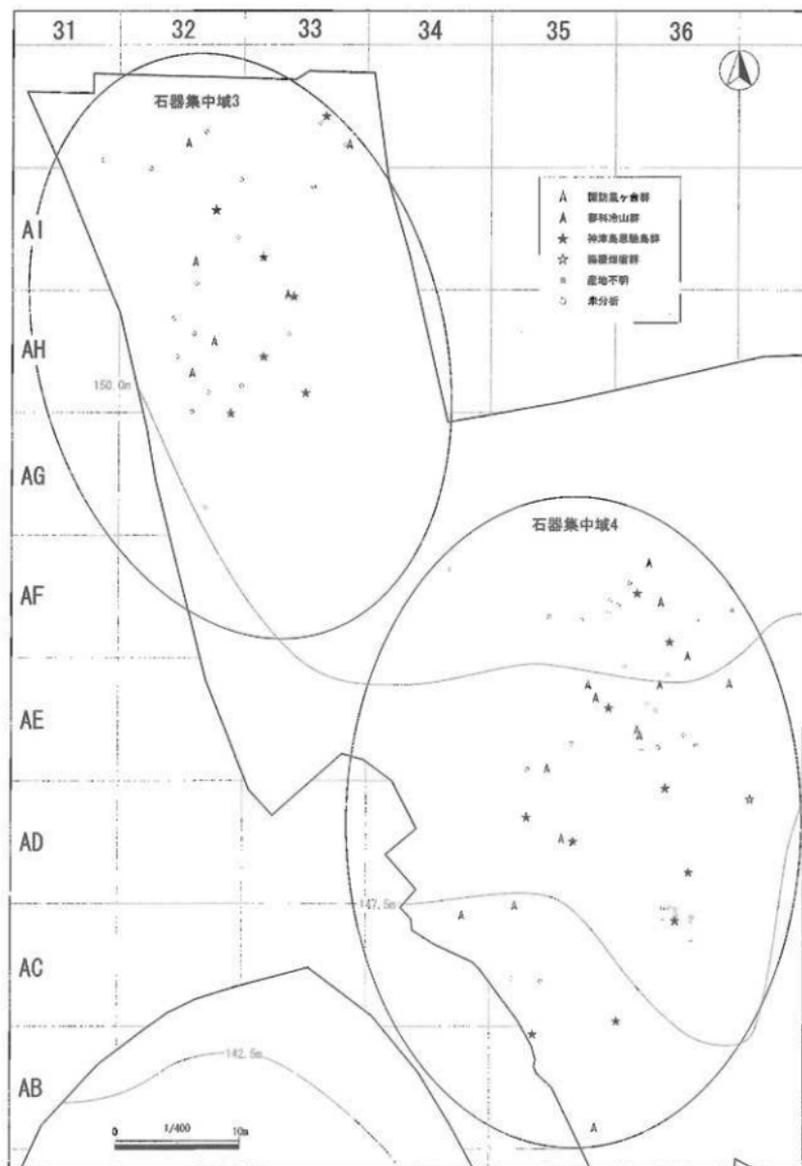
2点出土した。諏訪星ヶ台群(252)、神津島恩馳島群(253)の黒曜石がそれぞれ1点である。両者と



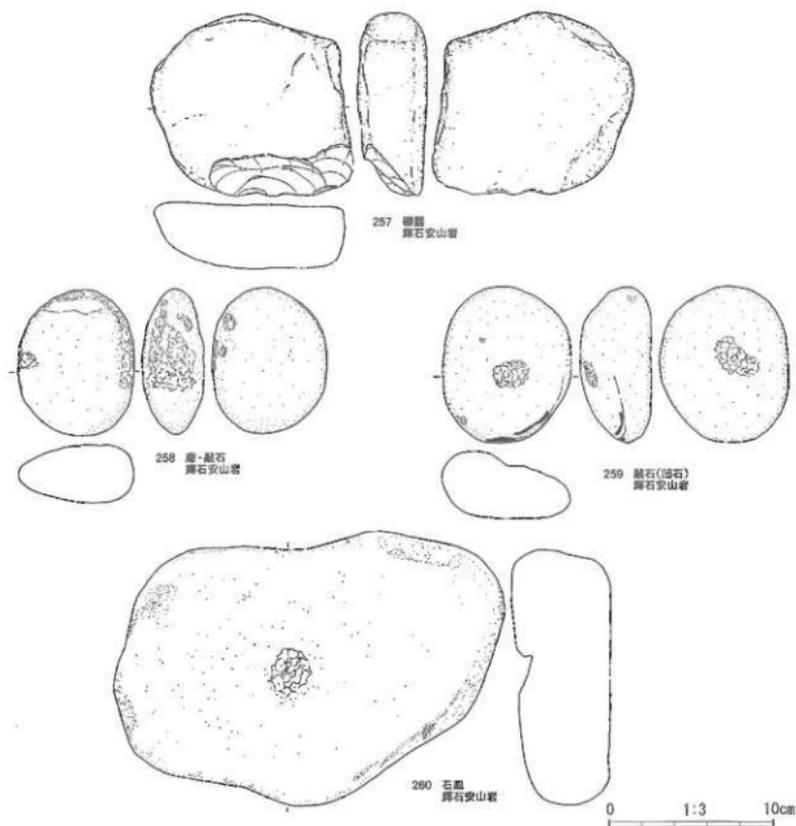
第76圖 石器集中域3・4 刮片石器類 器種別分布



第78図 石器集中域3・4 石材別分布



第79図 石器集中域3・4 黒曜石産地別分布



第80図 石器集中域3 出土石器(2)

も先端部を突出させる。252は基部を折損する。253は刃部と上端を折損する。上半は背面への片面調整で成形され、刃部の周辺から両面調整になる。

④二次加工ある剥片(第75図254)

2点出土した。赤玉石(254)とホルンフェルスがそれぞれ1点である。254は鋭い末端部をもつ不定型な剥片を素材とする。打点周辺を、左側縁で背面側に、右側縁で腹面側に抉るように調整し、突出を作り出す。ただし、突出部の端部には背面から調整剥離が行われ、尖らないため、その用途は不明である。末端部の鋭い縁には微細剥離痕が認められることから、この縁辺を使用する際に打点側の突出がつまみとして機能した可能性もある。

⑤楔形石器 (第75図255)

4点出土した。いずれも黒曜石を用い、神津島恩馳島群(255)・夢科冷山群・諏訪星ヶ台群・未分析のものがそれぞれ1点ずつである。255は、周縁の小さい剥離に比べて、中央に残された比較的広い剥離面は曇りが強く、古くに生じた剥離と考えられる。

⑥石核 (第75図256)

4点出土した。ホルンフェルス(256)が3点、神津島恩馳島群黒曜石が1点である。256は固定長形I b類である。先行する剥離面を打面にして剥片剥離を行う。作業面の裏に自然面を残す。

⑦礫器 (第80図257)

1点出土した。片刃垂角礫類である。粗い剥離で刃部を作り出す。

⑧磨-敲石 (第80図258)

9点出土し、1点を図化した。円盤状平坦部II類である。片面に磨面を有し、周縁の半周以上に敲打痕が認められる。

⑨敲石(凹石) (第80図259)

1点出土した。両面単数類である。平坦面の中央部付近に敲打により凹みが生ずる。

⑩石皿 (第80図260)

2点出土し、1点を図化した。両面に磨面の可能性がある平坦面をもつ。表面の中央には凹みがあるが、その最深部は鋭く、敲打によって作り出された凹みであるかは明らかでない。

(4)石器集中域4

調査範囲の北東の隅に位置し、石器集中域3の南東に接する。直径約45mの範囲に分布する。この範囲にはI群3類土器(押型文具方向密接施文)・II群1類土器(清水柳E類)の出土が多く認められるため、縄文時代早期中葉～後葉に位置付けられる。

248点の石器で構成され、うち37点が礫石器類である。剥片石器類は211点で、使用石材はホルンフェルスが91点、黒曜石が61点、ガラス質黒色安山岩が18点、砂岩(細粒)が9点、輝石安山岩が6点、珪質頁岩が5点、珪質粘板岩が3点などとなっており、黒曜石とホルンフェルス以外の石材を用いた製品が多く見られる点で他の石器集中域と異なっている。産地分析を行った黒曜石は26点であり、諏訪星ヶ台群が11点、神津島恩馳島群が10点、夢科冷山群が3点、箱根畑宿群が1点である。黒曜石全体として石礫が製品の主たるもので、残りのほとんどが剥片類である。石核や楔形石器は含まれていない。

①石鎌 (第81図261～279)

21点出土した。諏訪星ヶ台群黒曜石(262・263・269・271・272・275・278)が7点、神津島恩馳島群黒曜石(264・265・279)が5点、ガラス質黒色安山岩(267・268・276)が3点、珪質頁岩(261・277)が2点、未分析の黒曜石(266)、流紋岩(270)、蛋白岩(273)、珪質粘板岩(274)がそれぞれ1点である。

261は有蓋凹基類である。先端部と基部端を折損する。262～268は無蓋凹基尖脚I b類である。262の表面には筋理面が認められる。263は両面に素材面が残されている。264は片方の脚が外側にむかって飛び出す。266は側縁が粗い鋸歯状である。鋸歯縁の作出は全て表面側への剥離によってなされる。裏面に

素材面が残されている。267は先端部を細く突出させる。269・270は無茎凹基尖脚Ⅱ類である。270は抉りの奥を平坦にする。また、側縁は極小さい鋸歯状に加工している。271・272は無茎凹基円脚類である。273は無茎凹基平脚類である。右側縁を粗い鋸歯縁で、左側縁を細かい鋸歯縁で加工する。他には用いられない石材を利用している。274は無茎凹基微脚類である。両面に素材面を残し、周縁を加工して成形している。身部から脚部まで側縁がほぼ平行する。275～277は無茎平基類である。278・279は折損により基部が失われているため、尖頭器の可能性も否定できない。278には細かい、279には粗い鋸歯縁加工がなされる。

② 削器 (第81図280)

3点出土した。ガラス質黒色安山岩(280)、輝石安山岩、砂岩(細粒)がそれぞれ1点ずつである。280は片刃側縁類である。末端部が階段状になる剥片を素材として、両側縁を急斜度剥離で調整する。

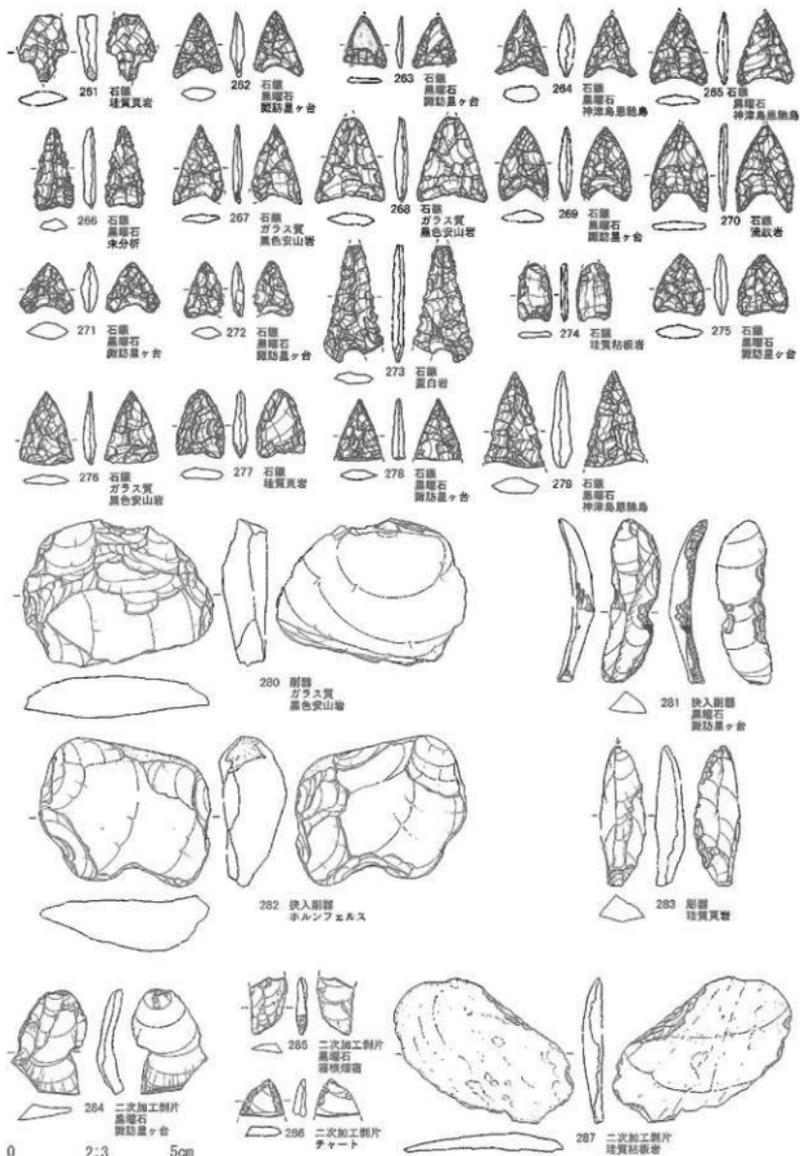
③ 抉入削器 (第81図281・282)

2点出土した。諏訪星ヶ台群黒曜石(281)、ホルンフェルス(282)がそれぞれ1点である。

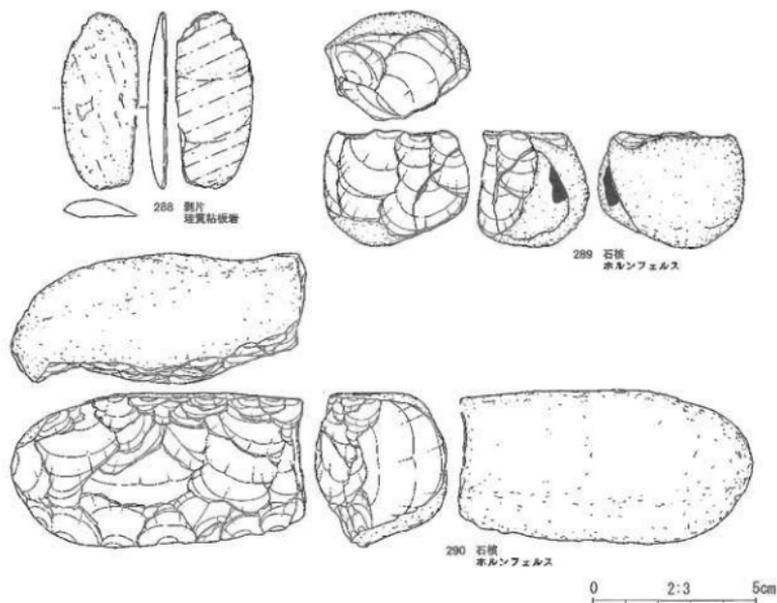
281は石刃を素材とし、右側縁全体を急斜度剥離で調整する。打点側から末端部側へ弧を描くように成形され、中央に抉りを作り出す。抉り部には腹面側にも平坦な剥離痕が認められる。左側縁では腹面への平坦剥離による調整が行われ、背面の一部にも調整剥離が認められる。282は厚い幅広の剥片を素材とし、主に腹面側に調整剥離を施す。末端部に深く抉る剥離を施す。

第21表 石器集中4 石器組成 (総点数 248点)

石器名	黒曜石(Obs)																			計									
	SW	TS	HN																										
石鏃	7	5																		21									
側縁																				3									
抉入削器	1																			2									
彫器																				1									
二次加工剥片	1		1		1															1									
微細側縁剥片	2		2	1	1															8									
剥片		3	2		15	1	14	3	4		1		1	1	2	1	84	1	1	1	1	8	2	145					
削片																									17	19			
楔形石器																										1			
石核																										3			
磨製石斧																										1			
計	11	3	10	1	1	35	1	18	1	6		1	1	1	1	2	2	2	2	91	1	1	1	5	3	9	2	1	211
磨石																											3		
磨石																											26		
磨石																											1		
磨石																											1		
磨石																											3		
磨石																											1		
計								4	2			18	6			1											37		



第81図 石器集中域4 出土石器(1)



第82図 石器集中域4 出土石器(2)

④彫器 (第81図283)

1点出土した。珪質頁岩を用いる。石刃を素材とし、その末端部から彫刀面を作出する剥離が腹面に施される。彫刀面をなす剥離の後に腹面打点側に数枚の剥離がなされるが、彫刀面の作出を企図したものであるかは明らかでない。右側縁には背面に向けて調整剥離が行われる。

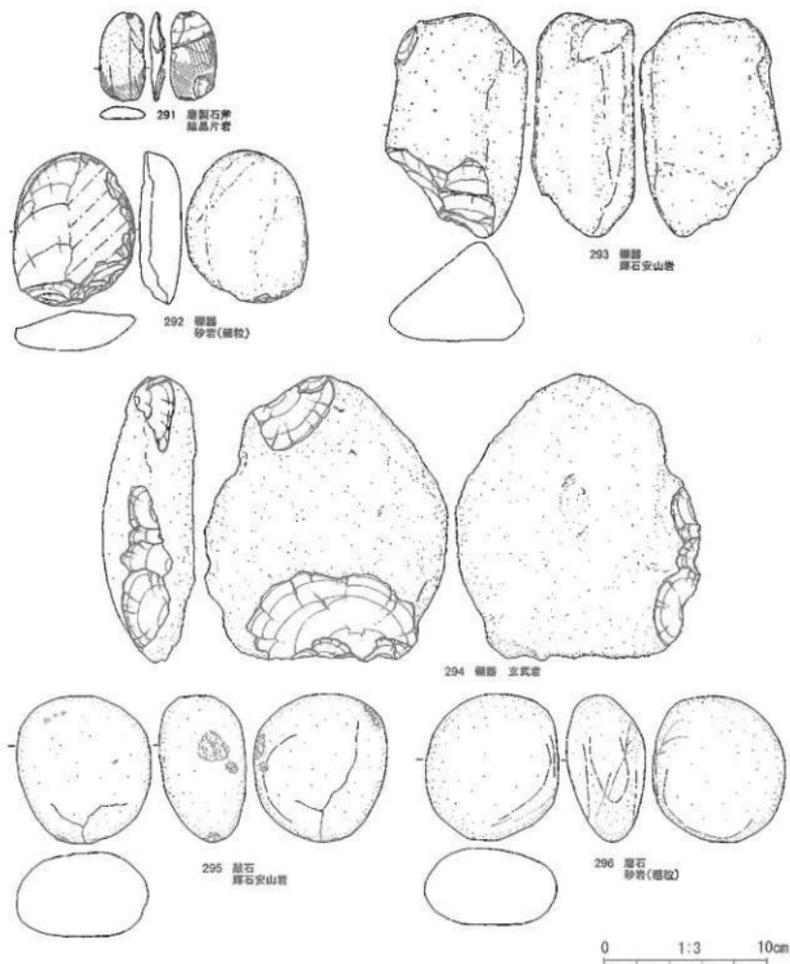
⑤二次加工ある剥片 (第81図284～287)

7点出土した。ホルンフェルスが2点、諏訪屋ヶ台群黒曜石 (284)、箱根畑宿群黒曜石 (285)、未分折の黒曜石、チャート (286)、珪質粘板岩 (287) がそれぞれ1点である。

284は左側縁上半に急斜度剥離の小さい調整が認められる。右側縁上半の鋭い縁辺には微細剥離痕が認められ、右側縁中央には数枚の小さい剥離が不正形のわずかな抉りを作り出す。285は石刃の末端部を斜めに横断する急斜度剥離が認められる。打点側は折損する。286は背面に向けた急斜度剥離で左右側縁を調整し、上端が尖る。大部分を折損していると考えられ、全体形は不明である。287は背面全体が自然面で覆われた、節理面で剥離した剥片を素材とする。長軸に平行する一側縁で両面に調整剥離を加え、反対の側縁には微細剥離痕が認められる。この状態で、使用されていた可能性は高いが、無茎凹基微脚類の石鏃と同じ石材を用いている点を考えれば、石鏃の素材である可能性もある。

⑥剥片 (第82図288)

1点を図化した。珪質粘板岩を用いる。287と同じく背面全体が自然面で覆われ、節理面に沿って剥離している。無茎凹基微脚類の石鏃と同じ石材を用いており、その素材となるものと考えられる。



第83図 石器集中域4 出土石器(3)

⑦石核 (第82図 289・290)

3点出土し、2点を図化した。いずれもホルンフェルスの亜円礫を用いており、自然面が残されている。289は打面と作業面を入れ替えながら剥片剥離を進行させた可能性があることから交互一端類とした。290は幅広い作業面に対して、自然面を打面に、上下から剥離を行う固定幅広I a類である。

⑧磨製石斧 (第83図291)

1点出土した。小さい楕円形の礫を素材とする。片面を調整剥離で成形した後に、両面に研磨を施す。両側縁の刃部周辺には研磨によって平坦面を作り出し、角を有する。

⑨礫器 (第83図292～294)

3点出土した。292は片刃円礫類である。節理に沿って剥離した礫の剥離面側に調整剥離を施す。比較的鋭い右辺に調整剥離が顕著である。293・294は片刃垂角礫類である。293は三角柱形の礫の端部に粗い調整剥離を施す。三角形の1つの稜には平坦面があり、後部磨石であった可能性があるが、風化が激しく痕跡が不明瞭である。294は大型礫の表裏に粗い調整剥離を施す。

⑩敲石 (第83図295)

26点出土し、1点を図化した。295は円盤状部分類である。端部に敲打痕が残される。

⑪磨石 (第83図296)

1点出土した。円盤状平坦部類である。両面に平坦な磨面をもつ。側縁にもザラつきのある磨面をもつ後部磨石である可能性があるが、痕跡が不明瞭である。

3 遺構外出土の石器

遺構外で出土した石器について記載する。

(1)石鏃

いずれの形態も石器集中域外で出土する傾向が強い。

①有茎凸基類 (第84図297)

1点出土した。流紋岩を用いる。先端部にはわずかに平坦な剥離面が残されるが、表面右側縁の剥離および左上半に残された広い剥離は平坦面より後に行われた剥離である。その平坦面が折面であったと考えれば、もともとはより長い身部を有していたものがリダクションによって縮小したと考えることができる。極めて小さいため石鏃としたが、基部形態は有舌尖頭器に似る。

②有茎凹基類 (第84図298～309)

12点出土した。諏訪星ヶ台群黒曜石(298～307)が10点、天城柏峠群黒曜石(308)、ホルンフェルス(309)がそれぞれ1点である。使用石材が諏訪星ヶ台群黒曜石に偏り、無茎石鏃では多数使用される神津島恩馳島群黒曜石を一切用いないことから、信州との密接な結びつきが想定できる。東海地方では後期から晩期に認められる形態で、これらについてもその時期に位置付けることができる。石器集中域からは、珪質頁岩を用いた1点(第81図261)が石器集中域4から出土しているのみで、共存の可能性は低い。

298～300・308はかえしから先端部まで緩やかに外湾するのに対して、その他のものは身部に屈曲を有する飛行機鏃である。飛行機鏃の中でも屈曲の強さに幅があり、屈曲部が突出するもの(307)やかえしより屈曲部が幅広になるもの(309)などがある。時期差を反映したものである可能性があるが詳細は不明である。301は明確な鋸歯縁になっており、298と306もわずかに鋸歯状の刃部を有している。茎部が折れているものが多く、完存しているのは308だけである。298の表面先端部から伸びる剥離は衝撃剥離だろう。301は裏面先端部寄り左半に、303は裏面先端部寄り中央に、素材面と考えられる剥離面が残されているが、全体として素材面が残される割合は低い。299は表面左側縁基部寄りがわずかに抉れるが、これは折れによるものである。

③無茎凹基尖脚 I a 類 (第84図310~316)

脚部の長さが全長の1/4以上の長脚のものである。8点出土し、7点を図化した。諏訪星ヶ台群黒曜石(310~314)が6点、神津島恩馳島群黒曜石(315)、産地不明の黒曜石(316)がそれぞれ1点である。黒曜石が大多数を占め、特に諏訪星ヶ台群黒曜石が多い。

312・313・315が脚部を、314が脚部と先端部を大きく折損する。310は台形状の袈りを有し、細く厚みのある脚部をもつ点で特徴的である。314にも袈りの中に屈曲が認められる。310の裏面には素材面が残されているが、他のものには認められない。

④無茎凹基尖脚 I b 類 (第84・85図317~363)

脚部の長さが全長の1/4以下のものである。60点出土し、47点を図化した。分類した中で最も数が多い。神津島恩馳島群黒曜石(332~347)が20点、諏訪星ヶ台群黒曜石(318~326)が14点、天城峠群黒曜石(328~331)が6点、産地不明の黒曜石(348~350)、ガラス質黒色安山岩(351~354)がそれぞれ4点、ホルンフェルス(355・356)、チャート(358~360)、珪質頁岩(361~363)がそれぞれ3点、和田土屋橋北群黒曜石(317)、蓼科冷山群黒曜石(327)、流紋岩(357)がそれぞれ1点である。神津島恩馳島群黒曜石が多く、諏訪星ヶ台群がこれに次ぐ。その他にも様々な石材の使用が認められる。

325・331・333・347・354・360は表面のみに、320・336・337・338・340・348・352・358・362は表面のみに、317・330・332・341・343・344・363は両面に、素材面が残されている。

317は脚部を折損しており、I類aである可能性もある。318と319は先端部付近で側縁が屈曲する。320は表面側に膨らみをもち、調整剥離の主体は表面側への比較的急斜度のものである。321には大きい夾雑物が含まれる。323は幅が狭く、深い袈りをもつ。326は先端部に加えて基部側にも広く折面が認められる。327は円弧を描く袈りを有し、細いかえしを突出させる。328は側縁部を内湾させる。袈りは外湾し最深部は尖る。329は表面側に膨らみをもつ。331には丁寧な鋸歯線加工が認められる。332は先端部寄り最も厚くなるが、それは素材の形状を反映してのものである。左側縁先端部付近で側縁が屈曲する。338は袈り部分に折面を有する。341は表面先端部に衝撃剥離と考えられる剥離が認められるが、左側縁からの剥離は衝撃剥離の後に行われており、使用した矢尻の修復を行った可能性がある。342は袈り部に折面が認められる。344は両脚部を折損しており、詳細は不明であるが、わずかな袈りが認められることからここに分類した。346の表面に認められる広い剥離は先端部の折れに伴うもので、衝撃剥離の可能性が高い。347の表面先端部にも衝撃剥離が認められる。349は先端部をわずかに突出させる。351の裏面先端部の剥離は衝撃剥離の可能性が高い。355・356は表面の風化が激しく、剥離面の判読が困難なところがある。357は先端部をわずかに突出させる。358は黒褐色半透明の、359はオリーブ灰色の、360は白色半透明に黒色の縞が入るチャートを用いる。361は先端部付近で側縁が屈曲する。362も左側縁のみに屈曲をもつ。

⑤無茎凹基尖脚 II 類 (第85図364~371)

最大幅が脚部の末端よりも先端部寄りにあるものである。11点出土し8点を図化した。諏訪星ヶ台群黒曜石(364~367)が5点、神津島恩馳島群黒曜石(368・369)が3点、和田山群黒曜石、ホルンフェルス(370)、流紋岩(371)がそれぞれ1点である。黒曜石が組成の多くを占める。

364は刃部に丁寧な鋸歯線加工が施される。365は裏面右下に素材面が残る。366は先端部付近で側縁が内湾し、先端部が突出する。裏面先端部には小さい衝撃剥離が認められる。367の表面左側縁上部には折面が認められる。368は両面に素材面が残存する。369の両脚部の外側側縁には素材面と考えられる平坦な剥離面が残されている。除去しきれなかったと考えられるこの剥離面が、II類の形状となる要因となっているため、その他のII類のものと性格が異なる。370は表面の風化が激しく、剥離面の判読が困難なところがある。先端部付近で側縁が屈曲する。371は左右の脚の長さが異なる。

⑥無蓋凹基円脚類 (第85・86図372～387)

脚部に角がなく、丸く作られているものである。19点出土し、16点図化した。神津島恩馳島群黒曜石(377～382)が6点、諏訪星ヶ台群黒曜石(372～375)が4点、天城柏峠群黒曜石(376)が3点、未分析の黒曜石(383)、ホルンフェルス(384・385)がそれぞれ2点、頁岩(赤色)(386)、凝灰岩(細粒)(387)がそれぞれ1点である。他の形態に比べて天城柏峠群黒曜石の利用が多く、黒曜石が組成の大部分を占める。また、頁岩(赤色)や凝灰岩(細粒)といった他の形態には見られない石材を利用する点に特徴がある。

384と387は表面の風化が激しく、剥離面の判読が困難なところがある。

377・382・383は表面のみに、374・375は裏面のみに、380は両面に素材面を残す。

372は表面右側縁中央に折面を有するが、裏面では折面を打面にした調整剥離が行われている。そこで行われた剥離のうち1つは右側縁まで達する長いものである。その剥離の後に表面左側縁の剥離が行われている。374には表面左側縁から右側縁に達する長い剥離が認められる。断面は表面側に張り出す三角形状である。375は表面に大きい衝撃剥離が認められる。376には夾雑物が含まれる。377は先端部付近で側縁が緩やかに屈曲する。378は側縁がわずかに内湾し、先端部が突出する。379は裏面の挟り部付近に削痕状の痕跡が認められる。その性格は明らかではないが、着柄に関わる痕跡の可能性がある。380は表面側の素材面が素材剥片の主要剥離面である。381は先端部が尖らない。折れが生じた後、補修が行われたものと考えられるが、石鏝でない可能性もある。左脚部末端には折面が残されており、その折れの後に行われた剥離は1ヶ所のみである。382は右側縁から右脚部にかけてを折れで失う。385は鋸歯状の側縁を有する。

⑦無蓋凹基平脚類 (第86図388～393)

脚部に平坦部をもつもので、いわゆる鋸形鏝である。縄文時代早期に位置付けられるものが含まれる。7点出土し、6点を図化した。神津島恩馳島群黒曜石(389・390)、諏訪星ヶ台群黒曜石(388)がそれぞれ2点、産地不明の黒曜石(391)、チャート(392)、珪質頁岩(393)が1点である。

388・390～392については平基のものにU字型の挟りを入れたような形であるのに対して、389と393は脚部の平坦面が傾斜する。388は裏面に素材面を残す。392は衝撃剥離により表面左側縁上半を失う。側縁は内湾しており、もとは先端部を突出させていたと考えられる。393はわずかに鋸歯状に側縁が加工される。

⑧無蓋凹基微脚類 (第86図394～406)

身上半に最大幅をもつ、いわゆる五角形鏝である。全出土資料のほとんどが珪質粘板岩を用いる。基部を挟らない五角形鏝についても、石材利用や形態が類似するためここに分類した。14点出土しており、13点を図化した。全て珪質粘板岩製である。

珪質粘板岩を用いた五角形鏝は静岡県東部において多く出土しているが、時期的な位置付けは明らかではない。節理に沿った扁平な剥片を素材とし、その周辺部を加工して成形するため、完全に素材面が残されている。この五角形鏝を作るための素材を供給した可能性がある珪質粘板岩の石核が石器集中域2から、剥片が石器集中域3から出土している。ただし、石器集中域に含まれる割合は、その他の石鏝よりも少ないことから、無蓋凹基微脚類石鏝が石器集中域に伴う可能性は低いと言える。

399・400・405は側縁を鋸歯状に調整するが、399と400は405と比べて作りが粗い。399～404は最大幅に対して基部幅が大きいものから小さいものへと順に配列している。つまり、後になるほど基部の大きさが小さくなる。基部に挟りをもたないものが後にまとまる傾向があるが、例外もある。基部の挟りの有無が時期差を示すものであるかは明らかでない。405と406は基部を折損する。405には挟りを作り出す調整剥離は認められない。406は加工も粗く未製品と考えられる。

⑨無茎平基類 (第86・87図407～422)

基部が平坦に近いものである。形状や大きさは様々である。18点中16点を図化した。諏訪星ヶ台群黒曜石(408～410)、ガラス質黒色安山岩(415～418)がそれぞれ4点、神津島恩馳島群黒曜石(412・413)が3点、流紋岩(420・421)が2点、和田鷹山群黒曜石(407)、天城柏峠群黒曜石(411)、産地不明の黒曜石(414)、ホルンフェルス(419)、珪質頁岩(422)がそれぞれ1点である。非黒曜石の利用が比較的多く、特にガラス質黒色安山岩の使用が目立つ。

412～414・416・419は裏面のみに、420は両面に素材面が残されている。

407は裏面に大きい衝撃剥離が認められる。411は基部に折面が認められ、もともと平基であったかは分からない。413は表面に大きい衝撃剥離が認められる。415は基部を抉るような剥離が1ヶ所認められるが、中央からずれており、抉りを作り出そうとしたものであるかは不明である。421は鋸歯縁加工が施される。

⑩未製品 (第87図423～425)

未製品のため基部形態が不明のものである。423・424は諏訪星ヶ台群黒曜石、425は神津島恩馳島群黒曜石を用いる。

423は両面とも加工の一部に止まり、両面に素材面が残される。424は両面に調整剥離が施されるが、薄い円盤状で石鏃としての形をなさない。石鏃ではない可能性もある。425は先端部を折損した石鏃とも考えられるが、円盤状の石器であった可能性もある。基部にも折れが生じており、形態は明らかでない。表面に素材面が残存する。

⑪折損 (第87図426～430)

折損によって基部が失われ、基部形態が不明のものである。尖頭器が含まれている可能性がある。426～428が諏訪星ヶ台群黒曜石、429が神津島恩馳島群黒曜石、430がホルンフェルスを用いる。

426は表面に折面からの調整剥離が認められる。429は右側縁が彫器状の折れによって失われている。

(2)石匙

横型のもが主体である。砂岩を利用した、調整が粗雑なものも各分類に認められる。

①横型左右非対称 (第87・88図431～439)

9点出土した。ホルンフェルス(434～438)が5点、ガラス質黒色安山岩(432・433)が2点、諏訪星ヶ台群黒曜石(431)、砂岩(中粒)(439)がそれぞれ1点である。

431はつまみを抉らない。つまみと対向する辺以外は両面調整である。裏面の素材面は風化が顕著であり、二重パティナの可能性がある。432は主要な2辺は異なる面への片面調整で成形される。433はつまみと対向する辺を片面調整で、その辺と尖頭部で交わる辺を両面調整で成形する。素材剥片の厚みがある側に尖頭部を作り出し、薄い側には加工を行わない。434は片面調整で刃部を作り出す。435は欠損している部分が多い。残存部から判断すると、つまみと対向する辺は片面調整で、それ以外の辺は両面調整で成形するらしい。436～438はつまみ部周辺以外の加工は乏しい。439はつまみと対向する辺を片面調整で加工し、両面調整で尖頭部を作り出す。また、尖頭部の反対側には円弧を描く分厚い刃部を有する部分があり、搔器のような機能をもっていた可能性がある。

②横型左右対称 (第88図440～444)

5点出土した。ホルンフェルス(440～443)が4点、砂岩(細粒)(444)が1点である。

440はつまみと対向する辺を両面調整し、刃部を作り出す。刃部とつまみ周辺以外の加工は乏しい。441・442は片面調整で刃部を作り出す。442は節理に沿って割れが生じている。443は体部を大きく折損してお

り詳細は不明である。444は片面が自然面で覆われた円形の剥片を素材とし、両面調整で大きいつまみを作り出している。

③縦型（第89図445・446）

2点出土した。ホルンフェルス（445）、砂岩（細粒）（446）がそれぞれ1点である。

445は下部が折損によって失われている。縦長剥片を素材とし、つまみを作り出しただけの、加工が乏しいものであったと考えられる。446は鋭い尖頭部を伴う刃部を片面調整で作り返す。反対の辺は両面調整で厚みがある。大きいつまみをもち、扱いは緩い。

（3）削器

片面への加工で刃部を作り出すものが大部分を占める。神津島恩馳島群黒曜石を利用したものは特に石器集中域1と2に多く含まれる。遺構外出土のものの中には砂岩を用いたものが多く含まれており、これらの利用石材は石斧と共通することから、石斧製作に伴う剥片剥離の中で生じた剥片を利用した可能性がある。

①両刃側縁類（第89図447～449）

5点出土した。神津島恩馳島群黒曜石（447）、ホルンフェルス（448）がそれぞれ2点、礫岩（449）が1点である。

447は薄い剥片の両側縁を調整剥離し、打点側に収斂する。背面末端部側左端には比較的急斜度の剥離が3枚連続する。448と449は背面が自然面の剥片を素材とする。448は腹面左側縁に大規模な調整剥離が認められる。末端部には腹面にむけた比較的急斜度の剥離がいくらかみられる。449は5mm程度の比較的小さい均質な礫が固結した礫岩を用いる。打製石斧の可能性もあるが、調整が1側縁に限定され、鋭い刃縁を有することから削器とした。末端部にむけて薄くなる、薄手の剥片を素材とする。

②両刃端部類（第90図450・451）

5点出土した。頁岩が3点、ホルンフェルス（450）、砂岩（細粒）（451）がそれぞれ1点である。

450は厚い剥片を素材とする。表面の風化が激しく剥離面の判読が困難などところがある。451は刃部の一端が筋理に沿って折れる。調整剥離は浅い。削器以外の器種であった可能性もなくなはないが明らかでない。

③両刃全周類（第90図452）

1点出土した。天城柏峠群黒曜石を用いる。両面が丁寧に調整され、深く入り込む長い剥離も認められる。折れのため全貌が明らかでなく、石匙などの他の器種であった可能性もある。

④両刃石核素材類（第90図453）

1点出土した。ホルンフェルスを用いる。表面に縦長剥片を剥離した痕跡が残る石核を用いる。裏面右側縁の剥離も剥片剥離の痕跡と考えられる。剥離痕と自然面の境界に蛇行する刃部を作出する。

⑤片刃側縁類（第90～92図454～464）

19点出土した。出土数が最も多い形態である。砂岩（細粒）（461～463）が5点、神津島恩馳島群黒曜石（454・455）、ホルンフェルス（457～459）がそれぞれ4点、流紋岩（460）が2点、諏訪星ヶ台群黒曜石、ガラス質黒色安山岩（456）、輝石安山岩（464）、砂岩（粗粒）がそれぞれ1点である。

454は両側縁背面に細かい調整剥離が認められる。腹面にも部分的に調整剥離が認められ、特に腹面右側縁打点側には比較的大きい剥離が施される。左側縁下半の折れは調整剥離の前に生じているようであり、素材剥片の剥離に伴うものである可能性が高い。455は背面左側縁上端と腹面左側縁下半に調整剥離が認められる。腹面右側縁には多数の微細剥離痕が認められる。微細剥離痕はわずかに上端の折面にまでおよぶ。456は厚い石刃を素材とする。末端部に自然面をもつ。背面には主要剥離と同一方向の剥離と、

対向する剥離が認められる。両側縁に調整剥離が施される。457は薄い石刃を素材とする。右側縁中央に数枚の調整剥離が認められる。458は背面右側縁に粗い鋸歯状の刃部をもつ。左側縁では自然面を加撃しているが、刃部は作出できておらず、剥離の意図は不明である。459は背面に自然面を広く残す剥片を素材とする。腹面の両側縁に調整剥離が施される。わずかに抉るような剥離になっているが、つまみを作り出したとは考えにくい。460は腹面右側縁に急斜度の小さい剥離が連続する。462は背面全体にわずかに屈曲をもつ円礫の自然面を残す剥片を素材とする。不連続な調整剥離が各所に認められる。腹面左側縁に比較的多くの剥離がみられる。461と463は背面全体に礫面を残す縦長剥片を素材とする。461は腹面両側縁および末端部に平坦な剥離が認められる。463は腹面左側縁に調整剥離が連続し、右側縁には鋭い縁辺を残す。464は表面の風化が激しく、剥離面の判断が困難なところがある。素材は石刃の可能性が高い。右側縁には抉るような剥離が残されている。

⑥片刃端部類 (第92・93図 465～468)

10点出土した。神津島恩馳島群黒曜石(465・466)、砂岩(細粒)(468)がそれぞれ3点、ホルンフェルス(467)が2点、頁岩、砂岩(中粒)がそれぞれ1点である。

465は削器としての刃部を作り出した後に、右端、次いで上半を折損したと考えられる。上半の折損の後、その折面を打面に腹面側にわずかに調整剥離を施している。466は右側縁に平坦な自然面を取り込み、平坦な剥離面を打面とする。幅広い剥片が素材である。末端部から左側縁にかけて、緩やかな弧を描く刃部が、背面への比較的急斜度の剥離によって作り出される。弧を描く刃部は素材剥片打面と交わり、鈍い先頭部をなす。腹面側では、打点部周辺と腹面左下に調整剥離が施される。また、背面には打面と平坦な自然面を加撃した剥離が認められるが、厳密には素材剥片剥離後のものであるかは不明である。ただし、形態を調整しているものと考えていだろう。467は打面および背面末端に自然面を残す。腹面に大きい調整剥離を施す。468は末端部と右側縁に調整剥離を行い、鈍い先頭部を作り出す。打点部周辺は背面への大きい剥離とその両端への腹面での剥離で2つの尖頭部をなす。

⑦片刃全周類 (第93・94図 469～472)

4点出土した。神津島恩馳島群黒曜石(469)、ホルンフェルス(470)、頁岩(471)、砂岩(中粒)(472)がそれぞれ1点である。

469は打点側と左側縁を背面へ、右側縁を腹面への調整剥離で刃部を作り出す。470は背面への急斜度剥離が全面に施され、腹面には部分的に剥離が認められる。ラウンドスクレイパーである。471は短小な打製石斧とも考えられるが、両側縁が鋭く潰れが認められないため、削器と考えた。472は腹面への調整剥離を主体とする。腹面左側縁は比較的鈍い。

⑧片刃石核素材類 (第94図 473)

1点出土した。砂岩(細粒)を素材とする。扁平な円礫を用いて両面から不定形な剥片を剥離していた石核を素材とする。長軸両側縁に調整剥離が認められる。

(4) 抉入削器 (第94図 474・475)

4点出土した。砂岩(細粒)が2点、諏訪墨ヶ台群(474)と神津島恩馳島群(475)の黒曜石がそれぞれ1点である。

474は鋭い縁辺を有する縦長剥片を素材とする。背面には先行する縦長剥片の剥離痕が認められ、打面には入念な打面調整が行われている。右側縁中央部に背面への小さい剥離で抉りが作り出される。475も腹面への調整剥離が主体である。折面をもつ小さい剥片の腹面右側縁中央に抉りを作り出す。

(5) 彫器 (第94図476)

1点出土した。硬質頁岩を用いる。折面が多く厚みのある角柱状の剥片を素材とする。端部を調整した後に、その調整された面を加撃して彫刀面を作り出している。彫刀面の剥離痕には微細剥離痕は認められないが、その下部および反対側の辺には微細剥離痕が認められる。

(6) 石鏃 (第94図477～482)

6点出土した。諏訪星ヶ台群黒曜石(477・478)、ホルンフェルス(479・480)がそれぞれ2点、チャート(赤色)(481)、チャート(482)がそれぞれ1点である。

477～481は先端部に向けて流線形を描くように細くなるのに対して、482は先端部を突出させる。477・478・480・481は石刃を素材とする。478・480・481は背面への調整剥離が主体である。479・480は表面の風化が激しく剥離面の判読が困難なところがある。482は灰色のチャートを用いる。刃部が折れている。

(7) 二次加工ある剥片 (第94・95図483～485)

41点出土した。図化したものは諏訪星ヶ台群(483)、箱根畑宿群(484)、神津島恩馳島群(485)の黒曜石を用いる。

483は小剥片の右側縁に急斜度剥離を施す。484は上端を折損した縦長剥片を素材とする。末端部腹面に両側縁から調整剥離を施す。両側縁には鋭い縁辺が残り、微細剥離痕が認められる。485は背面に主要剥離面と同一方向と対向方向の剥離が認められることから、両極打法によって得られた剥片の可能性がある。末端部は階段状になる。左側縁を中心に両面に小さい調整剥離が施される。石鏃の未製品の可能性もある。

(8) 石刃 (第95図486)

2点出土した。黒曜石、ホルンフェルス(486)がそれぞれ1点である。486は部分的に二次的な剥離が認められる。表面の風化が激しく、剥離面の判読が困難なところがある。

(9) 打面再生剥片 (第95図487)

1点出土した。黄玉石である。自然面を残す面で小さい剥片の剥離を行った後、その作業面を加撃して、打面再生を行ったと考えた。打面再生剥片の背面、つまり石核の打面となっていた面には連続して縦長剥片を剥離した痕跡が残されており、打面と作業面を転移しながら剥片剥離を進行させていたことが分かる。

(10) 楔形石器 (第95図488～490)

14点出土した。神津島恩馳島群黒曜石(489)が7点、諏訪星ヶ台群黒曜石(488)が6点、ホルンフェルス(490)が1点である。利用石材は黒曜石に偏る。

488は4方から剥離が行われている。裏面右側縁の潰れが顕著で、表面上端にもわずかに潰れが認められるが、ほとんどの辺には潰れが認められない。どの辺も表裏いずれかに剥離が施され、両面に剥離がなされる部分は乏しい。489は上下両端に、潰れを伴う両面への剥離が認められる。右側面には截断面様の剥離が認められるが、截断面が生じた後に表裏面の剥離が行われている。左側縁には表面にのみ剥離が認められ、潰れはみられない。490は末端部に平坦な剥離面を有する横長の剥片を素材とする。打点側は両面に、末端側は背面に、右側縁は腹面に剥離痕が認められる。明確な潰れは認められない。

(11) 石核

礫を素材とするⅠ類には非黒曜石を、剥片を素材とするⅡ類には黒曜石を用いる傾向がある。また、この遺跡では作業面を礫の長軸に設け、打点を左右に移動させながら不定形剥片を剥離していく固定幅広Ⅰa類が多く見受けられる。ホルンフェルスをはじめとする非黒曜石の石材に多く認められる。

① 転移類 (第95図491・492)

12点出土した。ホルンフェルス(492)が4点、諏訪里ヶ台群黒曜石、神津島恩馳島群黒曜石(491)がそれぞれ3点、未分析の黒曜石、珪質シルト岩がそれぞれ1点である。

491・492とも打面調整は認められない。491は石核(491-2)に微細剥離痕ある剥片(491-1)が接合する。491-1は末端と左端が折れた剥片を素材とし、右側縁の鈍い縁辺に微細剥離痕が認められる。

② 固定幅広Ⅰa類 (第95・96図493～495)

18点出土した。ホルンフェルス(493～495)が15点、硬質細粒凝灰岩、砂岩(細粒)、輝石安山岩がそれぞれ1点である。

493～495はわずかに稜が残る円礫を素材とする。

(12) 打製石斧

両側縁に敲打による潰れが認められるものが大多数を占めることから、「両極敲打技法」(久保田2004)によって成形されたものを多く含む可能性がある。短冊形薄型のもが大部分を占め、掬形薄型、短冊形厚型が次ぐ。礫をそのまま石斧の素材としたa類は全体では少ないが、分銅形厚型では過半数になる。礫を二分割したときや、複数に分割したときの初期に得られる剥片を素材とするb類はすべての石斧で多く利用されるが、特に掬形薄型に多い。自然面の残存が少ないc類は特に短冊形厚型に多くみられるが、これは短冊形厚型の調整剥離が顕著であることによるものだろう。自然面を残さないd類は、薄い板状に割られた剥片を利用する短冊形薄型に顕著である。

2つの石斧集中にみられる石斧の形態差に示されるように、時期差を示すものである可能性があるが、分布に明確な差異は見出せない。

① 短冊形厚型a (第97図496)

両面に自然面が残存するものである。1点出土した。裏面に残された自然面周辺は瘤状に高まっており、除去できなかったと考えられる。瘤自体にも加撃した痕跡がある。刃部への加工は乏しい。

② 短冊形厚型b (第97図497・498)

片面の大部分に自然面が残存するものである。10点出土し、2点図化した。497は基部と刃部が45°程ねじれる。

③ 短冊形厚型c (第97図499～503)

片面の一部に自然面が残存するものである。8点出土し、5点図化した。499は縦断面が極緩やかなS字状に屈曲する。500の右側縁は敲打痕が乏しく、鋭い縁辺を残す部分が多い。501の左側縁も右側縁に比べて敲打痕が乏しい。表面右側縁からの調整が顕著であるため、基部と刃部が若干ねじれる。502の表面下縁の大きい剥離は折面である。折れによって刃部を失ったため、裏面に調整を施して刃部の再生を行っている。503は節理面での折れで刃部を失っており、表面への剥離で刃部の再生を試みているが、途中で遺棄したらしい。

④ 短冊形厚型d (第97図504・505)

自然面が残存していないものである。5点出土し、2点図化した。504はホルンフェルスを用いる。表面の風化が激しい。505は基部に著しい厚みをもつ。これを除去しようとする加撃した痕跡が残されている。

⑤短冊形薄型a (第97図506)

両面に自然面が残存するものである。1点出土した。著しく扁平な礫を素材とする。

⑥短冊形薄型b (第97～99図507～529)

片面の大部分に自然面が残存するものである。45点出土し、23点図化した。507には鋭い工具で加撃したような深い剥離がところどころに認められる。509は薄いため、腹面への剥離のみで成形される。敲打痕は認められない。510も腹面への剥離が主体で、明確な敲打痕が認められない。左側面刃部寄りには素材面と考えられる平坦な剥離面が残存しており、厚みがある。513は刃部が緩やかな圭頭形になる。514は刃部への加工が乏しい。516は腹面側への調整剥離が主体で、敲打痕は認められない。520は若干凹凸のある円礫を利用する。腹面中央部の高まりを除去できなかったらしい。522～528は基部を折損する。522と524は基部が折れた後に調整を加えたいらしい。527は残存する範囲には敲打痕が認められない。529は下部を折損する。側縁には部分的に敲打痕が認められる。上部は両側から挟むような加工がなされるが、右の挟みには敲打したような潰れが認められる。石斧が欠損した後で何かに転用されたものかもしれない。

⑦短冊形薄型c (第99・100図530～539)

片面の一部に自然面が残存するものである。16点出土し、10点図化した。531・537・538には敲打痕が認められず、縁辺は鋭い。539は刃部側を折損するが、その折面を加撃した痕跡がある。

⑧短冊形薄型d (第100・101図540～550)

自然面が残存していないものである。25点出土し、11点図化した。540はホルンフェルス(片状)の薄い板状の素材を用いる。543～545は刃部を折損した後に調整剥離を行う。543は折面から表面に調整剥離を行った可能性がある。544は折面を加撃して両面に剥離を施すことが有効な刃部は得られていない。545は表面を加撃して、折面に剥離を施す。その意図は定かではない。546～548は刃部側を折損する。547は基部がわずかに尖る。549・550は上下両端を折損する。550には上の折面を加撃した痕跡が認められる。

⑨楕形厚型a (第101図551)

両面に自然面が残存するものである。1点出土した。ホルンフェルスを用いる。主に円礫の一端を中心に調整剥離を行う。

⑩楕形厚型b (第101図552～564)

片面の大部分に自然面が残存するものである。18点出土し、13点図化した。552の刃部は素材剥片の縁辺をそのまま利用し、背面に微細剥離痕が認められる。553は腹面にのみ調整剥離が施され、敲打痕は認められない。554は刃部だけは腹面への剥離のみで成形される。555は敲打痕が顕著ではない。557は刃部を折損する。560も刃部の調整は腹面にむけた剥離のみである。562は刃部への調整は乏しく、微細な剥離が認められるのみである。563は上下を折損するが、折面の大きさが小さいことから失われた部分は多くないと考えられる。564は刃部右半と基部右半を節理に沿った折れで失う。

⑪楕形厚型c (第102図565～568)

片面の一部に自然面が残存するものである。4点出土した。565～567には敲打痕が認められない。566は左側縁が弧状になり、いびつである。567の右側縁にはほとんど調整が施されず、自然面が残存する。下端部は剥離痕や潰れが認められることから打製石斧と考えた。

⑫分銅型厚型a (第102図569～571)

両面に自然面が残存するものである。3点出土した。569は比較的扁平な礫を素材とする。裏面基部に残された大きい剥離は敲打痕の後になされた剥離であり、使用に伴うものの可能性がある。570は比較的厚さのある礫を素材とし、剥離によりその形状を大きく変えている。表面中央左寄りに残された自然面の周辺は瘤状に高まっており、除去を試みたが成功しなかったらしい。571は礫が固結してできた礫岩

を用いており、剥離面の判読が難しい。粗い剥離で成形され、礫の形状を残しているが、刃部は鋭い。表面の礫面を加撃して抉りを作り出そうとしている。

⑬分銅形厚型d (第102図572)

自然面が残っていないものである。1点出土した。刃部から基部まで緩やかな弧状になる抉りを有する。基部には面取りを行ったような屈曲がある。

⑭分銅形薄型b (第103図573)

片面の大部分に自然面が残存するものである。2点出土し、1点図化した。573は刃部の調整剥離が腹面にのみ行われる。

⑮分銅形薄型c (第103図574)

片面の一部に自然面が残存するものである。1点出土した。右側縁の抉りには屈曲をもち、左右非対称である。剥離も粗く、形状もいびつである。

⑯尖頭形厚型b (第103図575)

片面の大部分に自然面が残存するものである。2点出土し、1点図化した。節理が発達した石材を用いており、剥離の多くが階段状である。右側縁は自然面を加撃した急斜度剥離が主体である。左側縁には敲打に伴うと考えられる潰れが認められる。下端は折れたような剥離痕が残されているが、有効な刃部が存在したかは明らかでなく、用途も定かではない。

⑰尖頭形薄型c (第103図576)

片面の一部に自然面が残存するものである。1点出土した。先頭部は比較的入念に調整される。下端部は折れて、刃部を再生しようとする可能性があるが、有効な刃部にはなっていない。両側縁に敲打痕が認められる。

(13)磨製石斧 (第103図577～580)

5個体出土し、4個体を図化した。577～579は刃部のみに研磨が施される刃部磨製石斧であり、580については残存部位が少なく詳細は不明である。いずれも刃部の両面が研磨され、直刃である。577と578は扁平な亜円礫に両極打法によって両側縁から調整剥離を行ったと考えられる。577は中央で折損したものが接合する。基部は亜円礫のままの形状を利用し、基部端には使用に伴うものと考えられる小さい剥離痕が認められる。578は左側縁の縁辺の一部に研磨によって平坦面を作っており、わずかな角を有する。刃部には研磨の後に生じた剥離痕が認められ、使用されたことが分かる。基部は折損する。579は全面を敲打によって成形した後、刃部から左側縁にかけて研磨を施す。左側縁は研磨による平坦面をもち、わずかに角を有する。基部側を折損する。580は破片のため、その形状は明らかでない。3片が接合する。剥離面はいずれも研磨痕の後になされたものである。破損した磨製石斧の破片を再利用したものと考えられ、左右側縁に調整剥離を施し、形を整えている。調整剥離を行った際に生じた剥片が接合している。

(14)礫器

片刃のものが大部分を占め、尖頭状のものは乏しい。素材礫の形態は様々な礫が使用される傾向があり、亜角礫のものが最も多く、亜円礫がそれに次ぐ。

①両刃円礫類 (第103図581)

1点出土した。端部に刃部を作出する。

②両刃亜円礫類 (第103図582)

2点出土し、1点を図化した。582は幅広の刃部をもつ。刃部には潰れが認められる。また、ホルンフェルスを利用することから石核である可能性もある。

③両刃角礫類 (第103図583)

1点出土した。折面を伴う板状の礫の比較的薄い辺に刃部をもつ。

④片刃円礫類 (第103・104図584・585)

2点出土した。584は比較的広い範囲に剥離が及ぶ。粗い剥離の後に比較的小さい剥離で成形される。585は一端に粗い剥離で刃部が作られる。

⑤片刃歪円礫類 (第104図586～589)

5点出土し、4点を図化した。586と587はホルンフェルスを用いる。両者とも端部に刃部を設ける。ただし、586には右側縁に刃部として有効とは考えられない剥離痕が認められ、587は刃部の反対側の端部にも剥離が認められることから、石核である可能性がある。588は折面をもつ大型の剥片を素材とする。幅が広い下端部の剥離面側に調整剥離を行う。尖った上端部にもわずかに調整剥離が認められる。589は分割礫の平坦面な主要剥離面を加撃して成形する。下部から右側縁にかけて細かい調整剥離を施し、弧状の刃部を作り出す。上部はわずかに尖り、若干の調整が認められる。節理の発達した石材を用い、一部に節理に沿った折れも認められる。

⑥片刃歪角礫類 (第104・105図590～594)

11点出土し、5点を図化した。590は粗い剥離の後、細かい剥離で刃部を弧状に成形する。591は上端部が折れるが、刃部作出との前後関係は不明である。592は粗い剥離で、角をもつ刃部を作り出す。594の調整剥離は1辺全体には及ばない。

⑦片刃角礫類 (第106図595～597)

3点出土した。596は比較的薄くなる辺に刃部を設ける。上部には折面様の急角度の剥離面が認められる。597は粗い剥離の後に細かい剥離を行い、若干弧状に整えているようにみえる。

⑧尖頭状円礫類 (第106図598)

1点出土した。両面に調整剥離を行い、丸みを帯びた尖頭部を作り出す。表面の調整は粗く、裏面に細かい調整が施される。ほかの礫器と比べて、成形が顕著である。

⑨尖頭状歪円礫類 (第106図599)

1点出土した。ホルンフェルスを用いる。広い剥離面は尖頭部の成形とは無関係になされていることから、もとは石核であった可能性がある。比較的小さい剥離で両側縁から調整剥離を加えることで尖頭部を作り出している。ただし、尖頭部をなしている剥離は粗いため、剥片の剥離を目的とした可能性もある。

(15) 敲石 (第106図600～602)

174点出土し、3点を図化した。円盤状の礫を用いるものが過半数を占め、その中でも周縁の一部分に敲打痕を残すものが多い。球状の礫、棒状の礫、歪角礫を用いるものは40～50点ほどで偏りが無い。棒状の礫と歪角礫を用いるものは比較的尖った端部を使用するものがほとんどである。

600は円盤状部分類である。長辺に強い敲打痕が認められる。601は円盤状平坦部類である。敲打痕が偏って存在する。602は棒状端部類である。太い方の端部に敲打痕が多く、細い方の端部には少ない。

(16) 磨石 (第107図603)

5点出土し、1点を図化した。円盤状平坦部類が過半数を占める。ほぼ全てのものがそれぞれの素材礫の平坦部を使用している。

603は円盤状平坦部類である。1面に平坦な磨面と考えられる面をもつ。

(17)磨-敲石 (第107図604・605)

72点出土し、2点を図化した。円盤状平坦部類が特に多く、棒状平坦部類が一定量含まれる点は磨石と同様である。磨面と敲打痕が異なる位置にあるⅡ類が大部分を占めており、円盤状や棒状の礫の広い面を磨面として用い、端部を用いて敲打を行うことが一般的であったことがわかる。

604は円盤状平坦部Ⅱ類である。主に側面に敲打痕が残される。605は円盤状平坦部Ⅰ類である。断面D字状で、平坦な面が磨られている可能性がある。局所的に偏って敲打痕が残される。

(18)稜部磨石 (第107図606～610)

13点出土し、5点を図化した。三角状、円盤状ともに平坦面に磨面を有するⅡ類が主体となる。加撃痕の位置は稜部磨面と無関係な使用が想定されるc類が最も多い。それに次ぐa類は稜部磨面の側縁に連続的加撃痕が認められるもので、敲打痕のほかに、稜部磨面から剥離が生じるものがある。ザラつきをもつ稜部磨面とともに、強い衝撃を伴う用途を示すものである。

606は三角状Ⅱb類である。稜部及び接する両平坦面に磨面をもつ。端部と稜部磨面端部、稜部磨面の反対の辺に敲打痕が残される。607は三角状Ⅱc類である。両端部に敲打痕が残される。608は三角状Ⅱe類である。稜部磨面に接する片方の平坦面は平滑で磨面と考えられるが、もう一方の面はわずかに凹凸があり磨面であるか不明である。609は円盤状Ⅰc類である。稜部磨面がザラつき磨られているか明確ではない。端部にわずかに敲打痕が認められる。610は円盤状Ⅱa類である。稜部磨面がザラつき磨られているか明確ではない。両平坦面が磨れていると考えられる。稜部磨面の側縁に剥離が生じている。

(19)敲石(凹石) (第108図611～614)

9点出土し、4点を図化した。611は片面単数類である。亜円礫を素材とし、浅い凹みが残される。612は両面単数類である。亜円礫を素材とする。613は両面複数類である。亜角礫を素材とする。片面に2つの深い凹みが、反対の面には3～4ヶ所の比較的浅い凹みが石材の長軸上に並ぶ。614は多面単数類である。複数の面をもつびつな亜角礫を素材とする。多孔質の石材であり、痕跡が明確でないところもあるが、3面に凹みが認められる。

(20)石皿 (第108・109図615～617)

礫に磨面が認められるもののうち、手に持っての使用が困難な2kg以上のものを石皿とした。磨面と敲打痕が併存するものについても石皿としている。15点出土し、3点を図化した。

いずれも素材となった礫の形状を大幅に改変せず、広い平坦な面をもつものである。

(21)台石 (第109図618)

礫に敲打痕が認められるもののうち、手に持っての使用が困難な2kg以上のものを台石とした。14点出土し、1点を図化した。

618は平坦な面に敲打痕が認められる。

(22)石錘 (第110図619)

2点出土し、1点を図化した。619は薄い扇平な円礫を用いる。両端部の両面に剥離を施して袈りを作り出す打欠石錘である。縁辺には潰れや剥離がほぼ全周に残されているが、これが石錘としての使用時に残されたものであるかは明らかでない。

(23)磨製石製品 (第110図620～623)

①軽石製品 (第110図620・621)

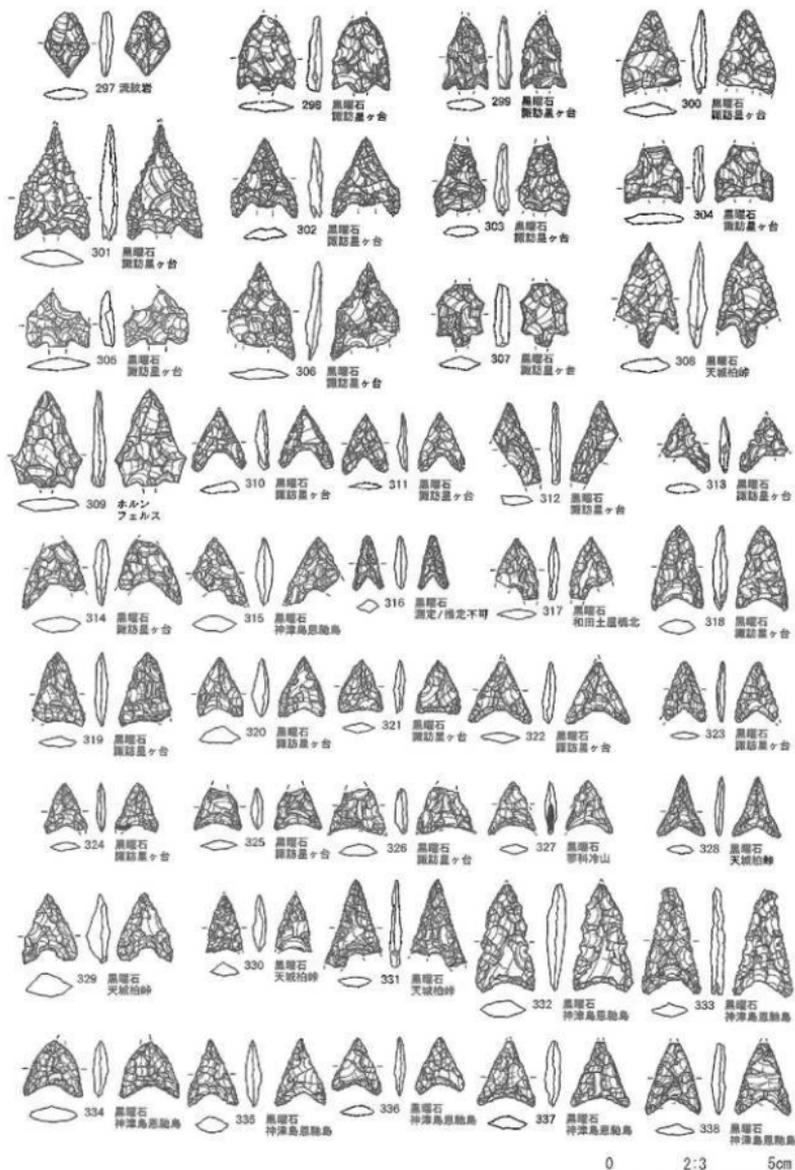
3点出土し、2点を図化した。軽石は漁労に用いた浮子としての使用が知られるが、出土したものは3点とも浮子としての明確な加工の痕跡は認められない。620は大部分が研磨によって形作られる。片刃石斧の刃部のような形態であるが、何に使われたものかは明らかでない。にぶい灰黄褐色で、うねる繊維を集合させたような構造をもつ。621は細長く、下端側に向かうにつれて若干幅広く、薄くなる。紐を結わえることができるような明確な袢りは認められない。淡黄色で、小さい孔が直線状に並ぶ。

②その他磨製石製品 (第110図622・623)

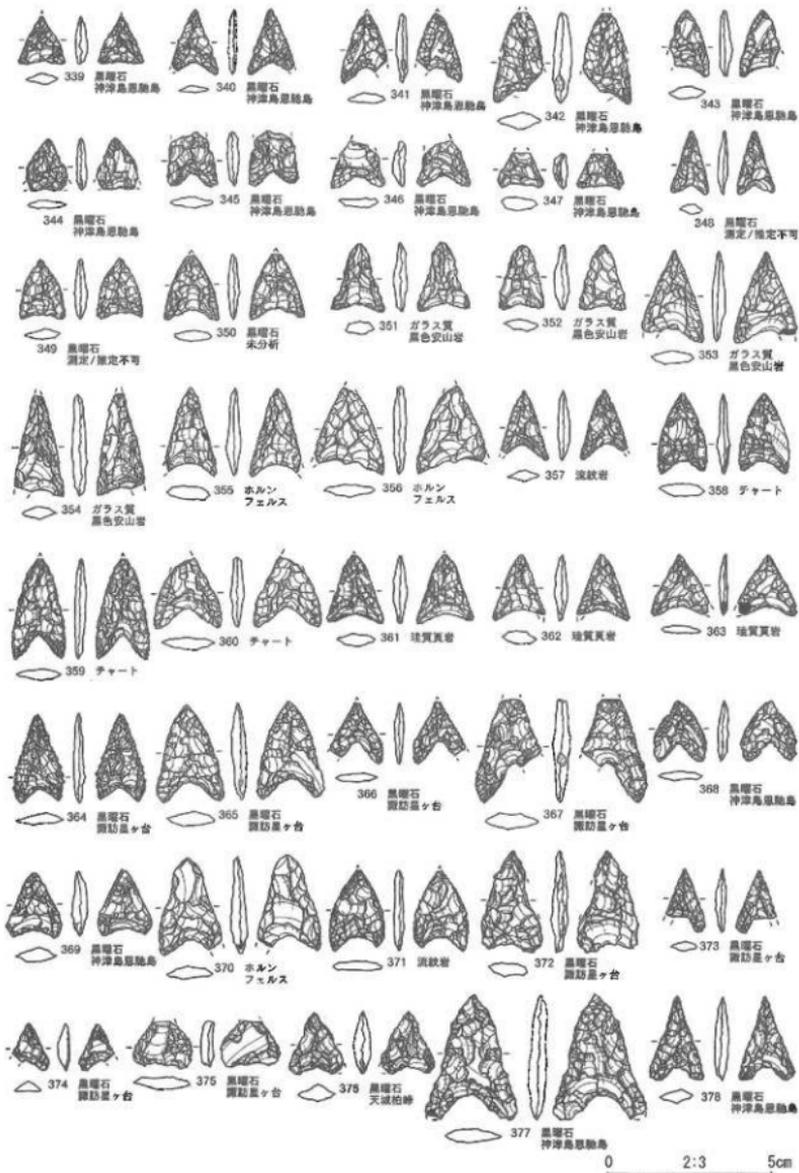
3点出土し、2点を図化した。形態は三者三様である。622は両端部以外の面が研磨されている。折れていない側の端部では断面形は表面側に突出する三角形に近く、折れている側の端部では断面形は丸みを帯びた六角形状になる。折れていない側の端部はわずかに膨らむ。残存部位が限られているため、全体形の想定は困難であるが、石剣の基部の可能性もある。623は一端を折損する棒状のもので、周囲に線状痕を伴う研磨が認められる。折れていない側は次第に細くなっていき、その端部には平滑な研磨面が数枚残されている。オリープ黄色の滑石を用いる。縄文時代の遺物でない可能性もある。

参考文献

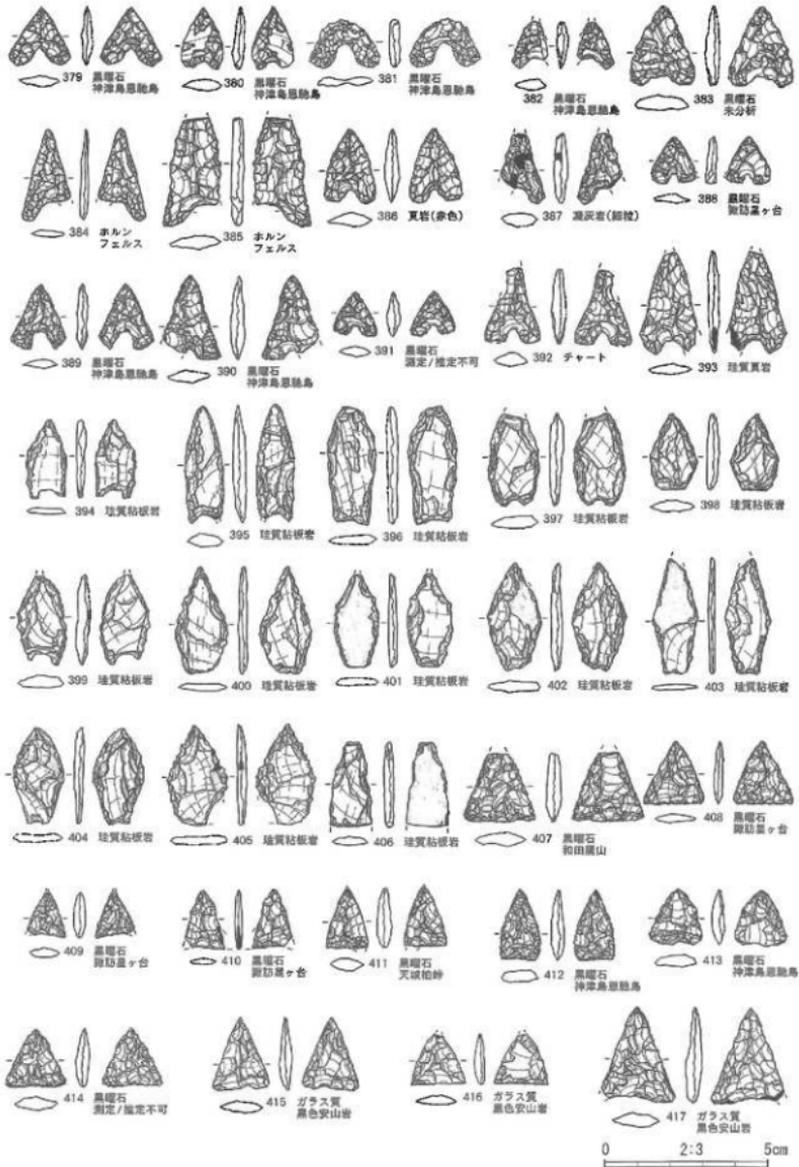
久保田正寿 2004 「実験からみた敲打技法—打製石斧の製作技法の復元にむけて—」『石器づくりの実験考古学』学生社 pp.147-172



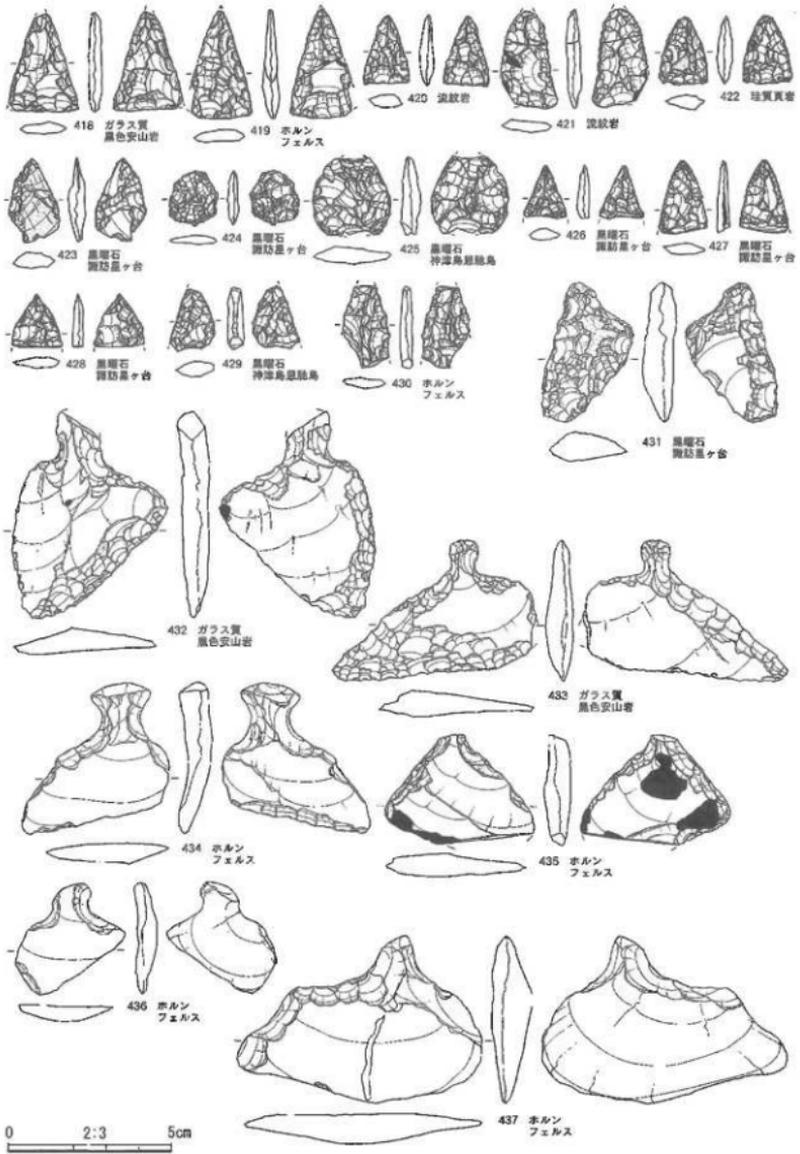
第84図 石器集中域外 出土石器(1)



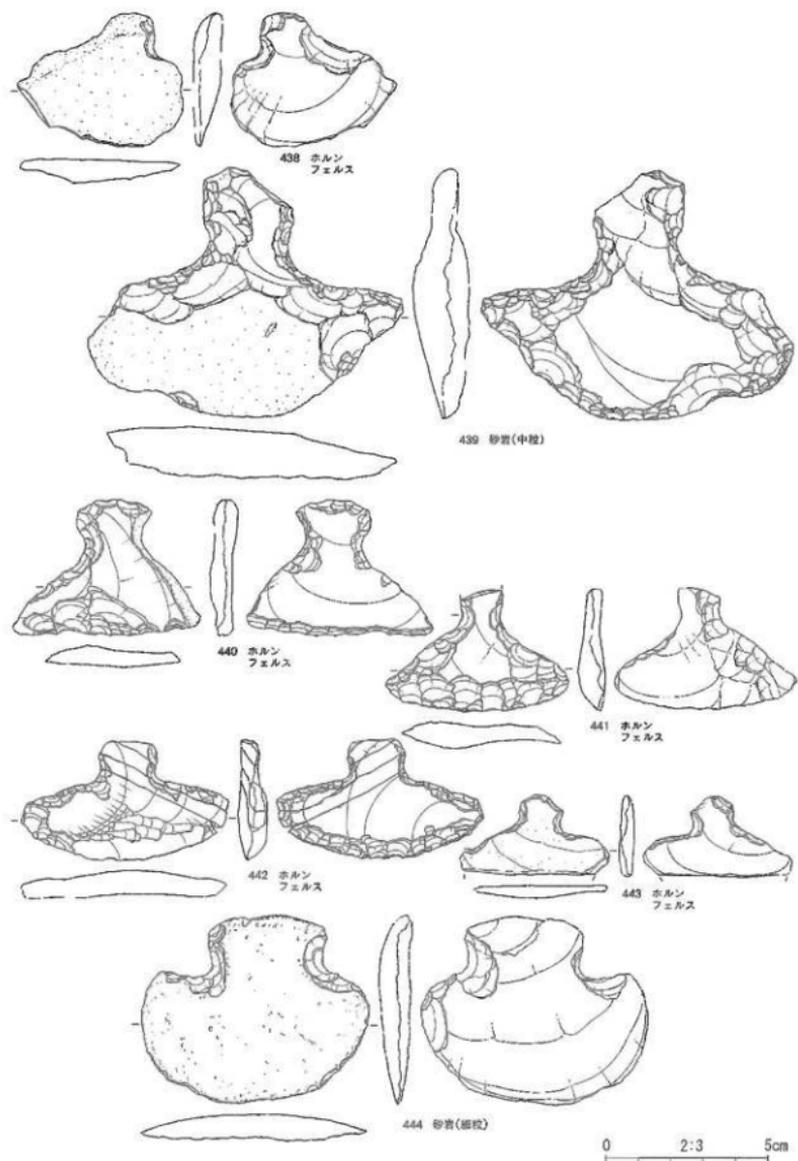
第85図 石器集中域外 出土石器(2)



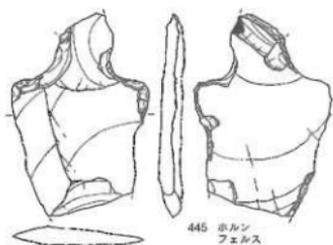
第86図 石器集中域外 出土石器(3)



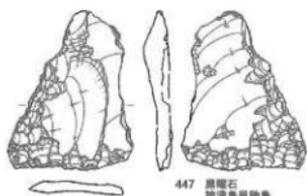
第87図 石器集中域外 出土石器(4)



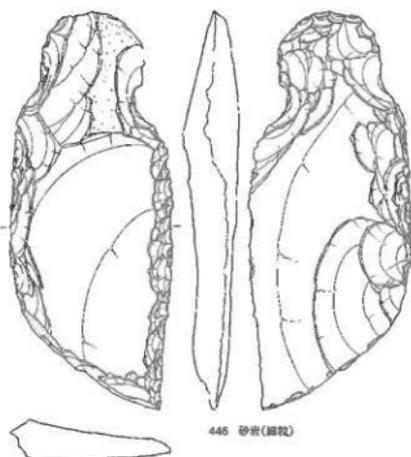
第88図 石器集中域外 出土石器(5)



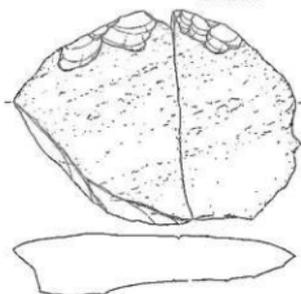
445 ホルン
フェルス



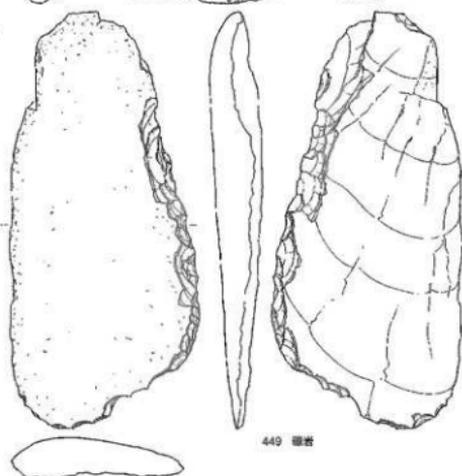
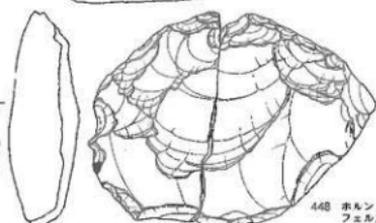
447 角礫石
先端高圓錐形



446 砂岩(細粒)



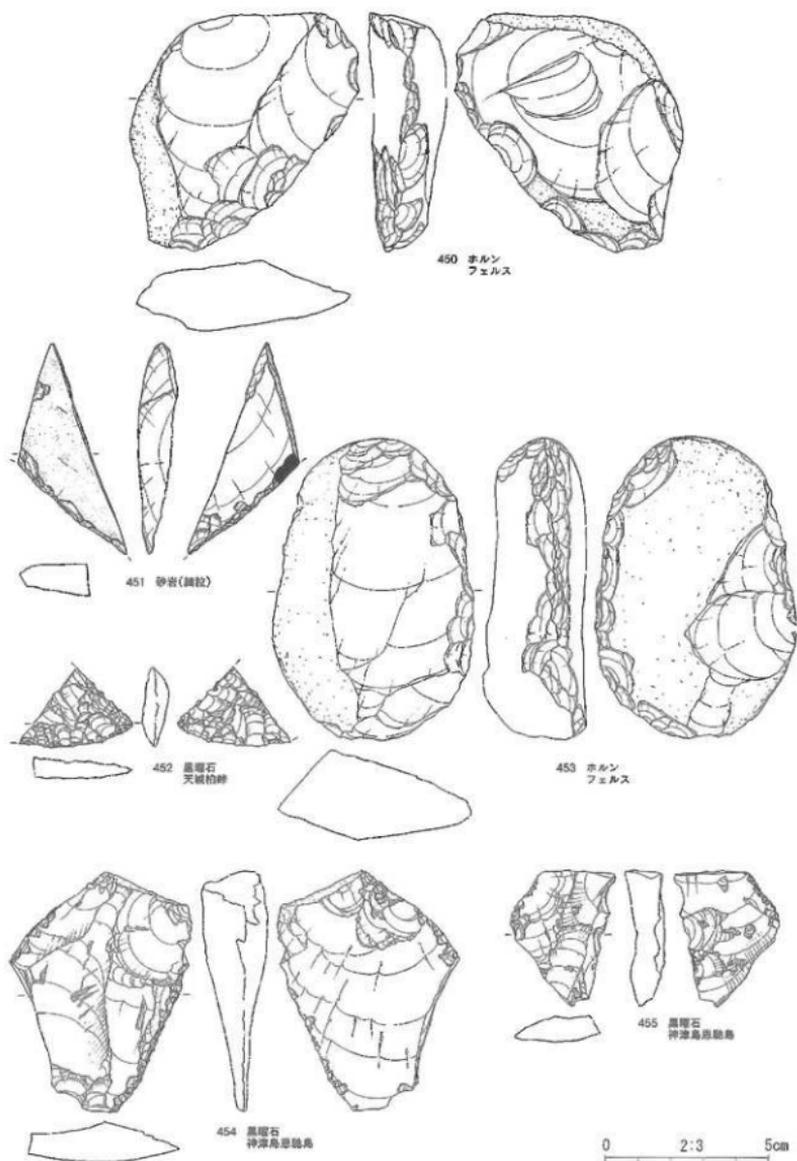
448 ホルン
フェルス



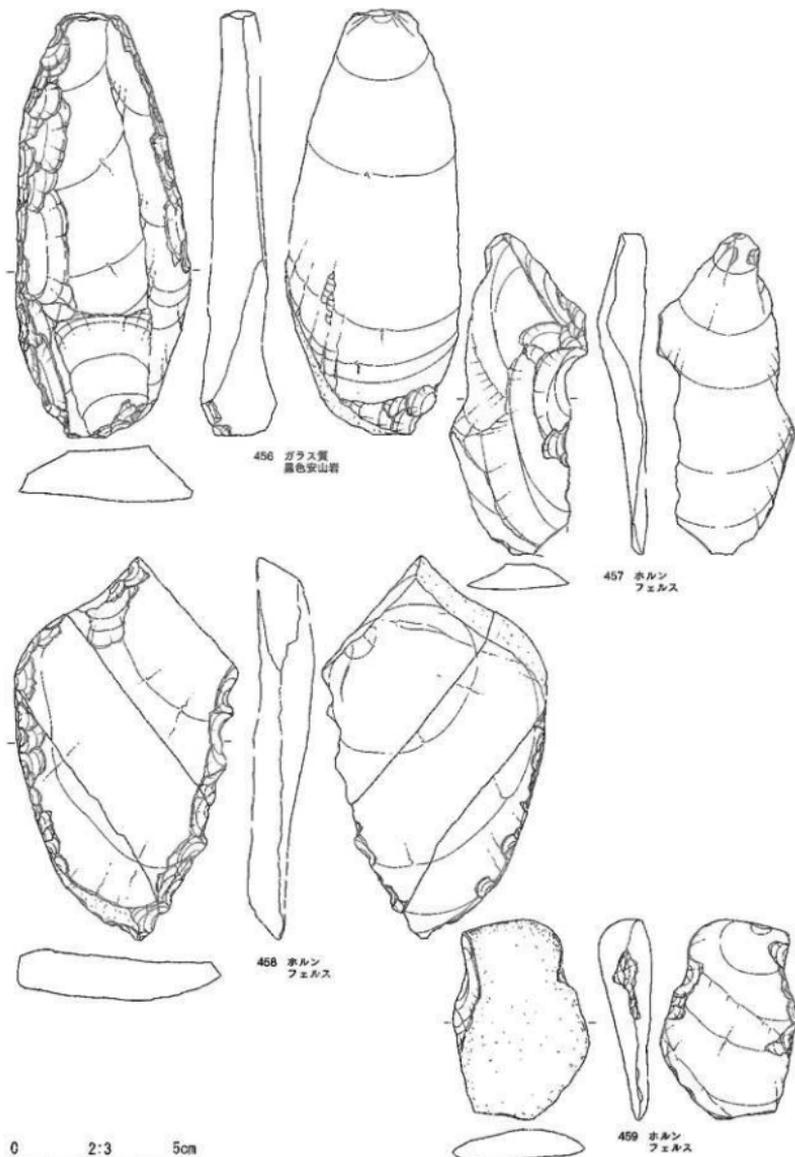
449 礫岩

0 2:3 5cm

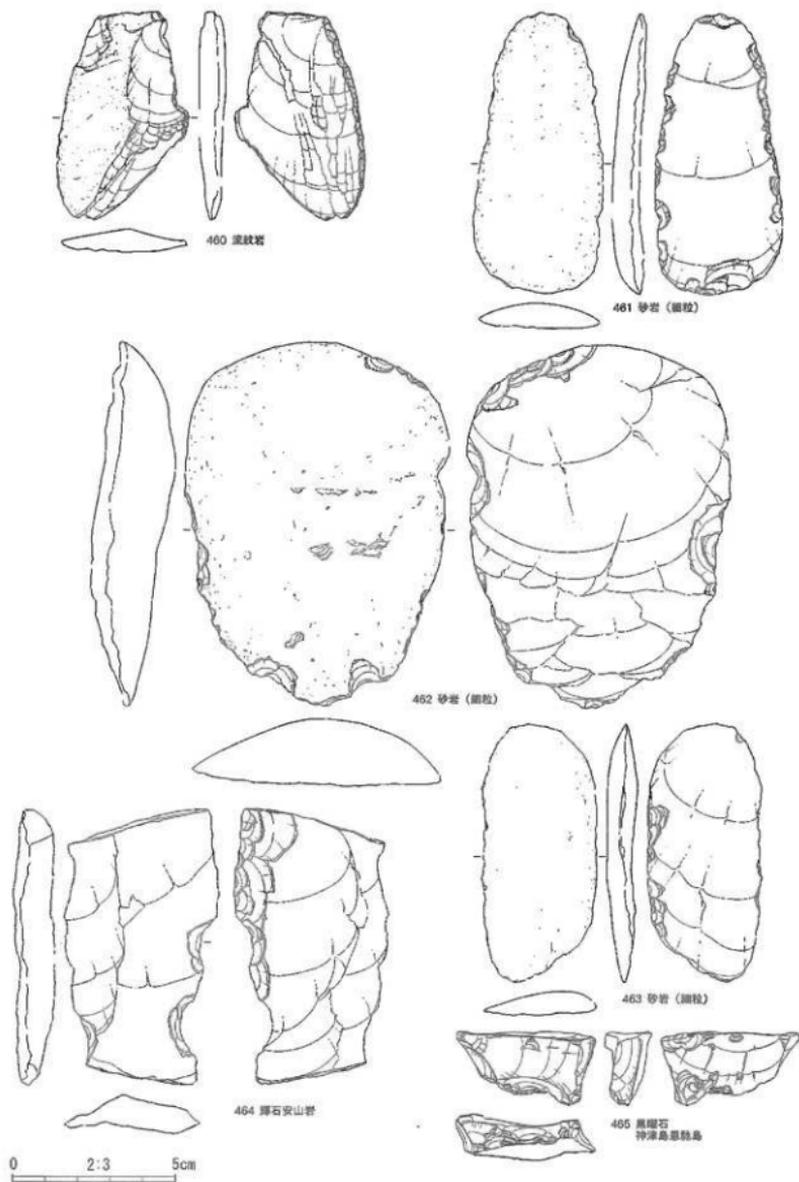
第89図 石器集中域外 出土石器(6)



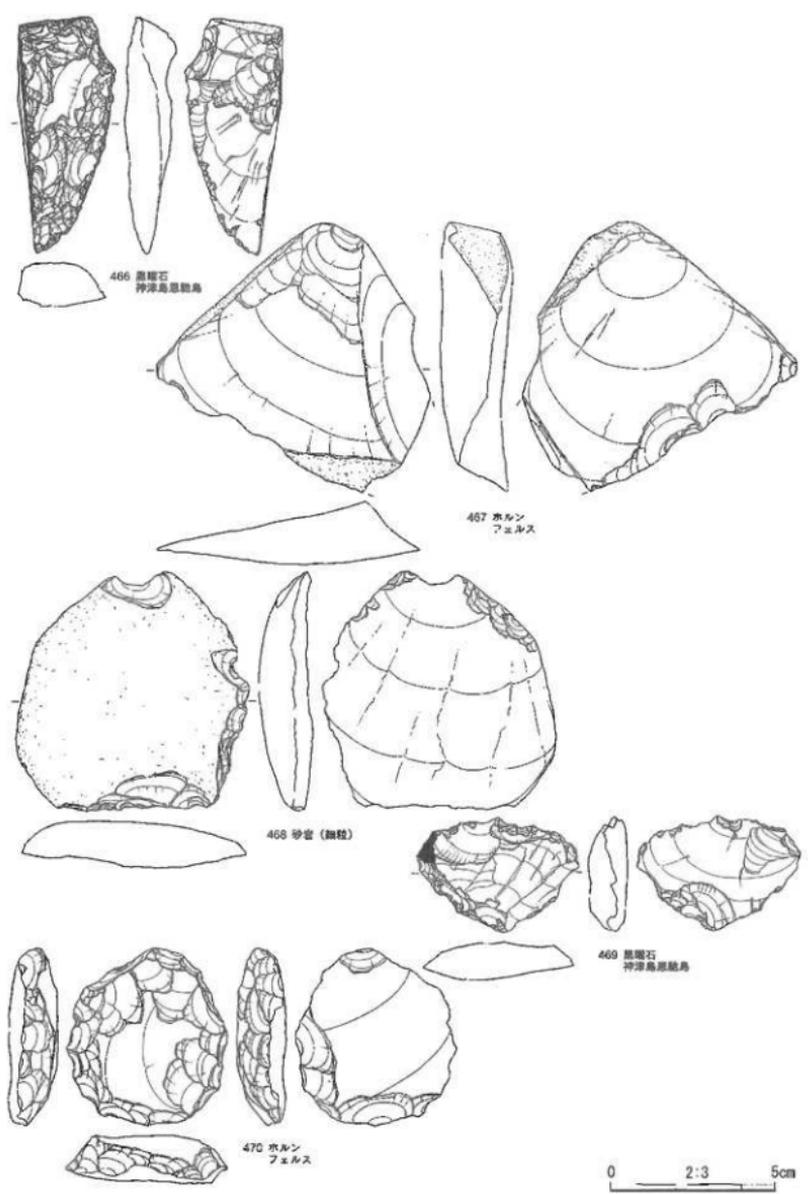
第90図 石器集中域外 出土石器(7)



第91図 石器集中域外 出土石器(8)



第92図 石器集中域外 出土石器(9)



466 黒曜石
神津島原跡鳥

467 ホルン
フェルス

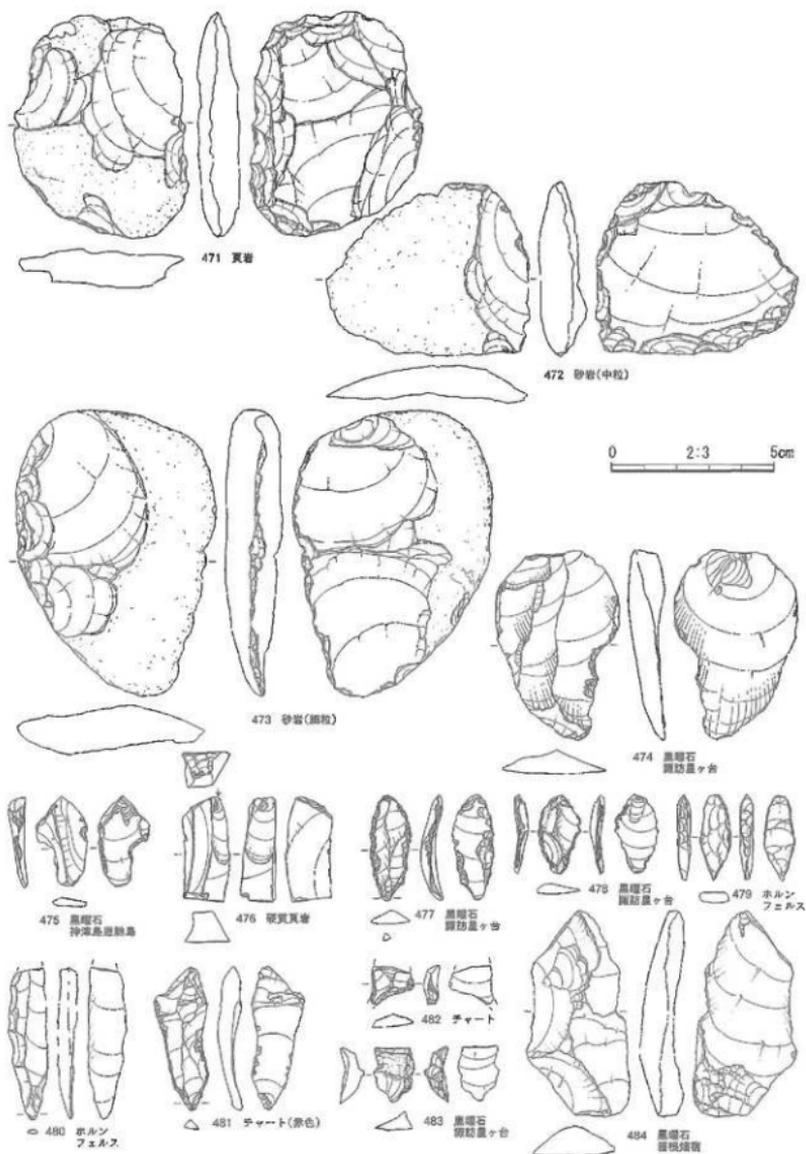
468 砂岩 (細粒)

469 黒曜石
神津島原跡鳥

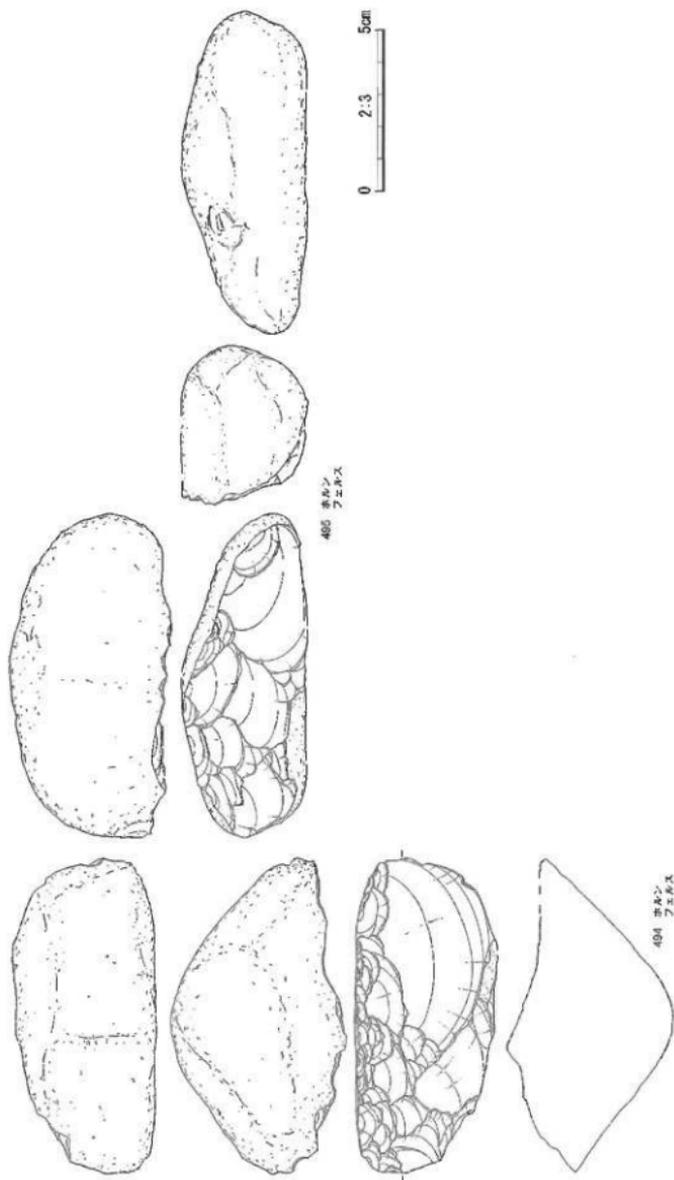
470 ホルン
フェルス



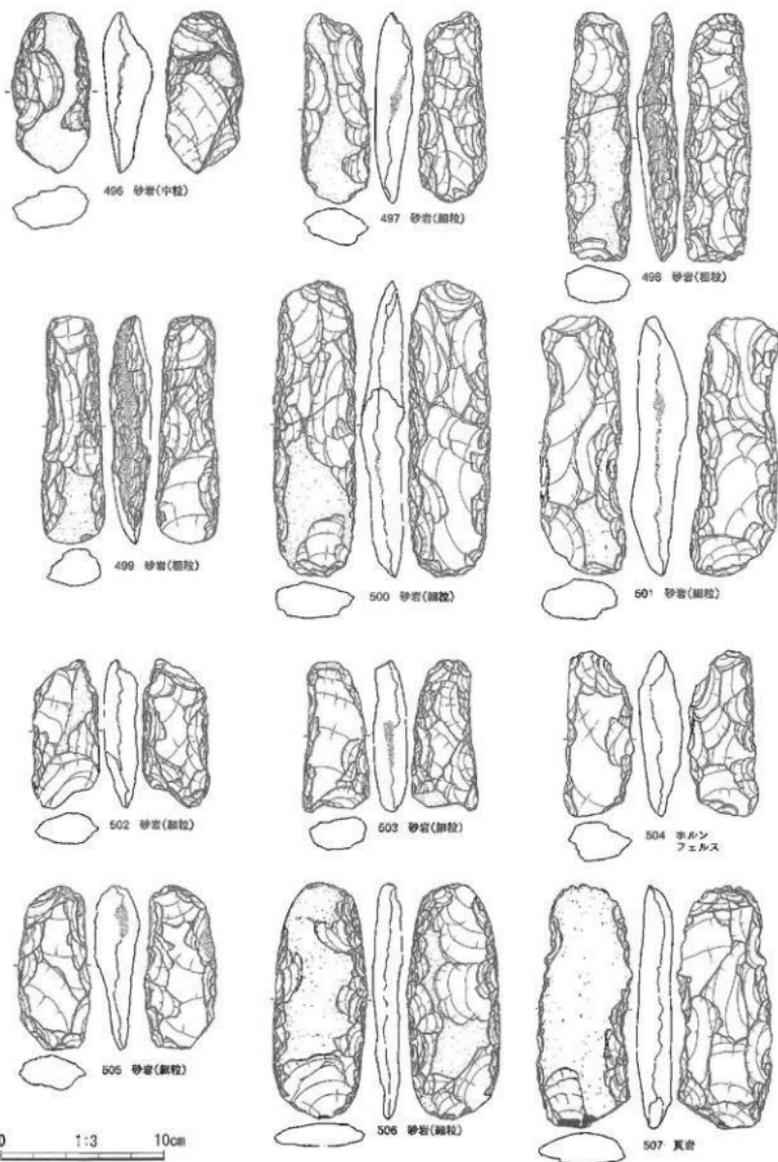
第93図 石器集中域外 出土石器(10)



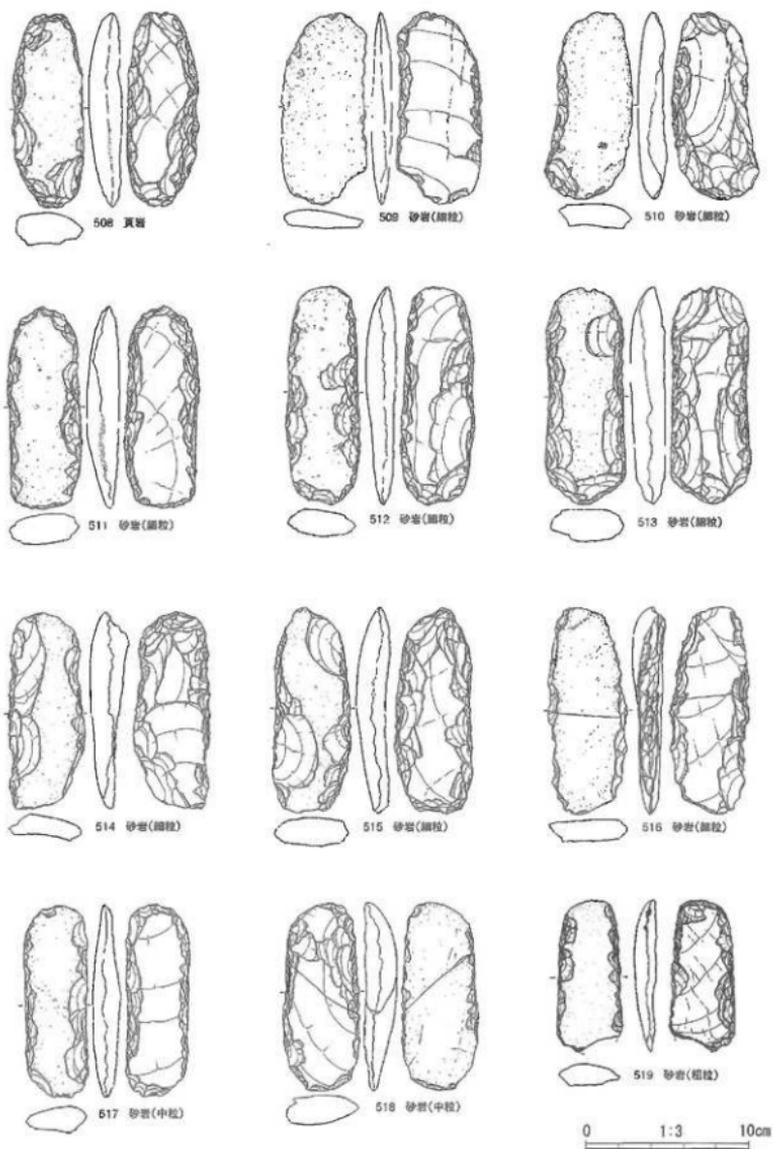
第94図 石器集中域外 出土石器(1)



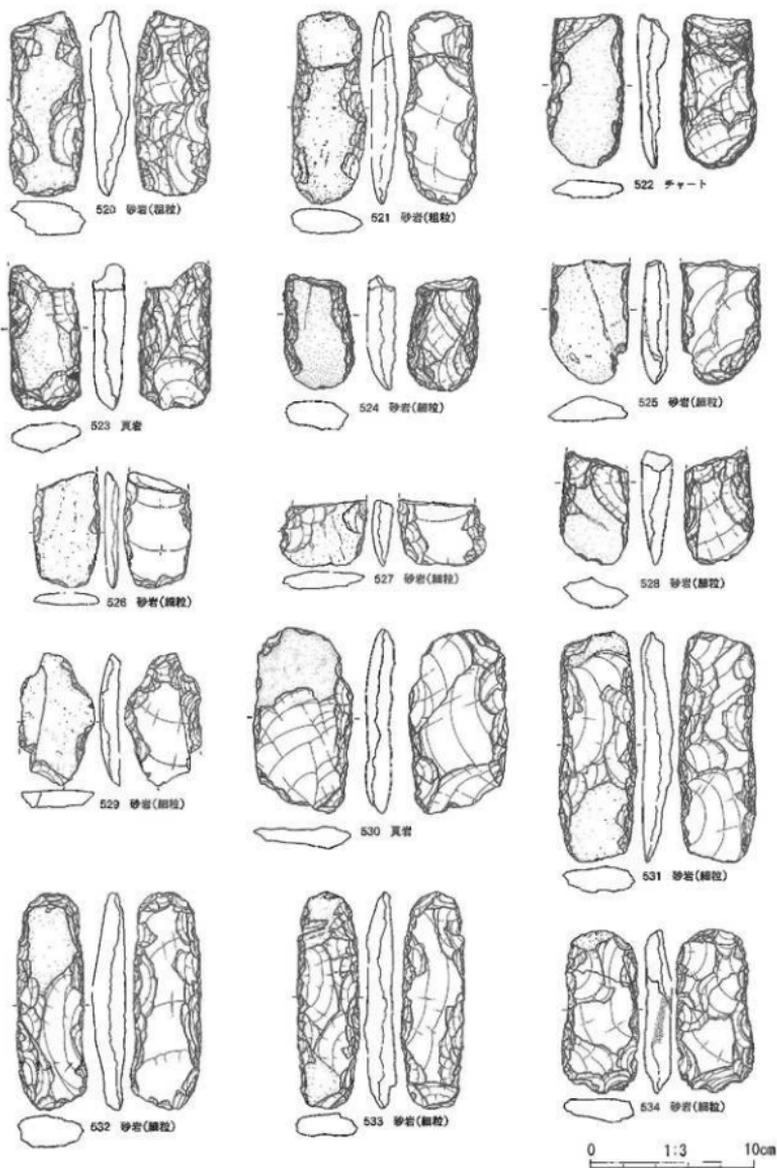
第96図 石器集中域外 出土石器⑬



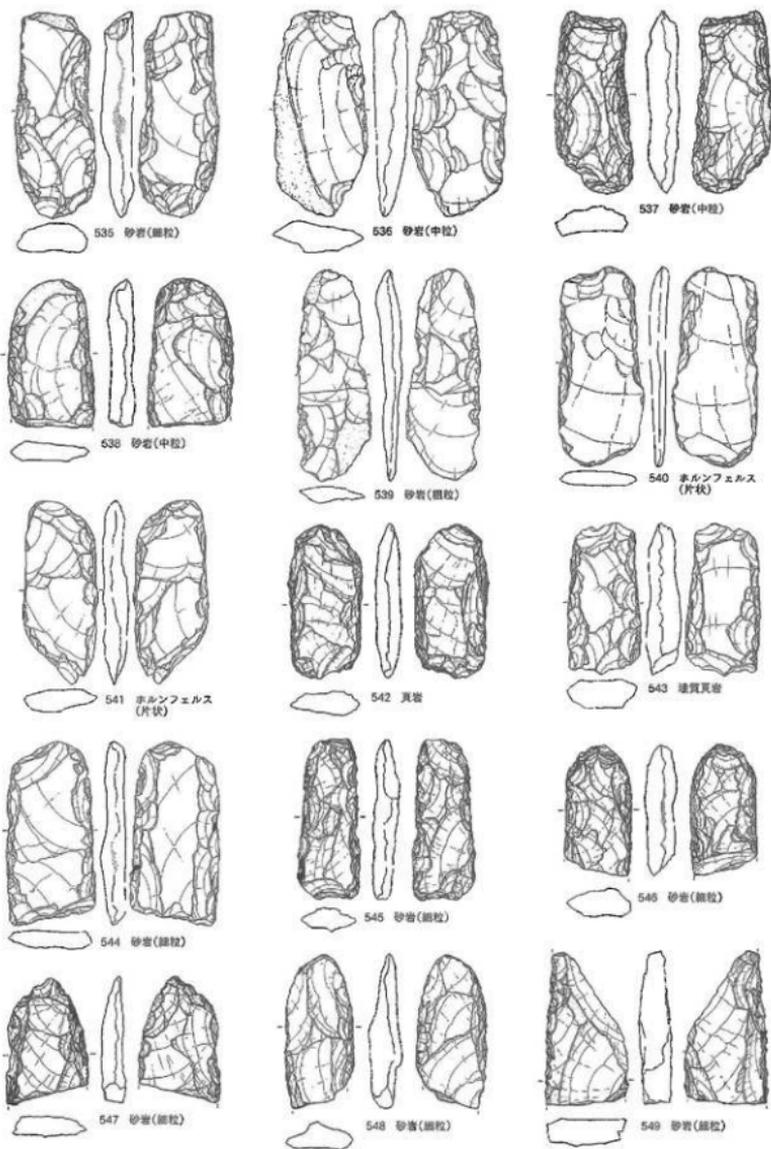
第97図 石器集中域外 出土石器(14)



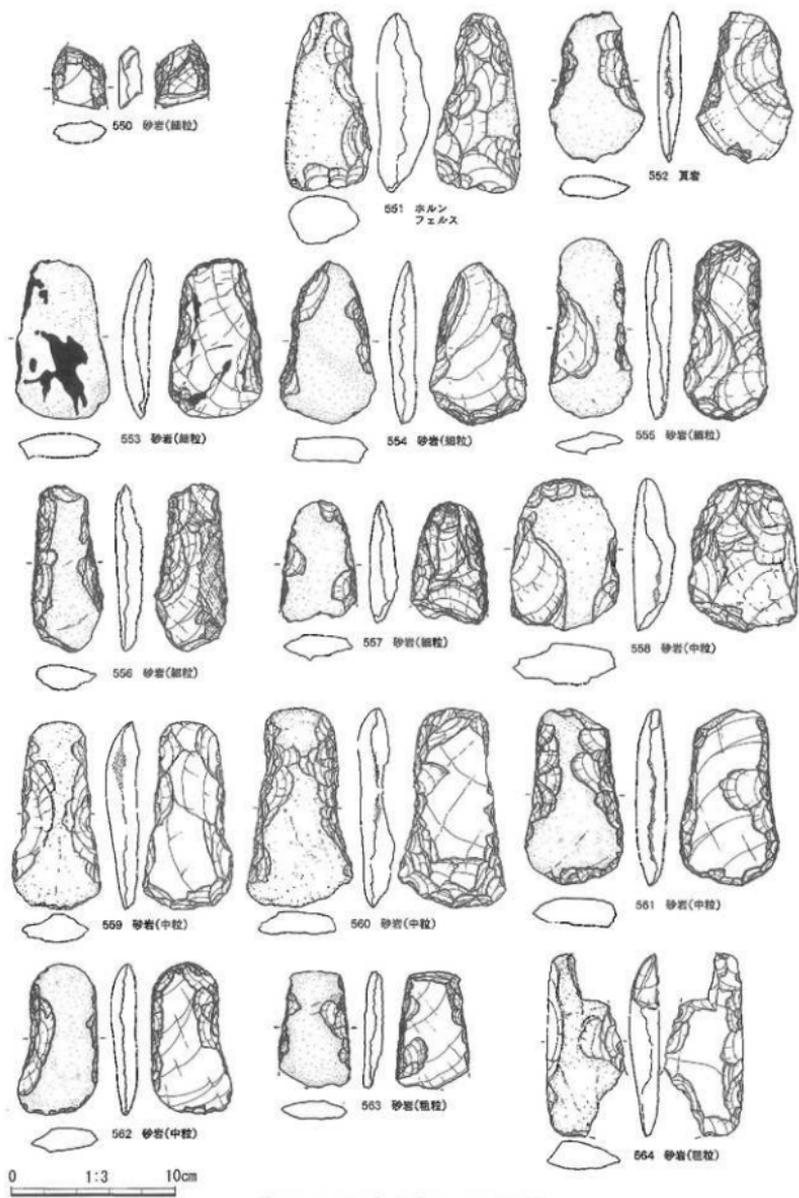
第98図 石器集中域外 出土石器(15)



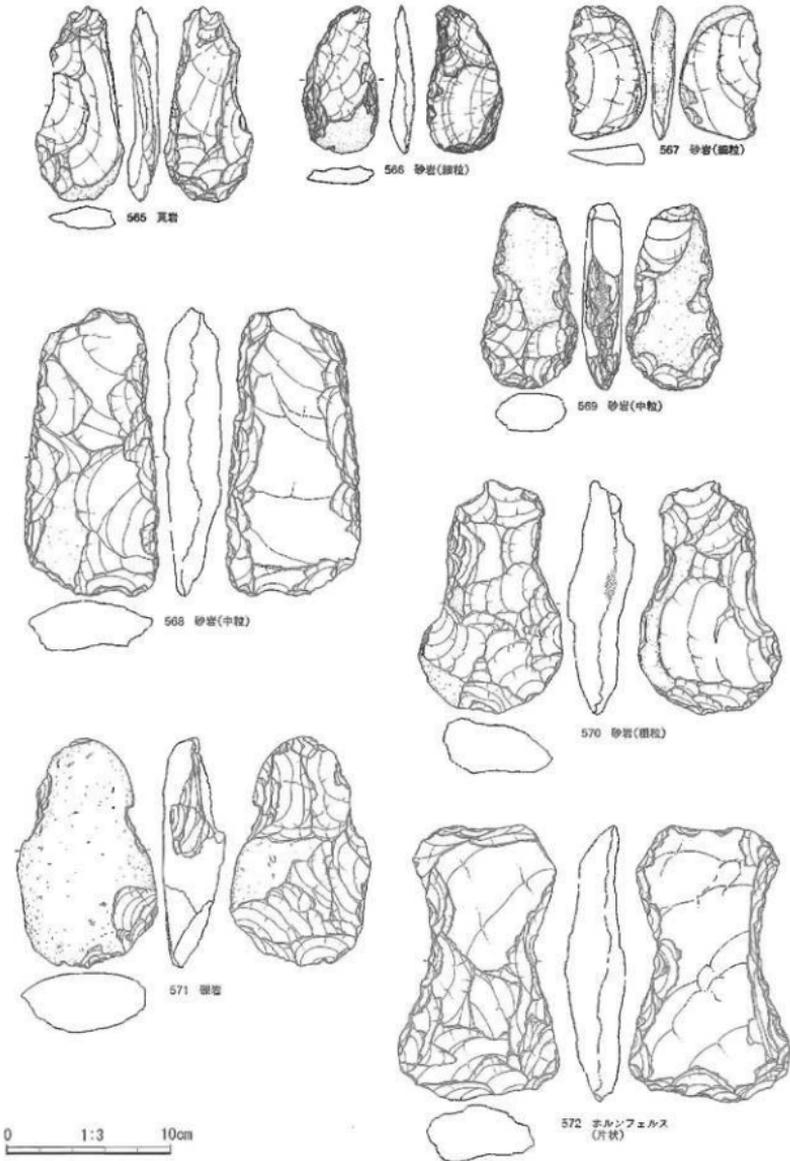
第99圖 石器集中域外 出土石器(16)



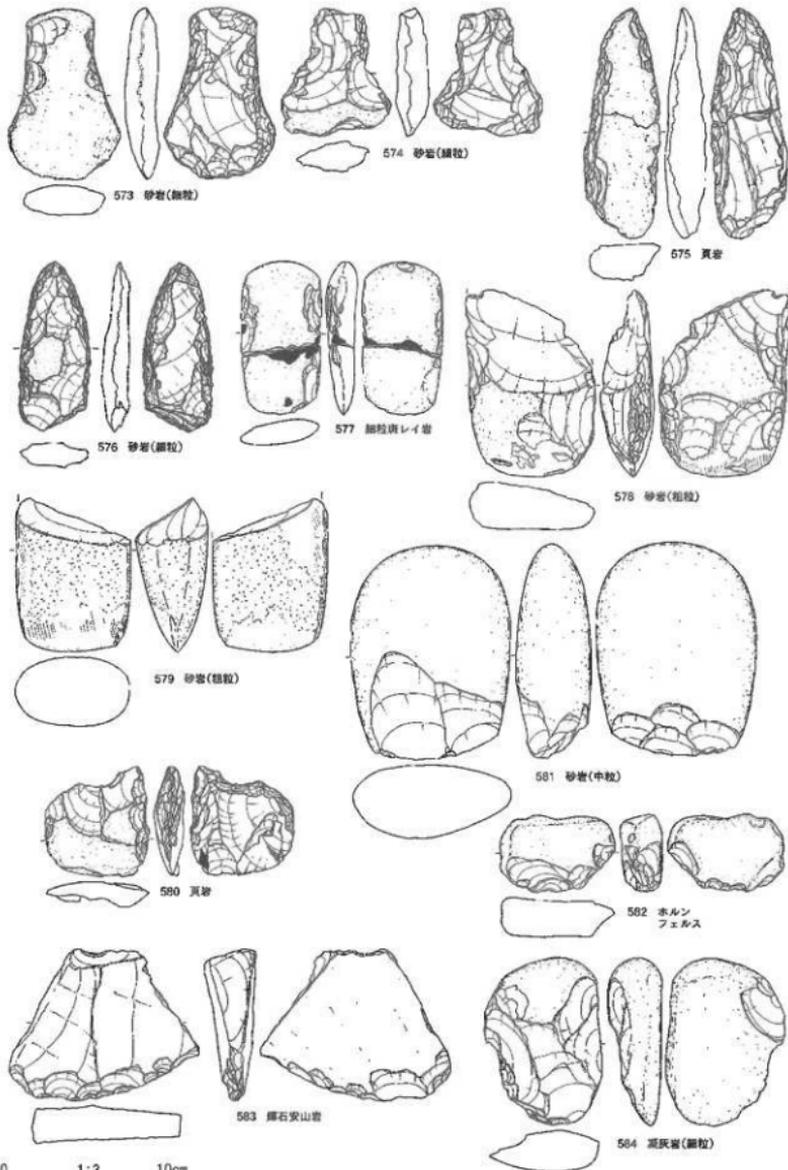
第100図 石器集中域外 出土石器(17)



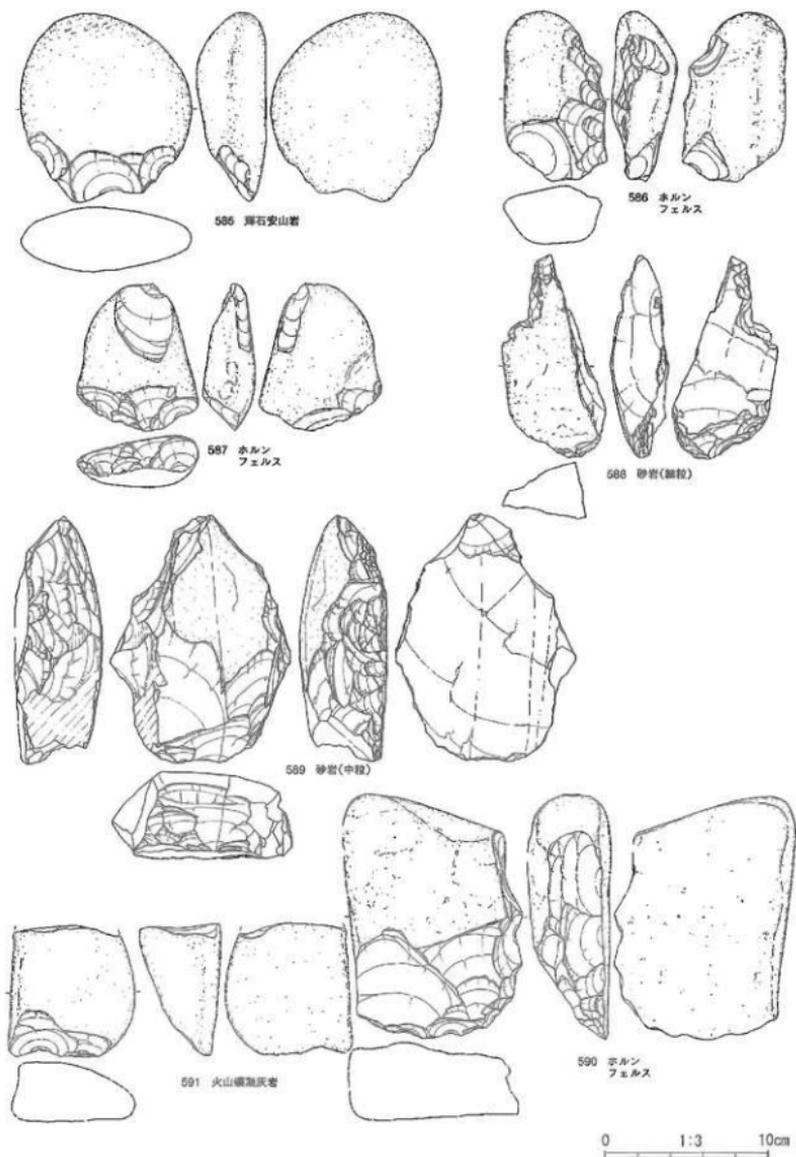
第101図 石器集中域外 出土石器(10)



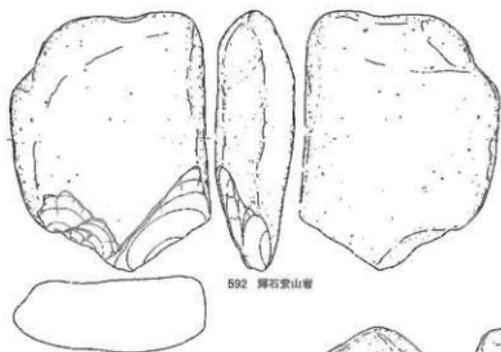
第102図 石器集中域外 出土石器(傳)



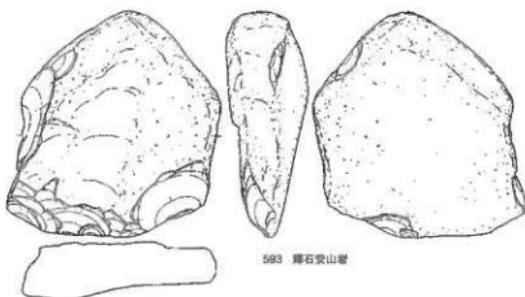
第103図 石器集中域外 出土石器例



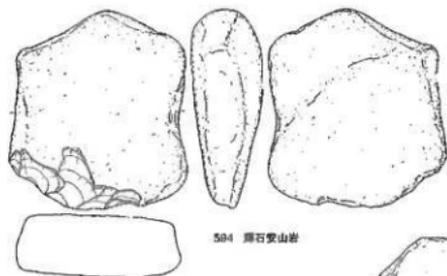
第104図 石器集中域外 出土石器(切)



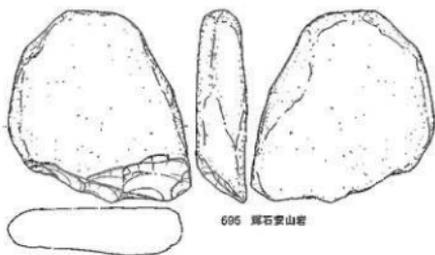
592 輝石雲山岩



593 輝石雲山岩



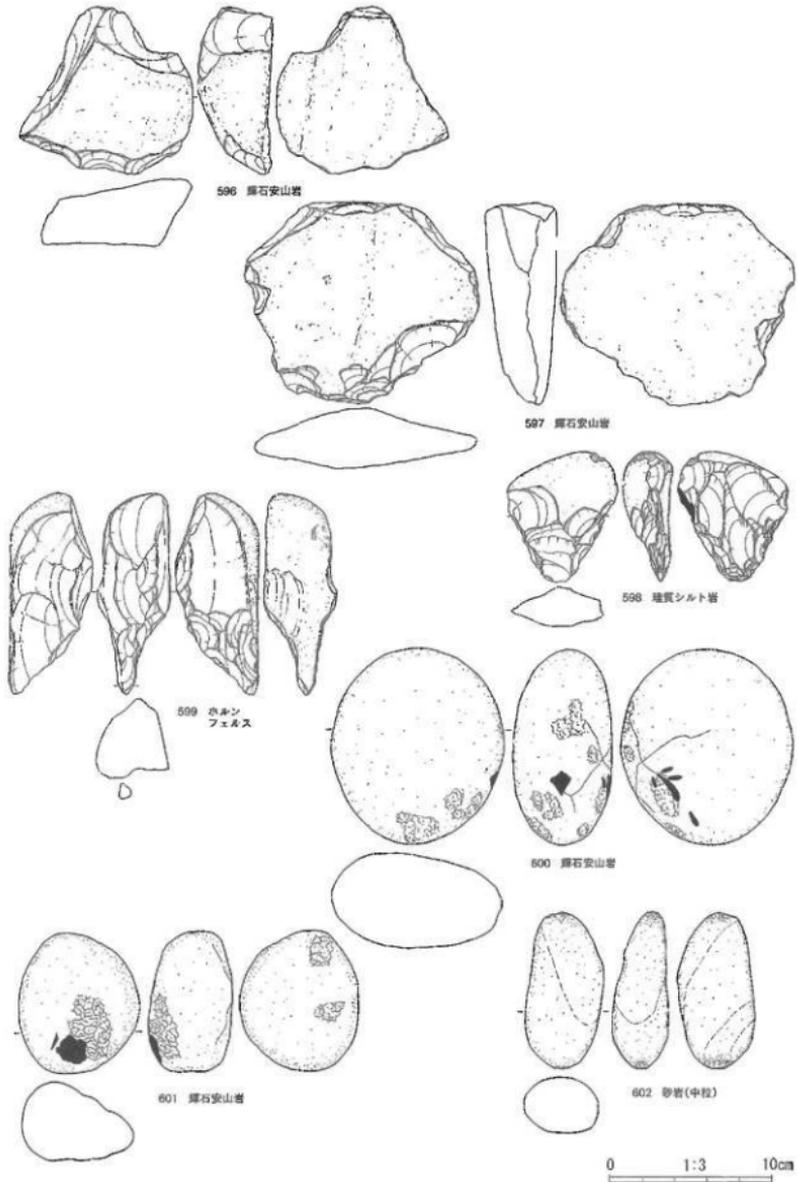
594 輝石雲山岩



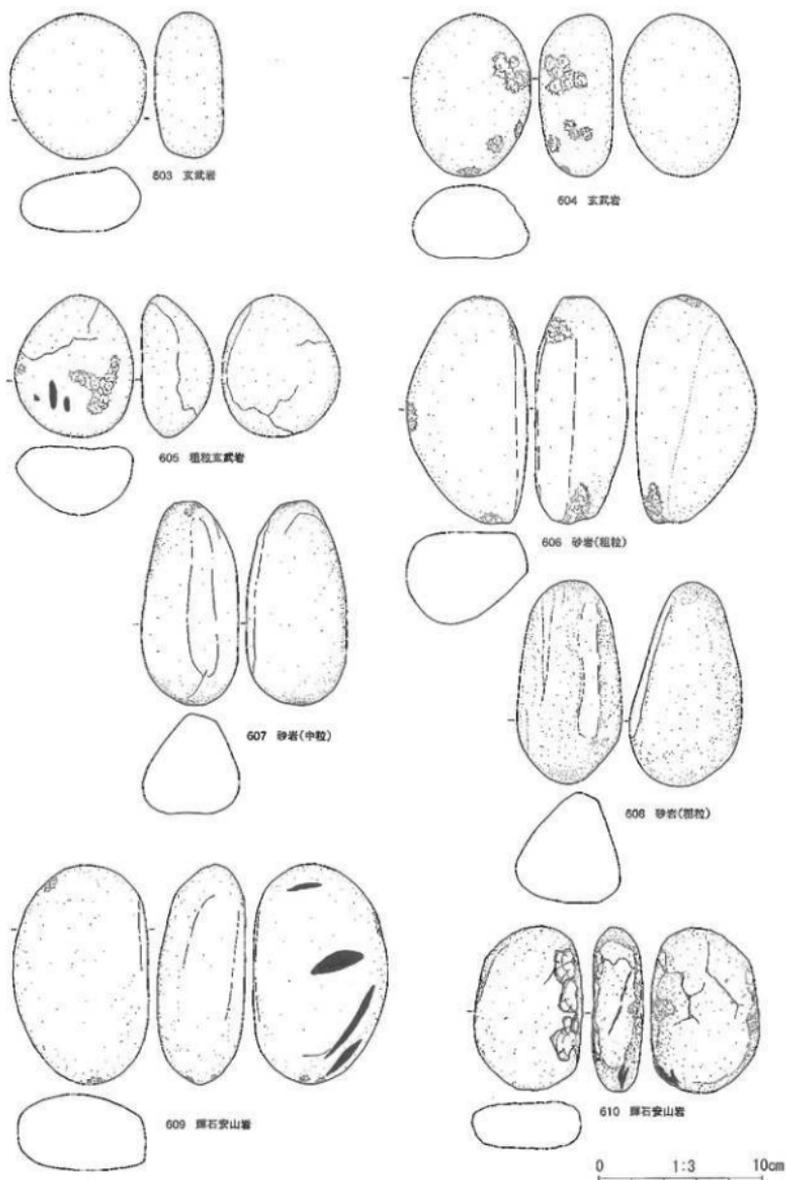
606 輝石雲山岩

0 1:3 10cm

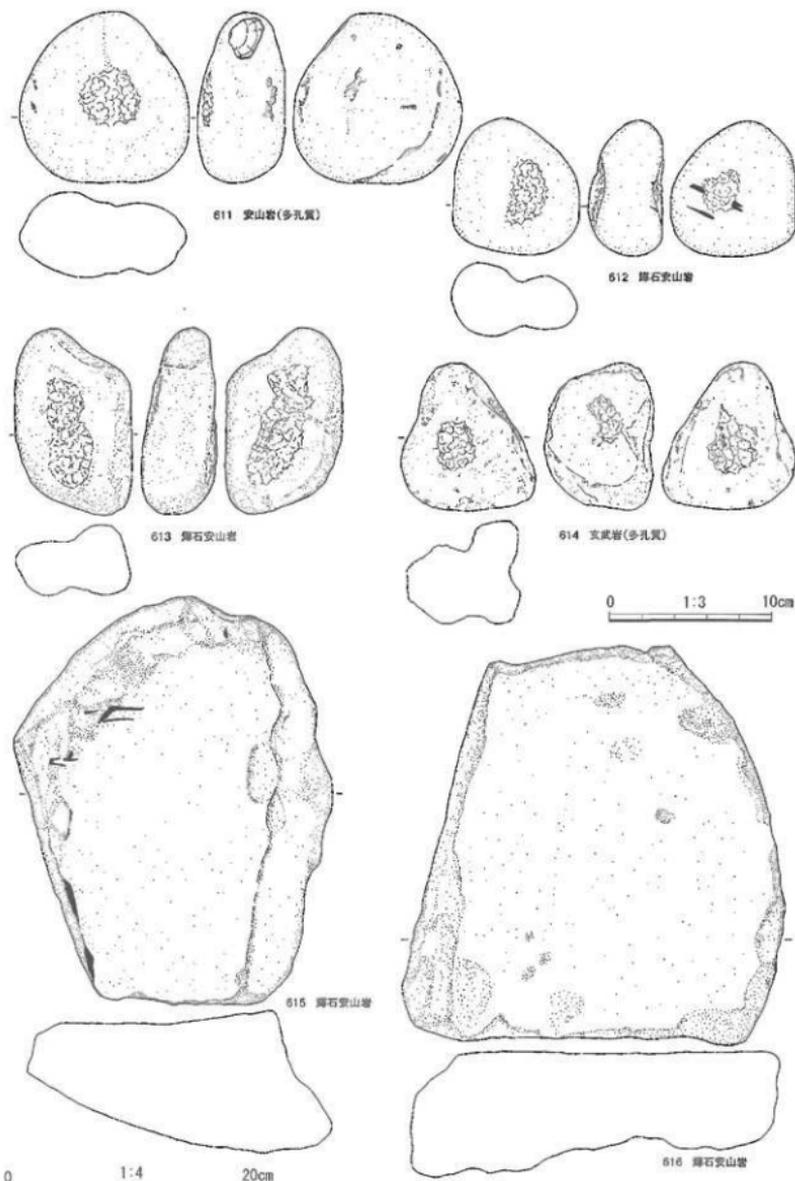
第105圖 石器集中域外 出土石器(2)



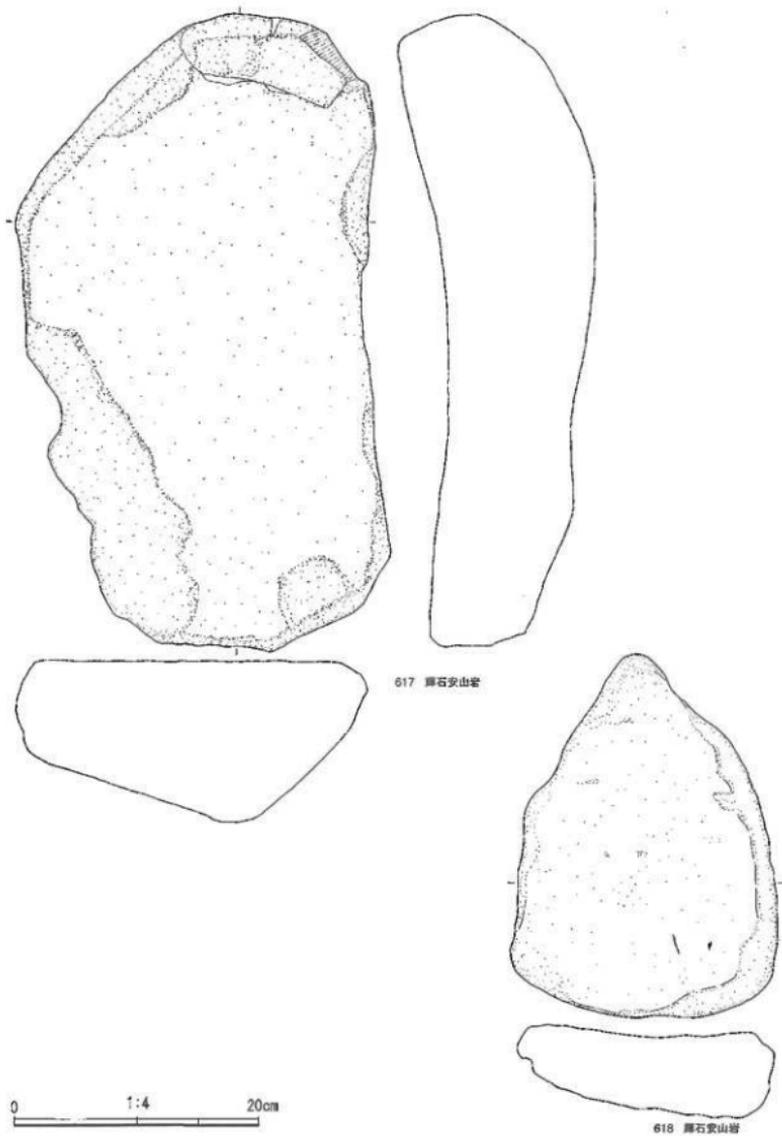
第106図 石器集中域外 出土石器(四)



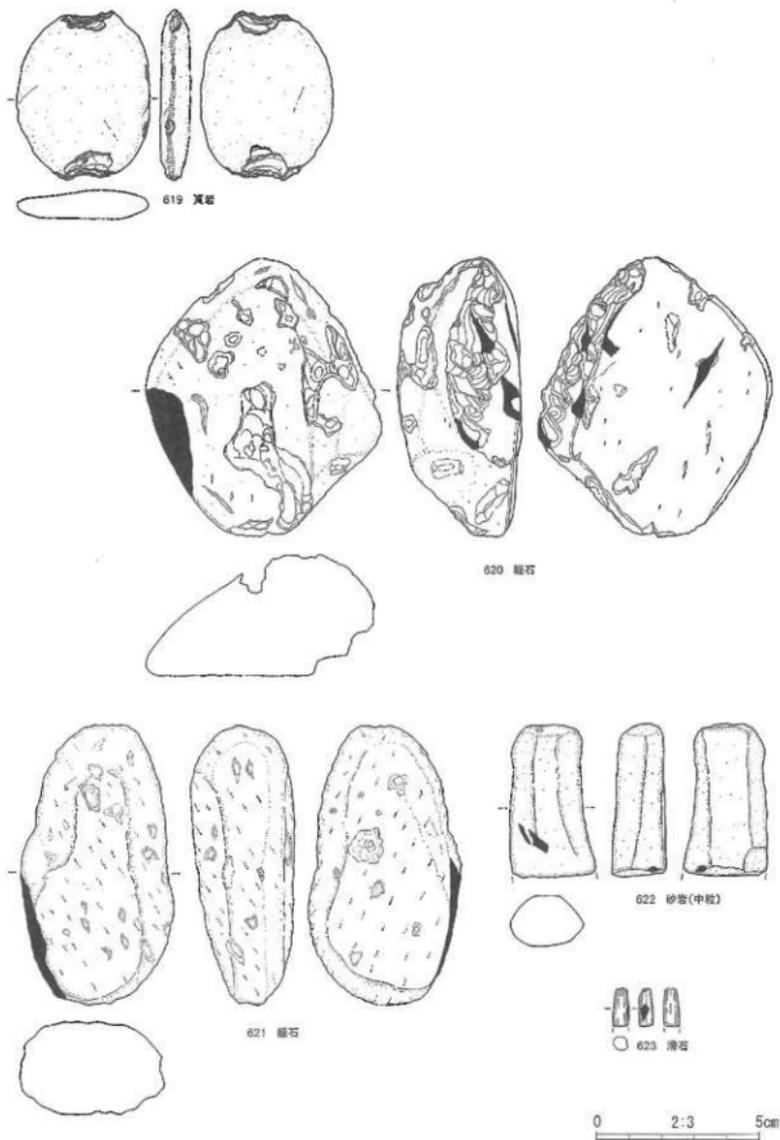
第107图 石器集中城外 出土石器(4)



第108図 石器集中域外 出土石器図



第109圖 石器集中城外 出土石器(2)



第110図 石器集中域外 出土石器刃

種別	種別番号	名称	産地	産状	グレード	石	寸法	産地	石種	長さ	幅	厚さ	重量	欠陥	Y価格	Z価格	備考
421	29-5	11189	KU	F06	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	25.7	15.0	3.1	1.3	94344.175	20544.090	134.090	
424	29-5	13117	KU	G08	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	17.0	15.0	3.3	0.6	94403.371	20736.430	129.790	
425	29-5	12723	AN	F24	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	24.1	21.0	7.2	1.2	94254.529	20642.618	136.470	
426	29-5	9772	FB	F14	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	14.0	14.0	3.7	0.7	94342.500	20511.600	136.840	上級
427	29-5	26391	FB	F17	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	16.0	13.0	4.0	0.1	94341.815	20514.320	140.140	
428	29-5	11397	KU	K17	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	22.0	15.0	4.0	1.0	94428.072	20522.490	136.710	
429	29-5	11911	FB	F18	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	17.0	15.0	3.0	0.1	94322.769	20488.618	136.470	
430	29-5	7900	KU	A022	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	08.0	03.0	0.1	0.0224	20377.124	145.405	片割れのみ	
431	29-5	4029	FB	F05	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	11.0	09.0	0.40	0.2	94460.922	20739.670	135.130	片割れのみ
432	29-5	3038	AN	L10	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	03.0	0.9	0.1	0.0	94303.710	20511.310	140.000	片割れのみ
433	29-5	1217	FB	A023	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	14.1	020.0	3.0	0.1	94356.566	20642.618	140.790	片割れのみ
434	29-5	5141	AN	A024	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	11.0	01.0	2.0	0.0	94331.791	20520.740	147.210	片割れのみ
435	29-5	5155	FB	L06	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	11.0	11.0	2.0	0.1	94381.360	20517.980	143.310	片割れのみ
436	29-5	10229	YL	A027	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	09.0	01.0	2.0	0.2	94229.100	20505.580	147.000	片割れのみ
437	29-5	4054	AN	000	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	11.0	11.0	0.9	0.3	94322.769	20488.618	136.470	片割れのみ
438	29-5	7249	KU	F10	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	28.4	14.1	4.1	1.2	94422.109	20811.120	139.000	
439	29-5	6057	ZK	A718	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	11.0	10.0	0.40	0.40	94342.034	20519.017	149.700	片割れのみ
440	29-5	11417	AN	K12	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	17.0	09.0	3.0	0.1	94487.532	20660.262	138.000	片割れのみ
441	29-5	6755	YL	000	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	4.2	1.1	0.4	0.4	94322.769	20488.618	136.470	片割れのみ
442	29-5	27108	AN	000	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	黒曜石	20.0	10.0	4.0	1.1	94372.008	20728.744	144.010	

第23表 石彫属性

種別	種別番号	名称	産地	産状	グレード	石	寸法	産地	石種	長さ	幅	厚さ	重量	欠陥	Y価格	Z価格	備考
137	30-1	12860	KU	F11	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	69.2	49.0	11.0	20.1	94440.911	20723.803	132.120	
140	30-1	12862	AN	A113	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	45.5	36.1	9.3	17.0	94404.715	20613.620	131.400	
139	30-1	12863	FB	A113	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	32.0	42.0	4.0	0.5	94405.909	20613.620	131.400	
141	30-2	8102	AN	A113	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	42.0	53.0	3.0	0.1	94412.512	20613.620	131.400	
443	30-1	12864	KU	E04	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	42.0	27.0	6.2	0.4	94405.909	20613.620	131.400	
444	30-1	12865	AN	Q14	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	61.0	47.0	8.2	19.7	94431.361	20811.120	139.000	
451	30-1	3080	KU	G08	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	48.0	42.0	6.1	14.0	94430.011	20736.430	139.790	
424	29-5	29662	FB	Z06	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	45.0	45.0	4.0	12.0	94422.208	20744.210	132.000	
425	29-5	12866	AN	A120	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	54.0	40.0	6.3	11.2	94411.004	20583.000	136.000	
426	29-5	12867	KU	T04	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	21.0	32.0	6.0	8.1	94411.004	20723.530	136.110	
427	29-5	12868	FB	A120	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	61.0	74.0	13.1	24.9	94422.011	20846.440	145.000	
428	29-5	12869	AN	A120	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	41.0	30.0	4.0	0.1	94411.004	20613.620	131.400	
429	29-5	12870	AN	A719	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	76.0	59.0	11.1	30.0	94422.011	20846.440	145.000	
440	29-5	12871	FB	L10	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	41.0	30.0	7.1	11.8	94422.011	20846.440	145.000	
441	29-5	8706	FB	Z06	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	37.0	35.0	6.3	11.6	94422.011	20846.440	145.000	
442	29-5	12872	AN	J09	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	36.0	32.0	4.0	12.0	94411.004	20744.210	132.000	
443	29-5	12873	KU	A120	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	28.0	40.0	4.1	1.5	94411.004	20583.000	136.000	
444	29-5	12874	AN	Y24	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	18.0	09.0	3.3	0.7	94427.717	20810.000	145.140	
445	29-5	12875	KU	Z05	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	61.0	41.0	6.0	15.0	94422.011	20810.000	145.140	
446	29-5	12876	KU	Y12	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	102.0	61.0	10.1	20.0	94422.011	20810.000	145.140	

第24表 削磨属性

種別	種別番号	名称	産地	産状	グレード	石	寸法	産地	石種	長さ	幅	厚さ	重量	欠陥	Y価格	Z価格	備考
137	30-1	12860	FB	F11	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	69.2	49.0	11.0	20.1	94440.911	20723.803	132.120	
140	30-1	12862	AN	A113	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	45.5	36.1	9.3	17.0	94404.715	20613.620	131.400	
139	30-1	12863	FB	F11	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	69.2	49.0	11.0	20.1	94440.911	20723.803	132.120	
141	30-2	8102	AN	A113	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	42.0	53.0	3.0	0.1	94412.512	20613.620	131.400	
443	30-1	12864	KU	E04	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	42.0	27.0	6.2	0.4	94405.909	20613.620	131.400	
444	30-1	12865	AN	E04	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	58.0	30.0	10.0	21.0	94405.909	20613.620	131.400	
134	29-1	27205	FB	F-1	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	29.0	24.0	7.1	4.1	94448.187	20872.307	122.000	
135	29-1	27206	AN	G-1	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	8.0	8.0	3.0	1.0	94448.187	20872.307	122.000	
136	29-1	27207	FB	G-1	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	23.0	20.0	2.1	0.8	94448.187	20872.307	122.000	
137	29-1	27208	AN	F-1	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	27.0	18.0	2.0	0.6	94448.187	20872.307	122.000	
138	29-1	27209	FB	F-1	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	33.0	13.0	0.8	0.2	94448.187	20872.307	122.000	
139	29-1	27210	AN	E-2	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	75.0	29.0	6.0	15.0	94448.187	20872.307	122.000	
140	29-1	27211	FB	E-2	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	39.0	33.0	8.0	8.0	94448.187	20872.307	122.000	
141	29-1	27212	KU	G-5	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	35.0	20.0	12.0	6.0	94448.187	20872.307	122.000	
142	29-1	27213	KU	G-5	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	29.0	25.0	12.0	6.0	94448.187	20872.307	122.000	
143	29-1	27214	KU	G-5	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	34.0	29.0	7.0	4.1	94448.187	20872.307	122.000	
144	29-1	27215	AN	G-5	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	26.0	6.0	6.1	1.5	94448.187	20872.307	122.000	
145	29-1	27216	FB	H01	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	30.0	27.0	13.1	11.4	94448.187	20872.307	122.000	
146	29-1	27217	KU	C-1	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	30.0	24.0	17.0	10.0	94448.187	20872.307	122.000	
147	29-1	27218	KU	C-1	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	30.0	40.0	22.0	10.0	94448.187	20872.307	122.000	
148	29-1	27219	FB	H1	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	43.0	40.0	16.0	10.0	94448.187	20872.307	122.000	
149	29-1	27220	FB	G-1	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	31.0	43.0	14.4	11.8	94448.187	20872.307	122.000	
150	29-1	27221	AN	G-1	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	28.0	30.0	14.0	11.0	94448.187	20872.307	122.000	
151	29-1	27222	FB	F-1	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	25.0	26.0	7.0	3.0	94448.187	20872.307	122.000	
152	29-1	27223	AN	J-1	オパール	オパール	オパール	オパール	オパール	40.0	20.0	6.4					

調査年度	調査地区	発掘層	遺物	種別	フリット	原料	産地	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	表面積(mm ²)	X線分析	Y線分析	Z線分析	備考
80	3007	KU	F28	赤いコンテックス	片割製	神奈川産	61.7	6.2	15.1	59.9	9438.52	1060.302	140.620		
80	4-2	1841	FE	F14	緑色片	片割製	64.0	8.9	7.9	17.7	9404.39	2802.986	141.730		
81	4021	FE	N6	緑色片	片割製	69.3	9.6	16.6	65.7	94287.54	2875.546	134.547			
81	4021	FE	V19	赤い片	片割製	68.0	9.1	8.2	59.2	94554.95	2899.229	141.649			
82	4209	AN	V23	赤い片	片割製	65.0	8.1	11.4	221.5	94455.45	2925.300	139.007			
83	4319	KU	AD33	緑色片	片割製	79.7	34.9	9.1	36.4	94595.779	2811.430	150.428			
83	1716	FE	J8	赤い片	片割製	84.0	10.7	16.4	10.9	94401.565	2810.202	133.755			
83	4255	FE	AD13	赤い片	片割製	77.1	11.1	8.2	59.2	94295.780	2897.152	142.066			
84	4319	FE	J6	赤い片	片割製	75.7	16.3	12.1	13.8	94613.717	2828.811	131.021			
84	4319	FE	H6	緑色片	片割製	84.8	46.7	11.1	69.2	94633.109	2812.263	130.210			
85	4302	FE	N22	緑色片	片割製	72.9	16.3	13.0	10.7	94243.250	2974.226	146.426			
85	4081	KU	N14	赤い片	片割製	77.1	29.7	14.4	29.8	94431.201	2825.128	138.680			
87	3016	AN	AF13	赤いコンテックス	片割製	75.0	72.0	10.1	131.9	94132.362	2879.020	140.454			
87	3016	AN	J20	赤いコンテックス	片割製	84.0	38.3	12.4	20.8	94435.467	2810.907	130.534			
89	3053	AN	AC2	赤い片	片割製	64.5	12.2	18.1	20.2	94290.900	2884.867	140.900			
89	3053	AN	AC2	赤い片	片割製	72.2	71.3	15.1	21.1	94217.455	2862.620	140.800			
89	637	AN	AD25	赤い片	片割製	75.3	36.2	5.9	7.2	94283.833	2880.710	131.962			
89	16027	OK	AA32	赤い片	片割製	75.4	69.2	3.2	30.2	94256.544	2884.096	140.722			
89	4084	FE	AA27	赤い片	片割製	68.9	49.7	12.2	46.2	94274.747	2874.581	131.060			
89	4084	FE	AA27	赤い片	片割製	76.4	49.1	13.1	17.3	94332.535	2864.297	140.520			
89	4319	AN	Y8	赤いコンテックス	片割製	54.4	48.4	14.6	69.7	94232.135	2879.320	135.922			
89	4319	AN	Y8	赤いコンテックス	片割製	69.3	32.2	14.1	40.1	94277.560	2879.620	134.154			
89	16025	FE	T8	赤い片	片割製	53.1	49.4	13.4	62.0	94404.783	2897.694	130.113			
89	16025	KU	J20	赤い片	片割製	56.7	60.2	15.1	51.7	94444.872	2812.240	137.980			

第25表 鉄入削器・彫器・石鏝・打製石製品属性

調査年度	調査地区	発掘層	種別	フリット	原料	産地	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	表面積(mm ²)	X線分析	Y線分析	Z線分析	備考
81	401	10313	KU	J1	赤い片	片割製	64.4	10.7	1.3	84406.490	2875.320	124.140		
81	401	10314	FE	AF20	赤い片	片割製	76.7	15.7	10.4	4.9	94135.260	2940.580	150.630	石方型
82	3012	504	FE	AD26	赤い片	赤いコンテックス	45.1	51.7	19.1	21.5	94290.561	2880.220	137.424	
84	401	11482	FE	AA	赤い片	片割製	65.3	12.2	13.2	60.0	94281.480	2879.620	137.410	
84	3006	FE	P17	赤い片	片割製	65.1	27.3	4.1	4042.240	2857.700	143.416			
84	2038	KU	P17	赤い片	片割製	60.4	55.0	16.1	44.0	94349.956	2885.481	133.381	141 打製片と接合	
84	2038	FE	AC16	赤い片	片割製	61.4	27.5	11.4	8.5	94212.009	2874.114	120.894		
84	10789	FE	GO	赤い片	片割製	62.9	13.5	8.2	4.5	94221.460	2879.581	140.866		
84	10810	FE	GO	赤い片	片割製	31.7	13.8	10.8	6.1	94320.960	2878.221	132.932		
84	11418	KU	D-2	赤い片	片割製	61.2	6.7	1.4	0.2	94462.480	2883.761	121.697		
84	3070	FE	F-1	赤い片	片割製	20.1	32.5	14.9	8.1	94442.745	2892.794	125.615		
84	3070	FE	AC2	赤い片	片割製	46.2	2.7	0.2	0.1	94281.660	2879.620	137.416		
84	3070	182	AN	AC12	赤い片	片割製	31.3	31.2	2.5	1.2	94370.947	2869.463	151.044	
84	3045	FE	W10	赤い片	片割製	60.1	12.2	6.3	1.5	94276.234	2880.520	140.561		
84	3045	FE	D10	赤い片	片割製	75.5	12.7	3.5	0.9	94464.010	2874.620	120.480	赤い打製片との接合	
84	3045	FE	GO	赤い片	片割製	25.3	5.1	2.7	1.5	94222.210	2879.620	137.416		
84	3045	KU	H6	赤い片	片割製	68.5	11.3	5.8	3.2	94414.118	2877.220	130.908		
84	3045	FE	W11	赤い片	片割製	64.4	15.8	3.3	0.2	94277.837	2866.245	141.267		
84	3045	FE	D10	赤い片	片割製	31.8	24.8	4.8	0.5	94420.145	2879.620	124.415		
84	11748	FE	F-1	赤い片	片割製	31.1	21.1	7.0	2.1	94249.843	2879.620	137.416		
84	3091	FE	GO	打製石製品	片割製	60.4	19.5	4.7	2.3	94463.833	2880.140	131.615		

第26表 二次加工ある剥片・石刃・打面再生剥片・削片・微細刻痕痕ある剥片属性

調査年度	調査地区	発掘層	種別	フリット	原料	産地	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	表面積(mm ²)	X線分析	Y線分析	Z線分析	備考
80	3049	FE	F-2	二次加工剥片	片割製	赤い片	52.1	17.2	2.1	84450.000	2868.372	122.021		
80	10209	AN	E-2	二次加工削片	片割製	神奈川産赤い片	14.0	18.5	5.7	0.6	94257.300	2869.590	129.638	
80	11443	AN	F-2	二次加工削片	片割製	神奈川産赤い片	39.2	20.1	9.0	4.4	94417.130	2869.031	122.645	
80	11447	AN	D-2	二次加工削片	片割製	神奈川産赤い片	39.3	17.1	2.5	8.0	94212.210	2869.211	122.645	
80	12084	AN	F-2	二次加工削片	片割製	赤い片	12.2	40.7	31.0	13.0	94555.396	2861.623	122.790	
81	20176	AN	E-2	二次加工削片	片割製	赤い片	36.4	34.4	17.1	12.8	94482.874	2862.874	122.880	94
81	12027	AN	G-1	削片	片割製	17.9	30.1	7.4	20.4	94230.190	2867.045	124.660		
81	12027	AN	F-1	削片	片割製	20.9	30.5	10.9	10.2	94418.767	2867.923	125.224		
81	17880	KU	G-1	二次加工削片	片割製	神奈川産赤い片	35.7	30.0	13.4	25.1	94235.407	2876.485	124.986	
81	18006	KU	G-1	二次加工削片	片割製	神奈川産赤い片	11.4	14.2	4.2	6.0	94433.463	2863.476	126.712	
81	19023	AN	G-3	二次加工削片	片割製	神奈川産赤い片	26.1	29.3	14.4	7.2	94428.216	2867.427	124.644	
81	19060	AN	H-1	二次加工削片	片割製	神奈川産赤い片	17.9	24.0	6.4	2.0	94426.427	2876.019	124.622	
81	19060	AN	G-9	二次加工削片	片割製	神奈川産赤い片	8.8	18.3	7.9	1.0	94423.768	2869.215	124.728	
81	20000	AN	H-1	二次加工削片	片割製	神奈川産赤い片	17.7	23.9	2.3	0.2	94420.854	2874.624	124.622	
81	21180	AN	G-9	二次加工削片	片割製	神奈川産赤い片	11.1	17.1	8.4	1.8	94421.789	2861.644	124.642	
81	22124	AN	GO	二次加工削片	片割製	神奈川産赤い片	17.1	2.3	1.0	0.2	94431.308	2868.003	125.200	
81	27703	AN	GO	二次加工削片	片割製	神奈川産赤い片	11.2	10.9	6.2	0.9	94422.015	2868.796	124.963	
81	27919	AN	GO	二次加工削片	片割製	神奈川産赤い片	20.7	13.2	5.8	1.3	94422.440	2868.260	124.613	
81	30917	AN	AD4	二次加工削片	片割製	赤い片	19.1	16.2	9.0	0.8	94456.718	2868.133	127.749	
81	3182	AN	AD1	二次加工削片	片割製	赤い片	55.4	26.7	5.9	3.5	94414.261	2861.111	131.448	
81	15088	AN	AF18	二次加工削片	片割製	赤い片	20.7	46.2	2.5	0.5	94190.273	2864.111	148.830	
81	15076	AN	F-1	二次加工削片	片割製	赤い片	17.4	59.2	2.1	0.6	94201.462	2864.091	148.200	
81	20147	AN	AD16	二次加工削片	片割製	赤い片	14.9	14.1	2.5	0.6	94319.299	2865.025	149.162	
81	3038	FE	AD18	二次加工削片	片割製	赤い片	20.4	24.5	2.8	0.2	94290.284	2864.321	148.243	
81	30711	AN	AF18	二次加工削片	赤いコンテックス	55.1	24.1	4.3	0.3	94418.862	2862.426	129.880		
81	30823	AN	AF18	二次加工削片	赤いコンテックス	51.1	31.1	4.2	0.5	94277.416	2862.426	129.880		
81	11341	AN	FE18	二次加工削片	片割製	赤い片	44.1	44.0	19.2	14.9	94396.513	2864.226	148.242	
81	40463	AN	AD1	二次加工削片	片割製	赤い片	16.1	12.1	2.7	0.7	94421.217	2867.426	124.613	
81	40463	AN	AD1	二次加工削片	片割製	赤い片	22.7	46.7	1.8	1.4	94264.254	2869.282	125.471	
81	40463	AN	AD1	二次加工削片	片割製	赤い片	11.1	8.1	0.2	0.2	94217.017	2868.549	124.748	
81	7185	KU	E13	二次加工削片	片割製	赤い片	63.4	21.7	10.2	10.1	94254.288	2861.024	140.614	
81	8083	神奈川産赤い片	削片	削片	削片	1.1	7.9	2.4	0.2	94272.722	2863.205	124.465		
81	20118	AN	AF21	二次加工削片	片割製	神奈川産赤い片	23.2	18.4	4.2	1.8	94416.264	2864.123	122.200	

第2章 縄文時代の調査の結果

調査年度	調査番号	発掘番号	名称	位置	用途	形状	素材	用途	長さ	幅	厚さ	重量	年代	出所	備考
1973	102	KU-1	G-1	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1973	1973	1/2次
1974	102	FR-1	F-1	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1974	1974	1/2次
1975	102	FR-2	F-2	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1975	1975	1/2次
1976	102	FR-3	F-3	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1976	1976	1/2次
1977	102	FR-4	F-4	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1977	1977	1/2次
1978	102	FR-5	F-5	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1978	1978	1/2次
1979	102	FR-6	F-6	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1979	1979	1/2次
1980	102	FR-7	F-7	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1980	1980	1/2次
1981	102	FR-8	F-8	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1981	1981	1/2次
1982	102	FR-9	F-9	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1982	1982	1/2次
1983	102	FR-10	F-10	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1983	1983	1/2次
1984	102	FR-11	F-11	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1984	1984	1/2次
1985	102	FR-12	F-12	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1985	1985	1/2次
1986	102	FR-13	F-13	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1986	1986	1/2次
1987	102	FR-14	F-14	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1987	1987	1/2次
1988	102	FR-15	F-15	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1988	1988	1/2次
1989	102	FR-16	F-16	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1989	1989	1/2次
1990	102	FR-17	F-17	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1990	1990	1/2次
1991	102	FR-18	F-18	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1991	1991	1/2次
1992	102	FR-19	F-19	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1992	1992	1/2次
1993	102	FR-20	F-20	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1993	1993	1/2次
1994	102	FR-21	F-21	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1994	1994	1/2次
1995	102	FR-22	F-22	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1995	1995	1/2次
1996	102	FR-23	F-23	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1996	1996	1/2次
1997	102	FR-24	F-24	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1997	1997	1/2次
1998	102	FR-25	F-25	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1998	1998	1/2次
1999	102	FR-26	F-26	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	1999	1999	1/2次
2000	102	FR-27	F-27	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2000	2000	1/2次
2001	102	FR-28	F-28	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2001	2001	1/2次
2002	102	FR-29	F-29	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2002	2002	1/2次
2003	102	FR-30	F-30	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2003	2003	1/2次
2004	102	FR-31	F-31	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2004	2004	1/2次
2005	102	FR-32	F-32	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2005	2005	1/2次
2006	102	FR-33	F-33	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2006	2006	1/2次
2007	102	FR-34	F-34	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2007	2007	1/2次
2008	102	FR-35	F-35	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2008	2008	1/2次
2009	102	FR-36	F-36	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2009	2009	1/2次
2010	102	FR-37	F-37	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2010	2010	1/2次
2011	102	FR-38	F-38	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2011	2011	1/2次
2012	102	FR-39	F-39	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2012	2012	1/2次
2013	102	FR-40	F-40	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2013	2013	1/2次
2014	102	FR-41	F-41	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2014	2014	1/2次
2015	102	FR-42	F-42	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2015	2015	1/2次
2016	102	FR-43	F-43	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2016	2016	1/2次
2017	102	FR-44	F-44	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2017	2017	1/2次
2018	102	FR-45	F-45	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2018	2018	1/2次
2019	102	FR-46	F-46	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2019	2019	1/2次
2020	102	FR-47	F-47	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2020	2020	1/2次
2021	102	FR-48	F-48	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2021	2021	1/2次
2022	102	FR-49	F-49	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2022	2022	1/2次
2023	102	FR-50	F-50	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2023	2023	1/2次
2024	102	FR-51	F-51	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2024	2024	1/2次
2025	102	FR-52	F-52	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2025	2025	1/2次
2026	102	FR-53	F-53	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2026	2026	1/2次
2027	102	FR-54	F-54	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2027	2027	1/2次
2028	102	FR-55	F-55	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2028	2028	1/2次
2029	102	FR-56	F-56	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2029	2029	1/2次
2030	102	FR-57	F-57	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2030	2030	1/2次
2031	102	FR-58	F-58	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2031	2031	1/2次
2032	102	FR-59	F-59	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2032	2032	1/2次
2033	102	FR-60	F-60	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2033	2033	1/2次
2034	102	FR-61	F-61	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2034	2034	1/2次
2035	102	FR-62	F-62	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2035	2035	1/2次
2036	102	FR-63	F-63	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2036	2036	1/2次
2037	102	FR-64	F-64	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2037	2037	1/2次
2038	102	FR-65	F-65	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2038	2038	1/2次
2039	102	FR-66	F-66	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2039	2039	1/2次
2040	102	FR-67	F-67	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2040	2040	1/2次
2041	102	FR-68	F-68	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2041	2041	1/2次
2042	102	FR-69	F-69	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2042	2042	1/2次
2043	102	FR-70	F-70	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2043	2043	1/2次
2044	102	FR-71	F-71	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2044	2044	1/2次
2045	102	FR-72	F-72	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2045	2045	1/2次
2046	102	FR-73	F-73	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2046	2046	1/2次
2047	102	FR-74	F-74	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2047	2047	1/2次
2048	102	FR-75	F-75	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2048	2048	1/2次
2049	102	FR-76	F-76	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2049	2049	1/2次
2050	102	FR-77	F-77	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2050	2050	1/2次
2051	102	FR-78	F-78	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2051	2051	1/2次
2052	102	FR-79	F-79	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2	100	2052	2052	1/2次
2053	102	FR-80	F-80	竪穴	竪穴	粘土	竪穴	竪穴	100	10	2				

発掘 番号	発掘 年度	発掘 種別	アゾ ビタ	種別	本 名	発掘 面積 (㎡)	文書 Y座標	文書 X座標	発掘 年度	発掘 種別	アゾ ビタ	種別	本 名	発掘 面積 (㎡)	文書 Y座標	文書 X座標	
11029	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡(東側)	14.4	49409.222	29020.183	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡(東側)	14.4	49409.222	29020.183	
11030	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡(西側)	3.1	49407.260	29020.184	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡(西側)	3.1	49407.260	29020.184	
11105	1984	PR	AS2	BE2	ガサス遺跡(東側)	3.7	49409.940	29034.477	147.84	2003	PR	AS2	BE2	ガサス遺跡(東側)	3.7	49409.940	29034.477
11302	1984	PR	AS2	BE2	ガサス遺跡(東側)	6.1	49407.147	29033.489	147.89	2003	PR	AS2	BE2	ガサス遺跡(東側)	6.1	49407.147	29033.489
13730	1984	PR	AS2	BE2	ガサス遺跡(西側)	3.0	49401.620	29037.864	147.925	2003	PR	AS2	BE2	ガサス遺跡(西側)	3.0	49401.620	29037.864
18512	1984	PR	AS2	BE2	ガサス遺跡(西側)	11.7	49401.400	29037.149	134.30	2003	PR	AS2	BE2	ガサス遺跡(西側)	11.7	49401.400	29037.149
20729	1984	PR	AS2	BE2	ガサス遺跡(西側)	5.6	49403.943	29033.629	147.854	2003	PR	AS2	BE2	ガサス遺跡(西側)	5.6	49403.943	29033.629
26238	1984	PR	AS2	BE2	鹿島遺跡	3.1	49434.389	29033.384	148.04	2003	PR	AS2	BE2	鹿島遺跡	3.1	49434.389	29033.384
26955	1984	PR	AS2	BE2	鹿島遺跡	3.1	49434.389	29033.384	148.04	2003	PR	AS2	BE2	鹿島遺跡	3.1	49434.389	29033.384
29468	1984	PR	AS2	BE2	鹿島遺跡	2.7	49434.389	29033.384	148.04	2003	PR	AS2	BE2	鹿島遺跡	2.7	49434.389	29033.384
30596	1984	PR	AS2	BE2	鹿島遺跡	8.7	49436.917	29033.605	150.263	2003	PR	AS2	BE2	鹿島遺跡	8.7	49436.917	29033.605
11154	1984	PR	AS2	BE2	鹿島遺跡	6.7	49434.714	29032.833	148.031	2003	PR	AS2	BE2	鹿島遺跡	6.7	49434.714	29032.833
4057	1984	PR	AS2	BE2	五石遺跡	13.7	49426.009	29039.747	151.153	2003	PR	AS2	BE2	五石遺跡	13.7	49426.009	29039.747
8944	1984	PR	AS2	BE2	五石遺跡	6.4	49437.876	29048.739	151.864	2003	PR	AS2	BE2	五石遺跡	6.4	49437.876	29048.739
9545	1984	PR	AS2	BE2	五石遺跡	2.5	49436.029	29046.304	150.179	2003	PR	AS2	BE2	五石遺跡	2.5	49436.029	29046.304
9461	1984	PR	AS2	BE2	五石遺跡	3.0	49431.254	29039.205	151.049	2003	PR	AS2	BE2	五石遺跡	3.0	49431.254	29039.205
9839	1984	PR	AS2	BE2	五石遺跡	38.7	49430.711	29042.100	150.299	2003	PR	AS2	BE2	五石遺跡	38.7	49430.711	29042.100
10061	1984	PR	AS2	BE2	鹿島遺跡	2.3	49432.290	29040.422	150.415	2003	PR	AS2	BE2	鹿島遺跡	2.3	49432.290	29040.422
1	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	31.4	49435.219	29046.414	150.743	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	31.4	49435.219	29046.414
4	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	15.1	49437.123	29046.317	150.427	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	15.1	49437.123	29046.317
6	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	3.0	49436.448	29045.279	150.649	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	3.0	49436.448	29045.279
9	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	9.4	49437.200	29043.233	150.160	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	9.4	49437.200	29043.233
11	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	3.0	49432.290	29040.422	150.415	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	3.0	49432.290	29040.422
25	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	11.7	49437.660	29043.237	150.287	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	11.7	49437.660	29043.237
32	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	5.0	49434.254	29042.100	150.299	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	5.0	49434.254	29042.100
40	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	4.9	49436.254	29033.629	147.854	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	4.9	49436.254	29033.629
139	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	12.0	49433.130	29033.629	147.854	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	12.0	49433.130	29033.629
147	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	9.0	49437.660	29043.237	150.287	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	9.0	49437.660	29043.237
182	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	10.2	49434.254	29042.100	150.299	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	10.2	49434.254	29042.100
184	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	10.2	49434.254	29042.100	150.299	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	10.2	49434.254	29042.100
428	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	15.3	49430.430	29043.629	148.075	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	15.3	49430.430	29043.629
447	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	16.0	49431.144	29043.629	148.075	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	16.0	49431.144	29043.629
855	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	3.0	49436.917	29043.629	148.075	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	3.0	49436.917	29043.629
856	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	3.0	49436.917	29043.629	148.075	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	3.0	49436.917	29043.629
9548	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	2.8	49436.108	29043.629	148.075	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	2.8	49436.108	29043.629
9553	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	6.1	49436.786	29043.629	148.075	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	6.1	49436.786	29043.629
9604	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	2.0	49436.433	29043.629	148.075	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	2.0	49436.433	29043.629
9908	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	5.0	49438.433	29039.629	150.366	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	5.0	49438.433	29039.629
9935	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	1.3	49432.144	29039.629	150.366	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	1.3	49432.144	29039.629
9928	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	2.3	49432.307	29037.264	151.174	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	2.3	49432.307	29037.264
9934	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	1.8	49432.773	29037.264	151.174	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	1.8	49432.773	29037.264
9923	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	20.3	49434.360	29043.629	148.075	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	20.3	49434.360	29043.629
9445	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	26.7	49430.980	29027.264	149.481	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	26.7	49430.980	29027.264
9492	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	4.4	49432.144	29049.629	148.767	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	4.4	49432.144	29049.629
9635	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	20.3	49434.360	29043.629	148.075	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	20.3	49434.360	29043.629
9839	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	48.3	49432.773	29043.629	148.075	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	48.3	49432.773	29043.629
9841	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	11.1	49432.001	29043.629	148.075	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	11.1	49432.001	29043.629
9875	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	1.0	49432.677	29043.629	148.075	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	1.0	49432.677	29043.629
9876	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	2.0	49432.677	29043.629	148.075	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	2.0	49432.677	29043.629
9883	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	18.0	49436.444	29039.629	147.854	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	18.0	49436.444	29039.629
9894	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	5.8	49436.290	29037.264	149.481	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	5.8	49436.290	29037.264
9895	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	2.7	49432.773	29037.264	151.174	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	2.7	49432.773	29037.264
9897	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	4.0	49432.444	29037.264	151.174	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	4.0	49432.444	29037.264
9903	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	1.8	49432.677	29037.264	151.174	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	1.8	49432.677	29037.264
9904	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	6.9	49432.677	29037.264	151.174	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	6.9	49432.677	29037.264
9908	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	8.0	49434.360	29043.629	148.075	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	8.0	49434.360	29043.629
10341	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	5.2	49436.290	29043.629	148.075	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	5.2	49436.290	29043.629
10347	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	8.0	49436.433	29043.629	148.075	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	8.0	49436.433	29043.629
10448	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	88.4	49430.430	29043.629	148.075	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	88.4	49430.430	29043.629
10623	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	16.7	49438.433	29046.329	148.807	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	16.7	49438.433	29046.329
10632	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	20.7	49436.447	29039.629	148.767	2003	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	20.7	49436.447	29039.629
10643	1984	PR	AS2	BE2	カヌシ遺跡	38.3	49437.014	29043.629	148.075	2003							

第3章 弥生時代の調査の成果

1 概要

今回の調査では、調査区南西端において、弥生時代の竪穴状遺構1基を検出し、覆土から土器片が出土した。遺構外からは、磨製石鏃が2点出土した。

2 遺構と遺物

(1) 竪穴状遺構

竪穴状遺構は、調査区の南西端の、西へ傾斜する斜面上にあり、標高は119mである。北側は調査区外のため未調査であるが、遺構の形状は不整形の長方形であると考えられる。覆土は硬化しておらず、床面を明確に確認できなかった。掘方底面にいくつかのピット状の掘り込みを検出した。これらは焼土や炭化物を含んでおり、炉などを埋めた跡と考えられる。

(2) 遺構出土の遺物

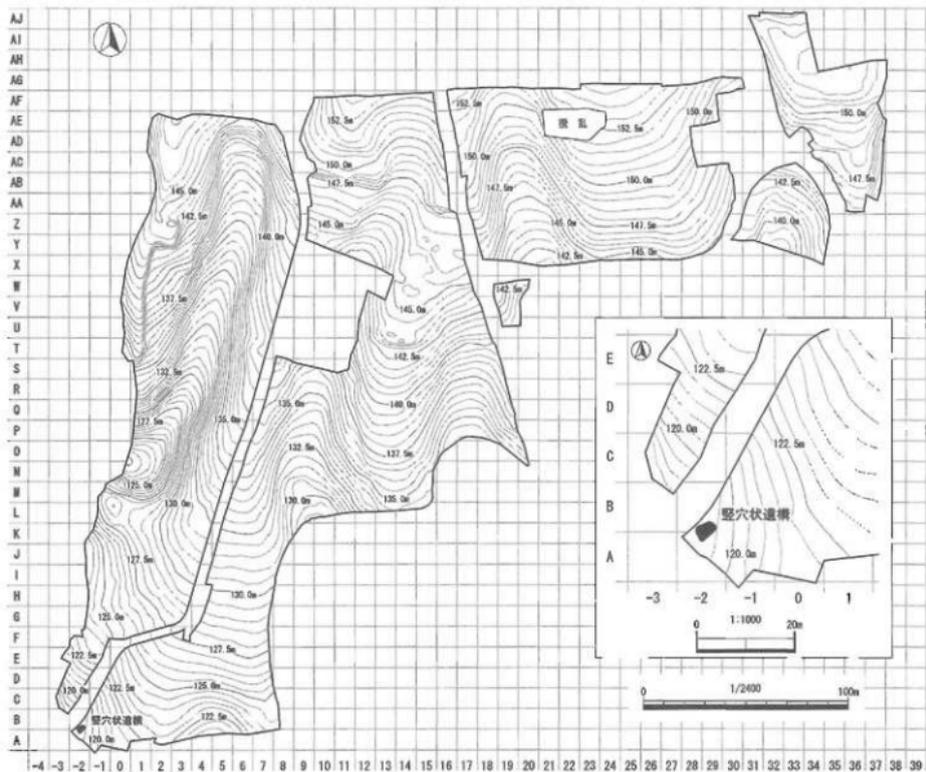
竪穴状遺構において土器片が出土した。残存状況の良好な以下の3点について報告する。これらはいずれも、後期中葉の壺形土器と考えられる。

624は口縁部破片である。口縁部は大きく外反し、僅かに薄く折り返している。折り返し断面は扁平である。頸部は短い。外面、内面ともに斜位のハケによる調整を施した後、指頭圧痕を加えている。頸部内面には輪積みの痕が認められる。625は肩部の破片である。外面は、短い原体のLRとRLの縄文を、交互に施文して羽状の地文とする。肩部上位に横位の円形浮文を3つ1単位として、推定4～5箇所貼付している。内面には輪積みの痕が見られる。頸部内面には板状のものでナデつけた痕が確認できる。626は胴部から底部にかけての破片である。表面は外面、内面とも摩滅しており、調整は不明である。底部は平底である。最大径は胴部下位22.0cmで、無花果形を呈している。

3 遺構外出土遺物

弥生時代の石器であることが明確な磨製石鏃を抽出した。他に、縄文時代の石器として報告した中に弥生時代のものが含まれる可能性があるが、ごく少数であると予想され、また分類が困難であった。

627は磨製石鏃の先端部片と考えられる。体部中央は扁平であり、先端部付近にわずかに鋸が作り出されている。628は弥生時代中期後葉以降に認められる凹基の有孔磨製石鏃である。体部中央は扁平で、刃部付近で屈曲して、鋭い刃部を形成する。穿孔は両面からなされる。挟り部にも研磨が施されている。先端部と片方の脚部は折損する。

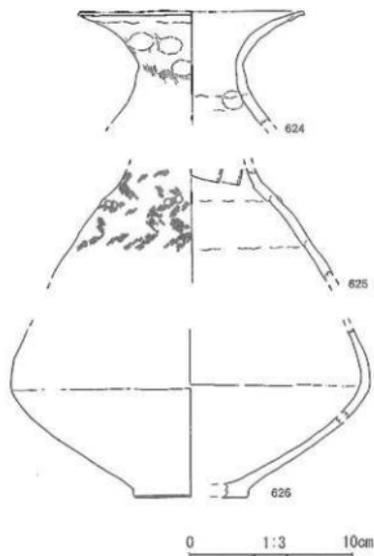


第111図 弥生時代遺構全体図

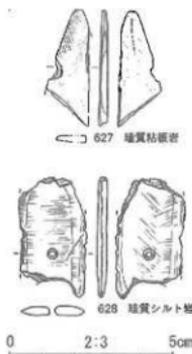


- 1 黒褐色土 (10195/3) 粘強い、細まりやや強い、明褐色スコリア($\phi 1\sim 3\text{mm}$)を少量含む。
- 2 黒褐色土 (10193/2) 粘強い、細まりやや強い、明褐色スコリア($\phi 1\sim 3\text{mm}$)を少量含む。
- 3 暗褐色土 (70193/4) 粘強い、細まりやや強い、明褐色スコリア($\phi 1\sim 3\text{mm}$)を少量含む。炭化物を含む。
- 4 暗赤褐色土 (5193/3) 粘強い、細まり強い、焼土粒を少量含む。
- 5 黒褐色土 (10192/3) 粘強い、細まりやや強い、明褐色スコリア($\phi 1\sim 3\text{mm}$)を少量含む。
- 6 黒色土 (10192/1) 粘強い、細まりやや強い、明褐色スコリア($\phi 1\sim 3\text{mm}$)を少量含む。

第112図 竪穴状遺構検出状況



第113図 堅穴状遺構出土遺物



第114図 弥生時代遺構外出土遺物

第36表 弥生時代堅穴状遺構属性

遺構名	現場遺構名	グリッド	層位	長辺(m)	短辺(m)	最大深(m)	平面形態	遺物	備考
堅穴状遺構	SB01	A/B-2	KU	4.3	3.1	0.9	不整形	弥生土器(後期中期)	両中は捜査

第37表 弥生時代土器属性

図版番号	図版番号	遺構名	現場遺構名	グリッド	器種	計測値(cm)	色調	胎土	焼成
624	58	堅穴状遺構	SB01	B02 C02	甕	口径(13.7) 胴部径(6.4)	7.5YR 7/6	硬 密 白色粒子多、石英、黒色粒子を含む	硬
625	58	堅穴状遺構	SB01	A02	甕	最大径(17.2) 胴部径(4.5) 器高(7.0)	7.5YR 7/4 にぶい藍	密 石英、白色粒子、黒色粒子を含む	硬
626	58	堅穴状遺構	SB01	A02 B02	甕	最大径(22.0) 口径(6.8) 器高(10.4)	7.5YR 6/6	硬 密 石英、輝石、白色粒子を含む	硬

第38表 弥生時代石器属性

検出番号	遺物番号	図版番号	層位	グリッド	器種	石材	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重さ(g)	X座標	Y座標	Z座標
627	24237	58	覆土	H01	磨製石鏃	珪質粘板岩	35.9	13.6	2.5	1.3	-94423.789	28695.805	126.985
628	1896	58	表土	J07	磨製石鏃	珪質シルト岩	36.0	20.5	2.5	2.6	-94404.919	28757.537	131.453

(注) 括弧内は検出層

第4章 古墳時代～律令期の調査の成果

第1節 調査の概要

今回実施した第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財調査においては、5基の古墳を調査した。根古屋古墳群自体の存在は古くから知られていたが、調査が行われたのはこれまでに的場古墳と呼ばれる1基のみであった（沼津市教育委員会 1985）。

調査を行った5基の古墳は、いずれも第二東名建設事業に伴う確認調査で新たに発見された古墳である。標高127～149mの緩斜面に展開し、いずれも横穴式石室を埋葬施設とし、古墳時代後期の所産と考えられるものである。概して残存状況は悪く、いずれも上部の大半を削平されていた。このような状況ではあるが、1号墳と3号墳、4号墳は周溝の一部が残存し、円墳であることが判明した。埋葬施設の石材の抜き取りも激しく、床面にまで攪乱が及んでいるものが多い。そのため、石室の形状を詳細に把握することは困難であった。いずれも無袖式石室であるが、開口部に対し玄室床面が一段低くなるという、駿河東部における特徴的な石室形態を採用していることは注目できよう。

上記のとおり遺存状況が良好ではないため、遺物は失われた可能性が高いが、1号墳の石室中央部付近から出土した圭頭大刀は特筆すべき遺物である。1号墳は石室規模も5基中では最大であり、根古屋古墳群中の有力墳の一つといえよう。

3号墳と同じ尾根上には、2基の方形周溝状遺構が検出された。同様の遺構は田頭山古墳群等で検出例があり、周辺の古墳との関連も注目される。

第2節 遺構

1 1号墳

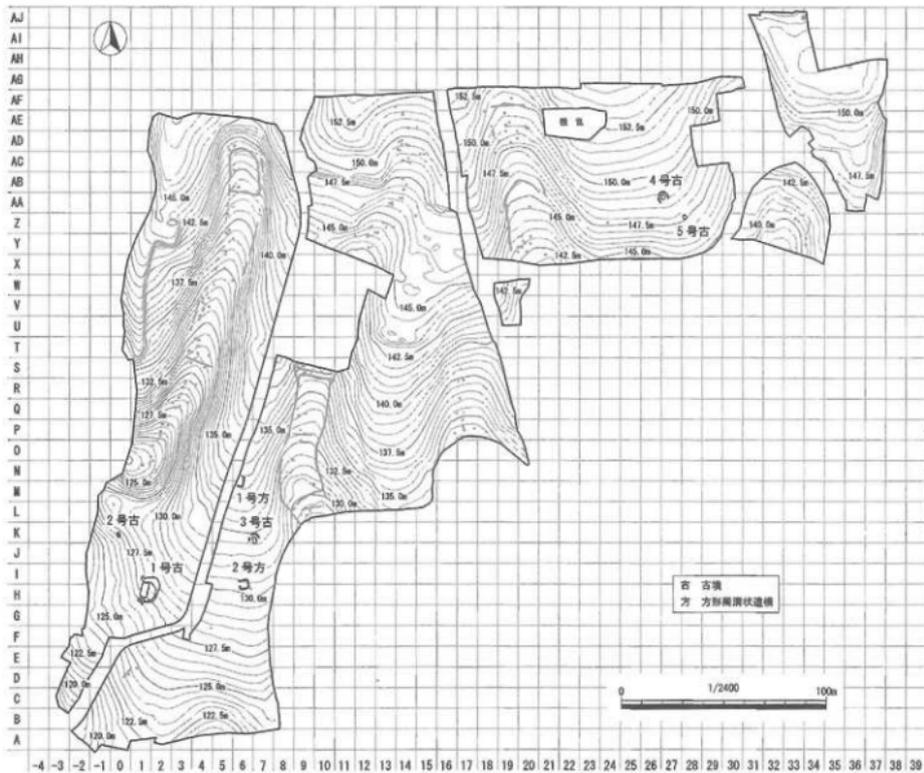
(1) 墳丘と外部施設（第116・117図）

古墳の位置 1号墳は調査区南西の緩斜面に位置する。標高は約128mである。北西30mには2号墳、北東60mには3号墳が所在する。今回調査した5基の古墳の中では最も南に位置する。

墳丘と規模 後世の削平のため盛土は残存しておらず、本来の高さについては不明である。しかし、検出した周溝から東西に対し南北がやや長い、楕円形に近い円墳であることがわかる。古墳の規模は東西長8.5m前後と推定でき、南北長は約9.5mである。

周溝 周溝は斜面下位にあたる墳丘の西側以外で確認した。ただし、検出面からの深さは最大でも0.3m程度と浅い。本来は、もう少し深いものであったと推測できる。周溝幅は、現状で北東部が最も広く3.5mであるが、この部分のみ幅が広いこと、この部分が斜面上位にあたり、水路となりやすいことから考えると、この部分は大きく崩落している可能性が高く、本来は北側・東側のように約1～2m程度であった可能性が高い。

墓道 墓道は埋葬施設から、直線的に南に向かって周溝の外側にまで伸びる。検出長は3.6m、検出面からの深さは最深部で0.3mである。本来は、斜面下方に向かって、さらに続いていたと考える。なお、周溝との交点は、周溝底面に比べ墓道底面が一段低い。



第115図 古墳時代・律令期遺構全体図

(2) 埋葬施設 (第118～120図)

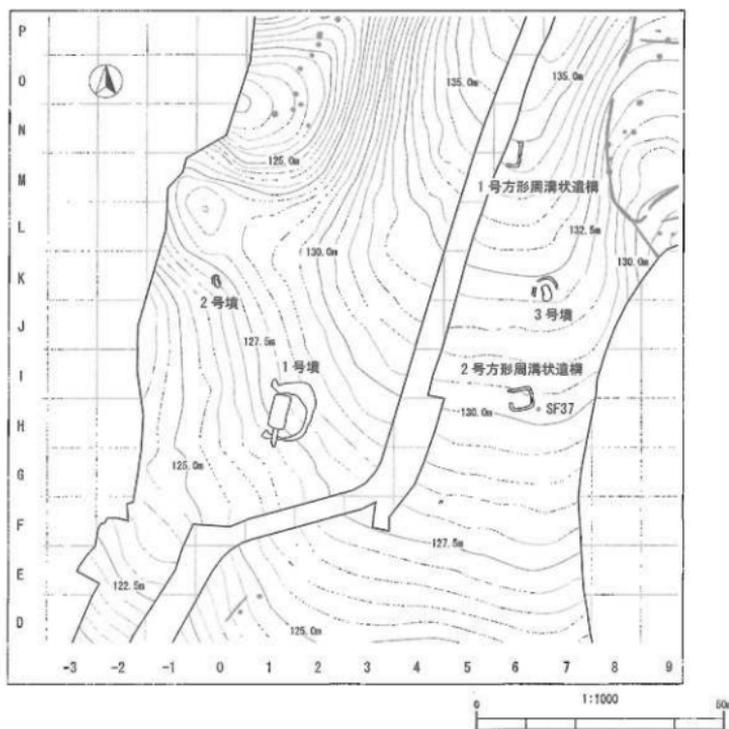
埋葬施設の形状と残存状況 埋葬施設はほぼ南に向かって開口する横穴式石室で、主軸方位はN-11°-Eである。後世の開墾等により石室の上部が破壊され、石室の立体的構造は明確ではないが、玄室平面形は長方形の無袖形石室である。

墓壇 墓壇は竪穴構造の隅丸長方形で、南側に墓道が接続する。墓道は墓壇の接続箇所が墓壇よりも一段高く、墓壇から一旦0.4m程高くなり、そこから0.8m南で0.2m下がる。つまり、墓壇自体が段構造で、墓道は墓壇側が高く、墓壇から0.8mで0.2m程の段差がある。

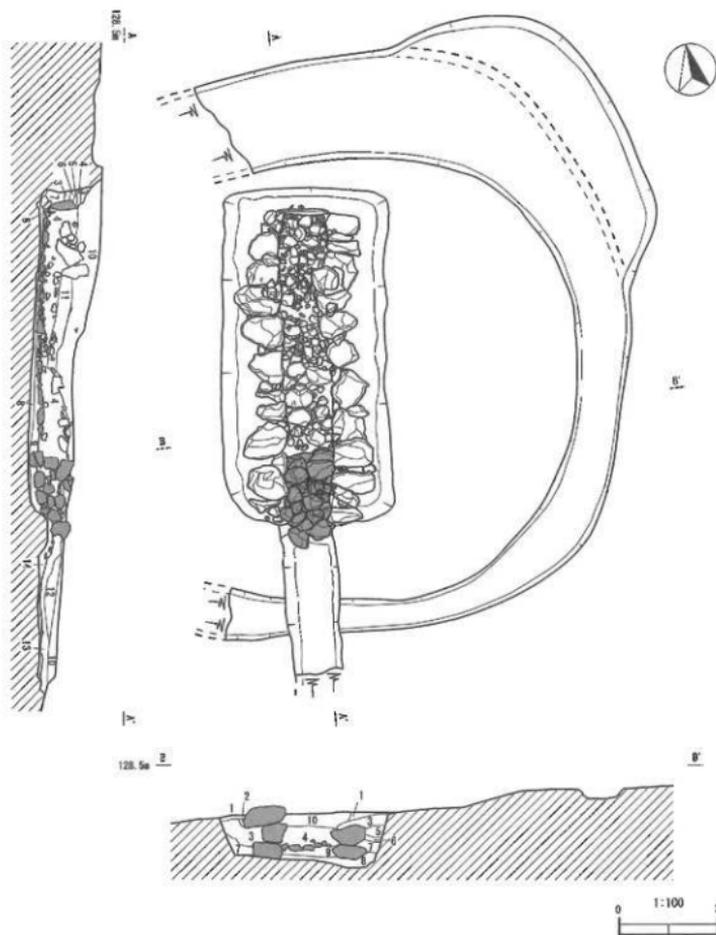
墓壇底面は東側のほうが深く掘り込まれており、土層を観察すると基底石が据えられる面まで一旦掘ったところを一部埋め戻して床面を形成したと想定できる。埋め戻した床の厚さは最大で0.2mである。なお、奥壁や側壁基底石設置にあたって石材を設置するために小土坑が掘削されている(第120図)。

また、奥壁・側壁と墓壇の間には、一部粘性が強い(粘土か)土砂により裏込めがなされる。裏込めの層位は側壁各段と対応している箇所があり、側壁の各段の積み上げと裏込めを併行して実施した様子が窺える。

墓壇の規模は石室規模を一回り上回る程度で、長さは7.1m、幅は奥壁部分が最も広く3.4m、開口部側は3.3mである。平面形は長方形を呈する。検出面からの深さは最深部で1.3mである。

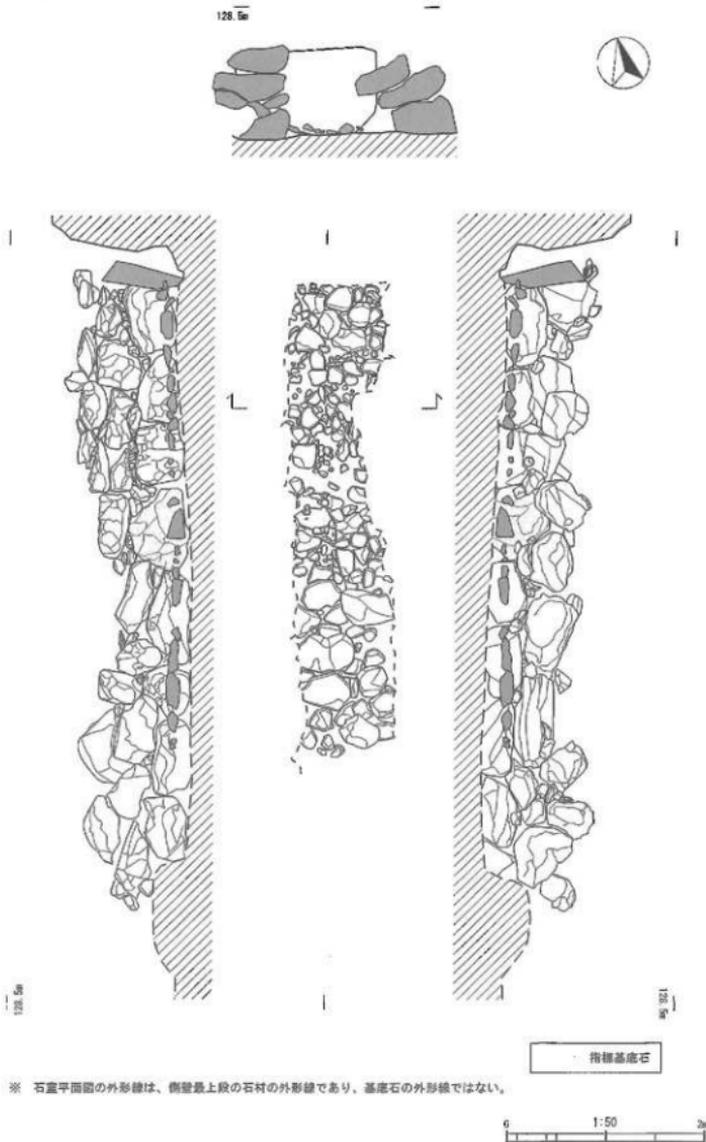


第116図 1～3号墳周辺地形



- | | | | |
|-------------------|---|-------------------|---------------------------------------|
| 1 黄褐色土 (10YR5/3) | 粘弱い、締まり弱い、ロームブロック(φ30~50mm)を含む。 | 8 赤黄褐色土 (10YR5/6) | 粘やや強い、締まり強い、ロームブロック、瓦・陶片が主体。 |
| 2 灰褐色土 (7.5YR4/2) | 粘弱い、締まりやや強い、AN・Rの混土層。 | 9 暗褐色土 (10YR2/4) | 粘やや強い、締まりやや強い、やや大型の油床下に埋土に用いられた土層。 |
| 3 明褐色土 (7.5YR5/6) | 粘弱い、締まりやや強い、ロームブロック(φ20~30mm)を多量に含む。 | 10 覆土 | |
| 4 褐色土 (7.5YR4/3) | 粘弱い、締まりやや強い、ロームブロック(φ10~20mm)を多量に含む、凝縮じりの締まりの極小埋土層、遺物散在層。 | 11 黄褐色土 (10YR6/3) | 粘弱い、締まりやや強い、層下に黒色土の閉層が認められる埋土層。 |
| 5 黒褐色土 (7.5YR2/2) | 粘弱い、締まりやや強い、ローム殻(φ2~3mm)を多量に含む。 | 12 黄褐色土 (10YR4/3) | 粘やや弱い、締まりやや強い、L層をベースにローム殻を含む、礫を少量含む。 |
| 6 褐色土 (7.5YR4/3) | 粘弱い、締まりやや弱い。 | 13 黒褐色土 (10YR3/1) | 粘やや強い、締まりやや強い、ローム殻を不規則に含む、礫を少量含む。 |
| 7 黒褐色土 (7.5YR2/2) | 粘弱い、締まりやや強い、ローム殻(φ2~3mm)を多量に含む。 | 14 黄褐色土 (10YR5/2) | 粘強い、締まり強い、ローム殻及びブロックを多量に含む、礫も多量に混在する。 |

第117図 1号墳全体図



※ 石室平面図の外形線は、側壁最上段の石材の外形線であり、基準石の外形線ではない。

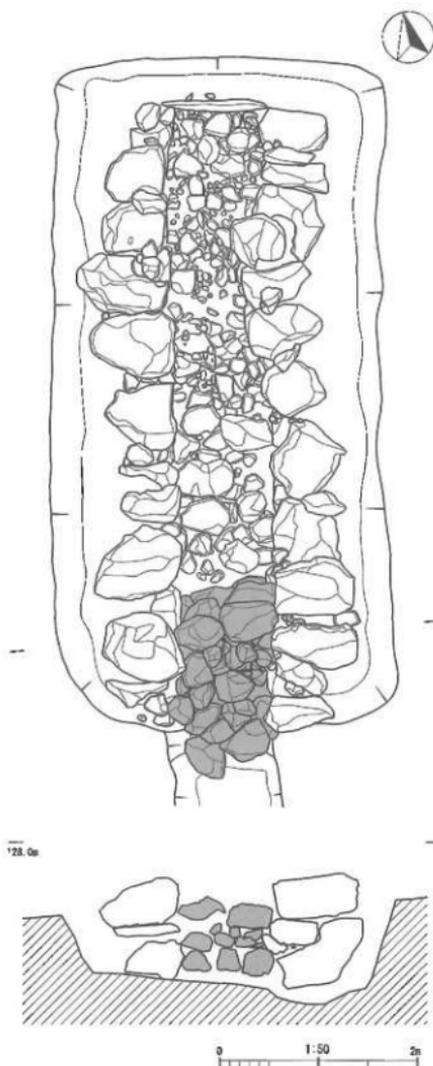
第118図 1号墳石室展開図

石室の規模 石室規模は全長6.3m、奥壁幅0.9m、開口部幅0.9mで、最大幅は奥壁から3.2mのところ

で1.0mである。残存高は床面の敷石上面から測り、奥壁で0.8m、側壁は奥壁から1.0mのところの西壁で1.0mであるが、本来の高さについては不明である。石室規模から推測すると1.5m以上2m以下であった可能性が高い。

段構造 玄室入口部分には、石材による段が構築される。段構造ではなく、閉塞石の可能性も考えられるが、以下の理由により閉塞石ではなく段構造（あるいは段構造とそこに置かれた閉塞石）と考える。第一に、墓壇が堅穴構造で、墓壇と墓道の間0.4mの段差が確認できること、第二にB-B'断面部分（第117図）の段構造とする石材が敷石設置前の埋土（9層）中に埋め込まれており、石材がその上に組み（噛み）合わせるように積み上げられていること（この石列を閉塞石とした場合は、閉塞石をおきながら奥壁に対して面を形成しながら閉塞したこととなり、やはり閉塞ではなく段を構成する石材と見るのが妥当である）、第三に横断面（第119図）を見ると、側壁と組み合わされている（差し込まれている）部分があること、第四に一番玄室よりの、奥壁に面する石材が最も大型であること、敷石がこの石材の下には一切確認できず、明らかにこの石材を意識して敷石が設置されていること、の5点を根拠として考えている。よって、B-B'断面より南側の部分は段構造を形成するための裏込めと考える。この仮定が正しければ、段は床面から0.7mであり、奥壁一段目と同じ高さまで構築されたことになる。

段構造は、奥壁から4.8mの所から、2.0mの長さに亘り20～50cm程度の角礫を積み上げており、石室内側面には横口面を整えて垂直的に積み上げている。残存高は0.7mである。使用される石材は側壁と同様に角礫である。



第119図 1号墳横穴式石室段構造部分実測図

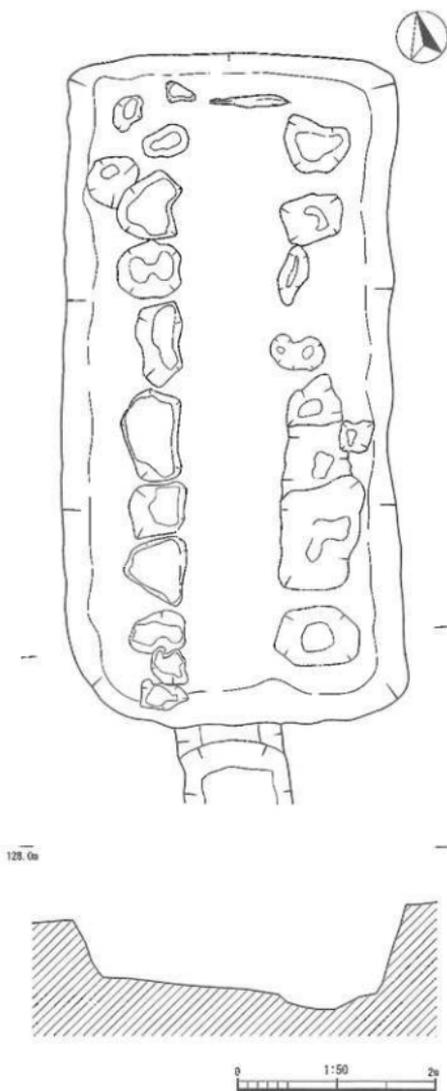
なお、墓道の取り付き部分から0.3mのところで土器片が出土している。この土器が原位置を保持するとすれば、段構造とした石材の中から出土したことになる。この場合は、墓道の取り付き部分の高さ（墓壇底面から0.4m）までが段構造で、それ以上は閉塞石であった可能性もあることを明記しておきたい。

敷石 石室内は、ほぼ全面にわたって敷石が敷設されるが、段構造の直下には敷設されない。奥壁手前における敷石上面での標高は127.0mである。敷石には幅10～120cm程度の角礫が使用されているが、奥壁から3.1mまでは10～30cm程度の比較的小ぶりの石材、これより開口部寄りには30cm以上の石材が使用される傾向にあり、使い分けされていたことが窺える。なお、一部の敷石は、整地（貼床）をした上に行われている。

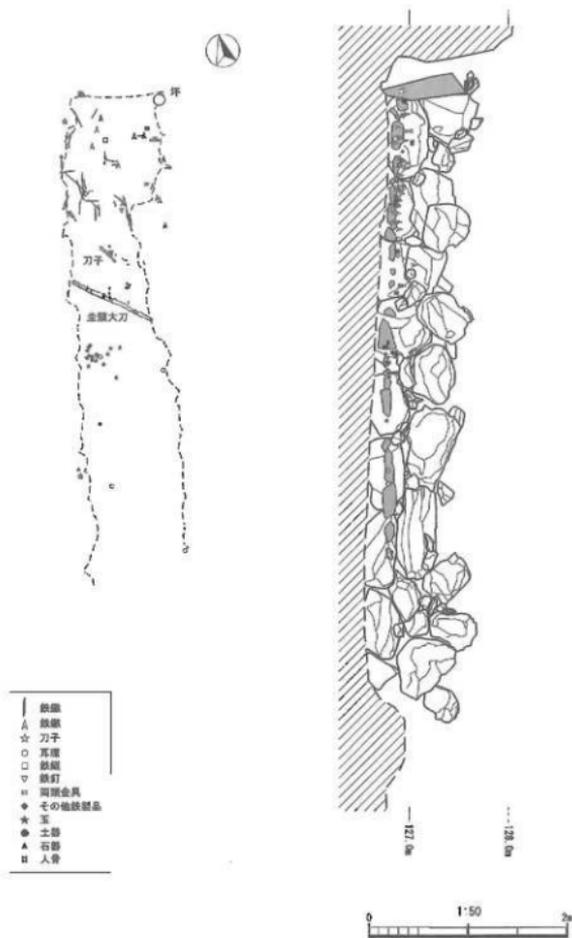
使用石材と用法 奥壁は扁平な板状の割石を縦位に設置している。この奥壁を据えるために小型の石材を巧みに利用している（第117図の7層と8層の間の石材）。石材の規模は幅110cm、高さ95cm、厚さ20cmである。二段目以上の状況は不明であるが、同様の石材を複数段積み上げていたと想定できる。

側壁は最大で三段残存した。使用されるのは幅50～100cm程度の角礫であり、人為的な加工は施されていない。基底石は横位に据えられ、二段目以上は小口面を石室内面に向け小口積みされる。主要構成材の隙間には5～10cm程度の角礫が間詰めされる。奥壁、側壁ともに持ち送りは確認できないことから、両者ともにほぼ直立し、玄室は箱形であった可能性が高い。

基底石は、両側壁ともに石室中央部分（奥壁から4石目）に二段目にまで及ぶ大型石材を設置しており、この石材を石室構築の際の指標として最初に設置された可能性が高い。

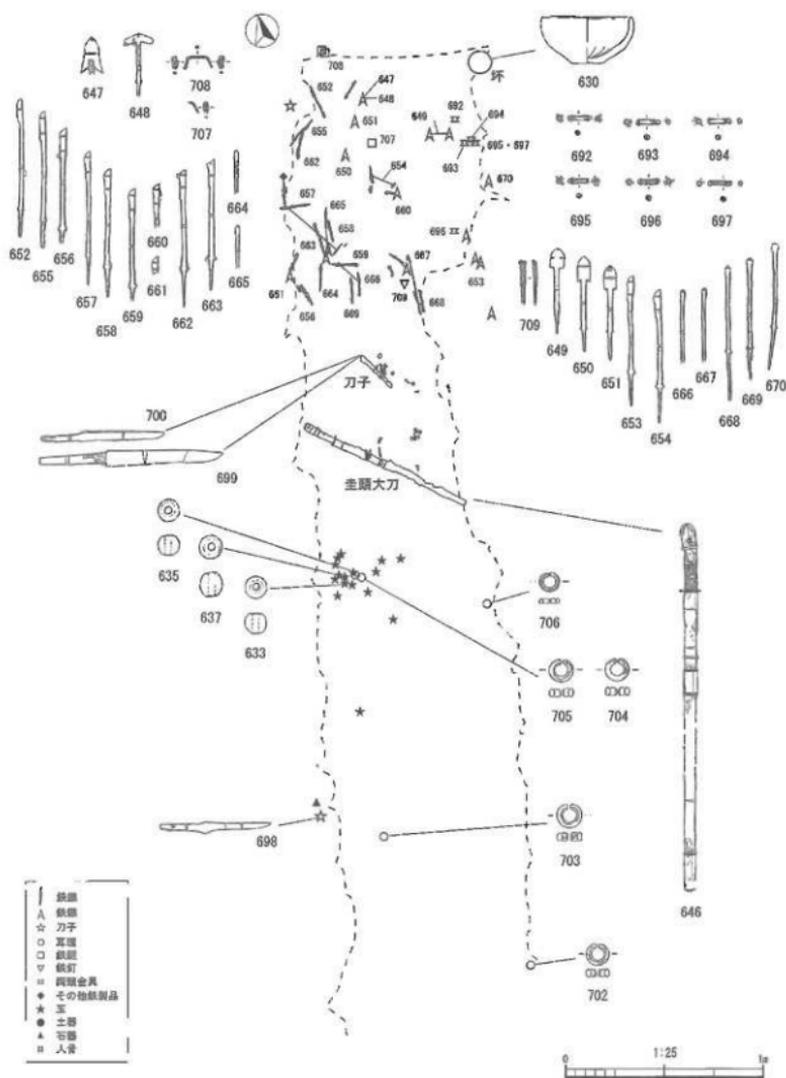


第120図 1号横穴式石室墓壇実測図



(注) 石室平面図の外形線は、例證最上段の石材の外形線であり、基礎石の外形線ではない。

第121図 1号墳遺物出土状況図



(注) 石室平面図の外形線は、側壁最上段の石材の外形線であり、基礎石の外形線ではない。

第122図 1号墳遺物出土状況詳細図

(3) 遺物出土状況 (第121・122図)

石室床面からは土師器をはじめ、圭頭大刀や鉄鍔などの武器類、丸玉や耳環などの装身具などが出土した。このうち、土師器は石室の北東隅角に口縁部を上に向けた正置の状態でも出土した。圭頭大刀は石室のほぼ中央から柄頭を北西に切先を南東に向け床面に置かれた状態で出土しており、最終埋葬時の原位置をほぼ留める。鉄鍔は31点以上出土したが、圭頭大刀と奥壁の間から散乱した状態で、鍔・釘は奥壁から1mの範囲内で出土したが、有意な状況ではなく、原位置を保持していない可能性が高い。玉類は圭頭大刀の南側0.7mで集中して出土した。耳環は704と705が玉類と同じ位置から出土しており、玉類と耳環は同一被葬者に伴う副葬品である可能性が高い。耳環706はそこから東に0.6m離れた右側壁付近から、703は玉集中心地点から南1.5mの地点で単独で、702は段部分と側壁が組み合わさる南東隅角付近から単独で出土した。両頭金具は奥壁から1mの範囲で左側壁に沿うように出土したが、出土した範囲からすると弓に装着された状態ではないことは明らかである。したがって、奥壁から圭頭大刀の間は、二次的な移動を受けている可能性が極めて高い。

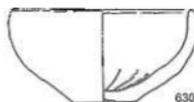
また、覆土からは須恵器破片などが出土している。石室覆土は攪乱の影響を受けていると考えられるが、石室内の土砂の堆積状況を観察すると、第117図11層以下には攪乱は及んでおらず、石室内の遺物が原位置を乱されたのは、現代の耕作によるものではなく、より古い時期であった可能性が高い。出土状態からは大刀や玉類・耳環の一部は原位置を留めているが、鉄鍔、刀子、釘などは原位置から移動させられたと考えられる。

(4) 遺物

1号墳では、石室内から、土師器1点、玉類15点(完形品)以上、耳環5点、金銅装圭頭大刀1振、刀子4点、鉄鍔31点(莖関数)以上、両頭金具6点、釘1点、鍔2点が出土している。また、石室上部から須恵器1点、釘1点が出土した。

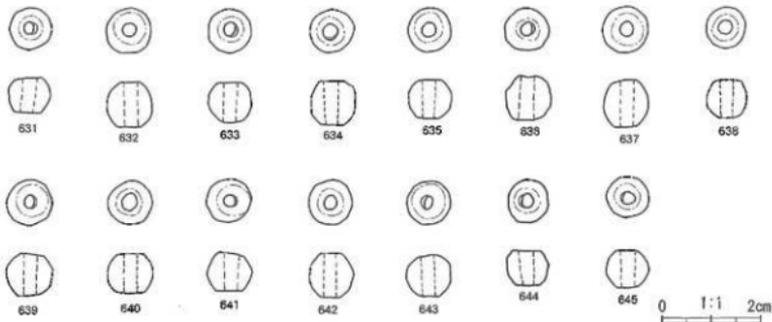
① 須恵器 (第123図)

石室覆土中から須恵器壺瓶類口縁部片(629)が出土した。口縁部は外傾する面をもつ。この特徴からプラスチック瓶あるいは平瓶の口縁部の可能性が高い。口径10cmである。



0 1:3 10cm

第123図 1号墳出土土器



第124図 1号墳出土玉類

②土師器 (第123図)

奥壁近くから土師器杯1点(630)が出土した。底部はやや上げ底で胴部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は丸く仕上げられる。内面底部にはケズリの痕跡が残存する。口径11.0cm、器高5.3cmである。

③玉類 (第124図)

玉類は滑石・蛇紋岩製丸玉が15点(631~645)以上出土している(第7章第5節参照)。丸玉は一部黒褐色に変色しているが、滑石製のものは赤褐色(透明)を呈する。直径8~10mm、高さ7~10mmで、孔径2~3mmである。穿孔方法は片面穿孔である。

④主頭大刀 (第125・126図)

概要 主頭大刀(646)は柄間および柄頭の裝飾板が一部欠損するが、ほぼ完形であり、金銅装主頭大刀の拵えの全容が判明する貴重な資料である。なお、柄装具、鞘装具ともに目釘・釧目釘を除いてすべて金銅装である。なお、各装具の数値は第39表に記載する。

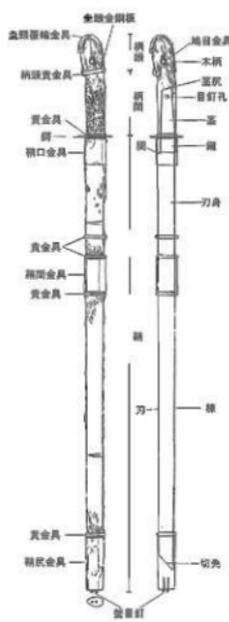
拵え 柄頭は主頭柄頭で、柄間は金銅板巻、鏝は無窓鏝、鍔で構成され、鞘は鞘尻金具、鞘間金具、鉄製釧目釘を伴う鞘尻金具をもつ構造で、拵えは瀬瀬芳之氏分類の「準素鞘」に該当する(瀬瀬 1984)。佩用方法は鞘には鞘尻金具は伴うものの金属製吊金具は一切使用されないことから、紐を用いて腰につなぐ縦佩の可能性が高い。なお、主頭大刀の全長は90.1cmである。

柄頭の構造 柄頭の構造は、木製主頭形柄頭に金銅板(内板)を佩表、佩裏に当て、その金銅板を主頭形の覆輪で覆い、その覆輪を柄頭装具で固定する。主頭形覆輪は土圧により若干変形し、一部欠損しているが、全体的な形状は留めている。その形態は、頭頂部(中央)が高く突き出し、左右両側が低く、左右両端は明瞭な段を有する。頭頂部の上からみた形状は、細長い樽形である。覆輪の内側は外形と同じ形状に成形されており、頂部は弧状で、弧状と直線

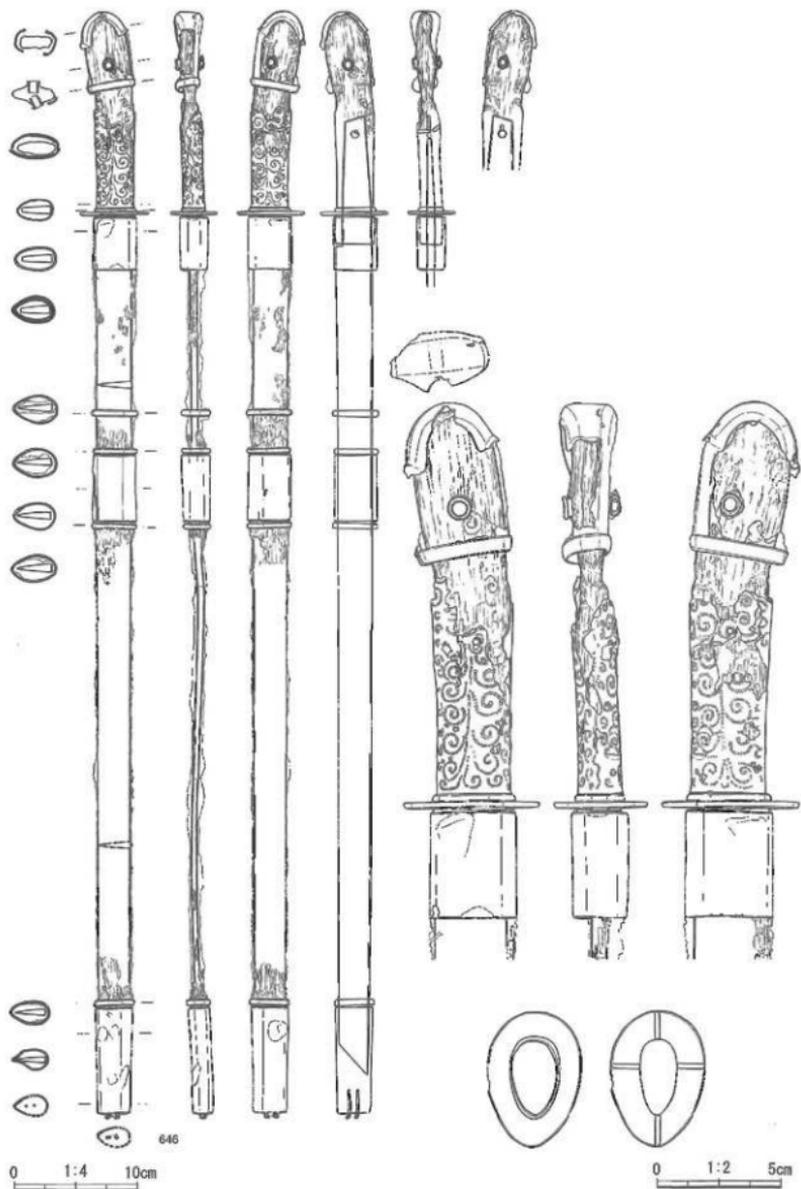
第39表 1号墳出土主頭大刀観察表

部 位	材質	長さ (cm)	柄 頭 部			金銅板 厚さ (mm)	備 考	
			柄頭部	蓋輪 (cm)	蓋輪 (mm)			
総丈	金銅板	90.1	-	-	-	-		
柄 頭	柄頭	5.5	樽形	4	2.25	0.75	文様部を覆輪で覆う	
	柄頭目釘	0.58	円形	1	0.7	0.5	横並び	
	柄頭金具	0.85	円形	1	0.7	0.5	横並び	
	柄頭金具	0.8	側面形	3.8	2	0.1		
	柄頭金具	5.9+	側面形	3.0	1.75	0.1	柄釘は鉄製	
	柄頭金具	0.3	側面形	3.5	2	0.1		
	鍔	金銅板	0.25	側面長方形	5.5	3.8	0.25	平面側面形
	鍔	金銅板	2.4	側面形	3.2	3.6	0.1	
	鍔口金具	金銅板	4.3	側面形	3.5	2.2	0.1	
	鍔口金具	金銅板	0.5	側面形	3.65	2.35	0.1	
鞘	鞘尻金具	0.45	側面形	3.8	2.25	0.1		
	鞘間金具	5.5	側面形	3.45	2.25	0.75		
	鞘間金具	0.45	側面形	2.55	2.15	0.15		
	鞘尻金具	8.65	側面形	2.95	1.65	0.75		
釧目釘	釧目釘	2.45	方形	0.3	0.2	-	横並び	
	釧目釘	2.45	方形	0.3	0.2	-	横並び	
本柄	木製	16.1	側面形?	3.35	2.1	-	側面形分	
	木製	73.2	側面形?	3.1	1.8	-		
刀	全長	78.6	-	-	-	-		
	刀身	67.9	二等辺三角形	2.95	0.8	-	カマズ切先	
	茎	10.7	長方形	2.3	0.8	-		

(注) 向きは、各部分の面に平行する方向の長さ。側面部は他に垂直する方向の長さとする



第125図 主頭大刀の部位名称



第126图 1号填出土圭头大刀

状の境界には段がつけられ、さらに三角形の切り込みが確認できる。この柄頭の形状は、西澤正晴氏分類のⅢ類に当たる（西澤 2000）。金銅板は厚さ0.5mmであり、非常に薄い板が用いられている。懸通孔には金銅装鳩目金具が両側から装着されている。金銅装の筒状金具で、外側部分にはストッパーを兼ねて、折り返しが確認できる。鳩目金具は金具の周囲の文様の連続性から文様が施された後、穿たれた可能性が高い。

柄頭内部の木柄も良好に残存している。木柄には、列点の痕跡が残存しているため、金銅板は文様が施されない状態で装着された後、暫く列点が刻まれたことが判明する。この金銅板には柄間金具と同様、一条線で表現された唐草文様（渦巻文）が施されていたことが判明する。木柄は柄間部分を含めた一体造で、圭頭形に成形されている。

木柄は材質分析の結果、アカガシ重属が使用されたことが判明した（第7章第4節参照）。

なお、刀茎は柄頭責金具よりも鏝側までに留まる。

柄間の構造 柄間金具は、木柄に金銅板を巻き付け、その金銅板に毛彫り列点文で唐草が表現される。柄頭金銅板（内板）と同様、渦巻文が鏝により施されており、木柄部分にもその打刻の際の痕跡が残存している。佩表・佩裏ともに同様の文様が刻まれている。鏝から6.5cmの位置に鉄製目釘が残存しており、この目釘は刀茎の目釘孔に打ち込み、これにより金銅板、木製柄を固定している。金銅板は鏝との間に金銅装責金具で固定される。柄間金具は金銅板を木柄に巻き付けており、切先側に接合部が確認できる。

鏝は、金銅装例形無窓鏝であり、先端は丸く仕上げられている。断面は隅切長方形である。内孔も同様例形である。

鏝は鞘口金具により詳細な形状は不明であるが、圭頭大刀は鏝部分で折れた状態で出土したため、保存処理前にその構造を確認した（図版4）。金銅装であり、刃側が窄まる例形である。

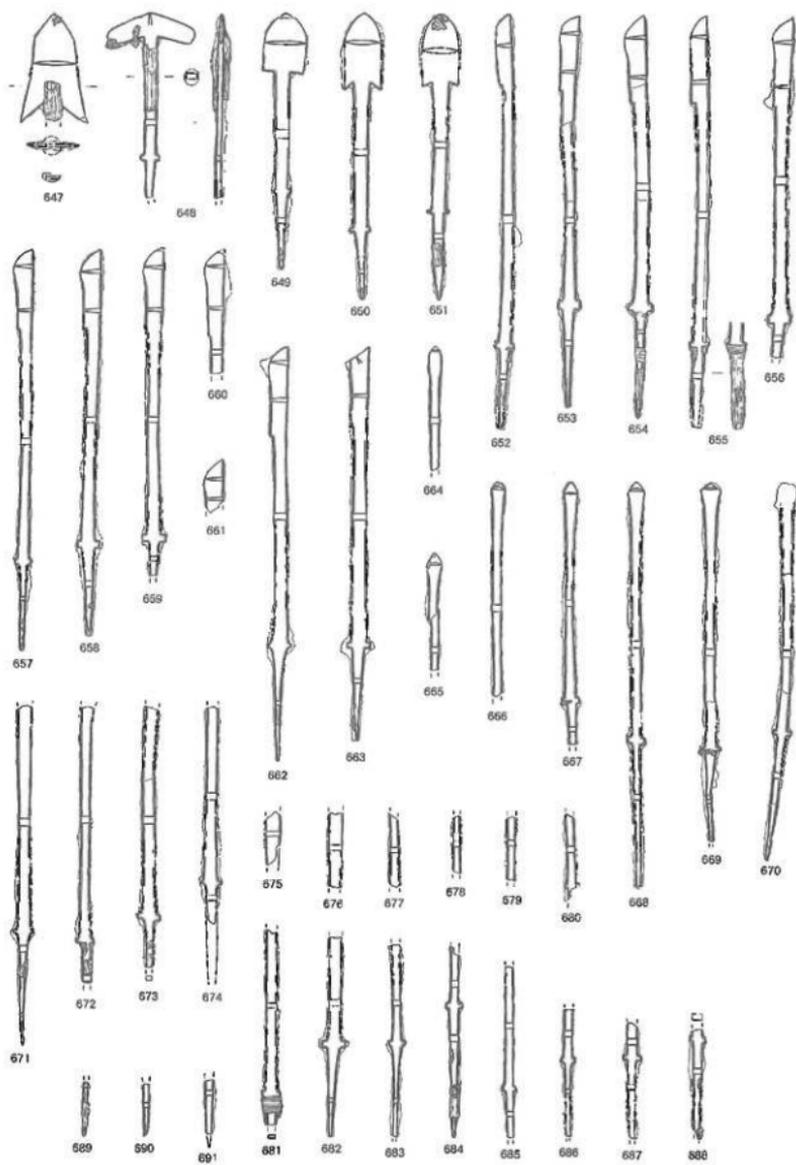
柄頭・柄間金具の文様 柄間金具の唐草文様は、まず中央に縦方向に一条列点が打ち込まれ、その中心から左右に渦巻文が表現される。佩表・佩裏ともに同様の文様が刻まれている。佩表の文様について、目釘より上部は中央に列点で直線が刻まれたと考えられ、その左側に反時計回りの渦巻文、右側に時計回りの渦巻文、目釘より下は直線を刻み、その左側に時計回りの渦巻文、右側に反時計回りの渦巻文を刻んでいる。佩裏側も同様の方向で文様を施す。棟側は、中央に一条の波状文様が刻まれ、その左側に上部が反時計回りの渦巻文、下部が時計回りの渦巻文、右側は上部が時計回り、下部が反時計回りの渦巻文を刻んでいる。

鞘の構造 鞘は鞘口、鞘間、鞘尻を金銅装金具で覆う「準素鞘」（瀧瀬 1984）である。鞘口金具は金銅装で、この鞘尻側に本来装着される責金具は、何らかの理由により鞘間金具の所まで移動している。鞘口金具は断面例形である。鞘間金具は上下を金銅装責金具で固定される筒状の金具で、断面例形である。鞘尻金具の先端は平尻で、鉄製罫目釘が打たれる。鞘尻金具は先端部分に薄い例形の金銅板をあて、それを包み込むように木鞘に金銅板を巻きつけて製作されているが、X線により木製鞘を一周し、部重ね合わせた状態が確認できる。鞘尻金具の断面は例形である。

罫目釘は2本打ち込まれており、全長2.45cm、鞘尻内部は1.9cm、先端はL字形である。X線写真を観察すると、罫目釘は切先に当たらないように長さが調整され、切先との間に1cmの間隔がある。

なお、鞘口金具や鞘尻金具の部分には木製鞘が遺存しており、分析の結果、ヒノキであることが判明した（第7章第4節参照）。よって、鞘と柄は様々な木材が使用されたことになる。

大刀 大刀は反りのない直刀で、X線写真から判断すると、切先はカマス切先で、隅は刃側の直角片間で深く切り込まれている。茎は茎尻に向かって先細り、茎尻は斜めに切断されている。茎尻先端から1.3cmの所に直径6mmの目釘孔が穿たれ、鉄製目釘が残存している。大刀は長さ78.6cm、刀身長67.9cm、幅2.95cm、棟厚さ6mm、茎長10.7cm、幅2.3cmである。



第127图 1号出土铁器

⑤鉄器・金銅製品 (第127・128図)

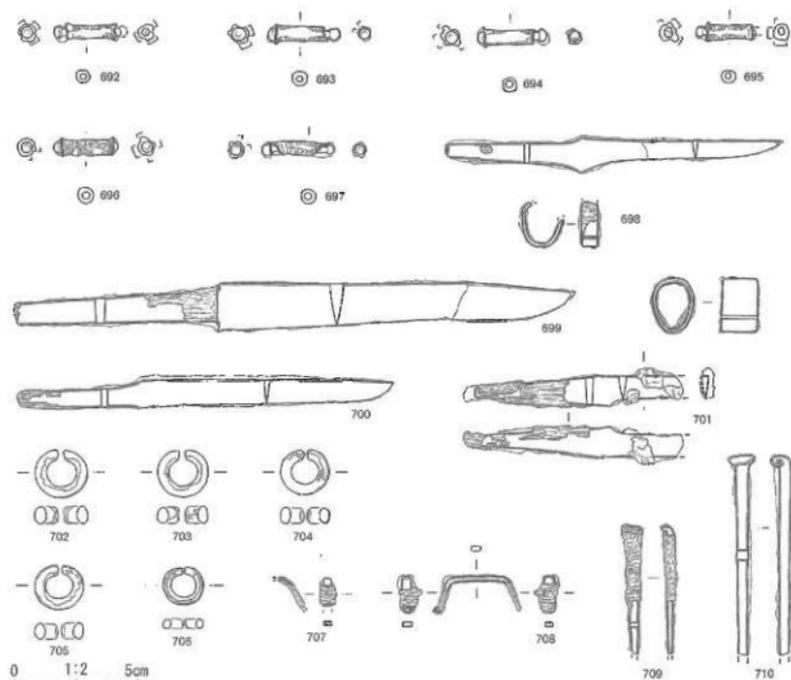
鉄器では、短茎腸状柳葉式1点、飛燕式1点、平根三角形式1点、平根腸状柳葉式2点、尖根片刃箭式12点、柳葉式1点、鬚箭式5点が出土している。他に茎間数は13点存在するが、平根式の3点は茎間まで残存しており、このほか平根式の破片は存在しないことからこれらは尖根式鉄鏃に伴う茎間である可能性が高い。尖根式鉄鏃は茎間数で総数26点以上が副葬されていたことになる。したがって鉄鏃の総数31点以上が副葬された可能性が高い。

短茎腸状柳葉式(647)は、ふくらの張る鏃身で、腸状が長い。鏃身中央よりやや茎よりに円孔が穿たれて、その部分まで矢柄が残存している。

飛燕式(648)は鏃身長よりも幅が広いもので、鏃身は「へ」字形(翼形)の両側を切断するものであり、西岡千絵氏のA類にあたる(西岡 2005)。やや頸部が長く、茎間は棘間である。矢柄は頸部を呑み込み、あたかも無頸無茎式鉄鏃のように鏃身近くまで及んでいる。

平根三角形式(649)は、ふくらの張る丸みをもった鏃身で、茎間は棘間である。平根腸状柳葉式(650・651)は、短く鋭い腸状で、ふくらの張る鏃身であり、茎間は棘間である。

尖根片刃箭式(652～663)は、鏃身の形状から2種類に分類できる。片刃箭式a類(652～662)は、鏃身間が直角間で、鏃身は上部のみ刃が形成され、下半には刃が形成されないものである。鏃身は刃が



第128図 1号墳出土金銅製品

つけられる部分がつけられない部分よりも幅がやや広い。このような形状の片刃箭式は通常この刃がつけられた部分の直下に撫間が形成されることが多いが、片刃箭式a類は長い鎌身、直角関であることが特徴である。片刃箭式b類(663)は端刃造の片刃箭式で、鎌身は先端が直線的に裁断される。側面には刃が付けられず、先端のみ刃が形成される端刃造である。a類同様、鎌身刃部下には関はなく、刃のつけられない鎌身部が続き、直角関に至る。このことから片刃箭式b類はa類の丸みを帯びた鎌身上部を端刃造に替えたものとも考えることもでき、a類よりも後出形態であると考えられる。

尖根柳葉式(664)は、鎌身と頸部の境界が明瞭ではないもので、緩やかな撫間である。後述する箭筒式鉄鎌に近い形態である。

尖根箭筒式(665~669)は刃部の形状から2種類に区分できる。a類(665~668)は鎌身がややふくらみをもつものである。b類は、鎌身が鋭角なもの(669)である。ともに棘関であり、頸部は鎌身から徐々に幅を狭めるもので明瞭な境界は確認できない。

このほか、鎌身に欠損し、頸部~茎片が22点(670~691)存在する。茎関が残存するものはしっかりとした棘関のものが多く、一部山形(突起)関のものがある。頸部の幅がやや広いもの、やや狭いものの2者が確認できる。

なお、茎に残る矢柄から、一部口巻きに糸巻きが残存しており(655・669)、その部分は黒色である。この黒色部分を科学分析していないことから確定ではないが、これは黒漆塗の可能性が高い。本来は尖根式には矢柄の口巻きに糸巻き黒漆塗技法が用いられた可能性がある。

刀子 刀子は4点出土した。699は、刃部残存長13.6cmの大型の刀子である。関は直角均等両関で、茎は茎尻に向かい先細るもので、茎尻は一文字尻である。茎には木柄の一部が残存する。木柄は関まで装着される。刃部には木質が確認できないことから、抜身の状態で副葬されたか木よりも腐食しやすい皮革などの鞘が装着されていた可能性もある。柄縁装具(繩)の断面形は倒卵形で、長軸2.2cm、短軸1.6cmである。これにより木柄の形状と大きさが推測でき、木柄の断面は倒卵形で、長軸2.0cm、短軸1.4cmであると想定できる。

698は撫角両関であり、刃部は内湾することから研ぎ減りした可能性がある。茎は茎尻に向かい先細るもので、茎尻は一文字尻である。茎には木質が残存しており木柄が装着された状態で副葬されたことがわかるが、刃部には木質が確認できないため、抜身の状態で副葬された可能性もある。698に伴う柄縁装具は一部欠損しているが、断面形態は倒卵形である。欠損により本体の形状を保持していないため大きさは明確ではないが、長軸2.0cm前後、短軸1.6cm前後であると推測する。木柄は同じく断面倒卵形で、一回り小さい状態、長軸1.8cm、短軸1.4cm前後に復元できる。

700は刃部側が突起関、棟側が撫間の不均等両関であり、茎はほぼ直線的に茎尻に至る。茎尻は一文字尻である。茎には木質が残存しており、木柄に装着された状態で副葬されたことが判明する。

701は切先が欠損する。関は棟側が突起関、刃部側が撫間、茎は茎尻に向かって急激に先細る。茎尻は一文字尻である。茎には木柄が残存する。刃部には皮革の痕跡が確認でき、皮革の鞘が使用されたことがわかる。

耳環 耳環は小型の耳環5点(702~706)が出土した。材質は科学分析を実施していないことから確定ではないが、見た目の色調から判断して、銅地銀張4点(702・704~706)、銅地金銅張1点(703)に区分できる。5者ともに銅箔に銀箔(薄板)・金箔(薄板)を巻きつけるものである。前者は法量から3者に区分でき、出土位置・大きさから704と705が組み合わせ関係である蓋然性が高い。その他の3点は離れた位置から出土しており、組合せ関係になるかどうかは検討を要する。なお、702と703はX線写真でも写り方が異なるため、材質、製作場所や方法が異なる可能性が高い。よって、大きさは同じでも同一被葬者に装着されていたとは考え難い。したがって、出土個数と法量から判断すると、当古墳には少

なくとも3人(702・703と704・705と706)が埋葬された可能性が高いが、さらに出土位置や材質を考慮すると4人が埋葬された可能性も残る(702と703と704・705と706の4人分)。

耳環5点ともに平面形態はやや不整形な円形で、横断面は楕円形で、耳環の直径は702～705が1.9～2.1cm、706が1.6cmである。

両頭金具 鉄製で6点(692～697)出土している。6点ともに筒状金具の両端に切り込みを入れて折り曲げ花弁状に成形し、その筒内部に棒状金具を挿入して、両端を傘形(半円形)に整形したものである。花弁は残存状況が良好ではなく明瞭ではないため6・8弁の可能性も排除できないが、4弁の蓋然性が高い。量量は、全長2.6～2.9cm、筒状金具の直径5～6mm、長さ2.0～2.3cm、棒状金具の全長2.6～2.9cm、頭の大きさ直径4～5mm、軸の直径2～3mmである。

鉄鏝 鉄製鏝が2点(707・708)出土した。2点ともに小型で平面形態は「コ」字形である。鏝身には木質が残存し、その木目は鏝身に直交する。ほぼ完存する708は鏝身にのみ木質が残存する。量量は全長1.5cm、幅3.4cm、鏝身長1.3cmである。

鉄釘 鉄釘は石室内から1点(709)、石室外から1点(710)が出土した。両者ともに、棒状釘身の頭部を平坦に叩き伸ばした後、L字形に折り曲げるものであり、東海地方で古墳や横穴墓から出土する通有の形態である(大谷 2004)。釘身の断面は方形で、709が残存長5.2cm、710が残存長8.1cmである。ただし、710は石室外からの出土であり、古墳に直接伴わない可能性がある。その場合は中世以降に帰属する遺物であろうか。

(5) 小結

1号墳の築造時期 原位置を保持する須恵器が出土していないことから時期を特定することは難しいが、土師器、圭頭大刀、鉄鏝からある程度時期を絞り込むことができる。土師器は古墳時代後期後半から終末期初頭、圭頭大刀はTK209型式期～飛鳥1期(遠江Ⅲ期後葉～Ⅲ期末葉)、鉄鏝はTK209～飛鳥1期とⅡ期に位置づけることが可能である。したがって、秋葉林1号墳は、TK209型式期～飛鳥1期に築造された可能性が高く、飛鳥Ⅱ期以降に追葬が行われた可能性が高い。

1号墳の追葬について 耳環が少なくとも3人分(材質と大きさからみると4人分の可能性もある)出土していることから、追葬は少なくとも2回行われた可能性が高い。追葬については、最も帰属時期が下るものは鉄鏝(片刃箭式b類、鬚箭式b類)であり、飛鳥Ⅱ期(遠江Ⅳ期前葉)までには位置づけられることから、初葬以後飛鳥Ⅱ期までに少なくとも1人が埋葬された可能性が高い。

なお、埋葬方法と順番であるが、鉄釘・鉄鏝が奥壁付近から出土していることから、まず奥壁付近に石室の土軸に並行するように木棺が埋葬された可能性が高く、その際の副葬品は圭頭大刀や鉄鏝、耳環であった可能性が高いが、その後の攪乱により移動されている。追葬の順序については明確ではないが、奥側から追葬されたとすれば、鉄鏝に時期差があるとした場合は、奥側に1人、玉類出土地点周辺に1人、耳環706の出土地点付近で1人の計3人の追葬が行われた可能性がある。

1号墳の特徴 1号墳は無袖形横穴式石室を埋葬施設とする9.5m前後の円墳である。石室は、無袖形石室ではあるが、埋葬空間が墓道より一段下がるという特徴をもつ(有段無袖形石室)、東駿河に広く見られる石室形態の一つである。

副葬品は圭頭大刀、鉄鏝、耳環、玉類、刀子など豊富な遺物が出土した。圭頭大刀や釘付式木棺の採用など畿内王権との関係が考えられる一方で、飛燕式鉄鏝は九州との関係も考えられる遺物である。一方、短蓋式鉄鏝は西日本での採用がほとんど行われなくなった後も東日本では採用され続ける形態であり、その点を考慮すれば東駿河の特徴を示していると考えられることができる。

したがって、秋葉林1号墳の被葬者の性格についてはまとめて詳述するが、畿内王権(や九州)と

の関係を持ちながらも、東駿河に特徴的な横穴式石室の採用、短葺式鉄鍍の採用など、地域に根差した首長と考えることができる。

2 2号墳

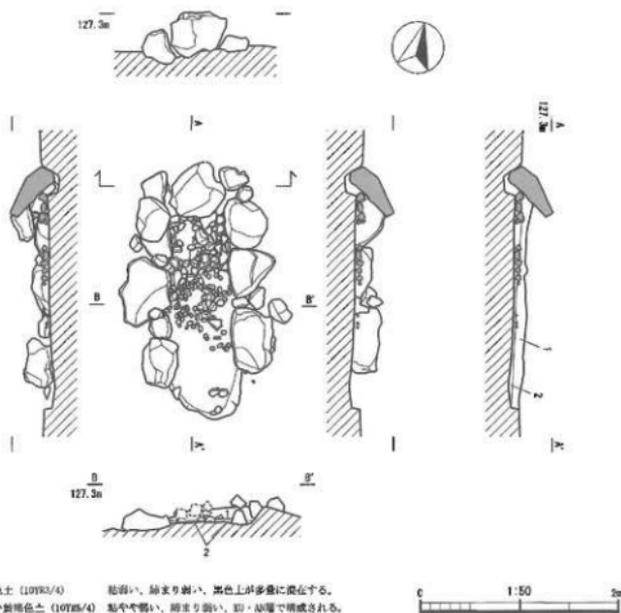
(1) 墳丘と外部施設 (第116図)

古墳の位置と残存状況 2号墳は調査区の南西にあり、南東方30mには1号墳、東方70mには3号墳が所在する。標高は約127mである。2号墳も1号墳と同様に上部を削平されていた。残存状況は1号墳よりも悪く、外部施設に関わるものはなにも検出できなかった。しかしながら、埋葬施設を覆う程度の墳丘は有していたものと考えられる。

墳形と規模 上述のように墳丘や外部施設は一切遺存しなかったため、墳形とその規模を明らかにすることはできない。愛鷹山南麓における事例からは、円墳であったと推量される。墳丘規模は、埋葬施設を覆い隠す程度と考えられ4~5m程度であろう。

(2) 埋葬施設 (第129・130図)

埋葬施設の形状と残存状況 2号墳の埋葬施設は、横穴式石室であった。墳丘と同様に上部の削平が著しく、残存したのは側壁と奥壁の基底石と床面の敷石程度であった。立体構造については不明であるが、無袖式石室で、平面形は長方形である。この石室は南側に開口し主軸方位はN-14°-Wである。



- 1 砂褐色土 (10YR5/4) 粘り強い、結まり強い、黒色土が多量に混在する。
 2 に高い黄褐色土 (10YR5/4) 粘りや弱く、結まり弱い、砂・砂層で構成される。

第129図 2号墳石室実測図

規模 石室の残存長は2.3m、幅は奥壁で0.5m、最大幅は奥壁から1.2mの所で0.7mである。残存高は西側壁で床面敷石の上面から測り0.3mである。墓壇の状況から判断すると、この石室の全長は2.4mであったと推定される。

床面の状況 床面は水平で敷石がみられた。石室のほぼ全面に施されていたものと考えられるが、一部は疎らになり、特に開口部付近は多くの石材が失われていた。ただし、開口部付近のごく狭い範囲のみ当初から敷石が施されていなかった可能性もある。使用される石材は幅5～20cmの角礫であるが、10cm前後のものが主体といえる。

なお、石室の床面は水平であるが、遺存する墓壇の状況から判断すると、墓道の底面は石室よりも一段高くなっていた可能性が高い。1号墳と同様の構造を持つ石室と考えられる。

使用石材と用法 奥壁は基底石のみの残存であったが、使用されるのは角礫であり、幅60cm、高さ60cm、厚さ20cmと扁平なものである。この石材のみで奥壁を構成していたとは考えがたく、同様の石材をさらに、二段積み上げていたものと考えられる。

側壁には幅40～70cm程度の角礫が主たる構成材として使用され、20cm前後の角礫が間詰めの石材として補助的に使用されている。石材は特に加工はされていないようである。基底石は横位に据えられている。二段目以上は1石の遺存に留まるが、残存するものは横積みされている。おそらく横積みと小口積みなどが併用されていたものと考えられる。なお、奥壁、側壁ともに持ち送りの有無は確認できなかった。

墓壇 墓壇は石室を僅かに上回る程度の大きさであり、全長2.6m、検出面からの深さは0.1mである。幅については、側壁残存部位や奥壁付近の様子が不明であるため、残存状況からは特定できない。

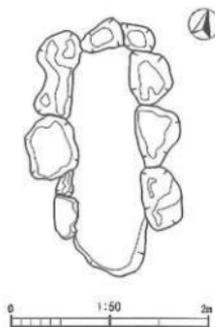
基底石を据え付けるにあたり、各石材の状況に応じて幾分掘り下げなどが行われている。

(3) 遺物

2号墳からの遺物はない。周囲の表土からは須恵器などが出土しているが、2号墳に伴うものであるのかは不明である。

(4) 小結

2号墳は先述した1号墳よりも残存状況は悪く、墳丘など外部施設は一切検出することはできなかった。周辺遺跡の事例からは、小型の円墳である可能性を指摘したい。埋葬施設は小型の横穴式石室であった。床面にまで破壊は及んでいたが、玄室平面形は無袖式長方形とみなせるものである。この2号墳も1号墳と同様に玄室床面が一段下がるタイプといえる。遺物等は出土しなかったため、時期を確定しがたいが、1号墳よりも後出することは明らかで、7世紀後半～8世紀初頭の所産と考えられる。



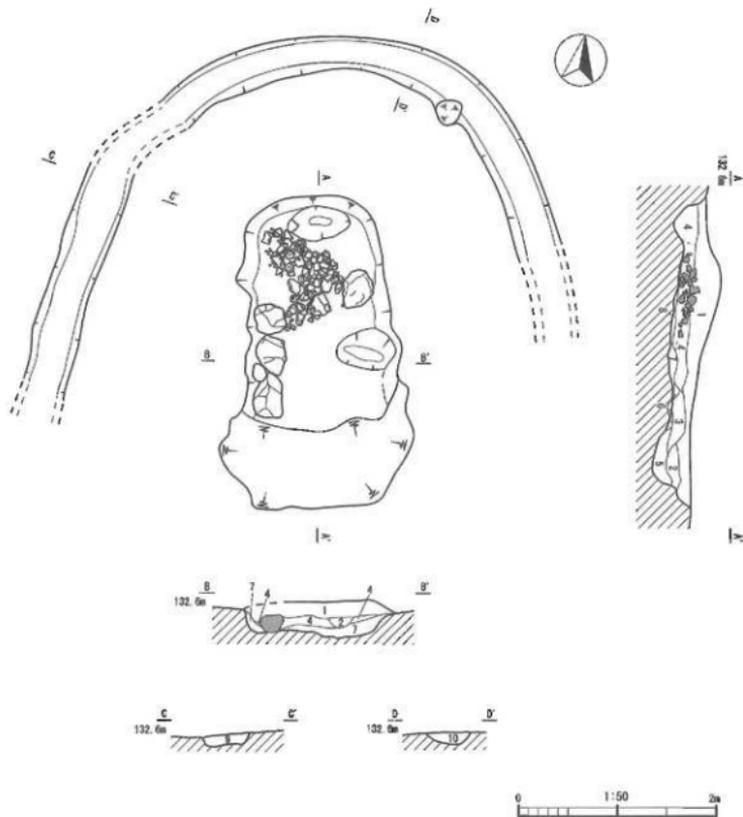
第130図 2号墳石室墓壇実測図

3 3号墳

(1) 墳丘と外部施設 (第116・131図)

古墳の位置と残存状況 3号墳は調査区の南西の尾根上、標高は約132mに所在する古墳である。西方約70mには2号墳、南西方約60mには1号墳が存在する。3号墳も先述した2基の古墳と同様に上部の削平が著しかったが、周溝の約半分が残存していた。

墳形と規模 上述のとおり墳丘の盛土は既に失われていたが、遺存した周溝から、3号墳は円墳であることがわかる。南北にやや長い楕円形のものであるが、南北長を確定することはできない。東西の長



- | | | | |
|--------|---|---------|--|
| 1 暗褐色土 | 粘強い、締まりやや弱い、赤色スコリア(φ1mm以下)を少量含む、きめ細かく耕作土に似る。 | 6 茶褐色土 | 粘やや弱い、締まりやや強い、瓦ブロックを多数に含む、狭間の土か? |
| 2 黒色土 | 粘やや弱い、締まりやや弱い、ややきめ細かくごく少量の赤色スコリア、瓦粒(φ2~3mm)を含む、石の抜き取り穴か? | 7 茶褐色土 | 粘やや強い、締まりやや強い、瓦ブロックを含む、横出面構成土(混合土)。 |
| 3 黒色土 | 粘やや弱い、締まりやや強い、赤色スコリア(φ1mm前後)を微量含む、かなり締まってはいるが隙間がこわされた後堆積か。 | 8 暗褐色土 | 粘強い、締まりやや弱い、瓦ブロックを含む、竈床直下で混合土。 |
| 4 黒色土 | 粘強い、締まり強い、赤色スコリア(φ1~2mm)、瓦ブロックを微量含む、同じ層直下の層であるが、2・3層とは別の形成過程を疑ふもの2ヶ所ありをこわしているものだろう。 | 9 黒色土 | 粘やや弱い、締まりやや強い、褐色土小ブロック、赤色スコリア(φ1~3mm)を少量含む。 |
| 5 黒色土 | 粘やや弱い、締まりやや強い、瓦ブロック(φ2~40mm)を多数に含む、抜き取り穴か? | 10 黒褐色土 | 粘やや強い、締まりやや弱い、中央部分に褐色土小ブロックが混在、西側に赤色スコリア(φ5~7mm)が点在する。 |

第131図 3号墳全体図

さは、4.8mである。

周溝 周溝は墳丘の北側約半分を検出することができた。周溝は最大で0.5mの幅を持ち、最も深い所であっても検出面からの深さは0.1mにすぎない。なお、斜面下方にあたる南側は、削平により消滅しており、墓道などは確認できない。

(2) 埋葬施設 (第132図)

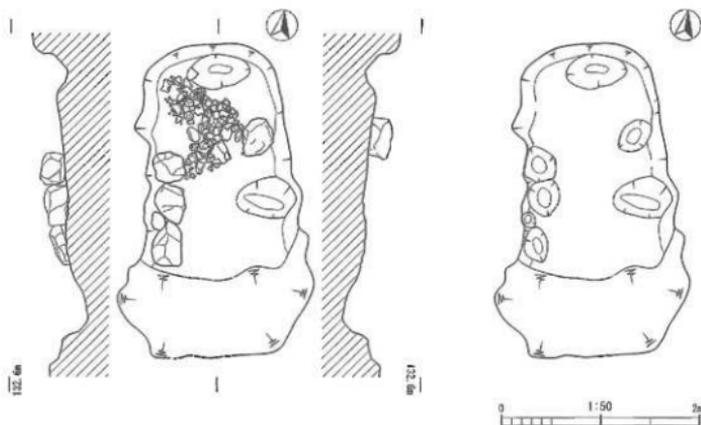
埋葬施設の形状と残存状況 3号墳の埋葬施設は横穴式石室である。残存状況は墳丘と同様に上部の削平が著しく、攪乱は床面にまで達していた。遺存したのは、側壁の基底石と床面の敷石の一部にすぎないため確認を得られるものではないが、石室は無袖式のもので、長方形の平面形をもつものと考えられる。墓壇の状況からは、石室開口部に比べ床面が一段下がるタイプのものの可能性が高い。この石室は南側に開口し、主軸方位はN-11°-Wである。

規模 石室の規模は、墓壇の状況からは3mをやや下回る程度であったと推定される。残存部分の石室幅は0.6mである。最大幅・奥壁幅共に、遺存部分の石室幅と同程度のものと考えられる。

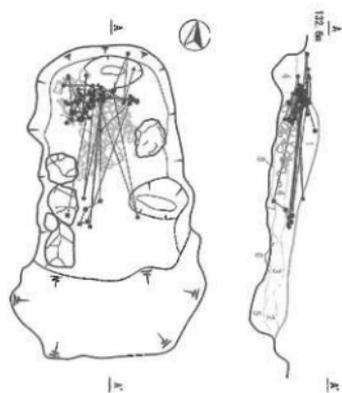
床面の状況 床面はほぼ水平で、攪乱が及んでいない箇所については、敷石が施されている様子が確認できる。敷石が確認できた範囲は0.8mの長さにとり、幅5～20cm程度の角礫が使用されている。一部は貼り床をした上に敷かれている状況がうかがえ、床面の標高は敷石上面で132.25mである。

使用石材と用法 奥壁は遺存しなかったため、石材とその用法は不明である。1号墳・2号墳、ならびに周囲の古墳の状況を踏まえると、奥壁には1石で石室幅となりうる石材を複数段積み上げていたものと推測される。側壁も一部の基底石の残存に留まる。西壁は3石、東壁は1石残存し、いずれも横位に据えられていた。使用されるのは角礫であり、加工はされていないようである。

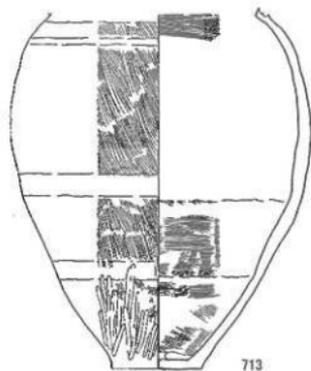
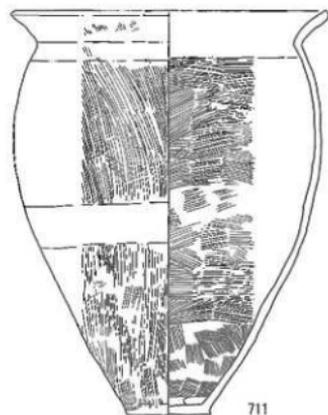
墓壇 墓壇は石室より一回り大きい程度で、残存長は2.4mである。幅は奥壁推定位置で1.3m、中央部が1.5m、開口部側は1.8mであるが、これは後世の攪乱の影響を受けているものと考えられる。本来的には、長方形に近い平面形であったと推測される。検出面からの深さは0.2mである。基底石を据え付けるにあたり、個々の石材を安定させるための堀窪めを行っている。



第132図 3号墳石室展開図・墓壇実測図



埋藏番号
 ● 711
 ○ 712
 ■ 713



第133図 3号墳遺物出土状況および出土遺物

(3)遺物 (第133図)

遺物出土状況 墓墳内において土師器の甕の破片が多数出土している。土器片は奥壁付近に集中して出土しており、出土層位は1層と4層が中心である。奥壁付近は深く攪乱が及んでいるため、これらの土器は原位置をとどめているとは考えられない。

出土遺物 接合作業の結果、ほぼ完形に復原できたものが1点、口縁部から胴部中位にかけて復原できたものが1点、口縁部を欠損するが胴部上位から底部にかけて復原できたものが1点である。いずれも土師器長胴甕で、時期は8世紀代の所産と考えられる。

711は長胴甕で、ほぼ完形に復原できた。口径25.2cm、底径6.6cm、器高32.8cmである。器壁は薄い、胴部最大径は中位から上位にかけてにあり、口径より小さい。口縁部は外方にのび、外面にヨコナデを施しているが、一部斜位のハケ目が残っており、内面にはヨコナデを施している。頸部には、外面にヨコナデの後ヨコミガキを施している。胴部外面は、上位から中位にかけて斜位のハケ目を施しており、中位にはヨコナデによりハケ目を消している部分があり、中位から底部にかけて縦位のハケ目を施している。胴部内面は、上位から中位にかけて横位のハケ目が見られ、中位にはヨコナデにより斜位のハケ目を消しており、下位には横位のハケ目を施している。底部には木葉痕が残っており、内面には横位の木目痕により調整を施し、指によるヨコナデを施している。色調は、外面、内面ともに橙色を呈している。8世紀前半の所産と考えられる。

712は長胴甕で、口縁部から胴部中位にかけて復原できた。口径(23.2cm)、頸部径(18.4cm)である。器壁は薄い。口縁部は外方にのび、外面に横位にナデを施している。胴部外面には、上位から中位にかけて、斜位のハケ目を施した後、棒状の工具でミガキを施しており、内面には横位のハケ目を施している。色調は内面、外面ともににぶい褐色を呈している。8世紀中葉の所産と考えられる。

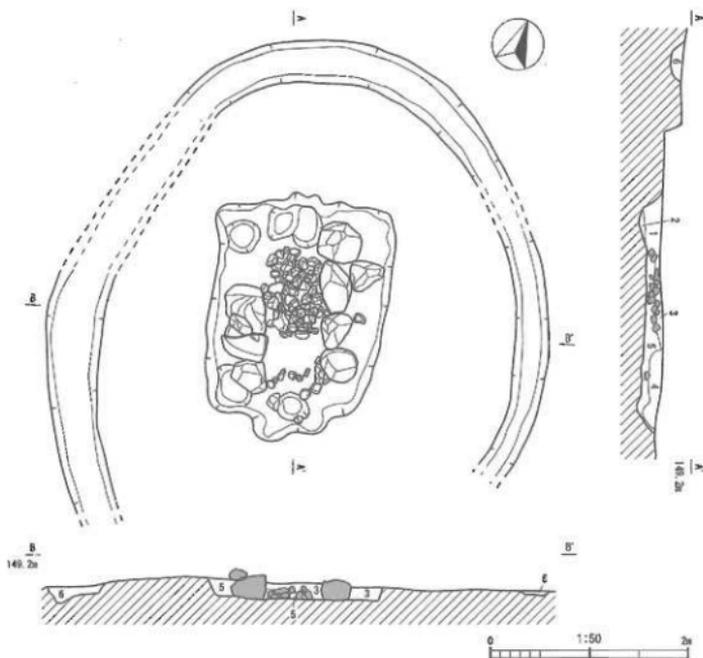
713は長胴甕で、口縁部を欠損するが、胴部上位から底部にかけて復原できた。頸部径(17.6cm)、底径7.2cm、胴部最大径24.2cmである。器壁は薄い。胴部外面は、上位から中位にかけて縦位のハケ目を施し、中位ではヨコナデによりハケ目を消しており、下位から底部にかけては縦位のハケ目を施した後、ヘラミガキを施している。胴部内面は、上位には横位のハケ目を施しており、中位には横位のハケ目を施した後、指で押してハケ目を消しており、下位には斜位のハケ目を施している。底部には木葉痕が残っており、内面は指でナデつけることで調整している。色調は外面、内面ともに橙色を呈している。8世紀中葉の所産と考えられる。

(4)小結

3号墳も前述の2基と同様に、後世の削平を大幅に受けており、墳丘の盛土は遺存しなかった。しかし、周溝の一部が検出できたことから、この古墳は直径約5mの円墳であることが判明した。

埋葬施設は小型の横穴式石室である。石材の抜き取りが激しいため、石室の形状を確定することはできない。ただし、無袖式で開口部に比べ玄室床面が一段下がる形状の石室であることは言える。

遺物は土師器の甕が出土した。いずれも長胴甕で、時期は8世紀代の所産と考えられる。出土状況から、これらの土器が原位置をとどめているとは考えられない。もともと石室内にあった甕が攪乱されたか、石室を壊して埋納された甕が攪乱されたかのいずれかであると推測される。



- 1 黒色土 粘やや強い、締まりやや弱い、全体的に黄土粒及びブロック(φ2mm-20mm)を含有、またRブロックを若干含む、石を抜き取った後に入った土と推される。
- 2 黒色土 粘やや強い、締まりやや弱い、赤色スコリア(φ2mm程度)を若干含む、Rブロックが少量に存在する、石の埋積めの上か?
- 3 黒色土 粘やや強い、締まりやや強い、赤色スコリア(φ2mm程度)を若干含む、2層よりやや明るい、層の上部に埋積した土。
- 4 黒色土 粘やや強い、締まりやや強い、スコリアを全体的に少量、Rブロックを少量に含む、下部に層はほとんどない、層を部分的に取り除いた後の上か?
- 5 黒色土 粘やや強い、締まり強い、R層の水溜、あるいは侵入したもので、きのこかき、上部にも層があったと思われる、石の埋積めの上か?
- 6 黒色土 粘やや強い、締まりやや強い、赤色スコリアを全体的に少量含む、層の下層の土。

第134図 4号墳全体図

4 4号墳

(1) 外部施設 (第134・135図)

位置と残存状況 4号墳は調査区の東に位置し、標高は約149mである。この古墳の南東方約20mには5号墳が所在する。4号墳も上部の削平が著しく、残存状況は良好ではない。墳丘は盛土の痕跡すらうかがえなかったが、周溝の一部が残存していた。

墳形と規模 墳形は遺存した周溝の状況から、直径4.5mの円墳である。墳丘は東西長に対し南北長がやや長い可能性もある。

周溝 周溝は、斜面下方にあたる南側は削平され遺存しなかったが、全体の3分の2程度を検出した。最大幅は0.6m、検出面からの深さは最も深い墳丘西側と北側で0.2mである。

(2) 埋葬施設 (第136図)

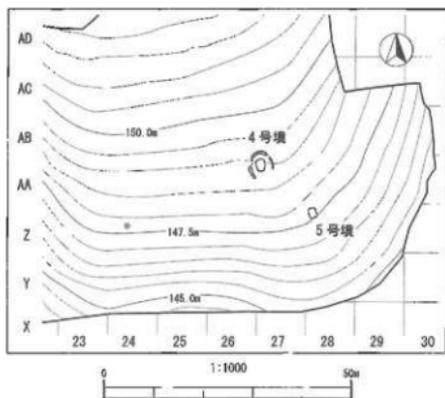
埋葬施設の形状と残存状況 4号墳の埋葬施設は横穴式石室であった。ただし、墳丘と同様に上部の削平が著しく、両側壁の基底石が残るのみであった。そのため、石室の形状について詳細は不明である。周辺古墳の事例から無袖式で長方形の玄室を持つものと推測される。なお、墓壇から判断すると、この古墳も玄室床面が開開口部から一段下がるタイプの石室のようである。石室は南側に開口し、主軸方位はN-22°-Wである。

規模 石室規模は、墓壇から1.6mと推測される。側壁残存部での石室幅は0.6mである。基底石のみの残存であり、石室の本来の高さをうかがうことはできない。

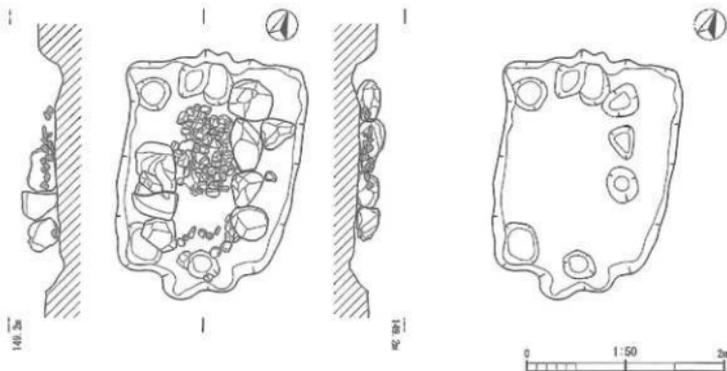
床面の状況 床面は奥壁から開口部に至るまでほぼ水平に保たれる。攪乱は一部床面にまでおよんでいたが、石室の奥壁側約半分には敷石が遺存した。敷石に使用されるのは幅5～25cm程度の角礫で、10cm前後のものが主体となっている。本来的にはより広範囲に敷き詰められていたものと考えられる。石室中央付近での標高は敷石上面で148.75mである。

使用石材と用法 奥壁は遺存しなかったために石材と用法は不明である。ほかの古墳の例から、1石で石室幅となりうる石材を複数段積み上げて奥壁としていた可能性が考えられるが、基底石が設置された痕跡をみると、最下段は2石で構成されていた可能性も排除できない。

側壁は、左右両壁共に基底石の一部が遺存するのみであった。横位での設置を基本としているが、小口面を石室内に向けているものも確認できる。持ち送りの有無などは不明である。使用される石材は角礫で、残存するものは幅40～50cm程度の大きさである。



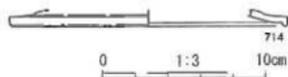
第135図 4・5号墳周辺地形



第136図 4号墳石室展開図・墓壇実測図

墓壇 墓壇は攪乱の影響を一部に受けているものの、概ね長方形の平面形を有し、長さは2.5m、幅は奥壁側が1.8m、開口部側が1.6mである。後世の石材の抜き取りによる影響である可能性も考慮しなければならないが、開口部側の中央部は幅80cm、長さ30cmではあるが突出する。墓道の痕跡である可能性もある。基底石の設置にあたっては、個々の石材の状況に応じた調整をしている可能性がある。注目すべきは、開口部側の中央部に石材を据えた痕跡が見られることである。矩石的な石材が設置されていた可能性も考えられる。

(3) 遺物



第137図 4号墳出土遺物

本来は墳丘にあたる表土中から須恵器が出土した（第137図）。坏蓋の口縁部破片で、遠江編年のV期前半に位置づけられ、8世紀前半の所産と考えられる。その他、土師器の破片が出土しているが、小片のため図示できなかった。

(4) 小結

4号墳もこれまでに述べた3基の古墳と同様に、上部の削平が著しいものであった。しかし、周溝の一部が検出できたため、この古墳は直径約4.5mの円墳と推定することができた。

埋葬施設は、推定全長2mに満たない小型の横穴式石室であった。しかし、この石室も石材の大半が失われており、石室構造の詳細を把握することはできなかった。墓壇から判断すると、この石室も先の3基と同様に、玄室床面が一段下がるタイプの石室と考えられる。石室内から出土した遺物はなく、時期を確定し難い。

5 5号墳

(1) 外部施設（第135図）

位置と残存状況 5号墳は調査区の東、標高約147.5m地点に所在する。この古墳の約20m北西方には4号墳が所在する。5号墳は今回調査を実施した5基の古墳の中では最も残存状況は悪く、外部施設に関しては墳丘盛土のみならず、周溝や墓道なども一切遺存しなかった。

墳形と規模 遺存状況が不良のため、墳形とその規模については不明である。ただし、少なくとも、埋葬施設を覆い隠す程度の墳丘は有していたものと考えられる。4号墳を参考とすると、直径4～5m程度の円墳の可能性が指摘できる。

(2) 埋葬施設（第138図）

埋葬施設の形状と残存状況 埋葬施設は横穴式石室であるが、外部施設と同様に埋葬施設に関しても遺存状況は特に悪く、破壊は床面にまで達していた。側壁は全て抜き取られており、奥壁の基底石と捉えられる石材のみが残存していた。ただし、この石材も石室内に倒れ込んでおり、原状を留めるものではない。

石室の形状については把握し難く、袖部の造作は不明である。墓壇から判断すると、無袖式で長方形の玄室平面形を取り、石室床面が一段低くなるタイプの可能性が考えられる。なお、石室は南側に開口し、主軸方位はN-12°-Wである。

規模 石室規模については明言できないものの、遺存した奥壁と墓壇から、全長は1.7m、奥壁幅0.6mと推定される。

1 黒色土(7.5%SiO₂) 粘りや強い、硬まりや強い、豆粒(4.0.5~2mm)を下部に若干含む。

第138図 5号墳墓壊検出状況・完掘状況図

床面の状況 破壊は床面にまで達しており、築造当初の状況を把握したいが、奥壁から開口部に至るまでほぼ水平である。ほかの4基の古墳では床面に敷石がみられたが、5号墳では1石も遺存しなかったが、当初は敷石が施されていた可能性も十分考えられる。現状での床面の標高は147.45mである。

使用石材と用法 5号墳で遺存したのは奥壁の基礎石と考えられる1石のみである。この石材は、幅50cm、長さ55cm、厚さ20cmと扁平なものである。

墓壊 墓壊は長方形の平面形を持ち、長さ2.0m、幅1.5m、検出面からの深さは5~15cmである。個々の石材の設置において、石材にあわせて床面を掘削している。

(3) 遺物

5号墳周辺の表土からは須恵器や土師器が出土しているが、これらは小片であるため図示できず、時期を特定できる遺物はない。

(4) 小結

5号墳は、破壊が著しいため外部施設については不明と言わざるをえない。一方、埋葬施設については推測の余地が残されており、横穴式石室と推定される。基礎石を含め、石材はほとんどが抜き取られていたが、僅かに残存した部位からは、この石室は全長2mに満たないものと推定される。遺物についても小片のみの出土で、時期を確定することはできない。

第40表 秋葉林遺跡古墳一覧

古墳名	墳形	墳丘規模		石室			墓壊			出土遺物			備考	
		長さ(m)	幅(m)	形制	主軸方位	全長(m)	奥室幅(m)	最大幅(m)	形状	全長(m)	最大幅(m)	石室内		石室外
1号墳	円形	9.5	8.5	無袖式	N-11°-E	6.3	0.9	1.0	長方形	7.1	3.4	土師器1、須恵器1以上、瓦類3、金銅製大刀1、刀子4、鉄鎧1以上、両面金具6、釘1、銅2	須恵器1、釘1	土室入口部分に設け遺あり
2号墳	円形			無袖式	N-14°-W	2.3+	0.5	0.7	長方形	2.6	1.4			
3号墳	円形?		4.8	無袖式	N-11°-W	3.0+		0.6	長方形	2.4+	1.6?			土師器3
4号墳	円形	4.5?	4.5	無袖式	N-22°-W	1.5?		0.6?	長方形	2.5	1.8			須恵器1
5号墳	円形?			無袖式?	N-13°-W	1.7?	0.6?		長方形	2.0	1.5			

(注) 「+」は「以上」、「?」は「約」、省略す。

第41表 1号墳出土鉄器類

種別 番号	図版 番号	形式	全長(m)	鎌身部			柄部			備考	
				断面 長(m)	幅(m)	厚(m)	断面 長(m)	幅(m)	厚(m)		
647	54	短直鋸片鋸式	(4.5)	厚造	4.5	(2.5)	-	-	-	-	-
648	54	飛渡式	(7.5)	平造	1.5	3.5	長方形	5.0	0.5	方形	(1.5) 0.3
648	54	平鋸三角形式	(10.3)	厚造	(2.3)	1.7	長方形	3.0	0.5	方形	2.0 0.3
650	54	平直鋸片鋸式	11.8	厚造	2.1	1.5	長方形	5.0	0.6	方形	2.5 0.4
651	54	平直鋸片鋸式	11.6	厚造	3.0	1.6	長方形	5.4	0.5	方形	3.5 0.4
652	54	尖根片方鋸式	(16.8)	三角形	3.0	0.7	長方形	10.7	0.4	方形	(3.1) 0.4
653	54	尖根片方鋸式	16.3	三角形	3.0	0.8	長方形	9.0	0.4	方形	4.0 0.4
654	54	尖根片方鋸式	16.5	三角形	3.5	0.9	長方形	8.5	0.6	長方形	4.5 0.3
655	54	尖根片方鋸式	(16.8)	三角形	3.5	0.7	長方形	10.0	0.5	長方形	(3.3) 0.5
656	54	尖根片方鋸式	(13.8)	三角形	3.5	0.8	長方形	8.8	0.4	長方形	(1.5) 0.3
657	54	尖根片方鋸式	16.4	三角形	3.2	0.8	長方形	9.6	0.4	長方形	3.6 0.4
658	54	尖根片方鋸式	(15.8)	三角形	3.2	0.8	長方形	8.9	0.5	長方形	(3.7) 0.5
659	54	尖根片方鋸式	(13.3)	三角形	(3.3)	0.8	長方形	8.5	0.4	長方形	(1.5) 0.4
660	54	尖根片方鋸式	(4.3)	三角形	(3.3)	0.6	長方形	(1.5)	0.4	-	-
661	54	尖根片方鋸式	(2.0)	三角形	(2.3)	0.8	-	-	-	-	-
662	54	尖根片方鋸式	10.9	三角形	3.5	0.9	長方形	8.7	0.5	長方形	4.5 0.5
663	54	尖根片方鋸式	10.0	三角形	3.2	0.9	長方形	9.0	0.5	長方形	3.8 0.4
664	54	尖根鋸式	(5.6)	三角形	1.3	0.5	長方形	(3.7)	0.4	-	-
665	54	尖根鋸式	(4.7)	片丸造	(0.6)	(0.6)	長方形	(4.2)	0.3	-	-
666	54	尖根鋸式	(8.8)	片丸造	(0.4)	0.6	長方形	(8.4)	0.3	-	-
667	54	尖根鋸式	(10.7)	片丸造	0.5	0.6	長方形	8.6	0.3	長方形	(1.4) 0.3
668	54	尖根鋸式	10.5	片丸造	0.5	0.7	長方形	10.2	0.4	方形	5.8 0.3
669	54	尖根鋸式	(14.6)	片丸造	0.3	0.8	長方形	10.7	0.3	方形	(3.0) 0.3
670	54	(柄部~茎片)	(15.4)	-	-	-	長方形	(12.2)	0.4	方形	5.2 0.3
671	54	(柄部~茎片)	(13.8)	-	-	-	長方形	(9.2)	0.5	方形	4.5 0.3
672	54	(柄部~茎片)	(11.2)	-	-	-	長方形	(9.6)	0.4	方形	(1.5) 0.3
673	54	(柄部~茎片)	(10.6)	-	-	-	長方形	(9.7)	0.5	方形	(0.3) 0.3
674	54	(柄部~茎片)	(8.9)	-	-	-	長方形	(7.3)	0.4	長方形	(1.8) 0.4
675	54	(柄部片)	(2.2)	-	-	-	長方形	(2.2)	0.5	-	-
676	54	(柄部片)	(2.9)	-	-	-	長方形	(2.9)	0.5	-	-
677	54	(柄部片)	(2.3)	-	-	-	長方形	(3.0)	0.4	-	-
678	54	(柄部~茎片)	(2.3)	-	-	-	-	-	-	方形	(2.3) 0.3
679	54	(柄部~茎片)	(2.8)	-	-	-	-	-	-	方形	(2.6) 0.3
680	54	(柄部~茎片)	(2.5)	-	-	-	長方形	(2.9)	0.3	方形?	(0.6) (0.1)
681	54	(柄部~茎片)	(7.9)	-	-	-	長方形	(6.8)	0.4	長方形	(1.1) 0.3
682	54	(柄部~茎片)	(8.1)	-	-	-	長方形	(4.5)	0.5	方形	3.6 0.3
683	54	(柄部~茎片)	(7.8)	-	-	-	長方形	(6.1)	0.3	方形	(2.7) 0.2
684	54	(柄部~茎片)	(7.8)	-	-	-	長方形	(2.5)	0.3	方形	5.3 0.3
685	54	(柄部~茎片)	(7.0)	-	-	-	長方形	(5.0)	0.3	方形	(2.0) 0.3
686	54	(柄部~茎片)	(5.1)	-	-	-	方形	(2.2)	0.3	方形	(2.9) 0.2
687	54	(柄部~茎片)	(4.7)	-	-	-	長方形	(1.5)	0.4	方形	(3.2) 0.3
688	54	(柄部~茎片)	(4.5)	-	-	-	長方形	(0.5)	0.5	長方形	(4.0) 0.3
689	54	(茎片)	(2.2)	-	-	-	-	-	-	方形	(2.2) 0.2
690	54	(茎片)	(2.1)	-	-	-	-	-	-	方形	(2.1) 0.2
691	54	(茎片)	(2.2)	-	-	-	-	-	-	方形	(2.2) 0.2
696	56	刀子	(13.5)	三角形	(8.2)	1.3	-	-	-	長方形	5.3 0.5
699	55	刀子	(22.1)	三角形	14.1	1.9	-	-	-	長方形	8.2 1.3
700	56	刀子	15.5	三角形	10.1	1.1	-	-	-	長方形	0.8 0.8
701	56	刀子	(8.7)	三角形	(2.8)	1.0	-	-	-	長方形	5.9 1.3

(注) 括弧内は保存位置

第42表 1号墳出土五類属性

種別 番号	図版 番号	遺物 番号	穿孔	径 (mm)	孔径 (mm)	高さ (mm)	重量 (g)	石材	双眼式磨製隕石による観察所見	
									断面 穿孔	備考
631	56	23755		8.9	3.0	7.2	0.79	滑石	一部の緑色半透明の部分が見られることから、受熱で赤みがかった可能性あり	
632	56	23756		9.0	2.7	8.3	0.83	蛇紋岩	白色繊維状鉱物を多く含む。深い緑色をした蛇紋岩	
633	56	23797		8.9	2.9	8.2	0.63	蛇紋岩	白色繊維状鉱物を多く含む。深い緑色をした蛇紋岩	
634	56	23798		9.7	2.7	9.5	0.73	蛇紋岩	白色繊維状鉱物を多く含む。深い緑色をした蛇紋岩	
635	56	23799		8.6	2.9	8.1	0.51	蛇紋岩	白色繊維状鉱物を多く含む。深い緑色をした蛇紋岩	
636	56	24238		8.9	2.8	9.0	0.55	蛇紋岩	白色繊維状鉱物を多く含む。深い緑色をした蛇紋岩	
637	56	24239		9.3	2.8	9.7	0.72	蛇紋岩	白色繊維状鉱物を多く含む。深い緑色をした蛇紋岩	
638	56	24240		8.8	2.7	7.8	0.82	滑石	一部の緑色半透明の部分が見られることから、受熱で赤みがかった可能性あり	
639	56	24241		9.4	2.5	8.9	0.63	蛇紋岩	白色繊維状鉱物を多く含む。深い緑色をした蛇紋岩	
640	56	24242		9.2	2.7	7.8	0.59	蛇紋岩	白色繊維状鉱物を多く含む。深い緑色をした蛇紋岩	
641	56	24244		8.9	2.7	8.0	0.44	蛇紋岩	白色繊維状鉱物を多く含む。深い緑色をした蛇紋岩	
642	56	24245		8.8	2.5	8.0	0.57	蛇紋岩	白色繊維状鉱物を多く含む。深い緑色をした蛇紋岩	
643	56	24249		9.0	2.2	8.2	0.52	蛇紋岩	白色繊維状鉱物を多く含む。深い緑色をした蛇紋岩	
644	56	24247		8.1	2.8	7.6	0.60	蛇紋岩	数個の鋭目状の蛇紋岩の組織が見られる。黒みがかった蛇紋岩	
645	56	24249		8.9	3.0	7.9	0.85	蛇紋岩	数個の鋭目状の蛇紋岩の組織が見られる。黒みがかった蛇紋岩	

(注) 石材の鑑定と双眼式磨製隕石による観察は、当研究所付属技術員(当時) 森崎富士夫が行った。

第43表 1号墳出土瓦葺属性

棟形番号	瓦版番号	材質	平面			断面	
			長軸 (cm)	短軸 (cm)	形類	長軸 (cm)	短軸 (cm)
702	56	銅地鉄張	2.1	1.9	襷門形	0.7	0.5
703	56	銅地金剛張	2	1.9	襷門形	0.7	0.45
704	56	銅地鉄張	2	1.8	襷門形	0.7	0.4
705	56	銅地鉄張	2	1.8	襷門形	0.7	0.4
706	56	銅地鉄張	1.6	1.5	襷門形	0.4	0.3

第44表 1号墳出土両頭金具属性

棟形番号	瓦版番号	全長	前部		軸部		
			長 (cm)	直径 (cm)	長 (cm)	直径 (cm)	側直径 (cm)
692	56	(2.7)	2.0	0.5	(2.7)	0.3	0.4
693	56	2.9	(2.1)	0.5	2.9	0.2	0.5
694	56	2.8	(2.0)	0.6	2.8	0.3	0.5
695	56	(2.4)	(1.9)	0.5	(2.4)	0.3	0.4
696	56	2.6	2.1	0.6	2.6	0.3	0.4
697	56	2.9	2.3	0.6	2.9	0.3	0.4

(注) 括弧内は残存割合

第45表 古墳時代・律令期土器属性

瓦版番号	瓦版番号	遺跡名	現地遺跡名	出土施設	層別	部類	計測値 (cm)	色調	胎土	施文	保存部分	残存率
629		1号墳	SZ01	H01	扉裏面	瓦葺張	口径 49.0 最大径 10.4 器高 0.1	7.5Y6/1灰	黄褐色粘土を若干含む	縦	口縁部	1/5
630	56	1号墳	SZ01	H01	土師器	甕	口径 11.9 最大径 11.6 器高 2.7 器底径 5.3	外面: 10YR6/4 内面: 7.5YR7/6 内径: 7.5YR7/6	黄、石灰、白色砂子、黒色砂子、赤色粘土を含む	今年鑑	ほぼ完整	
711	57	3号墳	SZ03	K06/07	土師器	瓦葺張	口径 25.2 最大径 21.4 器高 6.6 器底径 32.8	5YR6/6 緑	黄白色砂子、黒色粘土を含む	縦	ほぼ完整	口縁部 3/4
712	57	3号墳	SZ03	K06/07	土師器	甕	口径 (23.2) 最大径 (18.4) 器高 (22.2)	7.5YR5/4 Rc.65-高	黄白色砂子、黒色粘土を含む	縦	口縁部～ 胴部	1/4
713	57	3号墳	SZ03	K06/07	土師器	甕	口径 (17.6) 最大径 24.2 器高 7.2	5YR6/6 緑	黄白色砂子を含む。 灰土若干	縦	胴部～ 底部	
714		4号墳	SZ04	AA26	扉裏面	瓦葺張	口径 (16.7) 最大径 (17.0) 器高 (1.0)	7.5Y5/1 灰	黄白色粘土を含む	縦	口縁部	1/12
715		2号方形 周溝状遺跡	SX02	H06	扉裏面	瓦葺張	口径 (13.4) 最大径 (2.9)	7.5Y6/1 灰	黄白色砂子、黒色粘土を多量に含む	縦	口縁部	1/12
716				H-1	扉裏面	瓦葺張	口径 (10.0) 最大径 (12.3) 器高 (1.9)	7.5Y6/2 灰オリーブ	黄白色砂子、灰色粘土を若干含む	縦	口縁部	1/2
717				H-1	扉裏面	瓦葺張	口径 (16.4) 最大径 (20.1) 器高 (2.7)	7.5Y5/1 灰	黄白色砂子、褐色粘土を含む	縦	口縁部	1/12
718				G-1	扉裏面	瓦葺張	口径 (16.4) 最大径 (19.0) 器高 (2.3)	5Y6/2 灰オリーブ	黄白色粘土を少量含む	縦	口縁部	1/12
719				H06	扉裏面	瓦葺張	口径 (12.0)	5Y5/2 灰オリーブ	黄白色砂子、黒色粘土を含む	縦	口縁部	1/12
720				H06	扉裏面	瓦葺張	口径 (16.4) 最大径 (17.0) 器高 (1.0)	7.5Y6/2 灰オリーブ	黄白色粘土を少量含む	縦	胴部	1/12
721	57			X01	土師器	甕	口径 22.7 最大径 20.8 最大径 33.6 器高 9.3 器底径 29.3	5YR5/4 Rc.64-赤黒	黄、石灰、白色砂子、黒色砂子を含む	縦	ほぼ完整	口縁部 1/3
722	57			X01	土師器	甕	口径 19.4 最大径 38.2	外面: 5YR6/4 内面: 5YR5/4 Rc.64-赤黒	黄、石灰、白色砂子、黒色砂子、赤色砂子、砂灰を含む	縦	口縁部～ 胴部上段	1/2
723	57				土師器	甕	口径 (22.2) 最大径 (18.4) 器高 (10.7)	5YR5/6 赤赤陶	黄、石灰、黒色砂子、灰色粘土を含む	縦	口縁部～ 胴部中段	1/2

(注) 括弧内は残存割合

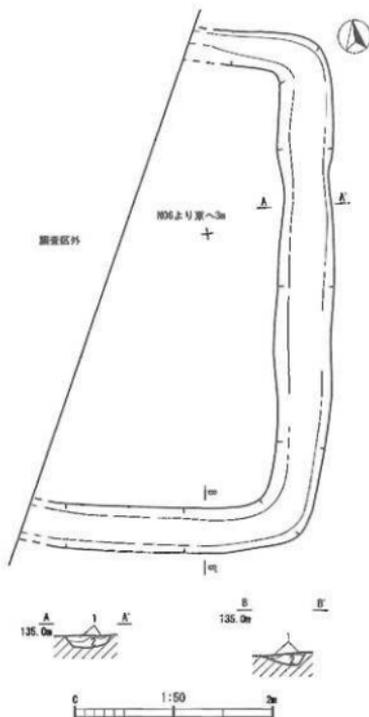
6 1号方形周溝状遺構 (SX01)

(1)遺構 (第116・139図)

位置と残存状況 3号墳と同じ尾根上に所在する。標高は約135mであり、南には3号墳、2号方形周溝状遺構 (SX02) が存在する。調査区際で検出し、検出できた平面形は「コ」字状であるが、調査区外に溝は延びている。溝に囲まれた内側には何らかの施設があった可能性も考えられるが、上部は削平を受けており、検出することはできない。

形状と規模 1号は上述したように、「コ」字状の平面形を持つ。ただし、調査区外に延びている状況から、本来的には次に記す2号と同様、方形の平面形と考えられる。

規模は、東西2.8m、南北5.4mである。南北方向から、一辺の長さは5.3m前後である。なお、溝は南北方向においてはN-8°-Eに方位をとる。検出面での溝の幅は0.5~0.6mである。検出面からの深さは最大で0.1mであり、斜面の下方面である南側は北側よりも幾分浅くなる。



- 1 黒褐色土
堅中や強い、粘まりや中強い、粘褐色粒(φ1mm前後)がスコリア下部に散在。
- 2 黒褐色土
粘中や弱い、粘まりや中強い、粘褐色~褐色土の小ブロックを少量含む。

第139図 1号方形周溝状遺構実測図

(2)遺物

この遺構からは遺物が出土しなかった。遺構周辺のL/M05/07グリッドの表土から須恵器片が出土している。これらが、遺構に伴うものであるのかは不明である。

(3)小結

1号は調査区端部で検出したため、遺構全貌を把握することはできなかった。ただし、後述する2号を参照とするならば、方形に巡る溝状遺構であった可能性が指摘できる。一辺の長さは5.3mであるといえよう。

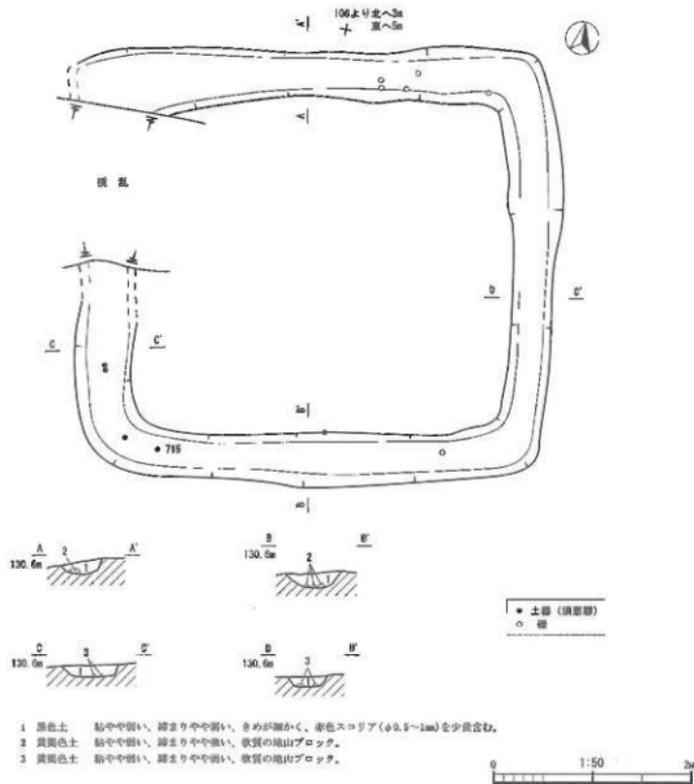
遺構に伴う遺物は、出土しなかったため時期や性格を特定することはできない。ただし、2号の例から、この遺構は律令期の所産である可能性が高い。

7 2号方形周溝状遺構 (SX02)

(1)遺構 (第116・140図)

位置と残存状況 3号墳と同じ尾根上、3号墳の南に位置する。標高は約130.5mであり、この遺構の北には1号が存在する。上部は後世の削平を受けているようであり、溝に囲まれた内側に何らかの施設があった可能性も十分に考えられるが、ここからは何も検出できなかった。また、遺構の西側には攪乱が及ぶ箇所がみられる。

形状と規模 2号は方形の平面形を有する。規模は、長辺が4.8m、短辺が4.5mであり、ほぼ正方形を呈する。このうち短辺が南北方向となり、



第140図 2号方形周溝状遺構実測図

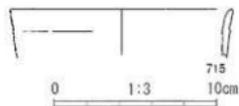
その方位はN-11°-Wである。

溝は、幅0.6m前後で、検出面からの深さは最大で0.2mであるが、斜面下方である南側と斜面上方である北側とで、検出面からの深さは0.15mでほぼ同一である。

(2)遺物 (第141図)

周溝の覆土から須恵器5点と礫6点が出土した。そのうち、周溝の南西隅付近から出土した須恵器片を図示する。坏身の口縁部破片であり、遠江編年のV期前半(8世紀前半)以降に位置づけられると考えられる。

なお、2号の南東に位置するSF37からは、須恵器坏身の破片が出土した。胎土から、猿投産の可能性がある。これが本遺構に関係するものであるかどうかは不明である。



第141図 2号方形周溝状遺構出土遺物

(3) 小結

2号は一辺4.8mの方形の平面形をもつ遺構であった。遺構とその周囲からは、8世紀前半以降に位置付けられる須恵器片が出土しているため、この遺構は律令期の所産と考えられる。愛鷹南麓を始めとする東部では、田頭山古墳群や池田B遺跡などで同様の遺構の存在が確認されており、これらの遺跡でも同様の年代観を示す土器が出土している（第6章第3節参照）。

第3節 遺構外出土遺物

1 概要

該期の遺物として、須恵器が134点、土師器が760点（光波測定器で座標を測定した点数）以上出土した。須恵器は1号墳の周辺、3号墳、1・2号方形周溝状遺構を含む尾根、4・5号墳周辺で出土した。特に、1号墳の南西、G/H-1グリッドでは35点が出土した。1号墳や2号墳からの流れ込みの可能性が考えられるが、詳細は不明である。土師器は3号墳周辺、4・5号墳周辺から多く出土したが、図示できない小片がほとんどだった。注目すべきは、調査区北西の痩せ尾根上のX01グリッド付近で、土師器壺の破片が集中して発見された。接合作業の結果、1個体がほぼ完形に復原できたほか、2個体が口縁部から胴部にかけて復原できた。これらの土師器は何らかの遺構に伴ったものである可能性があるが、付近は耕作による攪乱が激しく検出することはできなかった。

2 出土遺物（第142図）

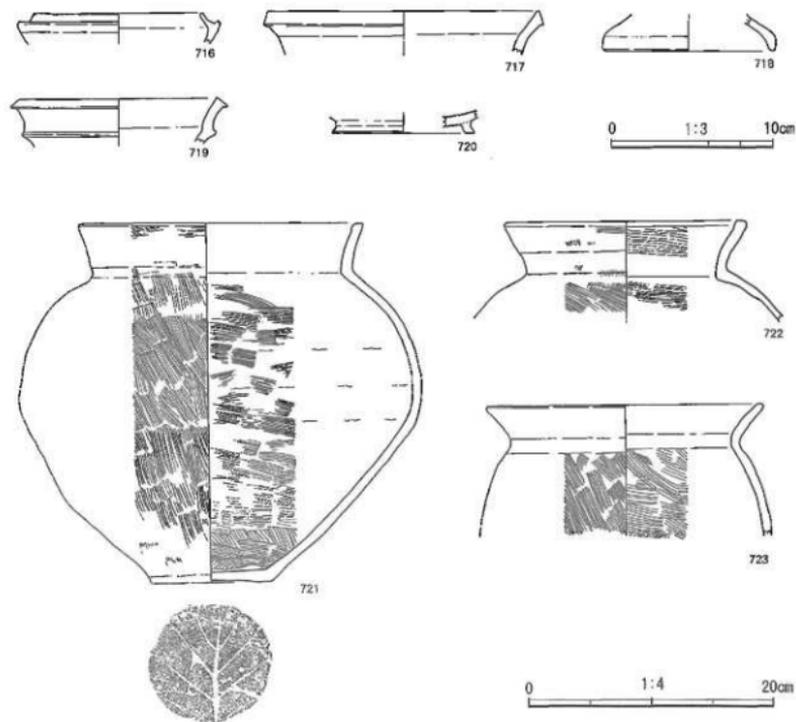
716～718は1号墳の南西、G/H-1グリッドで出土した須恵器片である。716は遠江編年のIV期前半に位置づけられる坏身の口縁部破片である。717は壺または壺の口縁部破片と考えられる。これらはH-1グリッドで出土した。718は遠江編年のIV期前半から後半に位置づけられる坏壺の口縁部破片である。G-1グリッドで出土した。

719・720は2号方形周溝状遺構の周辺で出土した須恵器片である。719は平瓶の口縁部破片である。湖西産で、遠江V期に位置づけられ、8世紀代の所産と考えられる。H06グリッドで出土した。720は台部破片であり、坏の可能性がある。8世紀末以降の所産と考えられる。I06グリッドで出土した。

721～723はX01グリッド付近から出土した。721は球胴壺である。口径22.7cm、底径9.5cm、器高29.3cmである。器厚は薄い。胴部最大径は中位から上位にかけてであり、口径より大きい。口縁部は短く、やや直立気味であり、端部は内側に肥厚する。胴部外面は、上位に粗い縦位のハケが確認でき、中位から下位にかけて細かい斜位のハケが確認できる。内面は、輪横みの底を確認でき、横位のハケを全面に施し、所々ヨコナデを施している。底部には木葉底が残り、内面には木目を押し引いた後にヨコナデを施している。胎土に白色粒子を多く含む。色調は外面・内面ともににぶい赤褐色を呈している。8世紀前半の所産と考えられる。

722は球胴壺の口縁部～胴部上位の破片である。口径19.4cm、頸部径16.2cmである。器厚は薄い。口縁部は、やや外方にのびる。外面にはヨコナデの後ヨコハケを施している。内面にはヨコハケを施している。頸部は、外面にヨコナデを施しているが、一部にタテハケ目が残っている。胴部上位は、外面にはハケ目を斜位に、内面には横位に施す。外面の色調はにぶい橙色、内面はにぶい赤褐色を呈している。胎土に白色粒子を多量に含む。8世紀前半の所産と考えられる。

723は長胴壺の口縁部～胴部中位の破片である。口径(22.2)cm、頸部径(18.4)cmである。器厚は薄い。口縁部は外方にのびており、外面、内面ともにロクロを回転させてヨコナデを施し、頸部は外面に一部ヘラミガキを施している。胴部は、外面にはやや細かいハケ目を斜位に施し、内面にはヨコハケの



第142図 古墳時代・律令期遺構外出土遺物

第46表 秋葉林遺跡方形周溝状遺構一覽

遺 構 名	周溝規模		周溝の出土遺物	備 考
	南北(m)	東西(m)		
1号方形周溝状遺構	5.4	(2.2)		西半は未発出
2号方形周溝状遺構	4.5	4.5	須恵器5、6	

(注) 括弧内は残存数値

後斜位のハケ目を施している。外面の色調はにぶい橙色を呈する。8世紀中葉の所産と考えられる。

参考文献

- 井鍋晋之 2003 「静岡県内の飾り弓について」『研究紀要』10号 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 白井 勲 1984 「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 大谷晃二 1999 「上塩冶築山古墳出土大刀の時期と系譜」『上塩冶築山古墳の研究』 鳥根県教育委員会
- 大谷宏治 2003 「地域区分、時期区分と鉄鏃分類」『研究紀要』10号 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2003 「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鏃の変遷とその意義」『研究紀要』10号 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2004 「大塚敷C古墳群の評価」『大塚敷C古墳群・大塚敷1号墓』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 尾上元規 1993 「古墳時代鉄鏃の地域性」『考古学研究』40巻1号 考古学研究会
- 菊地芳明 2003 「裝飾付大刀からみた古墳時代後期の東北・関東」『後期古墳の階段階』 東北・関東前方後円墳研究会
- 北川恵一 1988 「「駿東型の壺」の初現と終末について」『沼津市博物館紀要12』 沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治史料館
- 木ノ内義昭 2002 『東平遺跡』 富士市教育委員会
- 静岡県考古学会 2003 『静岡の横穴式石室』
- 東海考古学フォーラム実行委員会 2001 『東海の後期古墳を考える』
- 鈴木敏則 2001 「湖西宮古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』第5分冊 補遺・論考編 東海土器研究会
- 瀧瀬芳之 1984 「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 瀧瀬芳之 1986 「円頭大刀・圭頭大刀の編年と佩用者の性格」『考古学ジャーナル』266号 ニューサイエンス社
- 瀧瀬芳之 1992 「大刀の佩用について」『埼玉考古学論集』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 西岡千絵 2005 「飛燕式鉄鏃の研究」『七隈史学』6号
- 西澤正晴 2000 「井田松江18号墳出土の金銅装圭頭大刀について」『井田松江古墳群』 静岡県戸田村教育委員会
- 沼津市教育委員会 1985 『埋蔵文化財発掘調査報告書』 沼津市文化財調査報告第35集
- 浜松市教育委員会 2004 『有玉古墳』

第5章 その他の時代の遺構と遺物

第1節 時期不明の遺構

1 概要

本調査において、時期不明の焼土跡が1基、溝状遺構が15基、土坑が203基、地下室（ちかむろ）遺構が1基検出された。これらの遺構は調査区を南北に走る浅い谷の緩斜面に分布する。検出面は新期スコリア層のものが大半である。焼土跡は遺物を伴わないため、溝状遺構に切られているという以外に時期を特定する要素がない。溝状遺構は谷底を囲むようにして作られており、谷を横断するものもあった。土坑は溝状遺構を大抵切っていたが、まれに切られる例もあった。土坑の形状はほとんどが円形を呈している。

2 遺構と遺物

(1) 焼土跡 (第147図)

1号焼土跡 (FP02) はM10グリッドで検出した。検出層位はNSCである。遺物は出土していない。南東側をSD04に切られている。

(2) 溝状遺構 (第148図)

溝状遺構は15基検出された。いずれも調査区を南北に走る浅い谷の緩斜面に沿って分布している。内容は類同であるため、1号のみ実測図を掲載し、他は計測表のみの掲載とする。

1号溝状遺構 (SD01) はY19グリッドからほぼ北向きに伸び、AA19グリッド付近で等高線に沿うように半円状に伸び、AB20グリッド付近で跡をたどれなくなる。

(3) 土坑 (第149図)

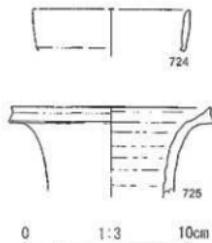
今回の調査区内では、新期スコリア層を中心とした層位から203基の土坑が検出された。平面形態は円形または亜円形で、直径は1m前後のものである。愛鷹山麓ではこのような形状をした円形の土坑の検出例が多いが、土坑の性格については不明である。

土坑の検出数が膨大であるため、本報告では代表的なものに限定して実測図を掲載する。その他の土坑については、章末に計測表を掲載する。これらは覆土から遺物が出土したものもあるが、遺構の年代を示しているとは考えがたい。

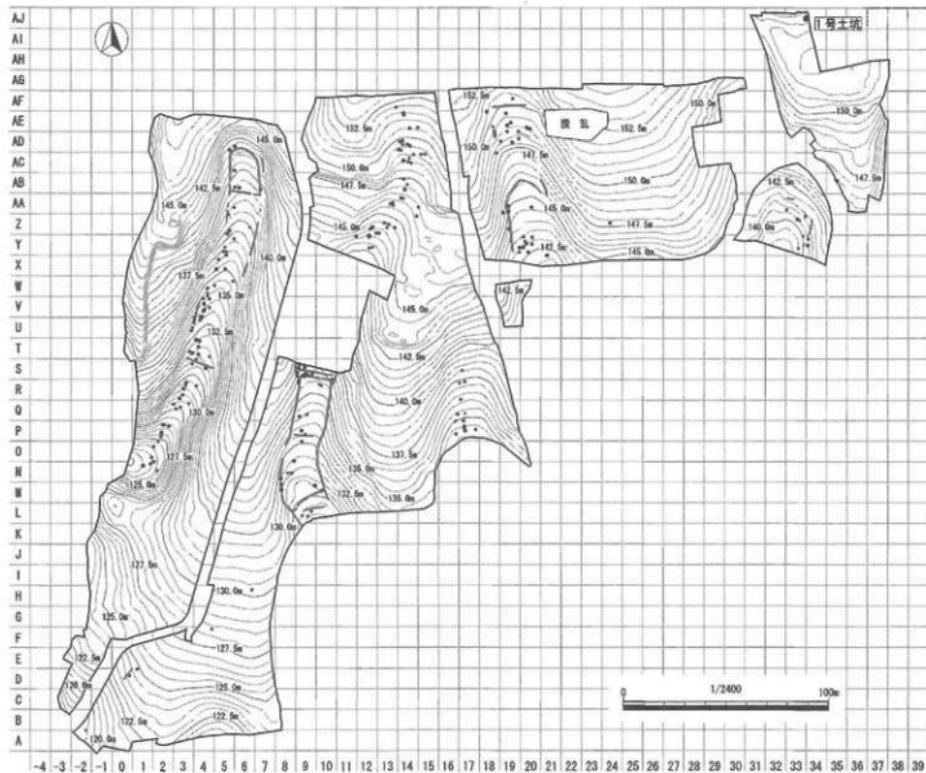
1号土坑 (SF144) はAJ33グリッドに位置する。検出層位はKUである。平面形態はほぼ円形を呈する。該期の他の遺構とは異なり、最大深は1.70mを測る。覆土から縄文時代よりも新しい時代のものと判断した。

2号土坑 (SF037) はH06グリッドに位置する。2号方形周溝状遺構の南東に位置している。覆土から8世紀後半に位置付けられる須恵器片が出土した (第143図724)。坏身の口縁部破片と考えられ、胎土の色調から、猿投産である可能性を指摘しておく。

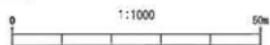
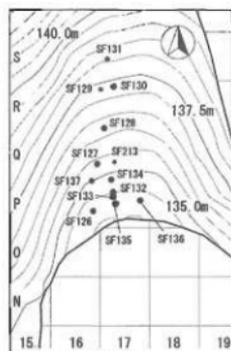
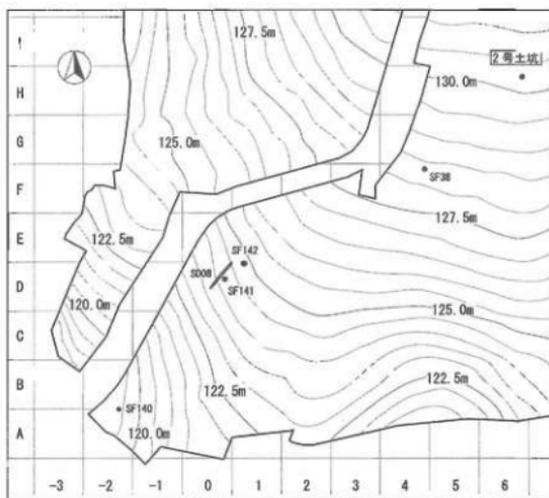
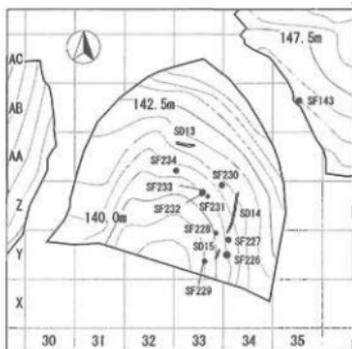
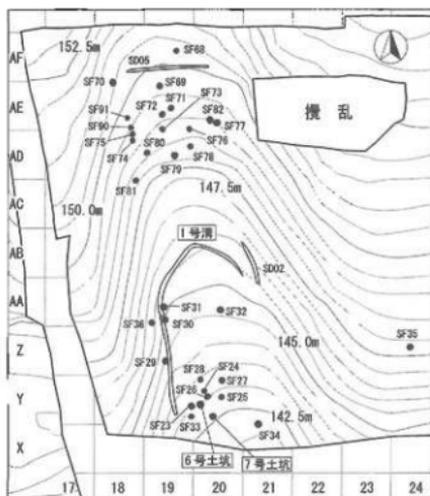
3号土坑 (SF182) はS03グリッドに位置する。覆土から須恵器片が出土した (第143図725)。長頸壺の口縁部破片と考えられ、8世紀



第143図 時期不明土坑出土遺物

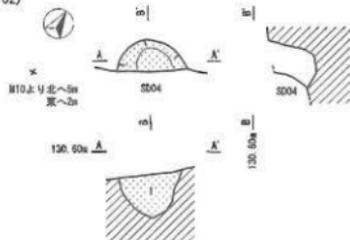


第144图 时期不明遺構全体图



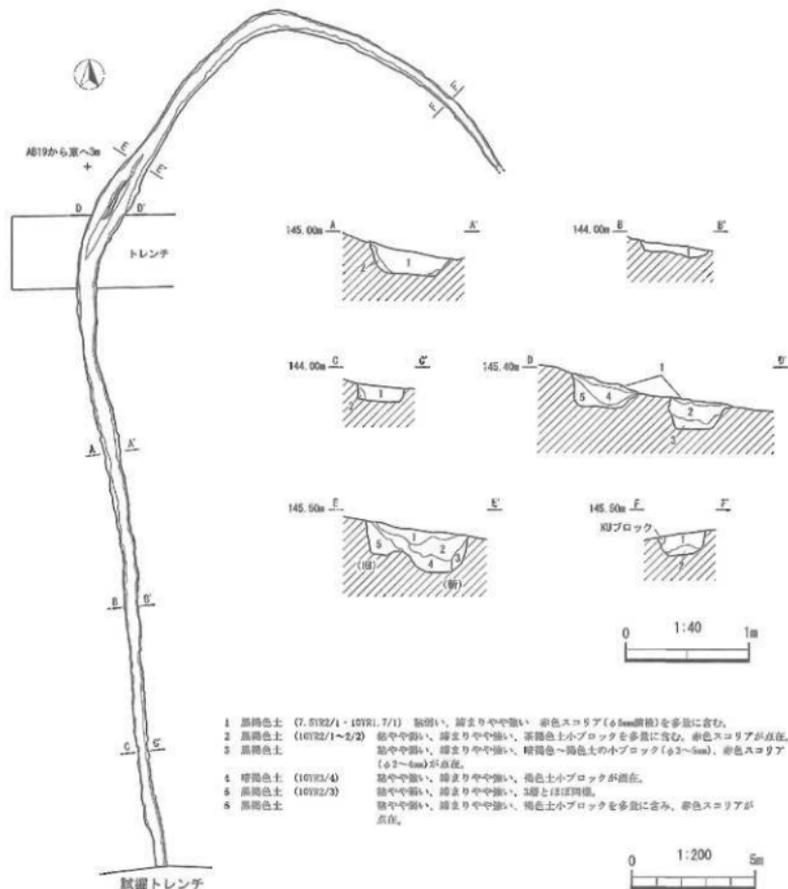
第146図 時期不明遺構集中部(2)

1号焼土跡 (FP02)



1 黒色土 (S1X1.7/1) 粘強い、締まりやや強い、赤色スコリア(φ1~3mm)を若干含む、焼土版を多数に含む。

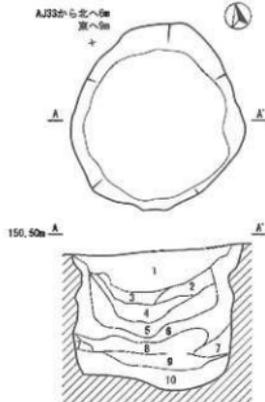
第147図 時期不明焼土跡



- 1 黒褐色土 (7. S1X2/1 - 15YR1.7/1) 粘強い、締まりやや強い、赤色スコリア(φ5mm程度)を多数に含む。
- 2 黒褐色土 (10YR2/1~2/2) 粘やや強い、締まりやや強い、黒褐色土小ブロックを多数に含む、赤色スコリアが点在。
- 3 黒褐色土 粘やや強い、締まりやや強い、暗褐色~褐色土の小ブロック(φ3~5mm)、赤色スコリア(φ2~5mm)が点在。
- 4 暗褐色土 (10YR3/4) 粘やや強い、締まりやや強い、褐色土小ブロックが点在。
- 5 黒褐色土 (10YR2/3) 粘やや強い、締まりやや強い、3層とほぼ同様。
- 6 黒褐色土 粘やや強い、締まりやや強い、褐色土小ブロックを多数に含む、赤色スコリアが点在。

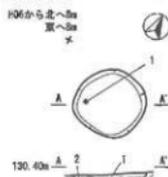
第148図 1号溝状遺構

1号土坑 (SF144)



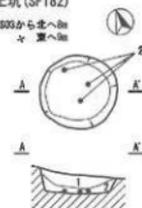
- 1 黒褐色土 (7.5192/2) 粘りや強い、締まり弱い、赤色スコリア (φ2~3mm) を多数に含む。
- 2 褐色土 (7.5194/3) 粘り弱い、締まりや強い、YLR (φ2~3mm) を少量含む。
- 3 赤色土 (7.5192/1) 粘り強い、締まりや強い。
- 4 褐色土 (7.5194/4) 粘り弱い、締まりや強い。
- 5 赤色スコリア、YLR (φ2~3mm) を微量含む。
- 6 褐色土 (7.5194/3) 粘り強い、締まりや強い、YLR (φ2~3mm) を少量含む。
- 7 濃い褐色土 (7.5193/4) 粘りや強い、締まり弱い。
- 8 暗褐色土 (7.5192/3) 粘りや強い、締まり弱い、YLR (φ2~3mm) を少量含む。
- 9 暗褐色土 (7.5193/4) 粘りや強い、締まり弱い、赤色スコリア、YLR (φ2~3mm) を微量含む。
- 10 黄褐色土 (7.5195/3) 粘りや強い、締まりや強い。

2号土坑 (SF37)



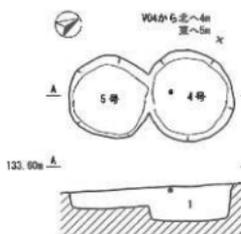
- 1 黒色土 粘りや強い、締まりや強い、きめが細かく、赤色スコリア (φ0.5~2mm)、赤色スコリア (φ1mm前後) を僅かに含む。
- 2 黄褐色土 粘りや強い、締まりや強い、赤色土小ブロックを多数に含む状態。

3号土坑 (SF182)



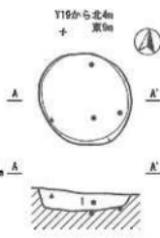
- 1 黒色土 (10192/1) 粘りや強い、締まりや強い、赤・褐色のスコリア (φ1mm~5mm) を少量含む。
- 2 黒褐色土 (10182/2) 粘り強い、締まりや強い、赤・褐色のスコリア (φ2~3mm) を僅かに含む。

4号土坑 (SF169)・5号土坑 (SF170)



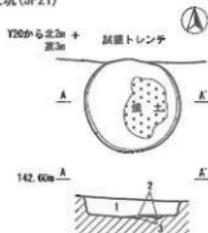
- 1 黒褐色土 (10192/2) 粘り強い、締まりや強い、赤・褐色スコリア (φ2~3mm) を僅かに含む。一部砂粒を含む。

6号土坑 (SF22)



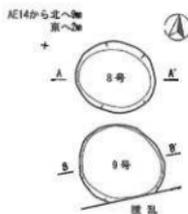
- 1 黒色土 粘りや強い、締まりや強い、赤色スコリア (φ2~3mm) を少量含む、上部に黒面層時代の土層を含む、黒曜石の石粒が出土する。

7号土坑 (SF21)



- 1 黒色土 粘りや強い、締まりや強い、赤色スコリアを少量含む。
- 2 明褐色土 粘りや強い、締まり強い、炭化物 (φ5~60mm) を含む。従上、従土ブロック (φ4~15mm) が押圧された状態。粘土の範囲は平定で不整形である。
- 3 明褐色土 粘りや強い、締まりや強い、黄土粒 (φ1~3mm) を少量含む。

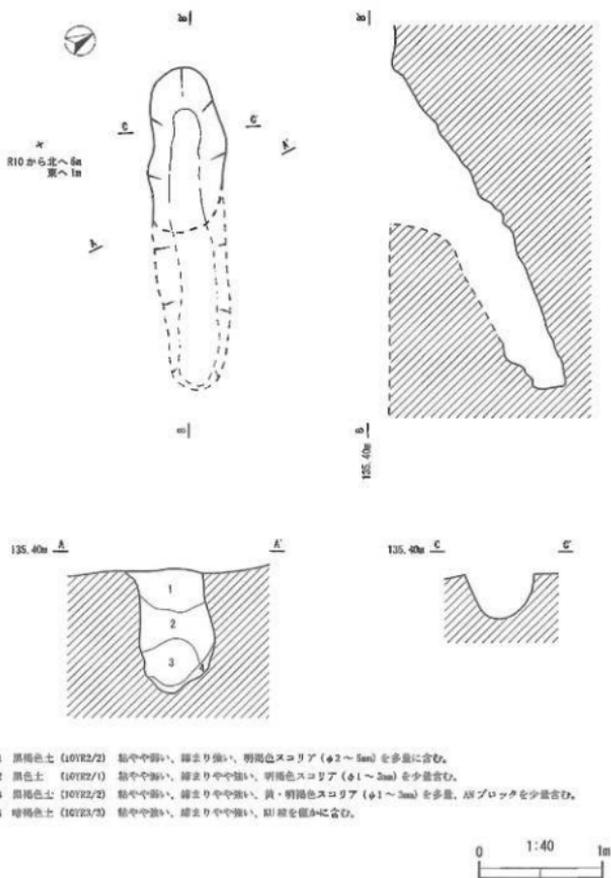
8号土坑 (SF66)・9号土坑 (SF67)



- 1 黒色土 (5191.7/1) 粘り強い、締まりや強い、赤色スコリア (φ1~3mm) を若干含む。



第149図 時期不明土坑



第150図 地下室突測図

前半の所産と考えられる。

4号土坑(SF169)と5号土坑(SF170)はV04グリッドに位置する。互いに重複しているが、前後関係は不明である。覆土から須恵器片が出土した。

6号土坑(SF022)はY19グリッドに位置する。覆土から土器(縄文土器、土師器片)・石器(石鏃)が出土した。

7号土坑(SF021)はY20グリッドに位置する。土坑底面で押圧された焼土を検出した。北側を一部削平されている。

8号土坑(SF066)と9号土坑(SF067)はAE14グリッドに位置する。互いに近接して検出された。9号土坑は南側一部を削平されている。

(4)地下室(ちかむろ)遺構(第150図)

地下室はR10グリッドで検出した。検出層位はKUである。遺物は出土していない。上部東半分を削平されている。

第2節 その他の時代の遺物

1 旧石器時代の石器

表土から出土したものであるが、旧石器時代に属する可能性が高いと判断した。

726は白色半透明の玉髓を用いた基部加工のナイフ形石器である。平坦な剥離面を打面として剥離された縦長剥片を素材とする。素材剥片末端部は不整形であるが鋭い。素材剥片の打面に接する両側縁に急斜度の整形剥離を施す。箱根・愛鷹地域のBB I層から出土する基部加工のナイフ形石器に類似することから、その時期の石器の可能性はある。

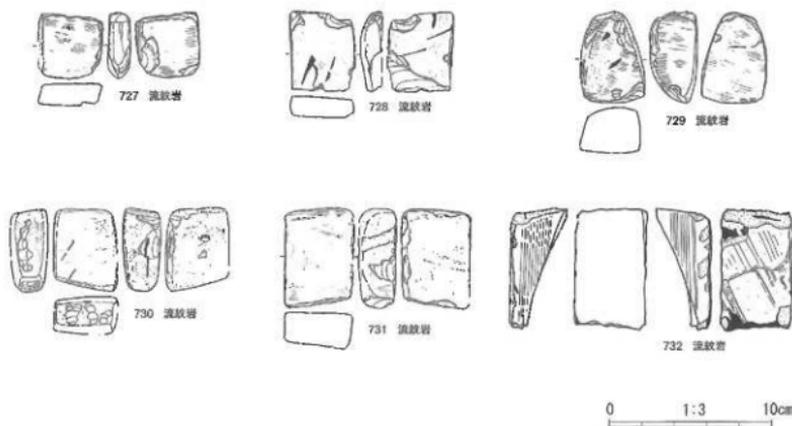
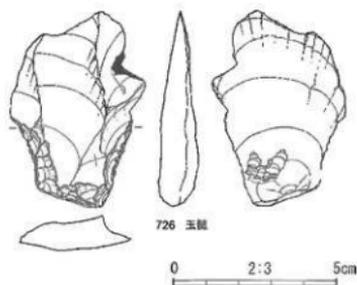
2 古代以降の砥石

古代以降のものと考えられる砥石が7点出土し、6点を図化した。

727と728は薄い板状である。一部の小口は未使用で、折面様の面が残されている。727の下端部は表裏にわずかな傾斜をもち、面をなさない。729は比較的丸みをもつもので、現状より大形の砥石が折れた後も使用を続けたものと考えられる。下端部は磨製の片刃石斧状の形態となっている。上面を除く全面で研磨が行われる。730と731は厚い板状である。730は上面以外には研磨が認められる。両平坦面以外の面には部分的に未使用面が残されている。上面には鑿状工具による加工の可能性のある痕がある。731は全面に研磨が認められるが、正面と左側面以外の面には部分的に素材面が残される。732は両側縁に工具による均質な線状痕が残されている。もともと直方体であったものが正面の使用によって窪められ、薄くなった部分で折損したものであろう。下端部には折面が残されている。裏面には鑿状工具による加工痕が残されている。図化していない1点にも732と同様の均質な線状痕が認められる。

3 古代以降の土器

調査区の表土～KU層から縄文・弥生・古墳時代以外のものと考えられる土器が78点出土している。内訳は第47表に示す。出土陶器のうち、産地が特定できるものについては、第48表にまとめた。これらはいずれも小片であり、図化できなかった。



第151図 その他の時代の出土遺物

第47表 出土土器点数表
(縄文・弥生・古墳時代以外)

種別	破片数
灰釉陶器	1
瓦質土器	21
貿易陶磁器	2
如多	1
常滑	1
瀬戸・美濃	2
志野	1
肥前	1
近世～近代	46
時期不明	3
計	78

第48表 出土陶器点数表

種別・産地	分類・時期	器種	破片数	備考
灰釉陶器	K500群行	碗	1	
青磁(亀泉産高)	B11類	碗	1	
如多	S型式	片口鉢	1	A類
常滑	中世	蓋	1	小形
瀬戸・美濃	大濠	溜鉢	2	
志野	17世紀前半	丸皿	1	
肥前	18世紀	缸皿	1	

第49表 焼土跡（時期不明）属性

遺跡名	現地遺跡名	グリッド	層位	長さ(m)	幅(m)	最大深(m)	平 面
1号	FP02	M10	NSC	0.57	(0.26)	0.36	不規則円形?

第50表 溝状遺構属性

遺跡名	現地遺跡名	グリッド	長さ(m)	幅(m)	最大深(m)	平面形状 / 検出層位	覆土	遺物	備 考
1号	SD01	Y/AB19/29	50.6	0.90	0.35	溝状 AN・KU	NSC+UK	土層2	SF30・32に切られている
	SD02	AA/AB01	9.32	0.50	0.05	溝跡跡 KU	KU+AN+クロ	土層2 土層1	試掘トレンチにより切られている
	SD03	L09/10	11.2	0.42	0.30	溝跡跡 NSC~クロ	NSC+KGP+クロ		SF42・43に切られている
	SD04	L/S4/10	09.0	0.55	0.36	不規則 NSC~KU	UK+NSC	土層1	SF112~114・120に切られている
SD05	AP18/20	16.4	0.46	0.21	溝跡跡	NSC	UK+NSC		
SD06	PO9/09	9.7	0.45	0.06	溝跡跡	NSC	UK+NSC		
SD07	SO6/10	12.4	0.52	0.31	溝跡跡	NSC	NSC+UK	土層2	SF103に切られている
SD08	DO0	3.4	0.22	0.05	溝跡跡	NSC	UK	土層1	
SD09	X/AC05/07	07.05	0.50	0.50	溝状	NSC	NSC+UK	土層2 土層3	試掘トレンチにより切られている
SD10	AC07	7.8	0.60	0.10	溝跡跡	NSC	NSC+UK		
SD11	U/V04	9.5	0.45	0.10	溝跡跡	NSC	NSC+UK		
SD12	SO3/04	14.0	0.65	0.85	溝跡跡	NSC	NSC+UK		
SD13	AA33	3.8	0.45	0.12	溝跡跡	NSC	NSC+UK		
SD14	Y/Z34	8.4	0.35	0.10	溝跡跡	NSC	NSC+UK		
SD15	Y33	1.9	0.35	0.10	溝跡跡	NSC	NSC+UK		

第51表 土坑（時期不明）属性

(注) 括弧内は残存値

遺跡名	現地遺跡名	グリッド	長さ(m)	幅(m)	最大深(m)	平面形状 / 検出層位	覆土	遺物	備 考
1号	SF144	AB33	2.30	0.30	1.70	不規則形	KU	KU+FB	
2号	SF107	H05	0.90	0.34	0.06	円形	KU	土層1	
3号	SF182	SO3	0.57	0.90	0.26	円形	NSC	UK+NSC	土層4
4号	SF169	V04	1.14	1.05	0.44	円形	NSC	UK+NSC	土層1
5号	SF170	V04	1.03	1.00	0.22	円形	NSC	UK+NSC	土層1
6号	SF022	Y19	1.50	1.12	0.23	円形	NSC	UK+NSC	石層1, 土層3
7号	SF014	Y29	1.02	1.10	0.22	円形	NSC	UK+NSC	
8号	SF066	AE14	1.02	0.94	0.20	楕円形跡	NSC	UK+NSC	一部割平, 直前に出土層位
9号	SF067	AE14	0.96	0.88	0.14	円形	NSC	UK+NSC	
	SF000	AA15	0.38	0.89	0.13	楕円形跡	NSC	UK	
	SF002	Z14	1.00	0.95	0.18	楕円形跡	NSC	UK	
	SF003	AA14	0.95	0.80	0.36	楕円形跡	NSC	UK	調査区外に及びており未発掘
	SF004	AA14	0.82	0.42	0.22	円形	NSC	UK	調査区外に及びており未発掘
	SF005	Z13	1.02	0.94	0.49	楕円形跡	NSC	UK	
	SF006	AA13	1.05	0.85	0.46	楕円形跡	NSC	UK	
	SF007	AA13	0.89	0.85	0.08	楕円形跡	NSC	UK	
	SF008	AA13	1.06	1.01	0.28	楕円形跡	NSC	UK	
	SF009	Z13	0.93	0.84	0.28	楕円形跡	NSC	UK	
	SF010	Z13	0.68	0.67	0.13	楕円形跡	NSC	UK	
	SF011	Z13	1.15	1.05	0.30	楕円形跡	NSC	UK	方形に似る
	SF012	Z12	1.13	0.96	0.36	楕円形跡	NSC	UK	
	SF013	Z12	1.10	1.05	0.27	楕円形跡	NSC	UK	
	SF014	Z13	1.04	0.99	0.16	円形	NSC	UK	
	SF015	Z12	1.60	0.30	0.16	円形	NSC	UK	坑内に遺品(直前土層)あり
	SF016	Z12	1.24	0.70	0.51	円形	NSC	UK	坑底により約1/2割平
	SF017	Z12	0.59	0.55	0.06	楕円形跡	NSC	UK	
	SF018	Z12	1.09	1.03	0.24	楕円形跡	NSC	UK	
	SF219	Y11	1.07	0.94	0.20	楕円形跡	NSC	UK	
	SF203	Y19	1.37	1.23	0.23	楕円形跡	NSC	UK+NSC	土層1
	SF204	Y19	1.10	1.05	0.38	円形	NSC	UK+NSC	
	SF205	Y20	1.03	0.94	0.33	楕円形跡	NSC	UK+NSC	
	SF206	Y20	0.94	0.87	0.06	円形	NSC	UK+NSC	
	SF207	Y20	1.14	1.10	0.43	円形	NSC	UK+NSC	
	SF208	Y20	0.98	0.93	0.32	円形	NSC	UK+NSC	土層1
	SF209	Z19	1.26	1.19	0.21	楕円形跡	NSC	UK+NSC	
	SF210	AA15	1.20	1.17	0.24	円形	NSC	UK+NSC	
	SF201	AA19	1.29	1.24	0.23	円形	NSC	UK+NSC	SD01を切っている
	SF202	AA30	1.30	1.16	0.34	円形	NSC	UK	SD01を切っている
	SF233	Y19	1.00	0.80	0.14	円形	NSC	UK	一部割平
	SF234	X21	1.27	0.60	0.09	円形	NSC	UK	約1/2割平
	SF235	Z24	1.15	1.05	0.11	円形	NSC	UK	
	SF236	AA19	1.02	0.96	0.16	楕円形跡	NSC	UK	土層1
	SF208	FB4	0.81	0.74	0.12	半円形跡	KU	UK	土層1
	SF041	N08	1.14	1.08	0.14	円形	AN	UK+NSC	
	SF042	M08	0.94	0.75	0.11	円形	AN	UK+NSC	SD03を切っている
	SF043	M08	1.15	1.08	0.27	円形	AN	UK+NSC	SD03上面で検出
	SF044	N08	1.31	1.16	0.05	円形	クロ+NSC	UK+NSC	
	SF045	N08	0.79	0.75	0.09	円形	クロ+NSC	UK+NSC	
	SF046	N08	1.84	1.00	0.38	円形	クロ+NSC	UK+NSC	
	SF047	M09	1.40	1.23	0.19	円形	NSC	UK+NSC	
	SF048	L09	0.79	0.73	0.14	円形	NSC	UK+NSC	
	SF050	AD14	1.08	1.00	0.28	円形	クロ+NSC	NSC	
	SF051	AD14	0.90	0.82	0.07	円形	クロ+NSC	NSC	
	SF052	AD14	1.09	0.99	0.14	円形	クロ+NSC	NSC	

第5章 その他の時代の遺構と遺物

遺構名	現地座標	グリッド	長径(m)	短径(m)	最大径(m)	平面形状	出土単位	層土	遺物	備考
SP653		AD14	0.90	0.86	0.18	円形	クロ+NSC	NSC		
SP654		AD14	0.92	0.87	0.20	円形	クロ+NSC	NSC		
SP655		AD14	0.99	0.95	0.32	円形	クロ+NSC	NSC		
SP656		AC16	0.98	0.95	0.18	円形	クロ+NSC	NSC		
SP657		AC15	0.97	0.85	0.12	円形	クロ+NSC	NSC		
SP658		AD14	1.28	1.15	0.55	円形	クロ+NSC	NSC		
SP659		AD14	0.82	0.72	0.16	円形	クロ+NSC	NSC		
SP660		AD14	1.11	0.87	0.11	楕円形	クロ+NSC	NSC		
SP661		AC14	1.05	1.05	0.21	楕円形	NSC	UK+NSC		一課所
SP662		AC14	1.00	0.80	0.18	円形	NSC	UK+NSC		
SP663		AD14	1.04	1.00	0.26	円形	NSC	UK+NSC		
SP664		AD14	1.01	0.89	0.08	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP665		AD13	0.97	0.86	0.19	円形	NSC	UK+NSC		
SP666		AD19	1.20	1.03	0.14	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP667		AD19	1.18	1.22	0.14	不整形	NSC	UK+NSC		
SP668		AD19	1.24	1.14	0.24	不整形	NSC	UK+NSC		
SP669		AD19	1.04	1.22	0.40	円形	NSC	UK+NSC		
SP670		AD19	1.12	1.26	0.19	円形	NSC	UK+NSC		
SP671		AD19	1.07	0.80	0.11	不整形	NSC	UK+NSC		
SP672		AD18	0.99	0.84	0.31	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP673		AD18	0.98	0.88	0.20	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP674		AD19	2.53	0.85	0.13	円形	NSC	UK+NSC		
SP675		AD20	1.25	1.09	0.26	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP676		AD19	0.88	0.95	0.16	円形	NSC	UK+NSC		
SP677		AD19	1.22	1.05	0.30	不整形	NSC	UK+NSC		
SP678		AD19	1.04	0.90	0.12	不整形	NSC	UK+NSC		
SP679		AD18	1.30	1.22	0.16	円形	NSC	UK+NSC		
SP680		AD20	1.02	0.80	0.13	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP681		L09	0.80	0.72	0.15	楕円形	NSC	UK		土層1
SP682		AC14	0.92	0.71	0.22	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP683		AC14	0.86	0.83	0.41	楕円形	クロ+KGF	UK+NSC		
SP684		AD14	1.00	0.97	0.24	円形	クロ+KGF	UK+NSC		
SP685		AC14	0.81	0.76	0.19	円形	クロ+KGF	UK+NSC		
SP686		L09	0.93	0.73	0.34	不整形	クロ+KGF	UK+NSC		
SP687		AD/AD18	2.56	0.84	0.25	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP688		AD18	2.80	0.75	0.24	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP689		O09	1.10	1.30	0.40	楕円形	クロ	クロ+NSC	土層1	
SP690		P09	1.10	0.90	0.07	円形	クロ	クロ+NSC		
SP691		P09	1.07	0.89	0.07	円形	クロ	クロ+NSC		SD06を切る
SP692		O09	0.87	0.81	0.08	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP693		O09	1.17	1.06	0.12	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP694		R09	1.14	0.80	0.44	円形	NSC	UK+NSC		SD04を切る
SP695		S09	0.99	0.81	0.18	楕円形	NSC	UK		SD04を切る
SP696		S09	1.15	1.00	0.14	楕円形	NSC	UK+NSC		SD04を切り、土層が新しい
SP697		S09	1.15	1.08	0.16	円形	NSC	UK+NSC		
SP698		S09	1.09	1.07	0.08	楕円形	NSC	UK+NSC		遺構
SP699		S09	0.71	0.70	0.08	円形	NSC	UK+NSC		
SP700		S09	0.70	0.86	0.08	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP701		R/S10	2.37	0.85	0.23	円形	NSC	UK+NSC		
SP702		S09	0.82	0.85	0.26	楕円形	NSC	UK+NSC		SD04を切る
SP703		S09	0.80	0.84	0.20	円形	NSC	UK+NSC		
SP704		S09	1.08	1.06	0.28	円形	NSC	UK+NSC		
SP705		S09	1.03	0.96	0.40	円形	NSC	UK+NSC		
SP706		P16	0.96	0.81	0.12	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP707		Q16	1.03	0.92	0.06	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP708		Q/R17	1.09	0.80	0.06	楕円形	NSC	UK+NSC		土層1
SP709		R17	0.71	0.83	0.03	不整形	NSC	UK+NSC		
SP710		R17	1.07	0.87	0.19	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP711		S17	0.82	0.73	0.08	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP712		F17	1.17	1.00	0.06	円形	NSC	UK	土層1	SP130を切る
SP713		P17	1.08	0.97	0.26	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP714		P17	0.86	0.88	0.34	円形	NSC	UK		
SP715		P17	1.15	0.11	0.06	円形	NSC	UK+NSC		
SP716		P17	0.87	0.81	0.09	円形	NSC	UK+NSC		
SP717		P16	0.88	0.78	0.15	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP718		A-2	0.70	0.68	0.10	円形	NSC	UK+NSC		SD01を切る
SP719		D00	0.92	0.84	0.06	楕円形	AN	KU+AN		
SP720		D01	1.04	1.09	0.16	楕円形	KU	KU+AN		
SP721		AD05	1.16	1.02	0.78	楕円形	PH	KU+PH		
SP722		AD06	1.20	1.16	0.14	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP723		AD04/08	0.98	0.92	0.28	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP724		AD05	1.14	1.08	0.36	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP725		AD05/06	1.14	1.12	0.36	楕円形	NSC	UK+NSC	土層1	
SP726		AD07	0.88	0.82	0.04	楕円形	NSC	UK+NSC		
SP727		AD06	0.84	0.89	0.26	不整形	NSC	UK+NSC		
SP728		Z05	0.73	0.69	0.29	円形	NSC	UK+NSC	土層1	
SP729		AA05/06	1.06	0.89	0.18	楕円形	NSC	UK+NSC		遺構により1/2傾斜、SD06を切る
SP730		Z06	0.69	0.83	0.09	円形	NSC	UK+NSC		
SP731		Y05	0.85	0.81	0.14	円形	NSC	UK+NSC		
SP732		X05	0.93	1.03	0.14	円形	NSC	UK+NSC		
SP733		X05	0.83	0.89	0.20	円形	NSC	UK+NSC		土層1
SP734		X05	1.25	1.29	0.43	円形	NSC	UK+NSC		
SP735		W05	0.88	0.81	0.54	円形	NSC	UK+NSC		
SP736		Z05	1.16	1.10	0.34	円形	NSC	UK+NSC		
SP737		W04	1.17	1.05	0.94	円形	NSC	UK+NSC		土層1
SP738		W03	0.90	0.77	0.14	不整形	NSC	UK+NSC		
SP739		W04	0.82	0.71	0.24	円形	NSC	UK+NSC		
SP740		V04	0.98	0.82	0.12	円形	NSC	UK+NSC		
SP741		V04	1.22	1.16	0.32	円形	NSC	UK+NSC		
SP742		V04	0.88	0.82	0.15	楕円形	NSC	UK+NSC		

遺跡名	発掘調査名	グリッド	長さ(m)	短径(m)	最大径(m)	平面形状	出土層位	覆土	遺物	備考
SF171	U/V04	1.28	1.03	0.42	円形	NSC	UK+N5C	層1		SF172と重複、新田不明
SF172	UD1	1.14	0.81	0.34	円形	NSC	UK+N5C			SF171と重複、新田不明
SF173	US4	0.59	0.45	0.26	円形	NSC	UK+N5C			
SF174	T04	1.32	1.26	0.56	楕円円形	NSC	UK+N5C			
SF175	T94	1.21	1.12	0.24	円形	NSC	UK+N5C	土層1		
SF176	T03	1.17	1.11	0.44	楕円円形	NSC	UK+N5C			
SF177	T03	0.94	0.87	0.15	円形	NSC	UK+N5C			
SF178	T04	0.96	0.87	0.29	円形	NSC	UK+N5C			
SF179	T04	0.96	0.55	0.18	円形	NSC	UK+N5C	層1		
SF180	S04	0.56	0.79	0.25	円形	NSC	UK+N5C			
SF181	T04	0.77	0.89	0.06	半円円形	NSC	UK+N5C			
SF183	S04	1.12	1.04	0.08	半円円形	NSC	UK+N5C			
SF184	R04	1.06	1.00	0.24	円形	NSC	UK+N5C			
SF185	R04	0.92	0.86	0.13	半円円形	NSC	UK+N5C			
SF186	R03	1.23	0.82	0.17	円形	NSC	UK+N5C			
SF187	R03	1.26	1.13	0.34	円形	NSC	UK+N5C			
SF188	R03	0.94	0.81	0.22	楕円円形	NSC	UK+N5C			
SF189	R03	1.09	0.89	0.25	円形	NSC	UK+N5C			
SF190	Q03	0.90	0.87	0.11	円形	NSC	UK+N5C			
SF191	Q02	0.91	0.78	0.15	楕円円形	NSC	UK+N5C			
SF192	Q02	0.89	0.86	0.20	円形	NSC	UK+N5C			
SF193	Q03	1.04	1.01	0.60	円形	NSC	UK+N5C			
SF194	N02	1.00	0.94	0.24	円形	NSC	UK+N5C			
SF195	N02	0.83	0.78	0.24	楕円円形	NSC	UK+N5C			
SF196	V04	1.10	1.00	0.35	半円円形	NSC	UK+N5C			
SF197	Y04	1.15	1.05	0.36	楕円円形	NSC	UK+N5C			
SF198	W04	0.52	0.51	0.10	楕円円形	NSC	UK+N5C			
SF199	U04	0.77	0.76	0.12	楕円円形	NSC	UK+N5C			
SF200	U04	0.94	0.75	0.20	半円形	NSC	UK+N5C			
SF201	U04	0.78	0.78	0.15	円形	NSC	UK+N5C			
SF202	U03	0.81	0.79	0.10	円形	NSC	UK+N5C			
SF203	U03	0.90	0.85	0.12	円形	NSC	UK+N5C			
SF204	Q03	0.74	0.63	0.06	茶碗	NSC	UK+N5C			土層の一部分で発見
SF205	X05	1.05	1.04	0.47	円形	NSC	UK+N5C			
SF206	Y06	0.83	0.73	0.28	楕円円形	NSC	UK+N5C			
SF227	Y05	0.75	0.76	0.23	楕円円形	NSC	UK+N5C			
SF208	Y05	0.75	0.65	0.23	楕円円形	NSC	UK+N5C			
SF209	Q03	0.78	0.70	0.14	楕円円形	NSC	UK+N5C			
SF210	Q02	0.87	0.85	0.17	楕円円形	NSC	UK+N5C			
SF211	N01	1.33	1.31	0.29	円形	NSC	UK+N5C			
SF212	Y/Z05	1.19	1.19	0.56	円形	NSC	UK+N5C	土層1		
SF213	Q17	0.60	0.58	0.30	半円円形	NSC	UK+N5C			
SF217	P02	1.30	1.13	0.44	楕円円形	NSC	UK+N5C			SF218を含む
SF218	P02	0.59	0.57	0.29	円形	NSC	UK+N5C			SF217と重複
SF219	P02	0.57	0.57	0.43	円形	NSC	UK+N5C	土層2		
SF220	P02	1.16	1.08	0.46	楕円円形	NSC	UK+N5C			
SF221	N01	1.02	0.80	0.31	楕円円形	NSC	UK+N5C			
SF222	P02	0.76	0.55	0.24	楕円円形	NSC	UK+N5C			
SF223	P02	1.19	1.10	0.41	円形	NSC	UK+N5C			
SF226	Y33/24	1.19	1.15	0.38	円形	NSC	UK+N5C			
SF227	Y34	0.99	0.86	0.25	楕円円形	NSC	UK+N5C			
SF228	Y33	0.73	0.67	0.30	楕円円形	NSC	UK+N5C			
SF229	Y33	0.83	0.78	0.28	楕円円形	NSC	UK+N5C			
SF230	Z33	1.02	0.94	0.27	円形	NSC	UK+N5C			
SF231	Z33	0.96	0.84	0.14	半円円形	NSC	UK+N5C			
SF232	Z33	0.84	0.83	0.12	半円円形	NSC	UK+N5C			SF233と重複、SF233を含む
SF233	Z33	1.04	0.90	0.12	円形	NSC	UK+N5C			SF232と重複
SF234	AA32/33	0.86	0.86	0.14	楕円円形	NSC	UK+N5C			

第52表 土坑（時期不明）出土土器属性

発掘番号	図版番号	遺跡名	グリッド	層別	器種	計測値(cm)	色調	胎土	地産	残存部分	残存率
724	58	2号(SF097)	H06	断面部	坏者	口径(9.5) 胴部径(9.2) 器高(2.6)	5YR 5/4 に白い赤褐色	黄 金属腐、白色粒子を含む	硬	口縁部	1/12
725	58	3号(SF182)	S03	断面部	長柄蓋	口径(12.2) 胴部径(7.7) 器高(5.6)	7.5YR 6/2 灰褐色	黄 白色粒子、赤色粒子、 黒色粒子を含む	硬	口縁部～胴部	1/5

(H) 断面内は残存後

第53表 その他の時期の遺物属性

発掘番号	遺物番号	図版番号	層位	グリッド	器種	石材	長さ(m)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	文倉部	Y倉部	Z倉部
726	41G	38	表土	AD12	ナイフ彫石	玉髓	59.5	38.7	11.4	21.5	94202.689	28807.310	151.674
727	74E7	38	表土	Q02	鏡石	鏡石	39.7	35.5	13.4	30.4	94353.212	20700.800	124.224
728	564	58	表土	AC23	磁石	鏡石	48.8	39.9	13.2	36.9	94214.209	28915.860	151.261
729	22420	58	表土	X01	磁石	鏡石	55.3	59.2	67.0	94386.008	28694.576	142.325	
730	7056	58	表土	AC13	磁石	鏡石	50.0	40.2	23.5	74.6	94321.181	28814.349	141.287
731	8596	58	表土	AC35	磁石	鏡石	50.5	41.7	22.3	95.4	94211.558	29006.095	147.502
732	1848	38	表土	C97	磁石	鏡石	75.6	44.3	30.7	129.1	94474.487	29755.118	125.148
23401			表土	P02	磁石	鏡石	30.6	28.7	15.7	17.7	94348.207	28704.678	125.329

第6章 まとめ

第1節 秋葉林遺跡出土の縄文土器と石器について

本遺跡では、縄文時代早期から後期にかけての土器群と、石鎌・打製石斧などを中心とする石器群が出土した。本節では本遺跡の広大な調査区のうち、特に遺物が濃集している3つの地区（第152図）について分析を試みたい。

1 西尾根部（E/J-2/01グリッド周辺）（第152図・第54表）

調査区南西の尾根上に位置する。石器集中域1・2と重なる。直径70mの範囲に分布する。集石が11基、土坑が5基、焼土跡が1基検出された。1号～3号集石から炭化物が出土し、放射性炭素年代測定を行ったところ、9490±50yrBP（25-1：IAAA-80604）、9310±50yrBP（25-3：IAAA-80606）、9420±50yrBP（25-4：IAAA-80607）、9570±40yrBP（25-5②：IAAA-80608）という年代値を得た（第7章第2節参照）。これらの値は、I群1類土器（押型文縦位密接施文）が8個体、2類土器（押型文帯状施文）が31個体など、早期中葉に位置づけられる土器が多く出土したことと整合的である（谷口 2002）。また、IV群1類土器（諸磯b・c式）が2個体などIV群の土器も出土しているが、I群の土器がFB層に濃集しているのに対し、IV群の土器はKU層に濃集しており、濃集層準に時期差に対応する差異が見られた（第55表）。

石器石材は、黒曜石が502点、ホルンフェルスが216点と、2つの石材の利用が顕著である。産地分析を行った130点の黒曜石のうち108点が神津島黒曜石群であると判明した。ホルンフェルスは石核・剥片の数に比して製品の数が少なく、石器製作を行った跡と考えられる。

特徴的な点として、直角礫の稜部に顕著な磨面が見られる稜部磨石が36点出土したことが挙げられる。稜部磨石はこれまで「特殊磨石」と呼ばれていたもので、中部地方を中心とする押型文系土器群の時期に特徴的に伴い（八木 1976）、愛鷹山麓においても多数の出土例がある（笹原 2000）。本遺跡における稜部磨石の分布は、押型文縦位密接施文および帯状施文の土器と平面的に重なる。また、両者は層位的にもほぼ同じレベルから出土している（第153図）。さらに、尾上イラウネ遺跡の2号住居址からは押型文土器と稜部磨石が出土している（関野・鈴木 1992）。これらのことから、稜部磨石と押型文土器は共存する可能性が高く、両者はほぼ同時期に位置づけられるものと考えられる。

第54表 地区別土器個体数および黒曜石点数一覧

54-1表 地区別土器個体数

	西尾根部	東尾根部 北側	東尾根部 南側
I群 1類	3		
I群 2類	31		
I群 3類	5		13
I群 4類	7		
I群 5類			1
II群 1類			9
II群 2類	4		
II群 3類			
II群 4類	1		
II群 5類			
III群 6類	17	2	17
III群 7類	1	1	1
IV群 1類	1	1	
IV群 2類	2	6	
IV群 3類	1	1	
IV群 4類	1	6	1
IV群 5類	1	3	
IV群 6類	5	5	1
IV群 7類	1	1	

(注) 1～IV群の各、身取図中の小片を除く

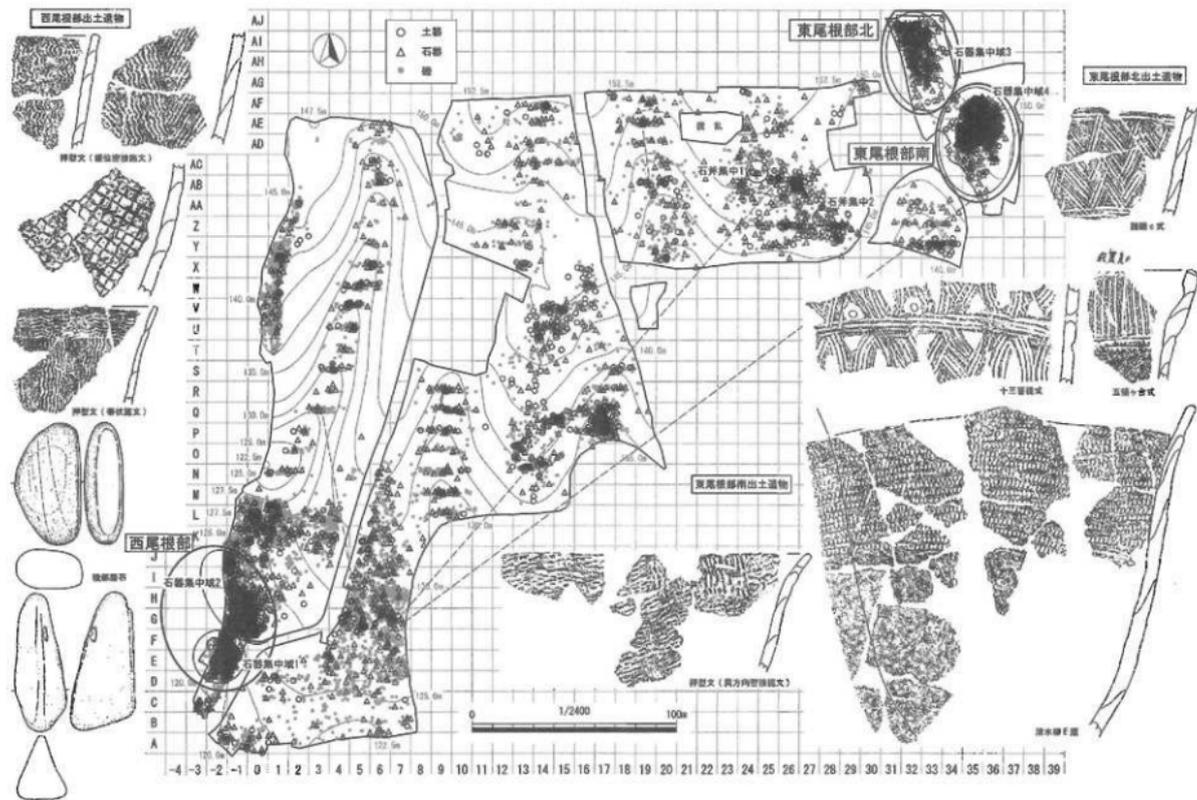
54-2表 黒曜石点数一覧（産地別）

	西尾根部	東尾根部 北側	東尾根部 南側
新田原山群	1		
新田原ヶ谷群	13	5	17
新田原山群		1	3
計	14	6	14
神津島黒曜石群	108	7	10
天城山群	2		
新田原山群	6		1
計	116	7	11
産地不明			1
未分析	372	17	35
計	502	30	61

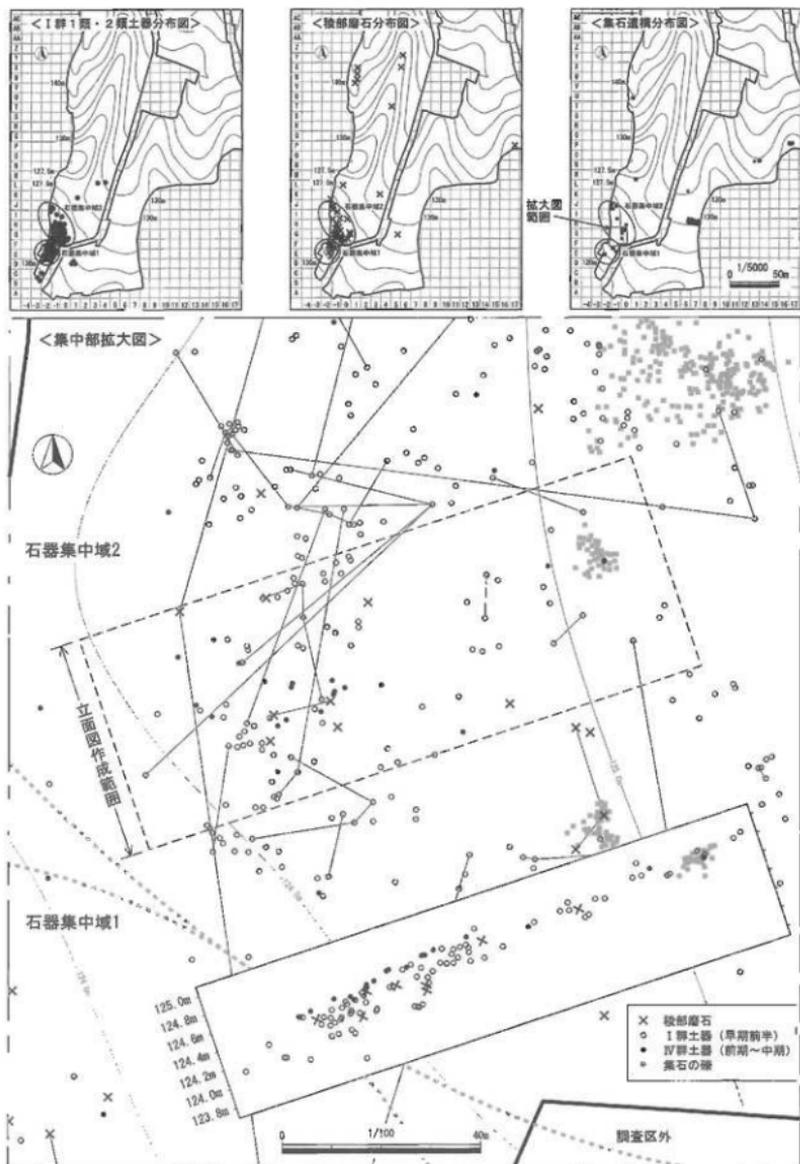
第55表 西尾根部縄文土器層位別点数一覧

	I群土器	IV群土器
出土	31	7
AN	22	6
KU	23	38
FB	34	12
その他	3	
計	63	63

(注) 数字は土器破片の数



第152回 縄文時代遺物分布状況



第153図 西尾根部の押型文土器と鞍部磨石の分布状況

2 東尾根部北側 (AG/AJ31/33グリッド周辺) (第152図・第54表)

調査区北東の尾根上に位置し、直径約40mの範囲に分布する。石器集中域3と重なる。遺構は検出されなかった。Ⅳ群1類土器(諸磯b・c式)・4類土器(五領ヶ台式)がそれぞれ6個体出土している。石器石材は全石器169点のうち、黒曜石が30点、ホルンフェルスが56点であり、ホルンフェルスの利用が顕著である。産地分析を行った黒曜石は13点のうち、神津島恩馳島群が7点、諏訪屋ヶ台群が5点、蓼科冷山群が1点となっており、在地系と信州系の黒曜石がほぼ同数となっている。本地区の土器群と石器群の垂直的な分布はKU～FB層に拡散しており、分類群別に特定の層位に濃集している状況は確認できなかった。

3 東尾根部南側 (AD/AG34/37グリッド周辺) (第152図・第54表)

調査区北東の尾根上に位置し、直径約45mの範囲に分布する。石器集中域4と重なる。土坑が2基検出された。Ⅰ群3類土器(押型文異方向密接施文)が13個体、Ⅱ群1類土器(清水柳E類土器)が9個体出土している。石器石材はホルンフェルス、黒曜石を中心とするが、ガラス質黒色安山岩や砂岩(細粒)、輝石安山岩、珪質頁岩、珪質粘板岩など多様な石材が見られるのが特徴となっている。黒曜石の産地は諏訪屋ヶ台群が11点、神津島恩馳島群が10点、蓼科冷山群が3点、箱根畑宿群が1点となっており、在地系と信州系の黒曜石がほぼ同数となっている。南西尾根部と異なり、稜部磨石が出土していない。本地区の土器群と石器群の垂直的な分布はKU～FB層に拡散しており、分類群別に特定の層位に濃集している状況は確認できなかった。

参考文献

- 依原千賀子 2000『池田B遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所
関野哲夫・鈴木淳一 1992『尾上イラウネ遺跡発掘調査報告書Ⅱその1—考古学的調査—』沼津市教育委員会
谷口康浩 2002「縄文早期のはじまる頃」、『異貌』20号 2-36頁
八木光則 1976「いわゆる『特殊磨石』について」、『信濃』28-4

第2節 出土遺物から見た秋葉林1号墳の被葬者像

1 圭頭大刀の評価

(1) 圭頭大刀の編年的位置

秋葉林1号墳出土圭頭大刀の拵えは、瀧瀬芳之氏分類の「板金柄準索鞘無窓鏢（二足佩用）圭頭大刀（L3類）」に分類でき、瀧瀬氏はL3をTK209型式期（遠江Ⅲ期後葉～飛鳥Ⅰ期）に位置づける（瀧瀬1984）。また、菊地芳朗氏分類の「B1類（註1）」にあたる。菊地氏は圭頭大刀を柄間金具へ金銅板巻の採用をもってⅠ・Ⅱ期に区分し、秋葉林1号墳のような金銅板巻柄間（B1類）は圭頭Ⅱ期としている。氏はそれを裝飾付大刀のC段階（TK209期、遠江Ⅲ期後葉）に位置づけている（菊地2003）。

さらに、西澤正晴氏の圭頭大刀柄頭の分類によれば、秋葉林1号墳例はⅢ類（覆輪構造頭頂部が高く突き出し、刃部側、棟側が下がって明瞭な段をもつ構造）に位置づけられ、中でもⅢ類2段階に位置づけられる（西澤2000）。西澤氏はⅢ類2段階をTK209（飛鳥Ⅰ期）～TK217併行期（飛鳥Ⅱ期）に位置づけるが、秋葉林1号墳例は釐目釘を有することからTK209型式に位置づけたい（註2）。

したがって、秋葉林1号墳出土圭頭大刀はTK209型式期（遠江Ⅲ期後葉、6世紀末～7世紀初頭）に帰属する可能性が極めて高い。

(2) 秋葉林1号墳出土圭頭大刀の類例

瀧瀬芳之氏の御教示によれば、上述の圭頭柄頭（山形の覆輪）と金銅板巻柄間の特徴を有するものは、茨城県小見玉市（旧・玉里村）木船塚古墳、群馬県高崎市倉賀野町出土、同郷生市広沢塚古墳、千葉県四街道市物井1号墳、東京都世田谷区殿山9号墳、神奈川県小田原市久野諏訪の原2号墳、長野県上伊那郡中川村六万部古墳、宮崎県西都市千畑7号横穴墓、宮崎県児湯郡新富町新田原42号墳、秋葉林1号墳例の10例が確認できる。10例のうち8例が東日本に存在しており、圭頭大刀の全体の分布傾向（菊地2003）と一致している。

したがって、圭頭大刀は東日本を中心に配布された裝飾付大刀である可能性が高く、秋葉林1号墳の被葬者も畿内王権のその政策のなかで入手した可能性が高い。つまり、一般的な見解として裝飾付大刀からは畿内王権との関係が深い被葬者像を描くことができる。

2 鉄鏢の評価

(1) 飛燕式の評価

飛燕式鉄鏢の編年的位置 古野徳久氏や西岡千絵氏による九州出土資料を中心にした分析では、飛燕式（註3）鉄鏢は、北部九州でTK43型式期に出現し、出現当初は北部九州を中心に分布すると考えられ（古野1989・西岡2005）、TK217期（飛鳥Ⅰ期）以降徐々に全国に拡散する（尾上1993・西岡2005）。そして、尾上元規氏の研究によれば、古墳時代終末期後半（7世紀後半）～奈良時代になると畿内王権に採用されたことが指摘されている（尾上1993）。したがって、秋葉林1号墳例がどの時期に位置づけられるかによって著しく評価が異なることになるため、再度編年的位置づけをみておきたい。

九州地方の事例を網羅した西岡氏は、鏢身形態をもとに飛燕式鉄鏢を3種4形式に分類しており（西岡2005）、秋葉林1号墳例は氏のA類に当たる。西岡氏の研究では、A類は飛燕式の出現段階から存在するものであり、時期を特定することは難しい。秋葉林1号墳例は、埋葬当初の原位置を保持していない可能性が高いが、片刃箭式など多くの鉄鏢がTK209型式～飛鳥Ⅰ期（TK217型式古段階）—古野・西岡両氏の研究によれば、TK209型式期よりも飛鳥Ⅰ期のほうがより妥当性が高い—に位置づけられることから、飛燕式鉄鏢もこの時期のものともみてよいと考える（註4）。したがって、九州以外では非常に早く



左 福岡山の前2号墳
右 秋葉林1号墳

第154図 九州と秋葉林 1号墳例の比較

飛燕式鉄鏃を副葬した古墳として評価することができるだろう。

飛燕式鉄鏃の系譜 上述したように、秋葉林1号墳例は九州からの拡散直後に位置づけられるため、直接的に九州からもたらされたのかを検証してみたい。

北部九州で出土するもの（第154図左）は、茎間は斜角間が多く、頸部の幅が1cm以上と広い（古野 1989）一方で、秋葉林1号墳例の茎間は棘間で、幅は5mmと狭い。この比較からは直接的に九州からもたらされたとするのは困難である。したがって、北部九州で生産された飛燕式鉄鏃が直接的にもたらされたわけではなく、形態的な情報が伝播し、九州以外の地域で生産された可能性が高い。東駿河地域でも鉄器生産は行われていた可能性が高く、その技術で生産された可能性も十分考慮する必要がある。

飛燕式の特異な用法 秋葉林1号墳例は、頸部・茎を有する鉄鏃でありながら、矢柄は頸部をほぼ完全に吞み込んでおり、一部鏃身にまで及んでいた可能性がある。北部九州の事例ではこのような用法は確認できず、秋葉林1号墳例はあたかも無頸式（無茎式・短茎式）鉄鏃を矢柄に装着するような方法を採用している。これは、新式の飛燕式を採用しながらも、採用方法は無頸式と同様の扱いを受けていたと想定できる。この点について、出土状況からみると鉄鏃の多くが原位置を保持していない可能性が高いことから断定はできないが、短茎式鉄鏃と飛燕式鉄鏃がほぼ同一箇所出土している点も興味深い。飛燕式鉄鏃は、古野氏によれば埴内内の祭祀に用いられた古墳が確認できることから、祭祀面に重きをおかれた形式であることが想定されている（古野 1989）。また、西岡氏によれば奈良時代以降簡矢に採用されていることから祭祀的側面が強いといえる（西岡 2005）。秋葉林1号墳例も伝統的な無頸式と同じ扱い、矢柄の固定方法を受けていることは、祭祀面でのつながりが意識されたことと想定しておきたい。

秋葉林1号墳では、出土した鉄鏃31本のうち2本は時期差が存在する可能性が高い（第157図）が、残りの29本は、短茎式・飛燕式各1本、3本の平根式、16本の尖根式（残り8本も尖根式の可能性が高い）、という構成であり、このうち短茎式・飛燕式は上差矢であった可能性が高い。地域の伝統的な無頸式と、新来でありながら地域の伝統に根ざした固定方法を採用した飛燕式鉄鏃を、祭祀面を重視して上差矢として採用した点が興味深い。

飛燕式鉄鏃の意義 飛燕式鉄鏃を所有する古墳は九州地方では比較的上位の古墳から出土することが多いとされる（西岡 2005）。秋葉林1号墳は今回の調査で確認された古墳5基の中では規模が大きく、遺物にも裝飾付大刀を保有するなど群集墳中では最も有力な古墳であり、北部九州の様相と合致している。

秋葉林1号墳の被葬者が、飛燕式鉄鏃を、北部九州から日本列島内に拡散する早い時期に入手している点を考えれば、北部九州の飛燕式鉄鏃を生産していた集団との関係を想定すべきであろう。その一方で、地域の伝統的な無頸式鉄鏃と同様の扱い方をしている点をみれば、東駿河地域に根ざした首長像を描くことが可能である。

(2) 片刃箭式・鑿箭式の評価

分類と編年の位置 秋葉林1号墳の片刃箭式・鑿箭式鉄鏃は、報告でも述べたように2種類に区別することができる。両者ともに刃部にふくらをもつもの（a類）と、端刃造るもの（b類）が確認できる。通常端刃造鉄鏃のほうが新しい傾向にあることから、a類→b類の順に生産された可能性が高く、a類が初葬時、b類が追葬時の遺物と考えられる。

片刃箭式ではa・b類ともに逸江Ⅲ期末葉以降、一部に直角間が残存するものの基本的に鏃身間は撫間や無間であることが多い。しかし、秋葉林1号墳例は直角間であり、古い様相をとどめる。したがって、当例は形態的特徴からa類がTK209型式期～飛鳥Ⅰ期、b類が飛鳥Ⅰ～Ⅱ期と考えることができる（大谷 2003）。

意義 秋葉林1号墳の片刃箭式は、鐵身自体は長い、刃が形成されるのは鐵身上部のみである点が特徴である。この片刃箭式a類は、2km東に位置する沼津市東原1号墳(第155図)で出土しており、秋葉林1号墳と東原1号墳の鉄鐵の入手経路が同一であったと考えられる。東原1号墳は鉄鐵17本以上の副葬であるが、同一古墳群中の東原5号墳は形態・寸法が非常に近い2種類の尖根柳葉式鉄鐵を32本以上副葬している。西日本の鉄鐵分析を進めた尾上元規氏によれば、TK209期以降、鉄鐵を30本以上副葬する古墳は、鉄器生産関連遺跡と分布がほぼ同一であることから、それら古墳の被葬者は鉄器生産とかかわりが深いことが指摘されており(尾上1993)、秋葉林1号墳も鉄器生産集団と近い関係を想定できる。

(3) 無頸式鉄鐵

無頸式鉄鐵は、古墳時代後期以降西日本ではほとんど採用されない鉄鐵形式であり(水野1995)、東海地方でも古墳時代後期以降三河以西ではほとんど採用されない(大谷2004b)。一方、遠江以東では、関東ほどではないにしても、一部の古墳に無頸式鉄鐵が採用されている。駿河では出土数はそれほど多くなく、伝統に基づき祭祀をするために必要であったと考えたい。また、上述したように、無頸式鉄鐵は古墳時代後期以降関東を中心に用いられるものであり、無頸式鉄鐵採用に当たっては東日本、特に関東との祭祀面での情報の共有などが行われた可能性を考慮すべきと考える(大谷2004b)。

(4) 鉄鐵からみた被葬者像

秋葉林1号墳の鉄鐵の特徴は、伝統的な短茎式を有するとともに飛燕式という最新式の鉄鐵をもつこと、片刃箭式鉄鐵の種類が多いこと、鉄鐵の副葬本数が30点を超えること、の3点が挙げられる。また、飛燕式は最新形態でありながら、矢柄を鐵身関部分まではめ込んでいることなど、地域の祭祀に根ざして取り込みを図ったと考えられる。

東駿河地域は、東海地方でも稀有な飛燕式鉄鐵(秋葉林1号墳)、雁又式鉄鐵(富士市横沢古墳、沼津市石川6号墳)を早くから導入していた可能性が高く、東駿河には北部九州などから鉄鐵形式の最新情報が伝播していた可能性が高い。

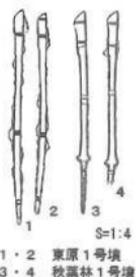
秋葉林1号墳の鉄鐵は、特徴的な片刃箭式鉄鐵を有する点から最新の鉄鐵情報をもとに地域で生産をした可能性も考えられ、秋葉林1号墳の周辺に鉄器生産を行うような集団が所在していた可能性が高い。

また、第二東名関連で発掘調査し、別報告書で報告される秋葉林古墳群の西隣の尾根上に所在する沼津的場3号墳(静岡埋文研2010)では鉄鐙が出土しており、それが鍛冶工人を示す可能性が高いことから、的場古墳群の被葬者に鉄器生産関係の工人あるいはそれを統括するような人物が含まれていた可能性がある。したがって、副葬された鉄鐵やその他の遺物から判断して、的場古墳群、秋葉林1号墳、東原古墳群の被葬者集団の周辺で鉄器生産が行われていた可能性が高い。その中で、秋葉林1号墳の被葬者は裝飾付大刀を所有しており、より上位階層にあることから、鉄器生産を管掌したか、あるいは工人集団に直接的に注文生産を行った被葬者像が考えられる。

3 釘・鏝の評価

(1) 釘・鏝の編年的位置

遠江の鉄釘の分析では、鉄釘は時期が下るにつれて長さが短くなり、太さが細くなる傾向にあり(大谷2004a)、その傾向に当てはめれば、秋葉林1号墳出土の鉄釘は、身厚4mmであることから、鉄釘の中では新しい傾向にある。遠江の事例に照らせば、身厚5mm以下のものは遠江IV期前半以降のものが多いが、一部磐田市塚下1号墳や牧之原市大寄A2号横穴墓ではIII期後葉に遡るものもあり(大谷2004a)、



第155図
一部のみを付ける
片刃箭式鉄鐵

(初葬)は多くの遺物が帰属するTK209～飛鳥Ⅰ期、追葬について耳環のみの場合は時期を特定しづらいが、追葬1回目が飛鳥Ⅱ期、追葬2・3回目が飛鳥Ⅱ～Ⅳ期に位置づけられよう。

(2)秋葉林1号墳の被葬者像

秋葉林1号墳出土遺物の中では、裝飾付大刀が目立つが、その他に飛燕式鉄鏃の採用、片刃箭式鉄鏃の多さとその特殊性、釘や鋸状鉄製品による釘付式木棺の採用に注目する必要がある。一方、東駿河地域で多い馬具が出土していない点も注目すべきであろう。

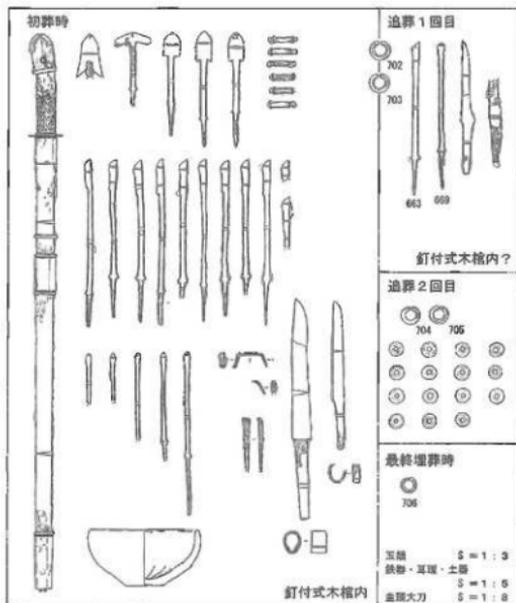
秋葉林1号墳の被葬者は、上述したように駿河では稀有な釘付式木棺を採用し、圭頭大刀を佩用するなど畿内との関係が深い一方で、飛燕式鉄鏃から九州との関連も窺える。さらに東駿河の強い地域色をもつ横穴式石室を採用すること、遠江・信濃以東に特徴的な無頸式鉄鏃を採用する点、最新形態の飛燕式鉄鏃を無頸式と同じ扱いをすることなど、地域に根差した石室や祭祀を行った被葬者像が描ける。つまり、秋葉林1号墳の被葬者は、東駿河という地域に密着しながらも、畿内王権や北部九州、また東日本とも交流をもち、地域内部では鉄器生産との関連をもった被葬者の顔が浮かび上がる。

(3)東駿河の有力古墳の被葬者像～予察～

秋葉林1号墳の副葬品からみると裝飾付大刀や釘付式木棺から畿内王権との関係が想定されるときともに、飛燕式鉄鏃は北部九州との関係、無頸式の採用などから東日本の様相、そして東駿河に特徴的な有段無袖形石室の採用や、無頸式鉄鏃の保持、矢柄で頸部を包み込む使用方法などの東駿河の地域色がうかがえる。

駿河地域全体の有力古墳すべての検討を実施したわけではないが、当研究所で調査した原分古墳も西日本の様相と東日本の様相を併せ持ちながら、石室自体は東駿河独自の石室を採用するという特徴が確認できる(静岡埋文研 2008・鈴木 2008・大谷 2008)。また、富士市東平1号墳でも、象嵌大刀や金銅装馬具など畿内王権からの配布の可能性の高い文物を保有しながら、東日本との関係が深いT字形利器や壺蓋を有する。

このように東駿河の有力古墳層は、畿内王権一辺倒の関係ではなく、東駿河地域に基盤を置き、駿河湾の奥まった位置にありながらも東日本、西日本との幅広い交流をになう被葬者像を描くことができる古墳が多い。東駿河の有力者



(注) 耳環の大きさと材質を考慮し、4人の埋葬があったと仮定した組合。
耳環の材質を考慮せず、大きさが同一のため銀環(702)と金環(703)が同一の被葬者に伴うと考え、3人の埋葬とすれば、ここで追葬1回目としたものが初葬時に副葬された一括遺物となり、技法の異なる鉄鏃も同一被葬者に伴うものとなる。

第157図 秋葉林1号墳の埋葬と副葬遺物の関係

は、東駿河地域で固執する無袖形石室や無頸式鉄鏃の採用など祭祀面での地域色の保持、それ以外では畿内王権との関係や北部九州などとの関係、そして東日本との関係を有することで自らの位置を確認するとともに、基盤の強化を図った可能性が高い。

註

- 1 菊地芳朗氏によるB1類の基準は、「無窓鏃と平尾系の鞘尾金具を着装する。無窓鏃はいずれも小さく喰出が少ない。鞘尾に釐目釘を打つものが多い。佩用金具をもたないものが主体を占める。柄に金属線を巻くものは認められない。鋒が判明するものはすべてカマス鏃である。」としており、秋葉林遺跡1号墳はこの記載に100%合致する典型的なB1類である。
- 2 西澤正晴氏のご教示による。
- 3 飛燕式は鏃身長に対し鏃身幅が広いもので、鏃身が「へ」字形のものとする。
- 4 鏃前式・片刃前式に端刃造が確認されるため、その他の片刃前式とは時期差がみられるが、この場合でも飛鳥Ⅱ期までに位置づけられる可能性が高い。
- 5 岡山県八塚古墳群でも、幅3cm程度の鏃状鉄製品が出土しているが、鏃ではなく、馬具の金具と想定している（岡山県 2009）。

参考文献

- 井鍋晋之 2008 「古墳時代終末期における駿河東部の有力古墳」『原分古墳』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2003 「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鏃の変遷とその意義」『研究紀要』10号 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2004a 「大屋敷C古墳群の評価」『大屋敷C古墳群・大屋敷1号竪』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2004b 「東と西の狭間」『静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論文集』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2008 「原分古墳出土刀剣類の復元と被葬者の性格」『原分古墳』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 岡山県古代古墳文化財センター 2009 『八塚古墳群』
- 尾上元規 1993 「古墳時代鉄鏃の地域性」『考古学研究』40巻1号 考古学研究会
- 菊地芳朗 2003 「鞍掛付大刀からみた古墳時代後期の東北・関東」『後期古墳の諸段階』 東北・関東前方後円墳研究会 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 『原分古墳』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 『的場古墳群・的場遺跡』（刊行予定）
- 鈴木一有 2008 「原分古墳出土馬具の時期と系譜」『原分古墳』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 瀧瀬芳之 1984 「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 瀧瀬芳之 1986 「円頭大刀・圭頭大刀の編年と佩用者の性格」『考古学ジャーナル』266号 ニューサイエンス社
- 瀧瀬芳之 1991 「大刀の佩用について」『埼玉考古学論集』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中彰太 1978 「古墳時代木棺に用いられた繫結金具」『考古学研究』25巻2号 考古学研究会
- 西岡千絵 2005 「飛燕式鉄鏃の研究」『七隈史学』6号
- 西澤正晴 2000 「井田松江18号墳出土の金銅装圭頭大刀について」『井田松江古墳群』 戸田村教育委員会（静岡県）
- 長谷川睦 2003 「静岡県における鉄鏃の地域色と生産・流通」『研究紀要』10号 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 古野徳久 1989 「古墳時代鉄鏃の編年」『九州考古学』64 九州考古学会
- 水野敏典 1995 「東日本における古墳時代鉄鏃の地域性」『古代探蔵』IV

第3節 2つの方形周溝状遺構と3号墳について

1 2つの方形周溝状遺構について

秋葉林遺跡では2基の方形周溝状遺構が検出されている。これらは3号墳と同じ尾根上で検出されており、3号墳の約20m北に1号方形周溝状遺構、約15m南に2号方形周溝状遺構が検出された。1号方形周溝状遺構は西側を削平されているが1辺が5.3m程度であると予想される。遺物は出土しなかったが、周辺からは8世紀代に位置づけられる須恵器片が出土している。2号方形周溝状遺構は1辺が4.8m程度で、周溝からは8世紀前半以降の所産と考えられる須恵器片が出土している。また、2号方形周溝状遺構の南東に位置するSF37からは、8世紀後半の所産と考えられる須恵器片が出土している。

静岡県東部で同様の遺構が発見された例として、田頭山古墳群、長泉町池田B遺跡、沼津市尾上皿橋西遺跡が挙げられる(第158図)。田頭山古墳群1号方形周溝状遺構は、1辺が4mであり、遺物は8世紀中葉の所産と考えられる土師器坏、須恵器摘み蓋、高台坏、長頸壺などが出土している。中央部に浅い土坑状の窪み(長径0.8m、短径0.44m、深さ0.08m)が検出され、報告者はこれを埋葬施設としている(井鍋 2004)。池田B遺跡の方形周溝状遺構は1辺が7mで、周溝内から8世紀代の所産と考えられる須恵器摘み蓋、長頸壺などが出土している(笹原 2000)。他方、尾上皿橋西遺跡の遺構は1辺が5mで、8世紀後半の所産と考えられる須恵器摘み蓋、長頸壺、無台坏などの遺物が出土している。報告者はこれを火葬墓としている(沼津市教育委員会 1995)。

遺構の立地についてみると、古墳の周辺に立地するものと、単独で立地するものとに分けられる。秋葉林遺跡と田頭山古墳群のものは、同じ丘陵上に古墳が所在している。池田B遺跡と尾上皿橋西遺跡のものは、近隣に古墳は確認されておらず、単独で検出されている。

秋葉林遺跡の2つの方形周溝状遺構は、古墳と同じ丘陵上に立地する点や、周溝内や遺構周辺から8世紀代の須恵器片が出土している点などが、田頭山古墳群のものと類似する。しかし、周溝の内部で土坑などは検出されなかったため、遺構の性格についての判断はなお慎重を要するであろう。

なお、同様の遺構が検出されている千葉県的事例との関連性も今後検討する必要がある。

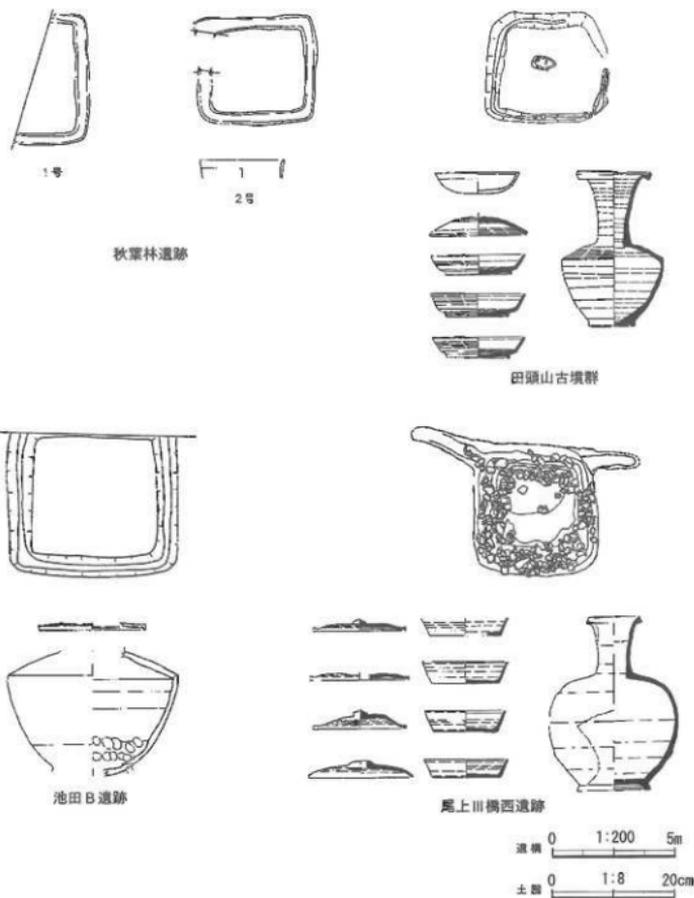
2 3号墳出土の壺について

秋葉林遺跡3号墳は2つの方形周溝状遺構に挟まれるようにして立地している。3号墳は攪乱が激しく、検出できたのは基底石が数個のみという状況であったが、墓室内から8世紀代の所産であると考えられる土師器の壺が出土した。

本遺跡3号墳の石室全長は3mをやや下回る程度、幅は0.6m程度であったと想定され、大人の伸展葬は困難であるため、壺が骨蔵器として用いられ、石室内に納められた可能性は十分考え得る。

この可能性を考える上で、静岡県中部の志太地域の事例が参考にならう。志太地域では、8世紀前半代に石室全長1~2m程度の小型横穴式石室が作られ、それらの中には火葬墓や骨蔵器を伴うものが見られる。こうした小型石室は志太地域における最初期の火葬墳墓と考えられる(磯部 1999)。

一方、壺の出土状況が良好ではないため、壺は3号墳石室内に納められたものではなく、後の時代に石室が破壊され埋納された、という想定も成り立つ。周辺に類似の事例が乏しく判断の材料が少ない。今後の発掘事例の増加に期待したい。



第158図 方形周溝状遺構の諸例

参考文献

- 磯部武男 1999 「志太地域における初期仏教の様相」『藤枝市郷土博物館紀要』8号
- 井鍋誉之 2004 『田頭山古墳群』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 井鍋誉之 2004 「東駿河・伊豆における律令墓制の展開」『静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論文集』
- 笹原千賀子 2000 『池田B遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 沼津市教育委員会 1995 「尾上III橋西遺跡第1・2次発掘調査報告」『沼津市文化財調査報告書』第58集

第7章 理化学分析

第1節 樹種同定調査報告書

株式会社 加速器分析研究所

はじめに

秋葉林遺跡は、愛鷹山南西麓の尾根上に立地する。今回の発掘調査により、縄文時代早期～中期を中心とした遺構が検出されている。本報告では、縄文時代の集石や愛鷹ローム層中の石器ブロックから出土した炭化材の樹種同定を実施する。

1 試料

試料は、縄文時代の集石から出土した炭化材4点（試料番号25-1～25-4）と、旧石器時代の石器ブロックから出土した炭化材2点（試料番号25-5①、25-6）の合計6点である。

2 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の形態や名称については、島地・伊東（1982）およびWheeler他（1998）を参考にする。また、各分類群の木材組織については、林（1991）や伊東（1995、1996、1997、1998、1999）を参考にする。

3 結果

樹種同定結果を第56表に示す。炭化材のうち、試料番号25-5①は、木材組織が全く観察できず、種類等は不明である。その他の試料は、試料番号25-3に2分類群が認められた。これらの炭化材は、全て広葉樹で、3分類群（クマシデ属イヌシデ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・クマシデ属イヌシデ節 (*Carpinus* subgen. *Euarpinus*) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～4個が複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～40細胞高のもの集合放射組織とがある。

第56表 秋葉林遺跡の樹種同定結果

試料番号	地点	遺物番号	グリッド	層位	遺 構	樹 種
25-1	No.25	23983	J-1	覆土	1号集石	クリ
25-2	No.25	23346	J-1	覆土	2号集石	クリ
25-3	No.25	覆土上層①	J-2/-1	覆土	3号集石	クマシデ属イヌシデ節 クリ
25-4	No.25	SY17④	J-2/-1	覆土	3号集石	クリ
25-5①	No.25	31050	Z-3	BD0	石器集中7	不明
25-6	No.25	9751	O-13	YLL	石器集中31・32	コナラ属アカガシ亜属

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと同複放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炭状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

4 考察

炭化材は、縄文時代の集石と旧石器時代のブロック中から出土した試料がある。縄文時代の集石は1号、2号、3号の3基があり、いずれもクリが確認されており、クリを主体とした木材利用が推定される。また、3号集石ではクリに混じってイヌシデ節も認められ、少なくとも2種類の木材が利用されていることが推定される。クリとイヌシデ節は、いずれも落葉高木であり、二次林等に普通にみられる樹種である。

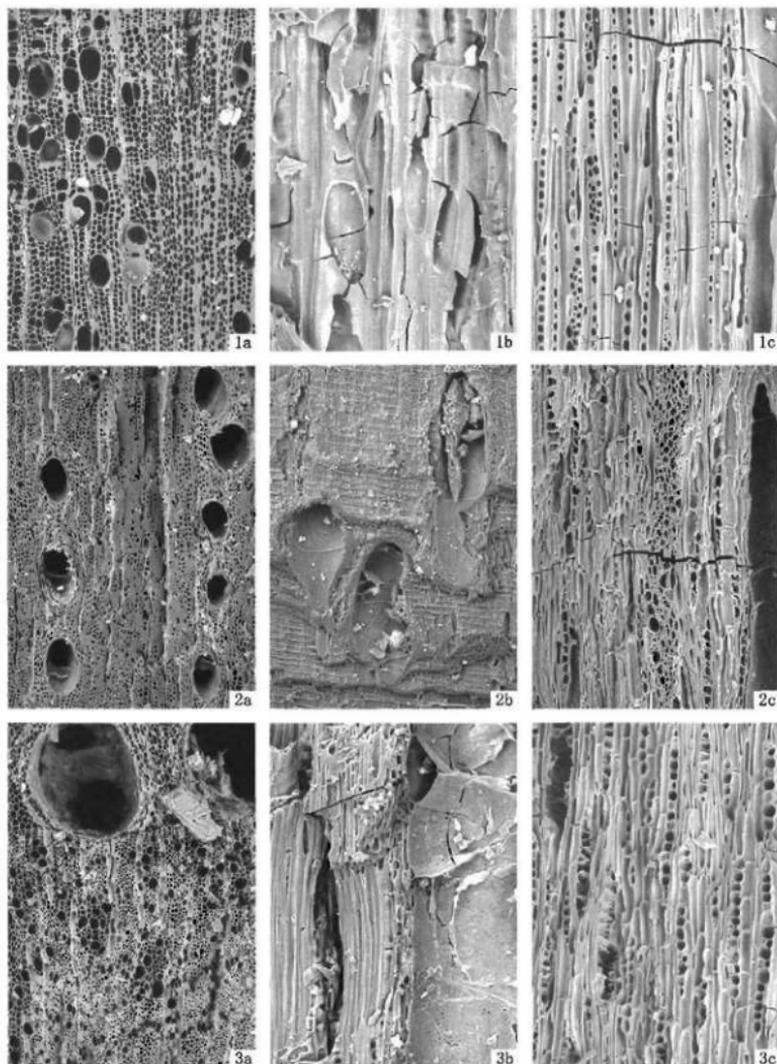
本遺跡周辺地域では、縄文時代の集石から出土した炭化材の樹種を明らかにした例は知られていない。一方、堅穴住居跡等から出土した炭化材については、清水柳北遺跡や葛原沢第IV遺跡で樹種同定が実施されている(バリノ・サーヴェイ株式会社 1989, 2001)。これらの結果を見ると、葛原沢第IV遺跡の縄文時代草創期の堅穴住居跡から出土した炭化材は、アワバキ属を中心にコナラ節、クリなどが確認されており、落葉広葉樹を主体とした木材利用が推定される。一方、清水柳北遺跡の縄文時代早期とされる住居跡や土坑等から出土した炭化材は、シキミを中心にアカガシ亜属、シイ属、ツバキ属、ケヤキ、カヤ、モミ属等が認められ、常緑広葉樹を主体とした木材利用が推定される。これらの結果を見る限りでは、時期によって木材利用が異なっている可能性がある。今後、さらに資料を蓄積し、時期別・用途別等の木材利用を検証することが望まれる。

旧石器時代の石器ブロック中から出土した炭化材のうち、BB0の試料は木材組織が観察できず種類不明である。休場層下部(YLL)から出土した試料は、常緑広葉樹のアカガシ亜属に同定され、周囲に常緑広葉樹が生育していた可能性がある。休場層の炭化材については、清水柳北遺跡で常緑広葉樹のシイノキ属が報告されており(バリノ・サーヴェイ株式会社 1995)、今回の結果とも調和的である。この結果から、休場層が堆積した時期の愛鷹山麓には常緑広葉樹が生育していたことが推定される。なお、この他には、山中城跡(三島市)で休場層中の礫群から出土した炭化材の樹種を明らかにした例があり、針葉樹のツガ属が報告されている(バリノ・サーヴェイ株式会社)。当該期の植物遺体に関する資料は少ないため、今後も資料の蓄積が望まれる。

引用文献

- 林 昭三 1991 日本産木材 顕微鏡写真集 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1995 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ 木材研究・資料 31 京都大学木質科学研究所 81-181
- 伊東隆夫 1996 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ 木材研究・資料 32 京都大学木質科学研究所 66-176
- 伊東隆夫 1997 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ 木材研究・資料 33 京都大学木質科学研究所 83-201
- 伊東隆夫 1998 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ 木材研究・資料 34 京都大学木質科学研究所 30-166
- 伊東隆夫 1999 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ 木材研究・資料 35 京都大学木質科学研究所 47-216
- バリノ・サーヴェイ株式会社 1989 炭化材同定 「清水柳北遺跡発掘調査報告書 その1」 沼津市文化財調査報告書第47集 沼津市教育委員会 419-420
- バリノ・サーヴェイ株式会社 1995 植物遺存体材同定 「山中城三ノ丸第1地点」 三島市教育委員会 370-373
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2001 葛原沢第IV遺跡第1号住居址の自然科学的調査 「葛原沢第IV遺跡(a・b区)発掘調査報告書1-縄文時代草創期・縄文時代-」 沼津市文化財調査報告書第77集 沼津市教育委員会 275-304
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 図説木材組織 地球社 176p
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修) 海青社 122p [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*]

※) 本測定は、当社協力会社 バリノ・サーヴェイ㈱にて実施した。



1. クマシダ属イヌシダ節(試料番号25-3)
 2. コナラ属アカガシ匠属(試料番号25-6)
 3. クリ(試料番号25-4)
- a:木口 b:柀目 c:板目

200 μm :a
 200 μm :b, c

写真1 秋葉林遺跡出土炭化材

第2節 放射性炭素年代調査報告書

株式会社 加速器分析研究所

1 測定対象試料

秋葉林遺跡は、静岡県（北緯35°09′05″、東経138°48′42″）に所在する。遺跡は愛鷹山南西麓の尾根上に位置する。縄文時代早期から中期を中心とする遺跡である。測定対象試料は、FB～KU層の1号集石から出土した炭化物（25-1：IAAA-80604）、2号集石から出土した炭化物（25-2：IAAA-80605）、3号集石の覆土上層から出土した炭化物（25-3：IAAA-80606）と覆土下層から出土した炭化物（25-4：IAAA-80607）、FB～KU層の1号集石から出土した炭化物（25-5②：IAAA-80608）、休場層直下黒色帯（BB0）の石器集中31・32から出土した炭化物（25-6：IAAA-80609）、合計6点である。

2 測定の意義

炭化物が出土した遺構の年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1)メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2)酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3)試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- (4)液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。
- (5)精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- (6)グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4 測定方法

測定機器は、加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置を使用する。測定では、米国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1)年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。
- (2)¹⁴C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。¹⁴C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料

の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰) で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により¹⁴C/¹²Cを測定した場合には表中に (AMS) と注記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。
- (5) 暦年校正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた校正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年校正年代は、¹⁴C年代に対応する校正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 (1 σ = 68.2%) あるいは2標準偏差 (2 σ = 95.4%) で表示される。暦年校正プログラムに入力される値は、下1桁を四捨五入しない¹⁴C年代値である。なお、校正曲線および校正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年校正年代の計算に、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を使い、OxCalv4.0 校正プログラム (Bronk Ransley 1995 Bronk Ransley 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

6 測定結果

¹⁴C年代は、FB~KU層の1号集石から出土した炭化物 (25-1 : IAAA-80604) が9490 ± 50yrBP、2号集石から出土した炭化物 (25-2 : IAAA-80605) が9490 ± 40yrBP、3号集石の覆土上層から出土した炭化物 (25-3 : IAAA-80606) が9310 ± 50yrBP、3号集石の覆土下層から出土した炭化物 (25-4 : IAAA-80607) が9420 ± 50yrBP、FB~KU層の1号集石から出土した炭化物 (25-5② : IAAA-80608) が9570 ± 40yrBP、休場層下部 (YLL) の石器集中31・32から出土した炭化物 (25-6 : IAAA-80609) が110 ± 30yrBPである。

試料の炭素含有率は、すべて60%程以上であり、十分な値である。化学処理および測定内容にも問題は無く、妥当な年代と考えられる。25-6は層位関係と整合しないことから、何らかの理由で混入した試料と推定される。

第57表 秋葉林遺跡の¹⁴C年代測定結果

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{14}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-80604	25-1	1号集石 FB-KU	炭化物	AaA	-26.85 ± 0.79	9,490 ± 50	30.67 ± 0.19
IAAA-80605	25-2	2号集石 FB-KU	炭化物	AaA	-24.10 ± 0.62	9,490 ± 40	30.67 ± 0.17
IAAA-80606	25-3	3号集石 覆土上層	炭化物	AAA	-27.67 ± 0.50	9,310 ± 50	31.38 ± 0.19
IAAA-80607	25-4	3号集石 覆土下層	炭化物	AAA	-25.33 ± 0.58	9,420 ± 50	30.94 ± 0.17
IAAA-80608	25-5②	1号集石 FB-KU	炭化物	AAA	-26.96 ± 0.65	9,570 ± 40	30.39 ± 0.16
IAAA-80609	25-6	石器集中31・32 YLL	炭化物	AAA	20.14 ± 0.56	110 ± 30	98.64 ± 0.34

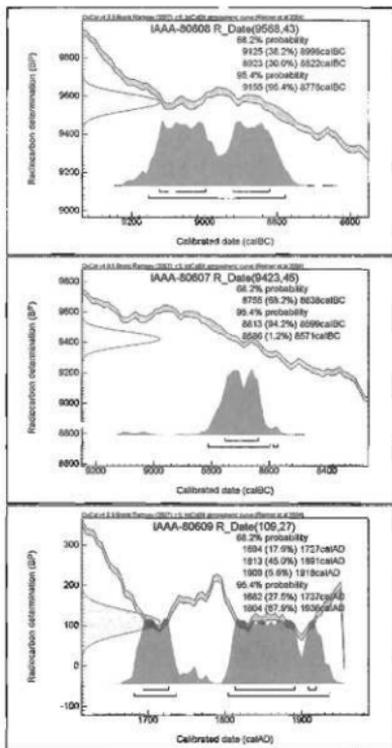
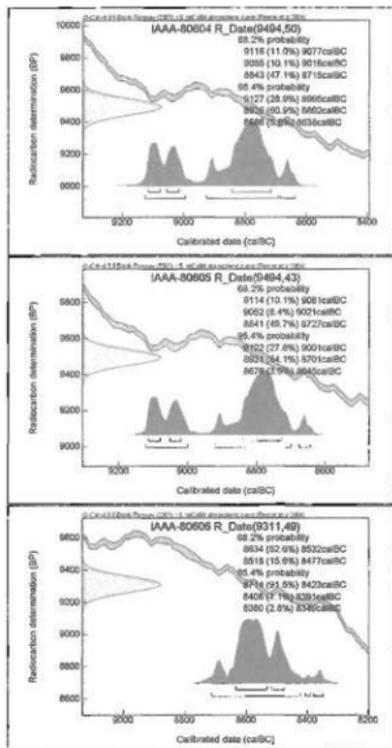
[#2316]

第58表 秋葉林遺跡の¹⁴C年代測定結果(参考値)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年校正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-80604	9,520 \pm 50	30.55 \pm 0.19	9,494 \pm 50	9116BC-9077BC (11.0%) 9055BC-9016BC (10.1%) 8843BC-8715BC (47.1%)	9127BC-8995BC (28.9%) 8926BC-8682BC (60.9%) 8586BC-8638BC (5.6%)
IAAA-80605	9,480 \pm 40	30.72 \pm 0.16	9,494 \pm 43	9114BC-9081BC (10.1%) 9052BC-9021BC (8.4%) 8841BC-8727BC (49.7%)	9122BC-9001BC (27.8%) 8921BC-8701BC (64.1%) 8676BC-8645BC (3.5%)
IAAA-80606	9,360 \pm 50	31.20 \pm 0.19	9,311 \pm 49	8634BC-8532BC (52.6%) 8518BC-8477BC (15.6%)	8714BC-8423BC (91.5%) 8406BC-8391BC (1.1%) 8380BC-8349BC (2.8%)
IAAA-80607	9,430 \pm 40	30.92 \pm 0.17	9,423 \pm 45	8755BC-8638BC (68.2%)	8813BC-8599BC (94.2%) 8586BC-8571BC (1.2%)
IAAA-80608	9,600 \pm 40	30.26 \pm 0.16	9,568 \pm 43	9125BC-8998BC (38.2%) 8923BC-8822BC (30.0%)	9155BC-8778BC (95.4%)
IAAA-80609	30 \pm 30	99.62 \pm 0.32	109 \pm 27	1694AD-1727AD (17.6%) 1813AD-1891AD (45.0%) 1909AD-1918AD (5.6%)	1682AD-1737AD (27.5%) 1804AD-1936AD (67.9%)

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C. van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



第159図 暦年較正年代グラフ

第3節 寺家前遺跡・衣原遺跡・秋葉林遺跡出土須恵器・土師器の蛍光X線分析

大阪大谷大学 三辻利一

1 はじめに

土器はこれまで、考古学（型式学）的手法で研究されてきた。実際、土師器や弥生土器などの軟式土器は土器形式に地域差があり、「●●式土器」というかたちでまとめられてきた。したがって、土器型式によって軟式土器の伝播についても考察されてきた。しかし、須恵器については「●●式須恵器」というかたちではまとめられていない。それは須恵器の型式には地域色が薄いためであるといわれてきた。しかし、陶邑窯跡群のように300年以上にわたって操業した生産地の須恵器の土器型式は、当初は朝鮮半島の土器型式に色濃く支配されてきた形が次第に日本化してくる、つまり、須恵器型式に年代変遷がみられるということで、陶邑の須恵器編年表がまとめられ、それに対照して、各地の遺跡から出土する須恵器は「陶邑●●型式」相当というかたちで、年代観が与えられてきた。こうした背景から、各地の消費地遺跡から出土する須恵器については、元素分析による産地推定が求められてきたものと自然科学側は理解している。しかし、消費地遺跡出土須恵器を元素分析しても、直ちに産地が判定されるという簡単なものではない。まず、各地の生産地の須恵器を大量に分析し、そのデータに基づいて、産地推定法を開発しておかなければならない。この仕事は依頼分析といったかたちで簡単に開発できるものではない。長年にわたる全国各地の窯跡出土須恵器の大量の分析データから、母岩を構成した長石類に由来するK、Ca、Rb、Srの4因子が有効に地域差を表すことが実証されている。雲母や角閃石などのFe化合物に由来するFe因子は須恵器についてはそれほど有効に地域差を表さない場合が多いこともわかっている。

もう一つ誤解されているところがある。「産地推定」とは元素分析によって正確に分析すれば、確実に生産地と消費地を結びつけることができる、すなわち、産地の同定であると安直に理解されている点である。そうではなくて、須恵器の産地推定とは須恵器の生産と供給の過去を再現するという歴史研究の一環として行われているという理解が必要である。したがって、広範囲にわたる多数の須恵器の伝播データを通してはじめて須恵器の流通が理解できることになる。陶邑産の須恵器が1点、2点検出されたところで、陶邑産須恵器の伝播、流通を論じることはできないのである。また、分析化学の立場からみても、同一生産地の須恵器といえども、自然界に産出する粘土の不均質性によるばらつきがあり、溶液のような均質系試料のように正確に分析するという考え方は成り立たない。そのため、どうしても、多数の試料を分析し、統計的な処理が必要となってくる。「均質系試料の分析化学」とは本質的に異なる。「不均質系試料の分析化学」の立場に立つデータ解析を行わなくてはいけなくなる。また、生産地がすべて発掘されている訳でもなく、多数の窯跡の調査が行われたとはいえ、限られた生産地の中から、可能性の高い生産地を抽出することになる。この結果はあくまで「産地の推定」というべきであり、「産地の同定」ではないことを理解しなければならない。この不確定性の部分を補う一つの方法として、分析の結果はすぐ受け入れられるものではなく、考古学側も土器型式などでも再確認することが必要である。その結果はじめて、産地推定の結果は考古学側と自然科学側とが共通して理解できると筆者は考えている。こうした過程を経過せずして、須恵器の生産と供給の過去を再現するという歴史研究には進展できない。

こうした考えから、静岡県内の古墳時代の須恵器の伝播、流通を論じる前に、県内の古墳時代の窯跡出土須恵器の化学特性を整理しておくことが必要であるし、また、消費地遺跡から出土した須恵器の分析データも古墳ごとで比較することも必要になってくる。こうした、胎土分析のデータを集積することによって、静岡県内の古墳時代の須恵器の生産と供給の過去を再現しようとする研究が進展する。

土師器については土器型式と胎土とを対応させる研究、つまり、同じ型式をもつ土器は同じ胎土をもっているかどうかについての情報は殆ど得られていないのが現状である。軟質土器は一般的に、生産地である窯跡が殆どの場合残っていない。したがって、須恵器のように、すぐ産地問題の研究という訳にはいかない。まず、土器型式と胎土との関連という視点からデータを集積し、同じ土器型式の軟質土器の胎土はすべて同じなのか、どの程度類似しているのか、それとも全く異なる胎土をもつものがあるかどうかという研究過程が必要である。その結果、最終的には須恵器と同様、軟質土器の生産と供給の過去を再現するという歴史研究へと発展する。

土器の胎土分析は、考古学的研究である土器型式との対応をしつつ、土器の生産と供給の過去を再現しようとする歴史研究の一端を担った研究であるということを理解することが、考古学側にとっても、自然科学側にとっても必要である。特に、歴史研究に参加している、胎土分析を担当する自然科学者にこの考え方が要求される。ここに同じ粘土でできた「現代のやきもの」と、科学的発掘を受けた、したがって、歴史空間上に位置づけされた「土器」とは本質的な違いがある。ただ、産地を求めるために「土器」を分析しているという安直な考え方では、この領域の研究を推進することは困難である。

今回は寺家前遺跡から出土した古墳時代の須恵器・土師器の蛍光X線分析の結果を、衣原遺跡出土の古墳時代・奈良時代の須恵器の分析結果と比較した。さらに、沼津市の秋葉林遺跡出土の須恵器・土師器の分析データとも比較した結果について報告する。

分析方法は従来の方法と同じであるので、説明を割愛する。

2 分析結果

まず、寺家前遺跡出土須恵器・土師器の分析データを第59-1表に示す。このデータに基づいて作成した須恵器の両分布図を第160-1図に示す。Na12・13・14・15の4点を除いて他の6点の須恵器は両分布図の基準領域内でまとまって分布しており、また、第59-1表より、Fe、Na因子も類似している。同じ胎土の須恵器、したがって、同じ生産地の製品であると推定される。産地となる窯跡は未特定であるが、静岡県外の生産地の製品である可能性も考えられる。他方、Na12・13・14・15の4点の須恵器はNaが少くないという点でも一致しており、同じ生産地の製品である可能性が高い。これらは両分布図での分布位置から見ても陶邑産の可能性もある。二分された須恵器（在地産と陶邑産）の間で土器型式に違いが認められるのが問題である。

他方、土師器の両分布図は第160-2図に示してある。須恵器とは胎土が全く異なることが分かる。Rb-Sr分布図では比較的まとまって分布しており、同じ地域内の土師器であると推定されるが、K-Ca分布図では大きくばらついて分布しており、いくつかの胎土の土師器が混ざっていると考えられる。この内、No1はK-Ca分布図では他の土師器から離れて分布しており、他の土師器の胎土とは異なる。また、No2・4・8・9の4点の土師器はK-Ca分布図では他の4点の土師器とは離れて分布しており、別胎土の土師器である可能性がある。この結果、3種類の胎土の土師器が混ざっていると推定された。それぞれ、土器型式でも再検討する必要がある。

衣原遺跡出土の古墳時代と奈良時代の須恵器の分析データは第59-2表にまとめてある。この結果に基づいて作成した両分布図を第160-3図に示す。K-Ca分布図ではNo21・23・24・26の4点は他の7点の須恵器から離れて分布しており、別胎土の須恵器と推定される。しかし、古墳時代の4点の須恵器（No28～31）と奈良時代の3点の須恵器（No22・25・27）は両分布図でまとまって基準領域内に分布している。これらは基準領域に分布した寺家前遺跡の6点の須恵器とほぼ対応する。したがって、衣原遺跡の7点の須恵器と寺家前遺跡の6点の須恵器は同じ産地の製品である可能性が高い。

沼津市の秋葉林遺跡出土須恵器と土師器の分析データは第59-3表にまとめられている。この結果に基

づいて作成した須恵器の両分布図は第161-1図に示してある。両分布図で、いずれも基準領域をずれて分布しており、寺家前遺跡、衣原遺跡出土須恵器の胎土とは異なる。別産地の製品と見られる。5点の須恵器のうち、No.6はとくにK-Ca分布図で他の4点の須恵器から大きくずれて分布しており、胎土は異なるとみられる。しかし、他の4点の須恵器はK-Ca分布図ではよくまとまって分布しており、同じ生産地の製品である可能性が高い。土器型式でも対照する必要がある。また、土師器の両分布図は第161-2図に示してある。Rb-Sr分布図では全試料がまとまって分布しており、同じ地域内で作られた土師器であると考えられる。しかし、7世紀後半と推定される土師器1点のみは、K-Ca分布図で他の4点の土師器とは離れて分布しており、胎土は異なると推定される。しかし、他の4点の土師器はFe、Na因子でも類似しており、同じ胎土、したがって、同じところで作られた土師器である可能性が高い。土器型式でも再検討することが必要である。また、これらの4点の土師器の両分布図における分布位置は、寺家前遺跡の土師器の分布位置とも異なっており、両者の胎土は異なる。それぞれ別場所で作られた土師器であろう。当然、両者の土器型式も異なると推定される。ただ、Rb-Sr分布図での分布から、両者とも在地産の土師器であろうと推定される。

第59表 須恵器・土師器分析表

59-1表 寺家前遺跡

掲載No	三比研No	遺物番号	遺物種別	器種	備考	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	20-1110		土師器	甕	古墳時代後期	0.612	0.712	2.44	0.244	0.321	0.247
2	20-1111		土師器	甕	古墳時代後期	0.190	0.502	4.22	0.126	0.479	0.145
3	20-1112		土師器	甕	古墳時代後期	0.286	1.10	4.17	0.111	0.693	0.208
4	20-1113		土師器	甕	古墳時代後期	0.317	0.616	3.56	0.101	0.510	0.155
5	20-1114		土師器	甕	古墳時代後期	0.249	0.900	3.44	0.124	0.756	0.159
6	20-1115		土師器	甕	古墳時代後期	0.349	1.10	2.23	0.207	0.765	0.209
7	20-1116		土師器	甕	古墳時代後期	0.284	1.06	2.43	0.159	0.510	0.206
8	20-1117		土師器	甕	古墳時代後期	0.116	0.639	4.47	0.078	0.939	0.119
9	20-1118		土師器	甕	古墳時代後期	0.178	0.711	3.78	0.114	0.591	0.207
10	20-1119		土師器	甕	古墳時代後期	0.360	1.03	2.95	0.206	0.756	0.218
11	20-1120		須恵器	坏蓋	古墳時代後期	0.605	0.104	1.52	0.599	0.488	0.447
12	20-1121		須恵器	坏身	古墳時代後期	0.509	0.131	1.20	0.714	0.434	0.089
13	20-1122		須恵器	坏蓋	古墳時代後期	0.576	0.141	1.80	0.661	0.290	0.143
14	20-1123		須恵器	坏外	古墳時代後期	0.595	0.026	1.00	0.713	0.213	0.123
15	20-1124		須恵器	甕	古墳時代後期	0.473	0.037	2.57	0.517	0.227	0.125
16	20-1125		須恵器	高坏	古墳時代後期	0.662	0.088	1.23	0.668	0.526	0.489
17	20-1126		須恵器	高坏	古墳時代後期	0.656	0.054	1.19	0.686	0.528	0.511
18	20-1127		須恵器	甕	古墳時代後期	0.636	0.094	1.45	0.662	0.470	0.451
19	20-1128		須恵器	甕	古墳時代後期	0.643	0.063	1.57	0.602	0.417	0.413
20	20-1129		須恵器	坏蓋	古墳時代後期	0.639	0.086	1.35	0.671	0.502	0.500

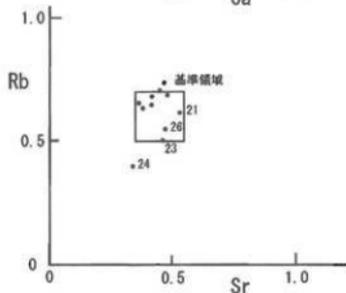
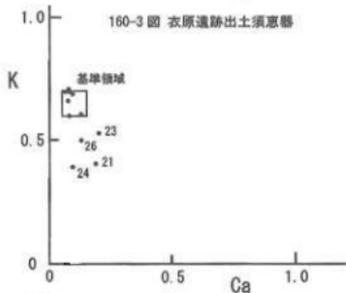
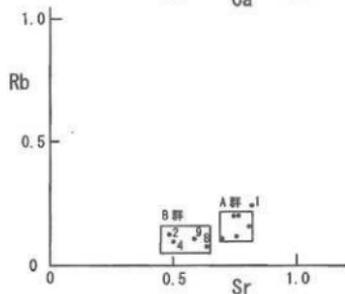
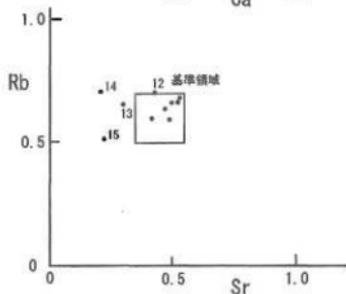
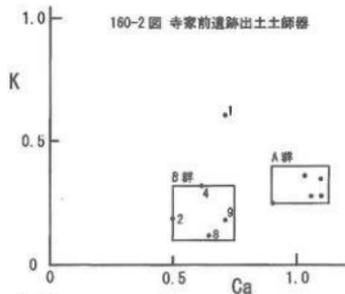
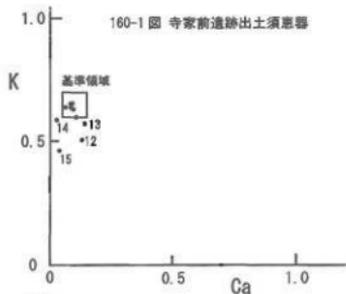
59-2表 衣原遺跡

掲載No	三比研No	遺物番号	遺物種別	器種	備考	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
21	20-1130		須恵器	甕	奈良時代	0.413	0.192	0.854	0.619	0.332	0.171
22	20-1131		須恵器	甕	奈良時代	0.705	0.082	1.94	0.706	0.452	0.473
23	20-1132		須恵器	坏蓋	奈良時代?	0.534	0.204	2.33	0.498	0.461	0.209
24	20-1133		須恵器	坏蓋	奈良時代?	0.391	0.095	2.51	0.397	0.544	0.229
25	20-1134		須恵器	甕	奈良時代	0.613	0.133	1.49	0.687	0.470	0.435
26	20-1135		須恵器	坏身	奈良時代?	0.503	0.126	1.34	0.554	0.471	0.359
27	20-1136		須恵器	坏蓋	奈良時代?	0.698	0.085	1.69	0.680	0.416	0.462
28	20-1137		須恵器	坏蓋(磁器)	古墳時代後期	0.659	0.077	1.96	0.635	0.377	0.404
29	20-1138		須恵器	甕	古墳時代後期	0.650	0.082	1.24	0.650	0.424	0.375
30	20-1139		須恵器	甕	古墳時代後期	0.692	0.089	1.38	0.742	0.467	0.465
31	20-1140		須恵器	甕	古墳時代後期	0.700	0.084	1.55	0.661	0.390	0.441

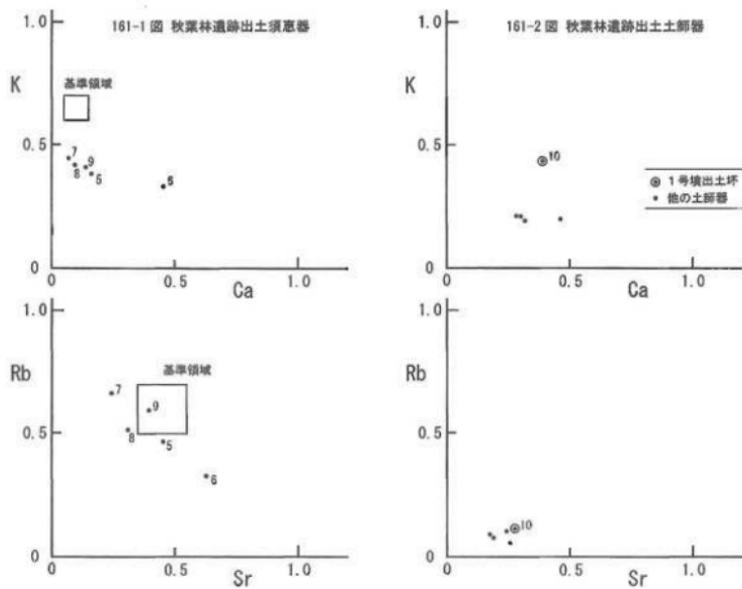
59-3表 秋葉林遺跡

掲載No	三比研No	遺物番号	遺物種別	器種	備考	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	20-1141	2629	土師器	甕		0.268	0.285	3.93	0.063	0.174	0.193
2	20-1142	2641	土師器	甕		0.262	0.461	3.75	0.063	0.253	0.233
2	20-1143	2643	土師器	甕		0.210	0.304	3.73	0.075	0.197	0.198
4	20-1144	4677	土師器	甕		0.193	0.320	3.78	0.105	0.237	0.168
5	20-1145	10926	須恵器			0.379	0.161	1.01	0.474	0.453	0.158
6	20-1146	11033	須恵器			0.327	0.447	2.48	0.325	0.634	0.385
7	20-1147	12222	須恵器			0.445	0.070	2.08	0.573	0.239	0.062
8	20-1148	12223	須恵器			0.416	0.094	2.22	0.515	0.311	0.312
9	20-1149	23149	須恵器			0.468	0.140	1.42	0.593	0.386	0.231
10	20-1150	26790	土師器	坏	1号壇石室内出土	0.429	0.391	4.49	0.113	0.275	0.326

(注) 分析値は前掲分析試料JG-11による無灰化値で表示してある



第160圖 兩分布圖(1)



第161図 兩分布図(2)

第4節 金銅装圭頭大刀にともなう木質部の樹種について

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 西尾太加二

1 はじめに

秋葉林1号墳から金銅装圭頭大刀1振りが出土した。この大刀には鞘、柄の部位に木質部が良好に遺存していた。そのため、木質部から小片を採取してプレパラート標本を作製し、生物顕微鏡で検鏡することで樹種同定を行った。

古墳などから出土する鉄製品や青銅製品には木材や布などの有機質遺物が錆着した状態で断片的に遺存することがある。有機質遺物は地下水位以下に埋没した遺跡から出土することが一般的で、乾燥や湿潤を繰り返す丘陵上に位置する遺跡から出土することは少ない。古墳などの埋没環境では、有機質を腐らせる微生物（木材腐朽菌）が活動するための十分な酸素と水が供給されるため、有機質は土壌中で分解され消滅してしまう。しかし、今回のように金属部分に密着した木材は、微生物に分解される前に錆などの鉱物質のものが沈着し、硬質化することで形状が保たれることがある。

2 試料および方法

大刀の鞘と柄の木質部は写真2・3に示すように金属部に錆着した状態で遺存している。試料の採取はダイヤモンドカッターを取り付けた精密加工機で切り出すようなかたちで行う。試料の大きさは各方向2～5mm前後である。木材の樹種を同定するためには、木口、柀目、板目の各断面に現れる細胞の形状や配列を観察しなければならぬため、試料のブロックをさらに3分割する必要がある。



写真2 柄 サンプリング箇所



写真3 鞘 サンプリング箇所

プレパラート標本の作製は研磨法で行った。研磨法とは、試料小片を透明なエポキシ樹脂に埋め込んだ後、透過光で検鏡できる厚さまでサンドペーパーやアルミパウダーを使って研磨する方法である。（写真4～6）

樹種同定は、木材の3断面を生物顕微鏡によって40～400倍で観察し、現生標本および文献資料と比較しながら行った。なお、作製した標本は当研究所清水整理事務所保存処理室で保管している。



写真4 樹脂で包埋した試料



写真5 研磨中の試料



写真6 完成したプレパラート標本

3 同定結果

顕微鏡観察によって判明した樹種は、幹部は針葉樹材のヒノキ、柄部は広葉樹材のアカガシ亜属であった。同定に利用した材の解剖学的特徴を下記に示し、各木材の細胞組織の顕微鏡写真を掲載する。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射線細胞の3種類の構成要素からなる。

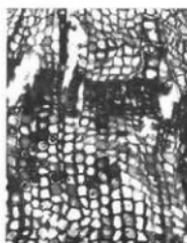
早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅および年輪幅が狭く均質な材である。樹脂細胞は晩材部に散在し、ときに接線状となる。分野壁孔は円形で開孔部は幅の狭いレンズ状で斜めに位置しトウヒ〜ヒノキ型で1分野に通常2個存在する。放射組織は単列で、細胞高は1〜15である。

ヒノキは関東地方以西の冷温帯から暖温帯上部に分布する常緑針葉高木。材は木理通直、割裂性がよく、緻密、強靱で光沢美しく、芳香がある。建蔽材、仏像、箸など様々な用途に用いられる。

アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

40〜140 μ mの丸い道管が年輪界に関係なく途中から始まり途中で終わるような放射孔材。道管の穿孔は単一で、放射組織には単列同性的なものと同放射組織の2種類がある。

カシ類はシノキ属と同様に照葉樹林を特徴づける種群である。材はきわめて堅硬、緻密で割裂性がよく、弾性強く強靱である。鋏、鋤、鍬、斧柄などの農具に多用される。

写真7 ヒノキ 木口 $\times 50$ 写真8 ヒノキ 柱目 $\times 100$ 写真9 ヒノキ 板目 $\times 100$ 写真10 アカガシ亜属 木口 $\times 50$ 写真11 アカガシ亜属 柱目 $\times 100$ 写真12 アカガシ亜属 板目 $\times 100$

参考文献

- 高地 謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』 地球社
 鈴木三男・能代修一 1997 『石川条里遺跡出土木製品の樹種』『石川条里遺跡第3分冊』 長野県埋蔵文化財センター

第5節 秋葉林遺跡1号墳出土土玉の材質分析調査

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告では、秋葉林遺跡1号墳から出土した玉の素材および玉表面に観察される塗膜様の黒褐色物質に関する知見を得ることを目的とし、断面薄片観察およびX線回折分析、エネルギー分散型検出器付偏光型電子顕微鏡（SEM-EDS）分析による科学的調査を実施する。

1 試料

試料は、秋葉林遺跡1号墳の石室内から出土した分析番号1・2の玉片2点である。玉は石室中央部付近の礫床直上の褐色土中から、10数点が集中して出土している。分析番号1・2とも破断面は黄褐色を呈し、表面は薄い塗膜様の黒褐色物質によって覆われている（写真13参照）。実体顕微鏡による観察では、表面に見られる黒褐色物質は一様な物質ではなく、斑状の赤褐色物質と黒色物質によって形成されていることが看取される。なお、石室内からは、その他に鉄鏝や鉄製品および土器などが出土している。

当初、玉は素材に琥珀を用い、その表面に漆が塗布されている可能性があると考えられており、それを検証するために、薄片作製鑑定1点により断面構造や付着物の状況を観察し、顕微赤外分光分析（FT-IR）3点により玉の素材が琥珀であるか、付着物が漆であるかを調査する計画案であった。ところが、1点の薄片作製鑑定を行ったところ、玉の素材は蛇紋岩の可能性が高くなり、表面の被膜は鉄分の可能性があると考えられた。そこで協議の上、断面薄片観察を分析番号1・2の両試料について行い、玉の素材と表面の状況を観察することとした。さらにX線回折分析を分析番号2について行い、玉の素材を確認することとした。また、SEM-EDS分析を分析番号2について実施し、表面の構造と成分について調査することとした。

2 分析方法

(1) 断面薄片作製観察

試料を包埋処理した後、ダイヤモンドカッターを用いて切断し、薄片用のチップとする（一次切断）。チップの片面を#180～#2500の研磨剤を用いて研磨し（一次研磨）、プレパラートに接着剤を用いて貼り付ける。プレパラートに貼り付いたチップを厚さ5mm程度に薄く切断する（二次切断）。#180～#800の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ0.1mm以下まで研磨する。さらに、メノウ板上で#2500の研磨剤を用いて正確に0.03mmの厚さに調整する（二次研磨）。最終的に、6 μ m、3 μ mおよび1 μ mのダイヤモンドペーストを用いて琢磨機上で鏡面磨きをして観察用の研磨薄片とする。研磨薄片は、偏光顕微鏡のほか、生物顕微鏡、落射蛍光顕微鏡を用いた観察を行う。

(2) X線回折分析

試料をメノウ乳鉢で微粉砕した後、無反射試料板に充填し、測定試料とする。作製したX線回折測定試料について以下の条件で測定を実施する。

検出された物質の同定解析は、Materials Data, Inc. のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する鉱物や化合物を検索する。

装置：理学電気製 MultiFlex	Divergency Slit：1°
Target：Cu (K α)	Scattering Slit：1°
Monochrometer：Graphite湾曲	Receiving Slit：0.3mm
Voltage：40kV	Scanning Speed：2°/min
Current：40mA	Scanning Mode：連続法
Detector：SC	Sampling Range：0.02°
Calculation Mode：cps	Scanning Range：3～65°

(3) SEM-EDS分析

断面薄片観察に用いた研磨薄片を用い、エネルギー分散形X線分析装置 (JED-2300) を備えた日本電子製可搬形走査電子顕微鏡JCM-5700により、加速電圧20kV・低真空モード (30Pa) で無蒸着観察・分析を実施する。なお、SEM-EDSによる調査は、表面に認められる塗膜様物質を対象とするため、写真14に示した領域について元素マッピング分析を行い、材質に関する情報を得る。

3 結果

(1) 断面薄片観察 (写真15)

1) 分析番号1

試料表面部に透過光および落射蛍光で黒色および黄褐色を呈する物質が約10～20 μm の厚さで認められるが、観察した範囲では粒子や組織構造は観察できない。

内部材質は蛇紋石および滑石を主要鉱物とする蛇紋岩である。蛇紋石は、径1～2.5mm程度の板状～柱状を呈する鉱物を交代する産状を示す。滑石は粒径0.2mm以下の柱状～粒状を呈する鉱物を交代し、仮像を形成している。石材自体は風化作用を被っており、非晶質物質、水酸化鉄、褐色粘土鉱物などが広範に生成している。試料表面部に見られる薄膜状の物質も水酸化鉄と見られる。褐色粘土鉱物は、後述の分析番号2と同様な産状を示していることから、スメクタイトと推定される。

2) 分析番号2

試料表面部に透過光および落射蛍光で黒色を呈する物質が20～30 μm の厚さで認められるが、観察した範囲で粒子や組織構造は観察できない。分析番号1と比較すると、表面の黒色部分がより明瞭で層厚も比較的厚い。

内部材質は蛇紋石および滑石を主要鉱物とする蛇紋岩であり、分析番号1と同様な岩相を示す。蛇紋石は径1～2mm程度の板状～柱状の鉱物を交代する。滑石は蛇紋石と共生して散在し、一部、径0.1～0.3mm程度の粒状鉱物を交代するものも認められる。分析番号1と同様に風化作用を被っており、非晶質物質、水酸化鉄、褐色粘土鉱物が広範に生成している。水酸化鉄は、石材内部に散在しているが、試料表面部に見られる薄膜状の物質も水酸化鉄と見られる。褐色粘土鉱物の周囲には、収縮組織が認められ、ひび割れが生じている。このような組織や次のX線回折の結果を考慮するとスメクタイトの可能性が高い。

(2) X線回折分析

X線回折図を第162図に示す。図中最上段に試料のX線回折図を掲げ、下段に検出された鉱物の回折パターンを掲げている。なお、文中で()内に示したものは、X線回折図で同定された鉱物名である。固溶体やポリタイプを有する鉱物については、X線回折試験では正確な同定は困難であるため、最終的な検出鉱物名としては、それらを包括する大分類の鉱物名を使用している。

分析番号2から検出された鉱物は、蛇紋石(リザーダイト:lizardite)、滑石(talc)である。なお、 $d = 18 \text{ \AA}$ 付近に認められるブロードな反射からスメクタイト(モンモリロナイト:montmorillonite)の可能性がある。

(3) SEM-EDS分析

写真14に示した領域に対する元素マッピング結果を写真16に示す。マッピング結果によれば、分析番号2の試料表面部に認められる薄膜状の物質は、2種類の構成物質によって特徴付けられ、最表面に鉄(Fe:赤色)とマンガン(Mn:青色)の濃集層(紫色)、その下に鉄の濃集層(赤色)が存在する。マッピングデータから抽出した両層の酸化物組成を簡易定量分析結果として写真17に掲げたが、鉄マンガン濃集層(抽出データNo.1)では、 Fe_2O_3 が25%、 MnO が18%程度、鉄濃集層(抽出データNo.2)では Fe_2O_3 が45%程度である。

写真14の顕微鏡写真と照合した場合、鉄マンガン濃集層は黒色を、鉄濃集層は赤褐色を呈する。観察領域における表面全体を覆う形で鉄濃集層があるが、内部との境界は不明瞭である。また、鉄濃集層の上に部分的に鉄マンガン濃集層が存在する。

4 考察

断面薄片観察およびX線回折の結果、分析番号1・2はともに蛇紋石と滑石を主要鉱物とする蛇紋岩を用いて製作された玉であることが確認された。蛇紋岩は近傍では三波川帯に産するが、いずれにしても静岡県内では産出しない石材であるため、遠方から搬入されたものと考えられる。

SEM-EDS分析では、玉表面部に認められる薄膜状の物質は2種類存在することが確認され、表面全体を覆う形で鉄濃集層があり、その上に鉄マンガン濃集層が部分的に存在していると見られる。実体顕微鏡下の表面観察の際に赤褐色部分と黒色部分が斑状に見られたことも、このことに起因すると考えられる。

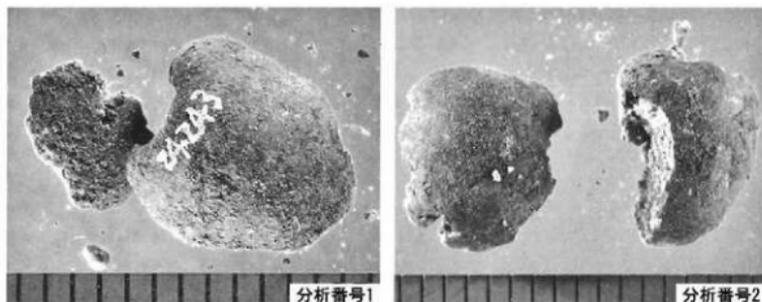
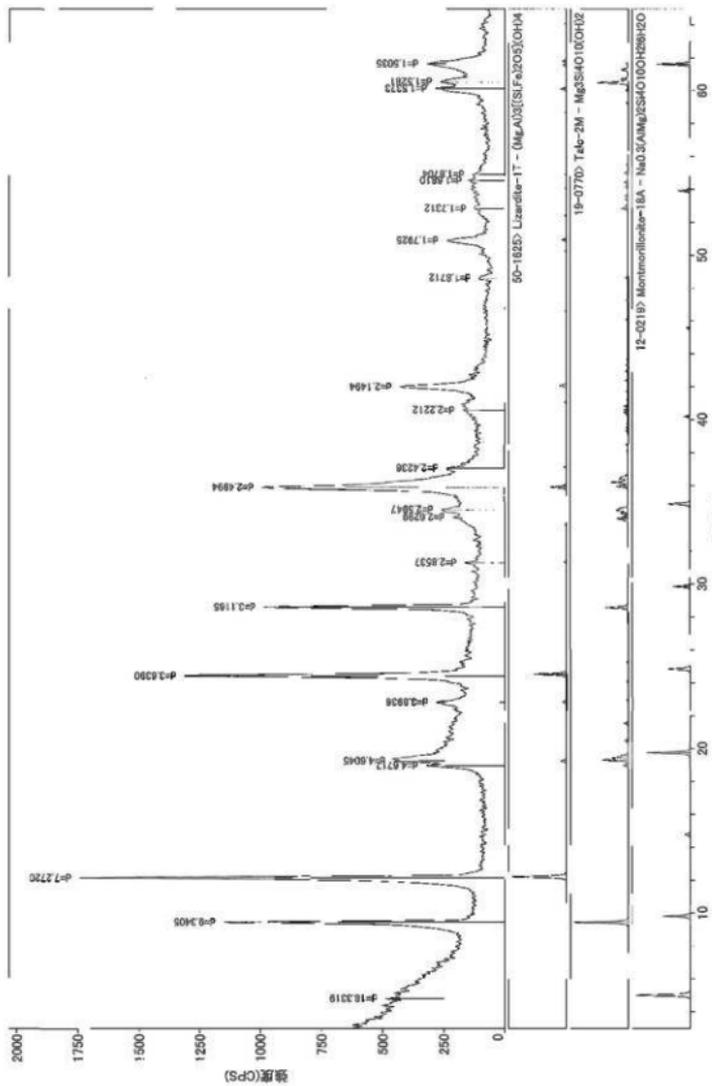


写真13 1号墳玉類分析試料

分析番号2の断面薄片（写真14の2）と反射電子立体像や元素マッピング図（写真16）における鉄濃集層の状況から、鉄濃集層は石材表面に付着した層ではなく、玉の石材の表面（外面）であると考えられる。鉄濃集層の形成については、石材内部から表面へ鉄が染み出し酸化沈着したものと、石材外部から染み込んだものの可能性がある。

一方、表面に斑状に認められる鉄マンガン濃集層は、石材表面に付着した状況が反射電子立体像から判明した。マンガンが顔料として用いられたとは考えにくいこと、鉄マンガン濃集層が部分的であることなどから、鉄やマンガンは玉が埋積していた土壌中から石材表面に付着したものと考えられる。とくに鉄分については、石室内から出土した鉄礫や鉄製品などの錆化が進んでいることから、それらに由来する可能性もある。



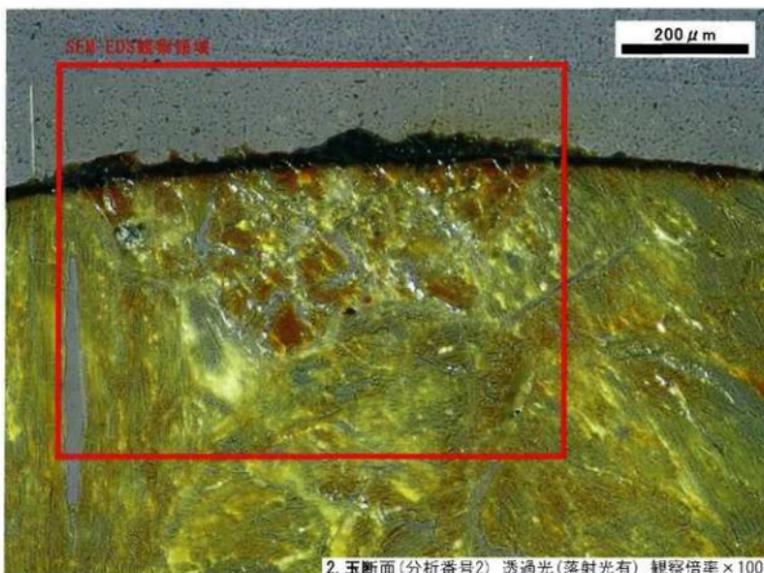
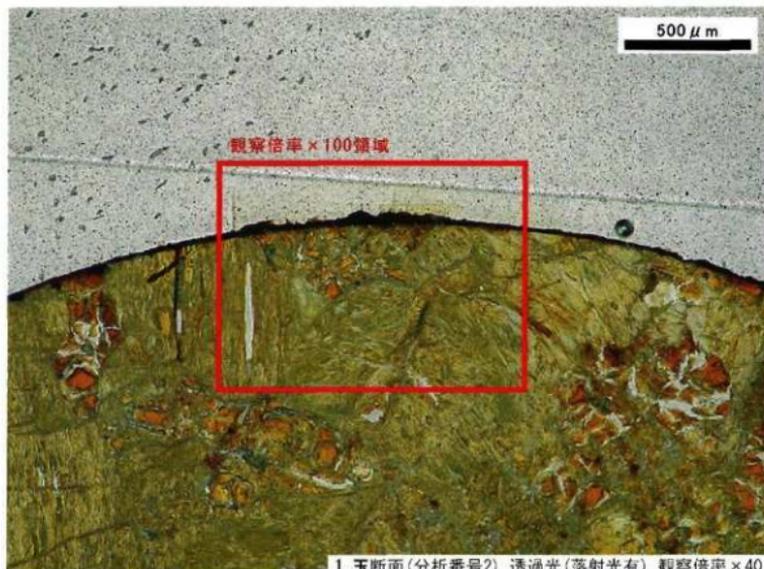
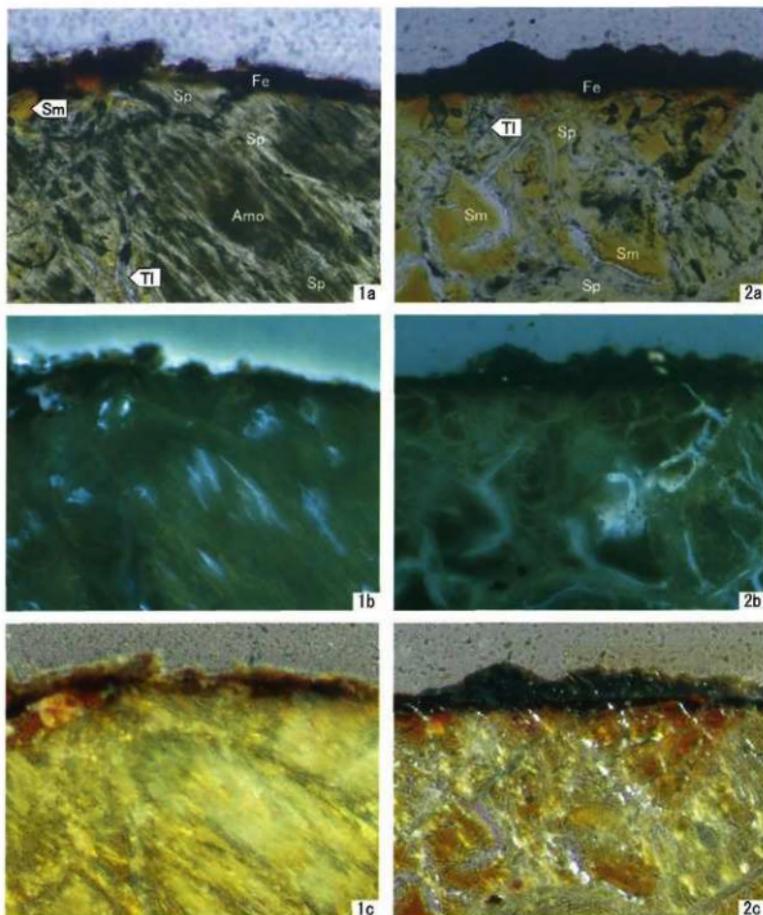


写真14 SEM-EDS觀察領域



1. 玉断面 (分析番号1)

2. 玉断面 (分析番号2)

a: 透過光 b: 落射蛍光 c: 透過光 (落射光有)

Sp: 蛇紋石 Sm: 褐色粘土鉱物 (スメクタイト?) Tl: 滑石 Fe: 水酸化鉄 Amo: 非晶質物質

写真15 薄片

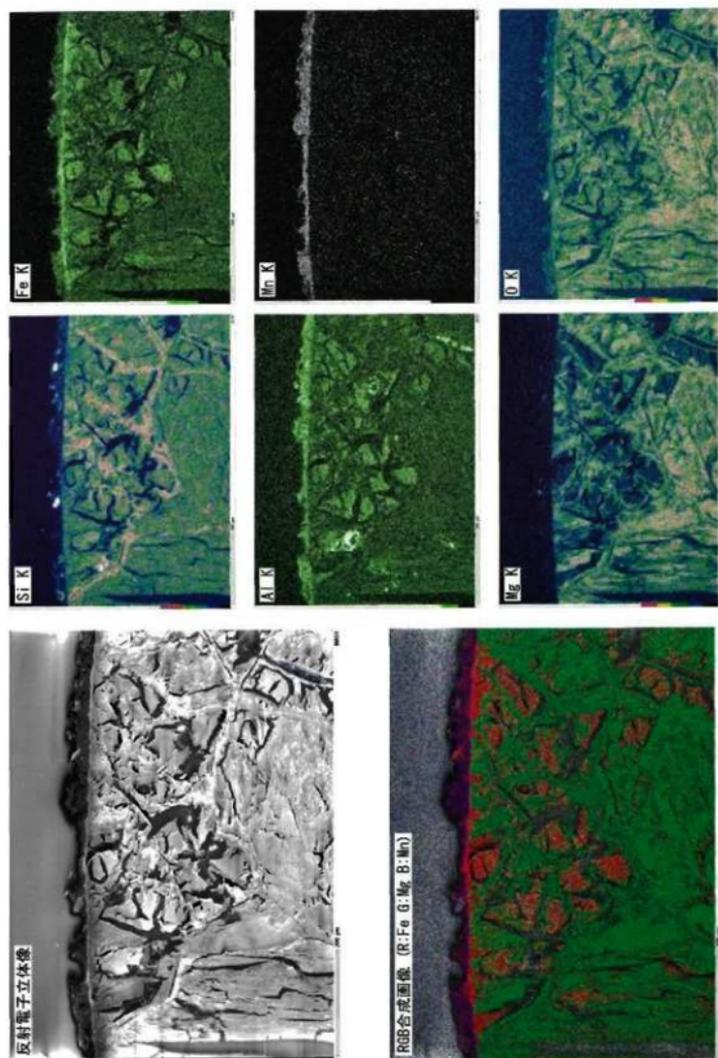
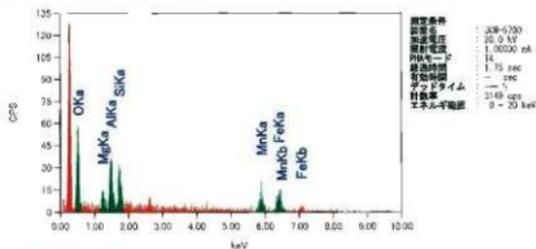
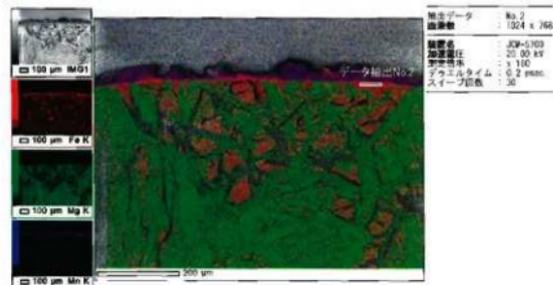
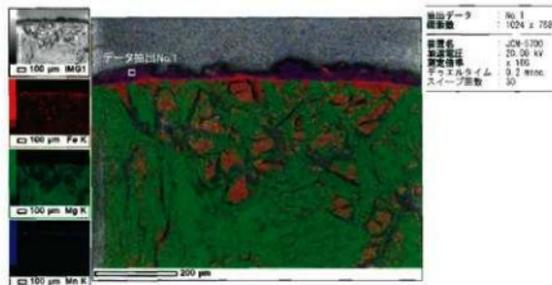
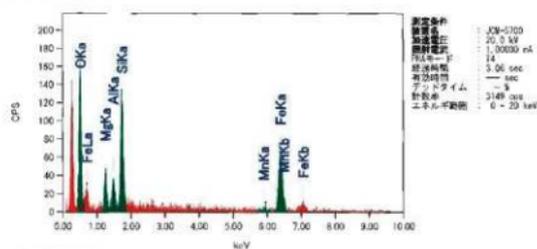


写真16 元素マッピング結果



EDS 簡易定量分析 (検出物)
フィッティング係数 : 0.594
検出回数 : 24.0

元素	Wt%	原子%	検出率	モル%	化合物	質量%	カチオン数	K
O	1.252	4.71	2.54	15.44	H ₂ O	7.41	1.89	4.0069
Al	1.456	32.52	2.52	19.56	Al ₂ O ₃	33.84	4.51	15.2545
Si	1.739	11.64	3.08	23.04	SiO ₂	24.20	4.05	15.6284
Mn	5.334	13.44	4.25	23.09	MnO	17.57	7.46	27.0559
Fe	6.338	17.19	4.86	12.77	Fe ₂ O ₃	25.28	5.12	26.5213
合計		100.00		100.00		100.00	16.10	



EDS 簡易定量分析 (検出物)
フィッティング係数 : 0.5257
検出回数 : 24.0

元素	Wt%	原子%	検出率	モル%	化合物	質量%	カチオン数	K
O	1.252	4.45	6.90	21.75	H ₂ O	11.71	1.52	6.2070
Al	1.456	4.23	9.25	6.37	Al ₂ O ₃	8.15	1.50	4.3773
Si	1.729	16.20	1.00	47.53	SiO ₂	34.53	5.50	22.3254
Mn	6.684	9.54	1.45	0.60	MnO	2.70	0.39	1.5725
Fe	6.398	31.85	1.69	23.25	Fe ₂ O ₃	46.84	5.46	64.7290
合計		100.00		100.00		100.00	15.64	

写真17 簡易定量分析結果

写 真 图 版



秋葉林遺跡調查區遠景



1号墳石室全景



1号墳出土遺物

图版 4



圭頭大刀 (1)



圭頭大刀 (2)



甕集合



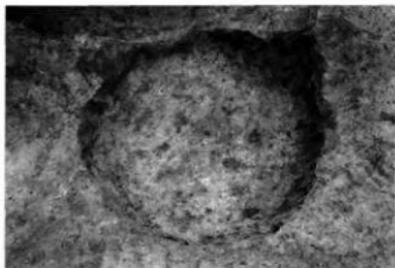
1号集石 (1)



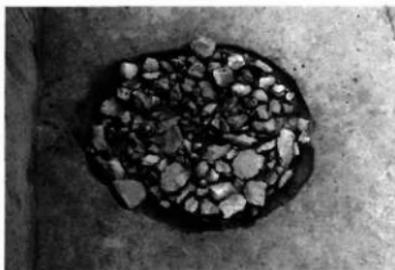
1号集石 (2)



2号集石 (1)



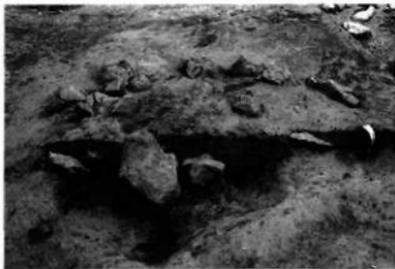
2号集石 (2)



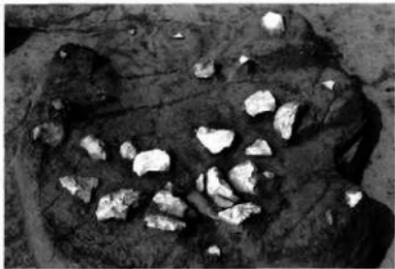
3号集石 (1)



3号集石 (2)



4号集石



5号集石

图版 8



6号集石



7号集石



8号集石



9号集石



10号集石



11号集石



12号集石



13号集石



14号集石



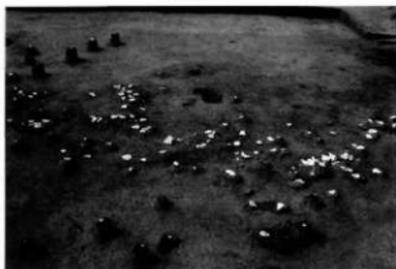
15号集石



16号集石

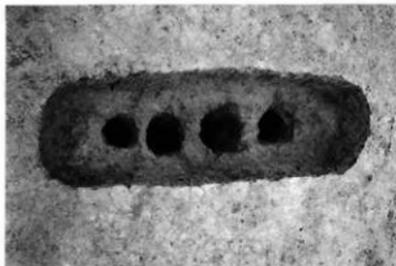


17号集石



18号集石

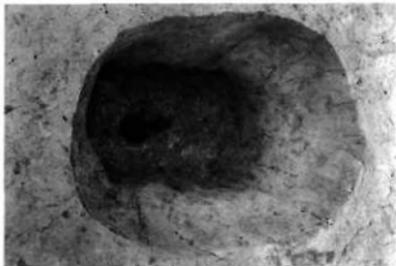
图版10



1号土坑



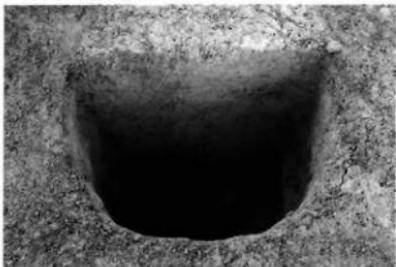
2号土坑



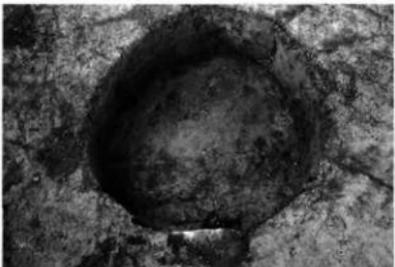
3号土坑



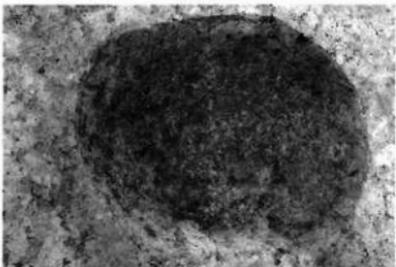
4号土坑



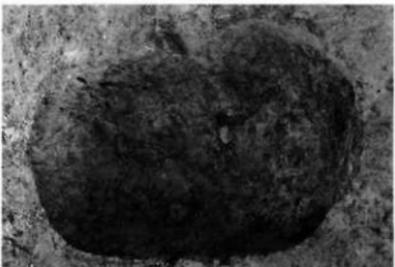
5号土坑



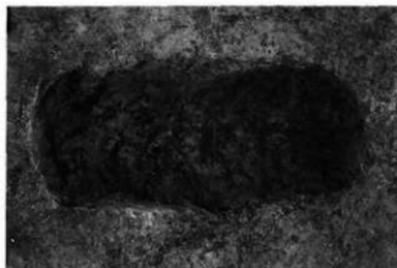
6号土坑



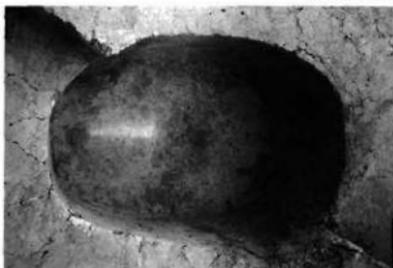
7号土坑



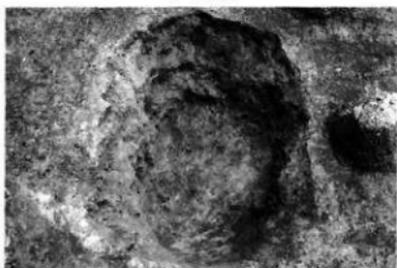
8号土坑



9号土坑



10号土坑



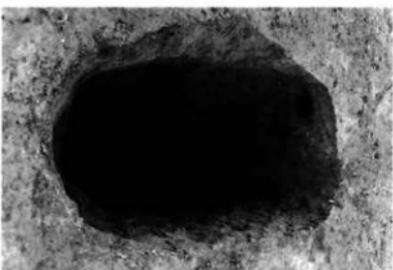
11号土坑



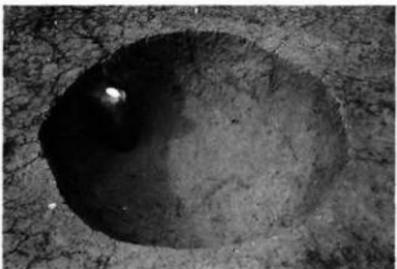
12号土坑



13号土坑



14号土坑

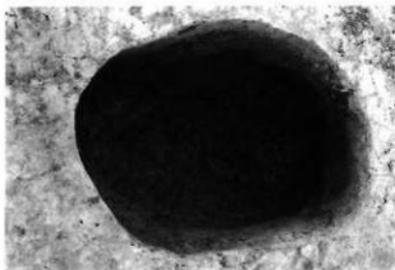


15号土坑

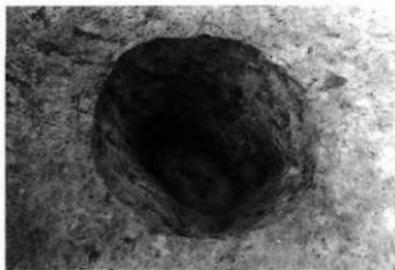


16号土坑

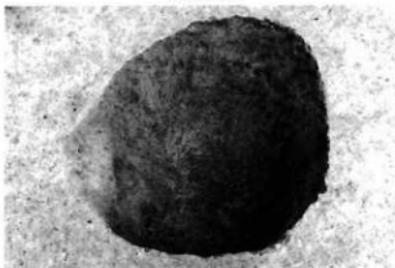
图版12



17号土坑



18号土坑



19号土坑



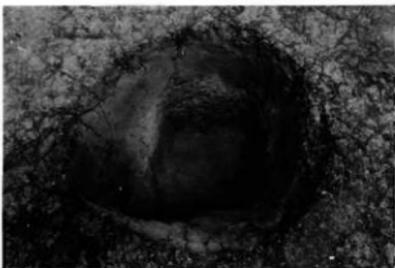
20号土坑



21号土坑



22号土坑



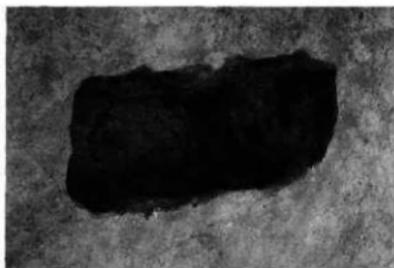
23号土坑



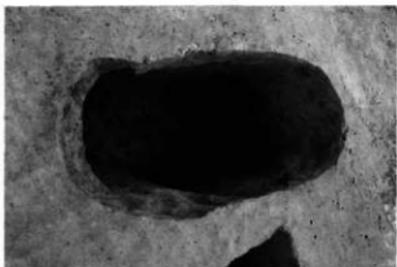
24号土坑



25号土坑



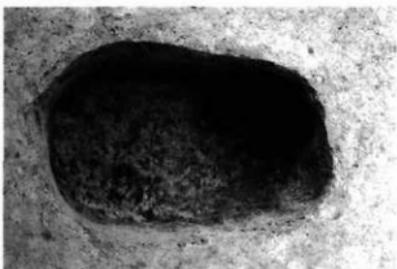
26号土坑



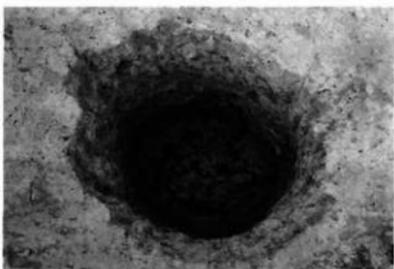
27号土坑



28号土坑



29号土坑

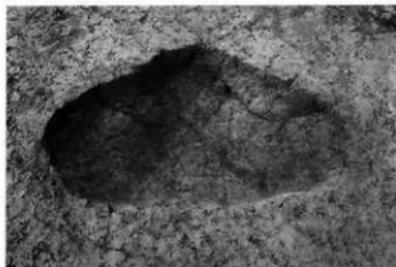


30号土坑



31号土坑

图版14



1号烧土跡



2号烧土跡



1号石斧集中



2号石斧集中



豎穴状遺構



1号墳全景



1号墳石室内遺物出土状況

图版16



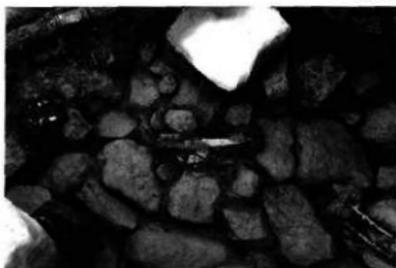
1号墳石室内遺物出土状況(近景)(1)



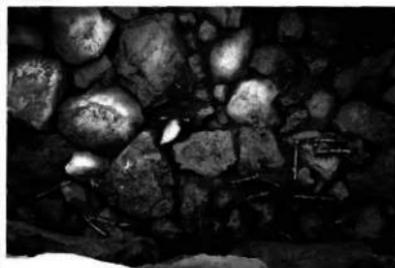
1号墳石室内遺物出土状況(近景)(2)



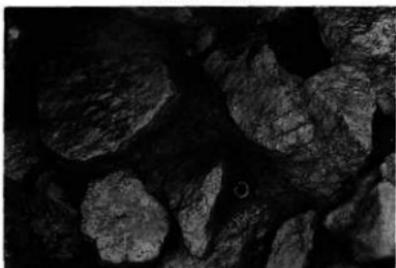
大刀出土状况



刀子出土状况



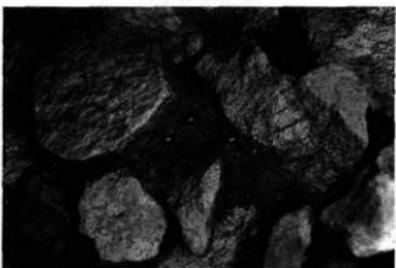
鉄櫃出土状况



耳環出土状况 (1)



耳環出土状况 (2)



玉出土状况



土器出土状况

图版18



1号墳石室段構造部分



1号墳基底石検出状況



1号墳墓室完掘状況



2号填石室完掘状况



3号填周边(空撮)



3号填全景

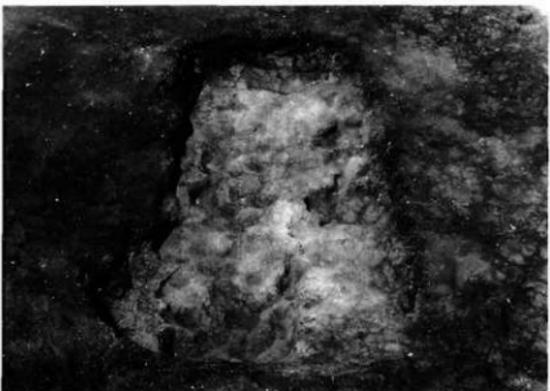
图版20



3号填石室完掘状况



3号填墓室出土状况



3号填墓室完掘状况



4号墳全景

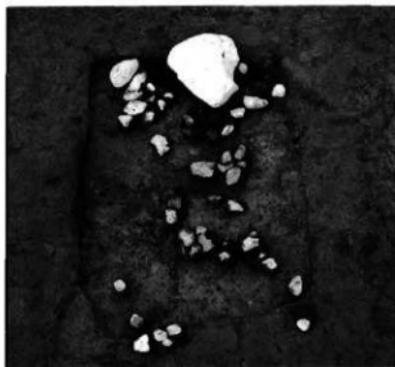


4号墳石室完掘状況



4号墳墓填完掘状況

图版22



5号墳検出状況



5号墳墓壙完掘状況



1号方形周溝状遺構



2号方形周溝状遺構



2号方形周溝状遺構遺物出土状況



地下室遺構



2号集石出土遗物



4号集石出土遗物



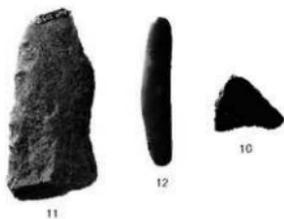
5号集石出土遗物



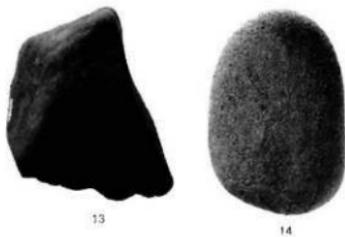
9号集石出土遗物



16号集石出土遗物



17号集石出土遗物

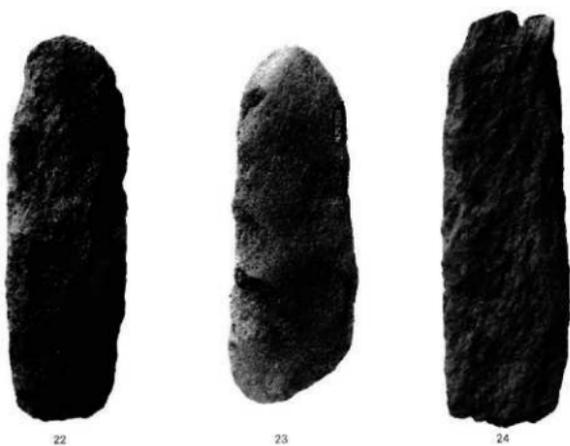


18号集石出土遗物

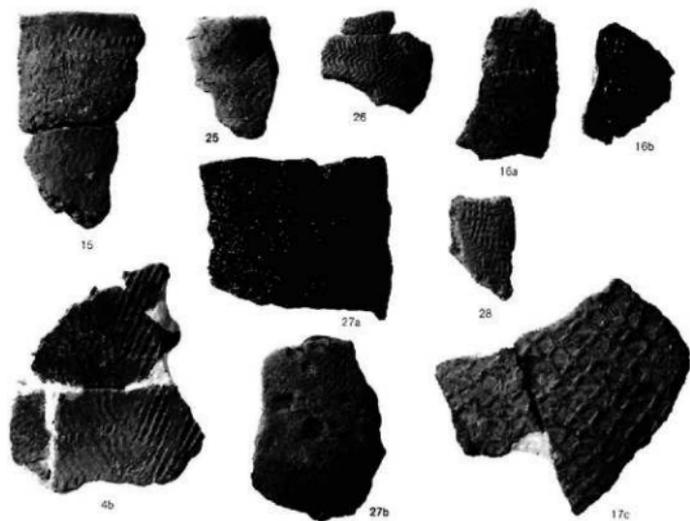
图版24



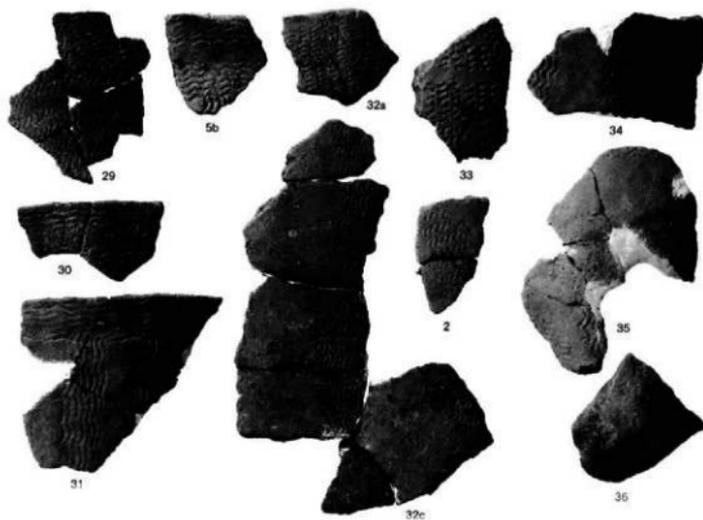
1号石斧集中出土遗物



2号石斧集中出土遗物



I群1類土器

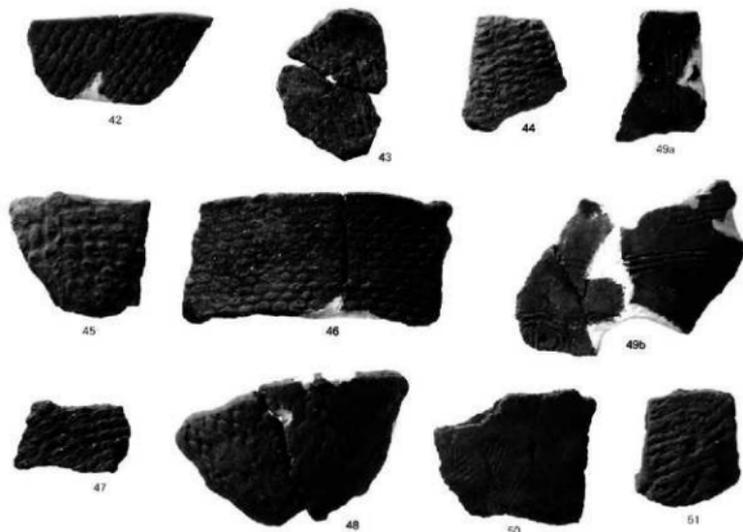


I群2類土器

图版26



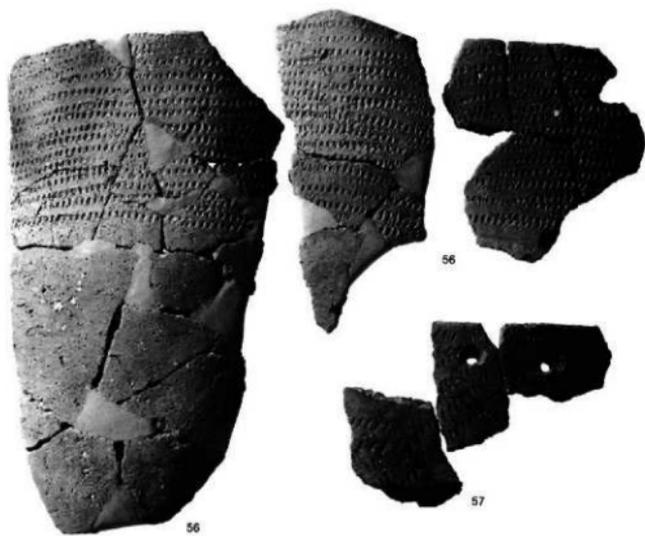
I 群3類土器 (1)



I 群3類土器 (2) · 4類土器

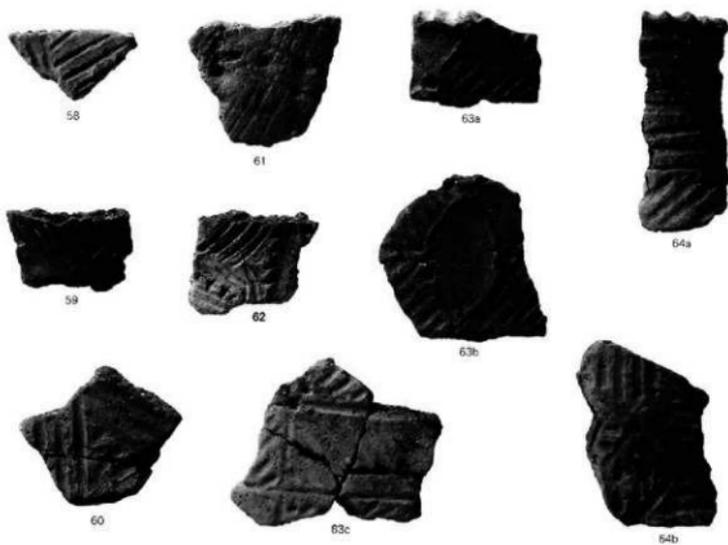


Ⅱ群1類土器(1)

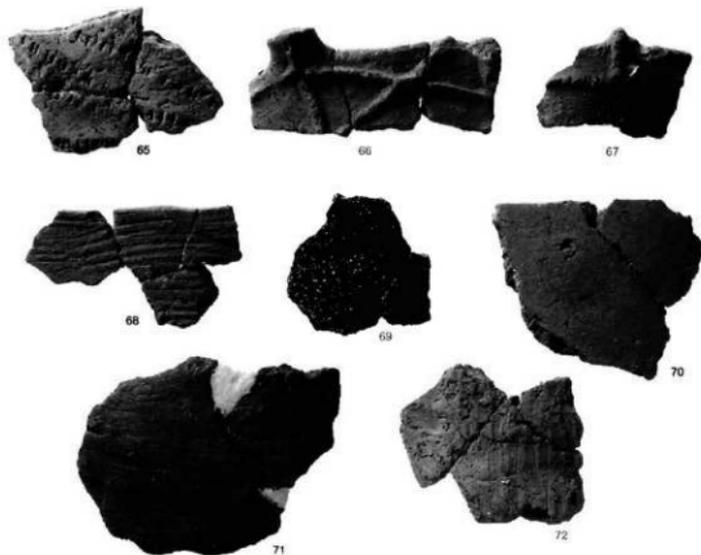


Ⅱ群1類土器(2)

图版28



II群2類・3類土器



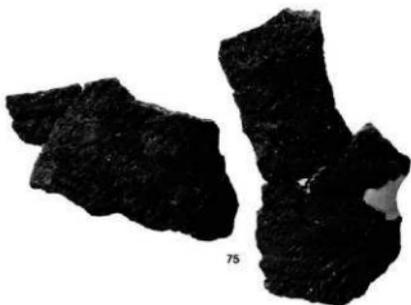
II群4類・5類土器・6類土器(1)



73



74



75



76

II群6類土器(2)・7類土器



77



78



79



80



81



82



83



84



85



86



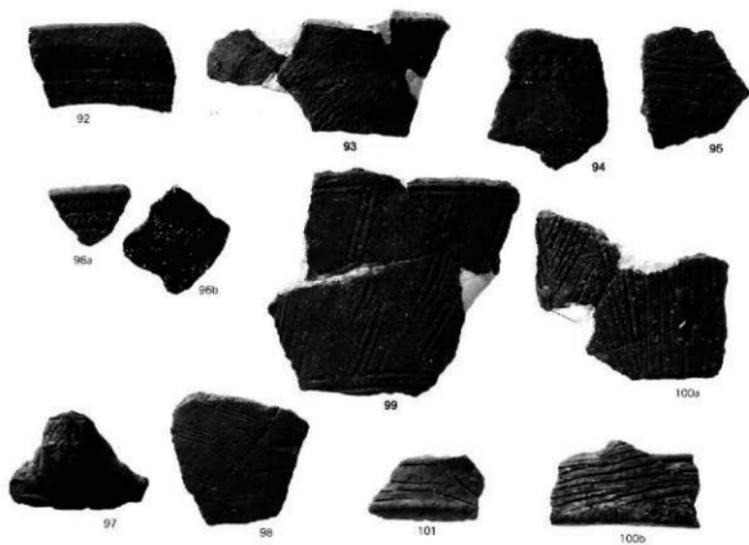
87



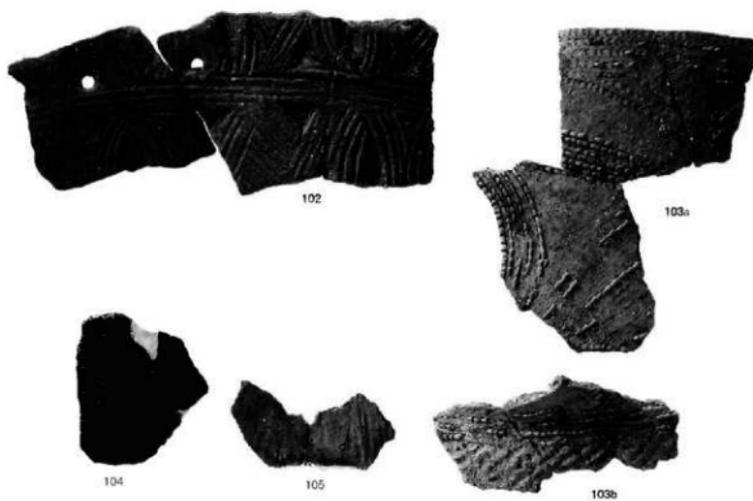
91

III群1類・2類土器

图版30



IV群1類土器

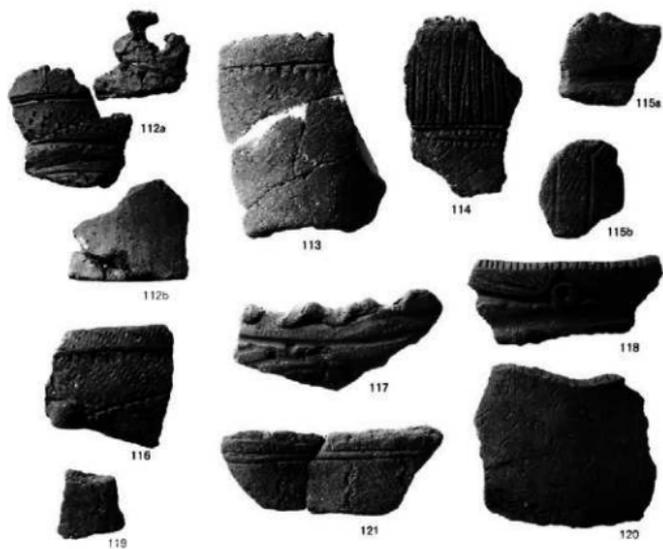


IV群2類・3類土器

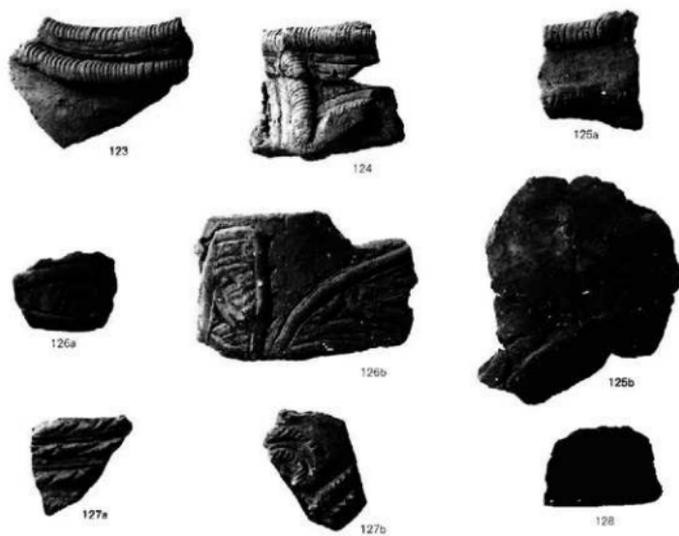


IV群4類土器(1)

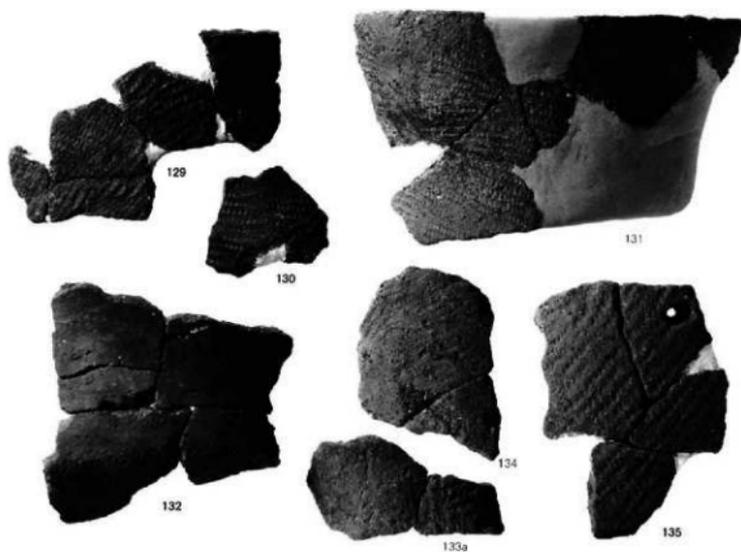
图版32



IV群4類土器(2)



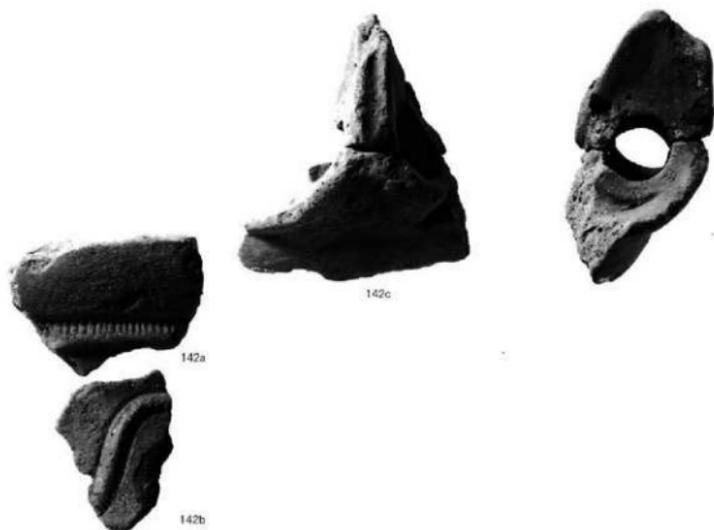
IV群5類土器



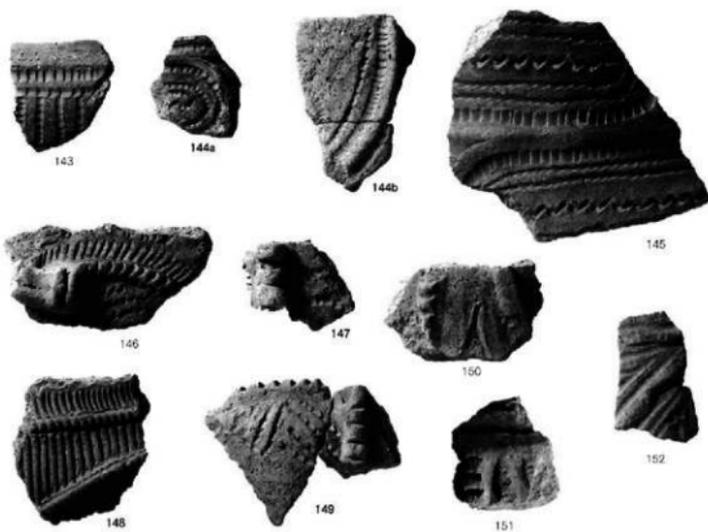
IV群6類土器



V群1類・2類土器



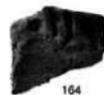
V群3類土器(1)



V群3類土器(2)・4類土器(1)

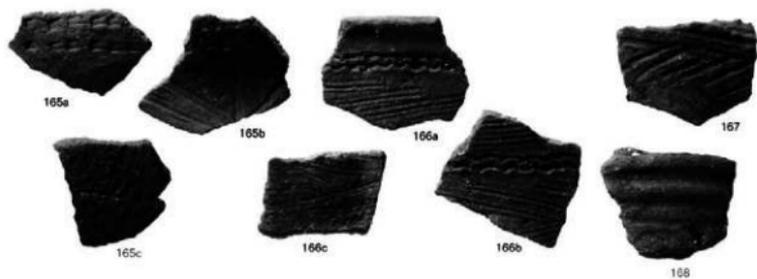


V群4類土器(2)



VI群・VII群土器

图版36



169



171



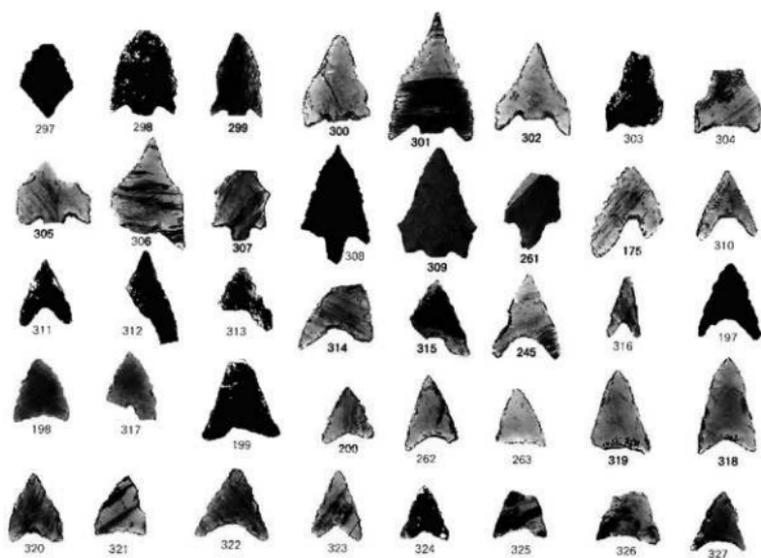
172



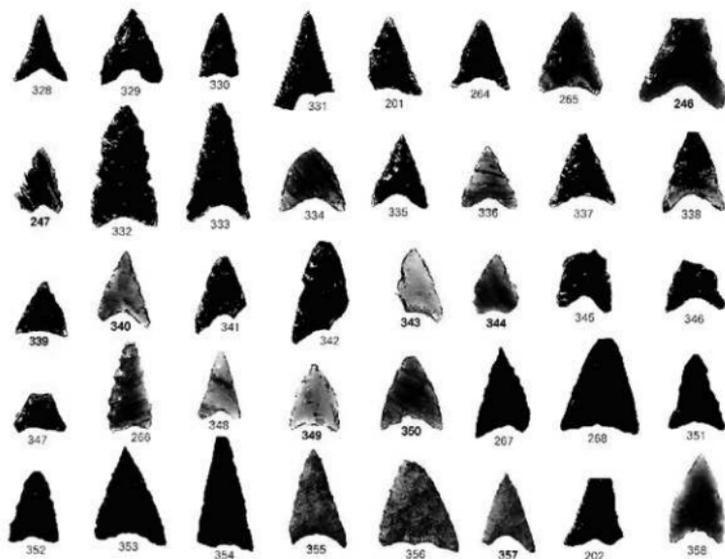
173



174

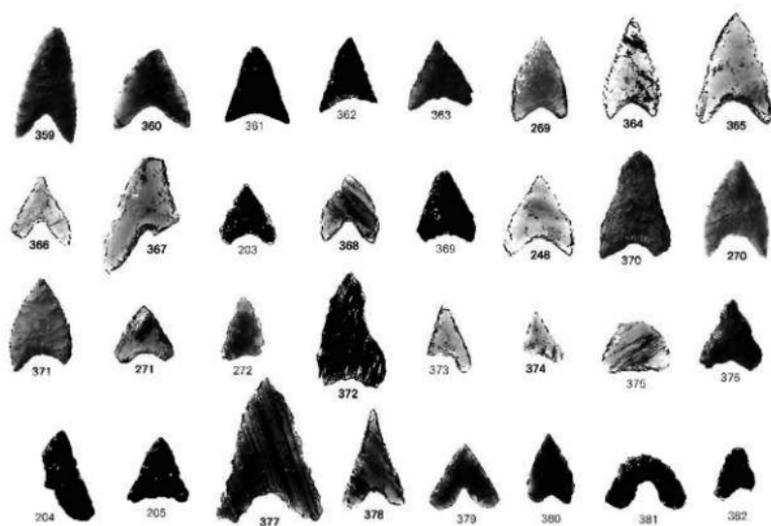


石鏃 (1)

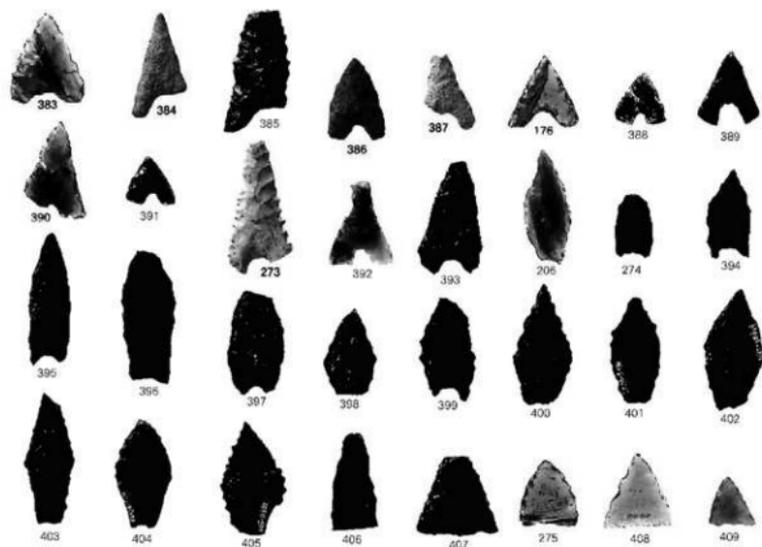


石鏃 (2)

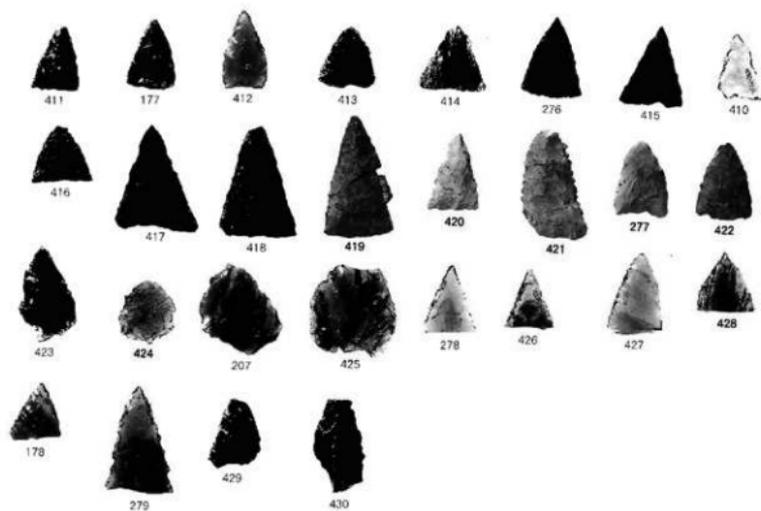
图版38



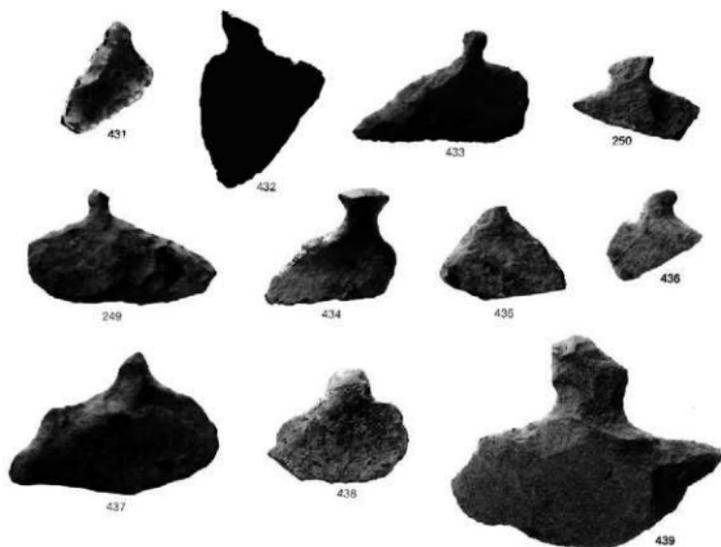
石鏃 (3)



石鏃 (4)

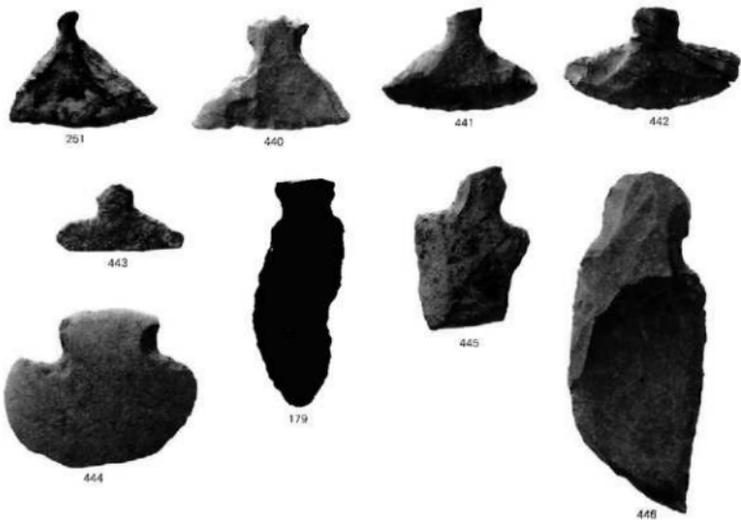


石镞(5)

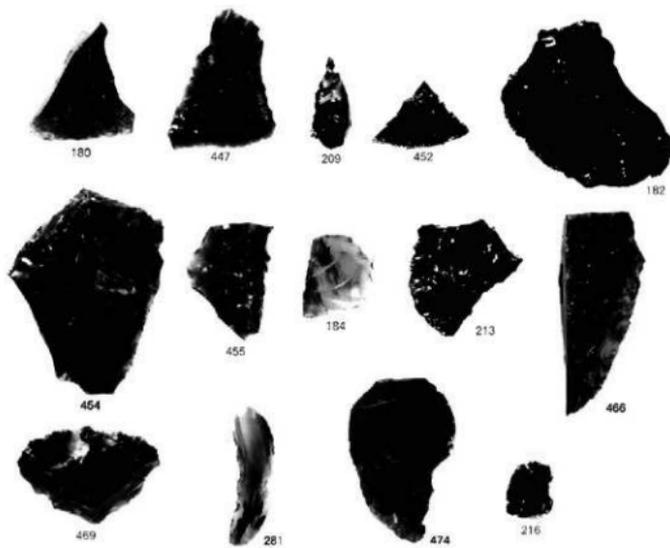


石匙(1)

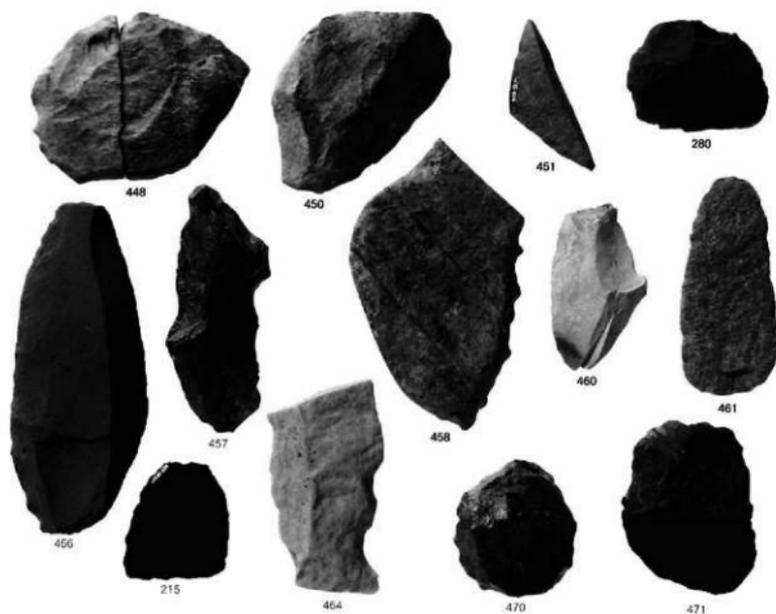
图版40



石匙 (2)



刚器 (1)



削器 (2)



彫器・石錐

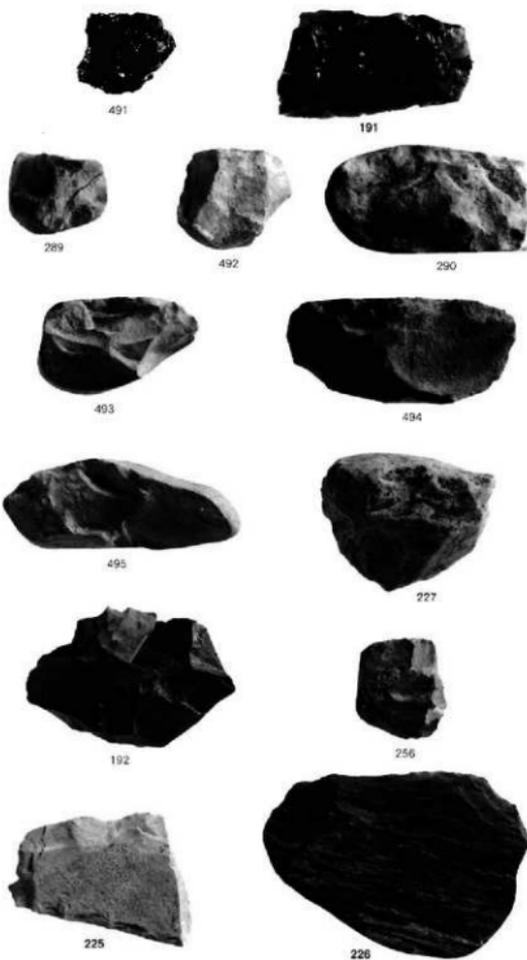


打製石製品・剥片類

图版42



楔形石器



石核



496



497



498



499



500



501



502



503



504



505



506



507

打製石斧(1)



508



509



510



511



512



513



514



515



516



517



518

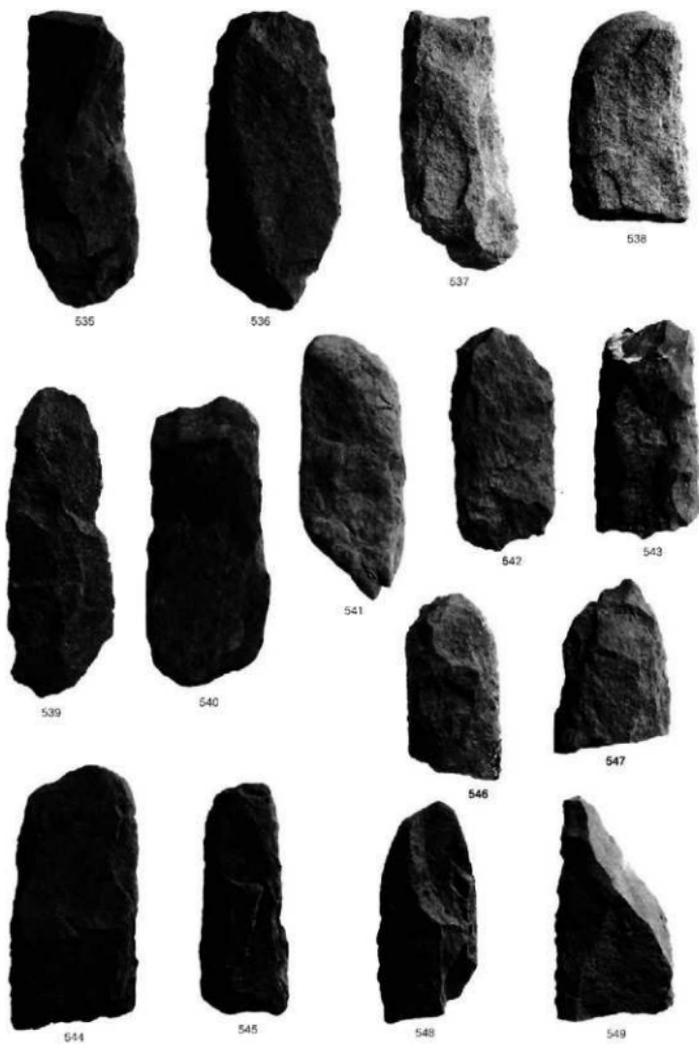


519



打製石斧 (3)

图版46



打製石斧 (4)



打製石斧 (5)

图版48



565



566



567



568



569



570

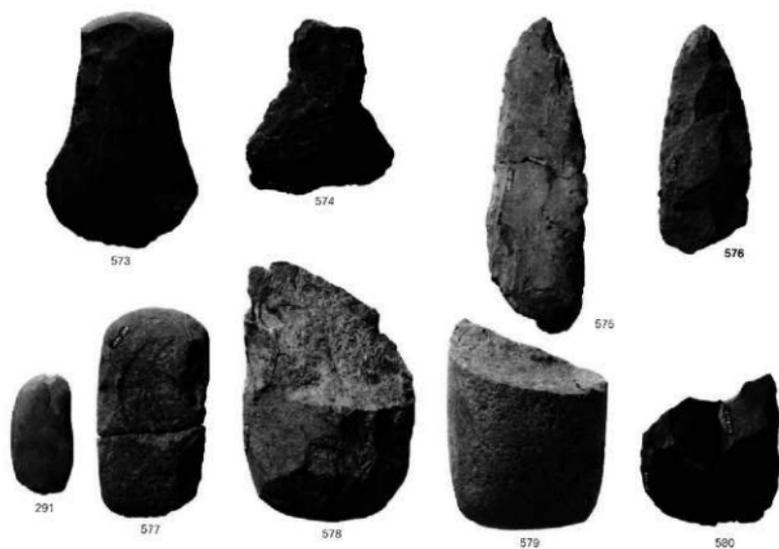


571

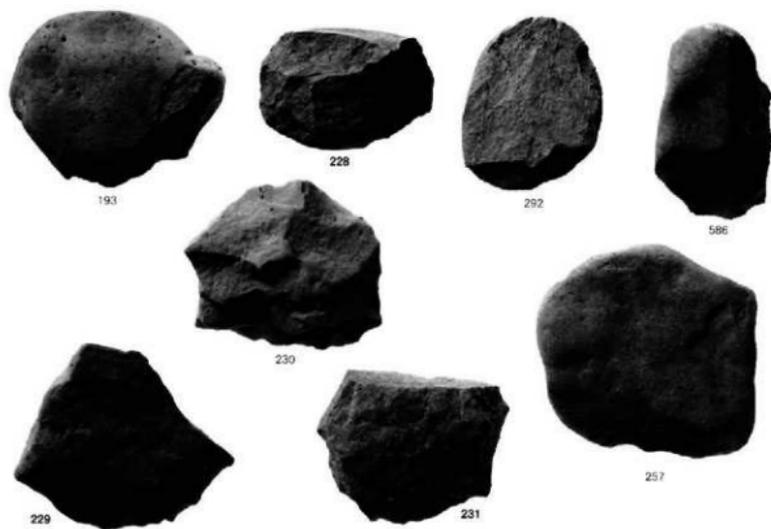


572

打製石斧(6)

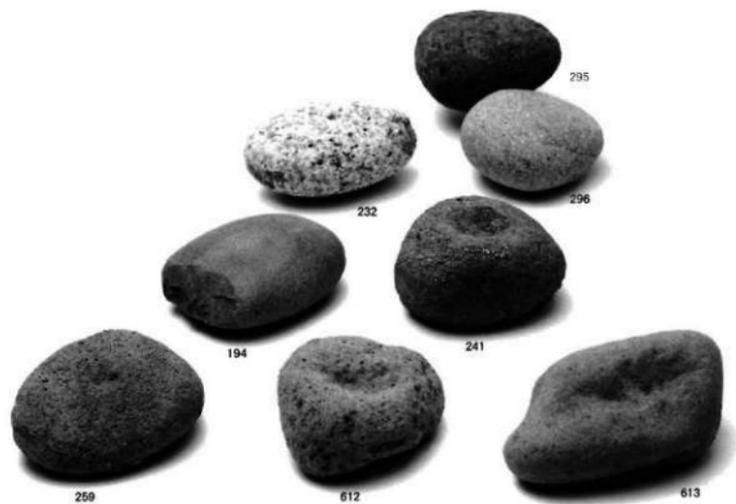


打製石斧(7)・磨製石斧

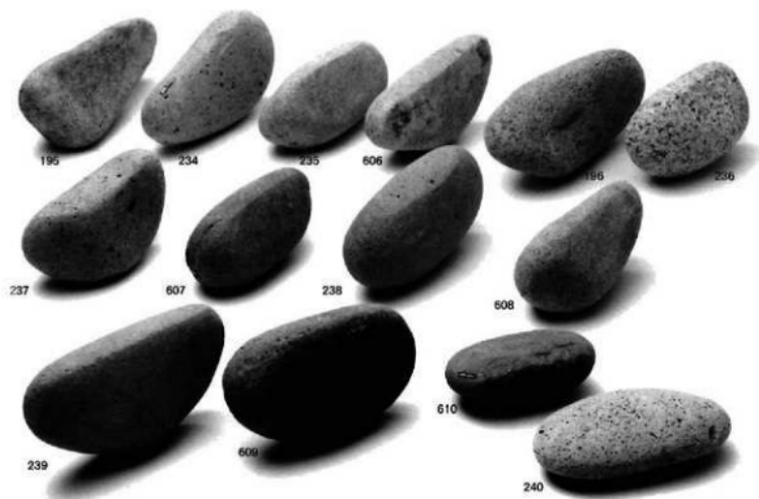


礫器

図版50



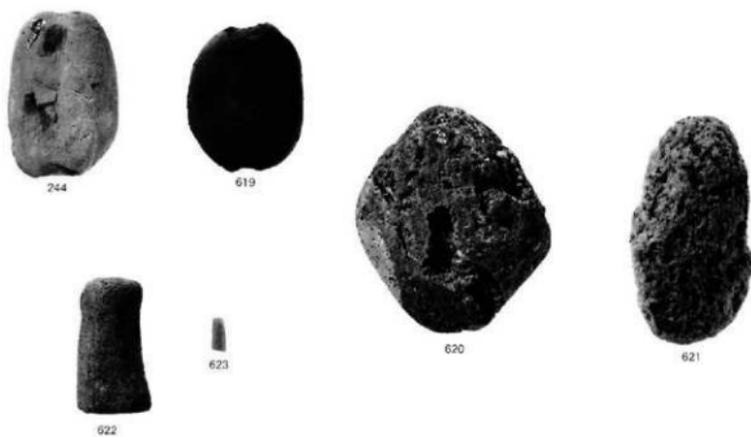
磨石・敲石類



稜部磨石



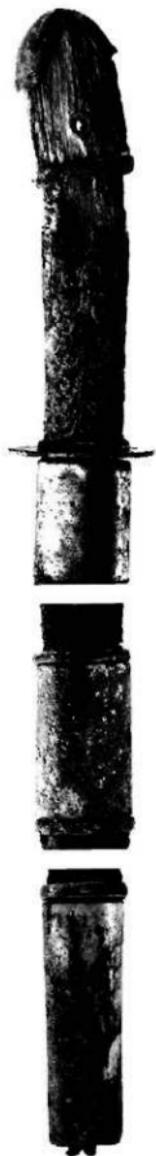
石皿・台石



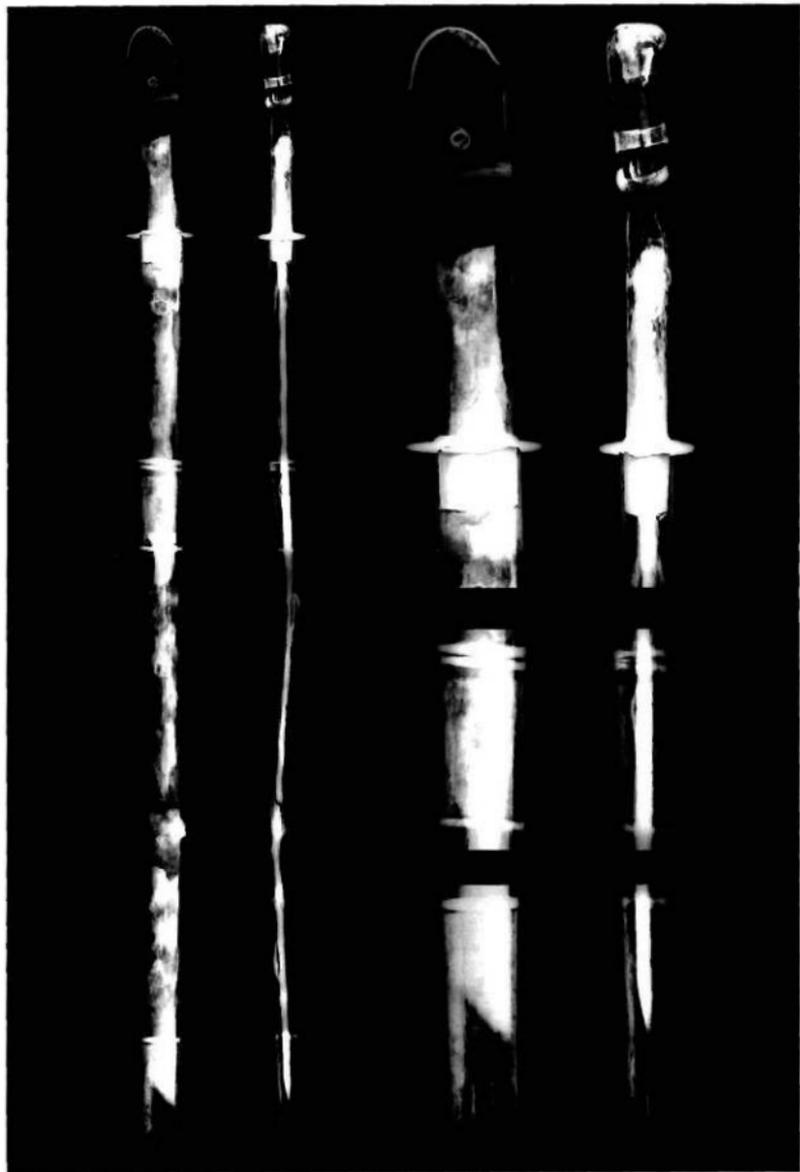
石錘・磨製石製品



046



1号墳出土大刀



1号墳出土大刀 (X線)

图版54

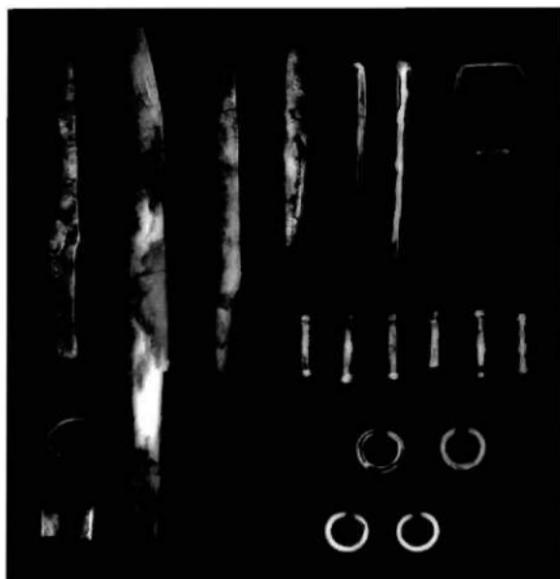
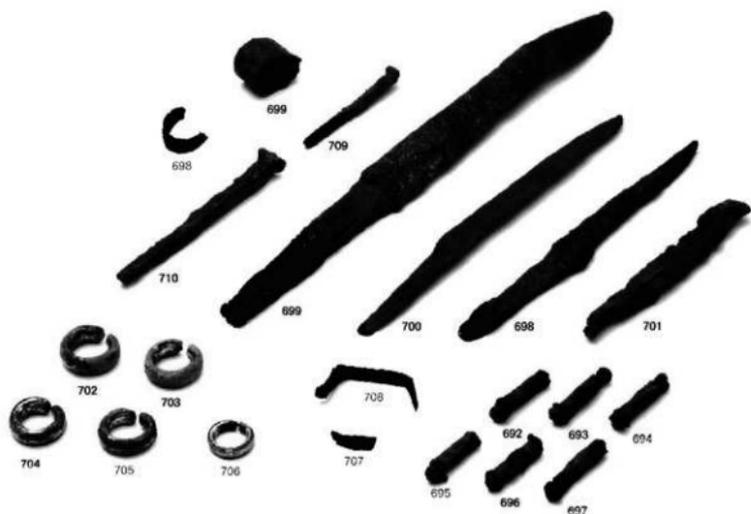


1号墳出土鉄鍔

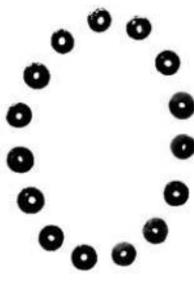


1号墳出土鉄鏃 (X線)

图版56



630



631~645

1号填出土金属制品·土器·玉



723



722



712



721

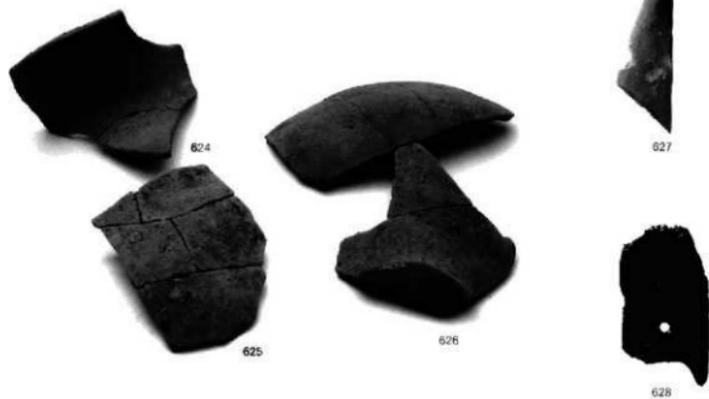


711



713

図版58



弥生時代の出土遺物



その他の時代の出土遺物

報告書抄録

ふりがな	あきばばやしせいせきに									
書名	秋葉林道跡Ⅱ 第二東名No.25地点 (縄文時代早期以降編)									
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書									
巻次	沼津市-4									
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告									
シリーズ番号	第216集									
編著者名	遠藤圭一 大谷宏治 三好元樹 菊池吉修 小崎晋 西尾太加二 三辻利一									
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所									
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23番20号 TEL054-262-4261(代表)									
発行年月日	西暦2010年3月25日									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
		市町	道跡番号							
あきばばやし 秋葉林 いせの 道跡	しづまの 静岡順 めまふし 沼津市 あきの 青野 あきの 秋葉林 831ほか	22203		世界測地系		1999.1~ 2000.3 2000.4~ 2000.10	44959㎡ 17666㎡	道路建設(第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財調査)		
				35°09'05"	138°48'42"					
				日本測地系					2006.4~ 2006.6	200㎡
				35°08'42"	138°49'05"					
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項				
秋葉林道跡	散布地・ 集落跡・ 古墳	縄文時代	集石18 土坑31 焼土跡2 石斧集中2	土器(早期~後期)、石器(石斧・石鏃など)		早期を中心とした土器と、石斧・石鏃を中心とした石器が出土した。				
		弥生時代	竪穴状遺構1	土器(後期)		竪穴状遺構から後期の土器が出土した。				
		古墳時代	古墳5	大刀、玉、鉄鍬、耳環 須恵器、土師器		1号墳から圭頭大刀・鉄鍬・耳環などが出土した。				
		律令期以降	方形周溝状遺構2、土坑203、溝状遺構15、地下室1、焼土跡1	須恵器、土師器		2基の周溝状遺構は8世紀代のものか。				
要約	秋葉林道跡は、愛鷹山南西麓に立地する遺跡である。旧石器時代から律令期以降までの遺物と遺構を確認した。縄文時代は石鏃・石斧を中心とする石器と早期を中心とする土器が検出された。弥生時代は竪穴状遺構から後期の土器が出土した。古墳時代は5基の古墳を確認し、1号墳から圭頭大刀・鉄鍬・耳環が出土した。									

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第216集

秋葉林遺跡Ⅱ

(縄文時代早期以降編)

第二東名No.25地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成22年3月25日

編集・発行 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL (054)262-4261(代)
FAX (054)262-4266

印刷所 みどり美術印刷株式会社
〒410-0058 静岡県沼津市沼北町2-16-19
TEL (055)921-1839(代)

